
榎屈といっしょ！

西宮 東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榎風といっしょ！

【Nコード】

N2501A

【作者名】

西宮 東

【あらすじ】

魔術が学問として存在する仮想近現代世界。至上的最強の天才魔術師・秋宮榎風とその使い魔にして恋人である毎日名前を変えられて呼ばれる少年。二人を中心とした様々な面子が繰り広げる恋愛ファンタジー。*三月〜四月より、続編開始予定！詳しく決定次第報告します！

第1歩：OUTSIDE - 1

「ハコ」

静かに女は言う。

「はい」

それに応じて無感情に答える少年。

「ハコおー」

さつきよりも間延びした口調で少年を呼ぶ中性的な美女。その顔に合わせたかのように女の声は中性的かつ、美麗な音色を現に紡ぎ出す。

「はいっ」

二度も呼ばれた為か声を少し強めよく聞こえるように声を高音に変える。少年特有の未発達顔立ちのくせして、不気味と言っているほどの冷静さに加えあまり顔に感情が出ていない。そのためか、外見と雰囲気的な年齢が一致しない不思議な心地を覚える。

「ハあー」

今や珍しくなった『作務衣』を着ているが、その合間から垣間見える華奢な体つきと胸の膨らみが女性認識させるに申し分ない。そのはずが完全なまでのフィット感を見せるのはなぜだろうか……

「はいつ!!」

度重なる無駄な呼びかけにムツときたのか、声を荒げて少年は返事をする。

漂う冷静さは薄れ、代わりに赤々とした怒りの感情を漂わせる。
そんな少年に突然、

「はこお」

「な、何ですか!?!いきなり抱きつかないで下さい!」

甘ったるい口調で猫のようにじゃれつく女性に容赦なく少年は肘打ちを連発する。

そんな攻撃にもめげず というよりより強く抱きつく。
そして一言、

「お酒買ってきてえ」

甘えるような口調をかえずなついた猫のごとく体中をなすりつけて喉を鳴らす。

「ここらへんに酒屋がある訳ないでしょう!さっき一緒に回ったばかりじゃないですか!?!」

「またまたあゝ、そんなこと言っちゃってえ」

心底甘えきつた女性の言動は少年を毎日のように困らせている。
女性はそれはそれで楽しんでるようだが。

だが生き物とは慣れる。聞き慣れた言葉を右から左へと受け流す
ということを覚えるのだ。

この女性 秋宮 アキミヤ 榎_{カナギ} 風の発する綺麗な声で紡がれる言葉に少年

は、

「聞く耳持たん」

と言つてひたすら耐える。これも毎日のように見かけられる根比べ。

「だいたい……あれだけ買い込んで置いたのに一朝一夕で飲み干したのはあなたのせいじゃないですか。自業自得です」

呆れたようにため息混じりに言つと予想通りと言わんばかりに即時に言葉が返ってくる。

「もう、そんな強気な言葉つかっちゃってえ。そんなところに萌え萌え!!」

頬ずりしてくる榎風に少年はいつも通り罵声を浴びせた。

「ええゝい、寄るな! ショタコン! 腐女子! いや、腐婆! 女子という年では無いだろ」

いつそう強くなった頬摺りで最後までいえるはずなどなくひたすら引きはがそうと試みる。

「そんな、ハコにもやつぱり萌ええゝ!」

少年はこんなことされるぐらいなら素直に酒を買いに行こうと思ひ、あらがうのを弛めするりと榎風の手を抜けると部屋のドアの前まで逃げた。かなり必死の形相だ。

少年はこんな毎日は辛いと思いつつも楽しんでいた。

第1歩：OUTSIDE - 1（後書き）

はじめまして西宮 東です。初めて書いた小説なのでおもしろいかどうかの保証はできませんが、お時間あればこれからもお目に留めて下さい

第2歩：OUTSIDE・2

少年は手を前に差し出す。同時にあきらめた口調で、

「探してきますからお金を出して下さい」

とだけ言った。

榎風は何を思ったか少年に一度近づきお金を取りに行く為か離れる間に小さく耳元で、

「さすが私のハコだ。かわいい」

と囁く榎風。その行動に言いようのない敗北感を少年は覚えたがどうしようもない。何をどうしても榎風にはかなわずいつもいつも従ってしまう。

榎風が部屋の奥に行って十数分、大きな財布を鞆に入れながら無地のTシャツとジーンズに着替えた榎風が出てきた。かなりラフだがこの女性の明快さにはちょうど良く似合っていた。

「何してるんですか？」

不思議に思い少年が訪ねると、

「何してるって一緒に行くに決まってるだろう？」

と当然のように榎風は返す。心底少年は脱力しきり肩を落とした。そうして気を取り直し叫ぶように声を張った。

「だったら一人で行けばいいじゃないですか！」

「デートに一人で行くバカがどこにいる」

確かに一人でデートができる器用な人は早々いないだろう。
他愛のない言い合いはまだ続く。

「酒を買いに行くだけでしょ！」

「デートっていうのは好きな異性と出かけることを言うんだ。だからこれは立派なデートじゃないか」

定義はそうかもしれないがこの場合ただの買い物だ。

こうなれば、もう負けだ。これ以上話していても屁理屈で良いように少年が丸め込まれるだけなのだから。

「ところで……」

少年は話題を変え思案深げに言った。

「ん？なんだハコ？」

「『今日の名前』は何でハコなんですか？」

少年は榎風に毎日名前を変えられると言う不思議な境遇にいる。
境遇と言うよりは榎風の単なる性癖だが。

「それは私の大事な箱入り息子 もとい、箱入り恋人だからな」

「……………何時になったら名前の日替わりを止めてくれるんですか？」

「それはハコに一番にあう名前を見つけたらだ」

榎風は心底楽しそうに少年に笑いかける。この世は楽しいことで

溢れていて辛いことが全く無いと言わんばかりに。

それより後、少年は終始無言で榎風の隣をあるいた。

榎風は少年の細い腕に自分の腕を強く、強くそこにいるのを確かめるように絡め満面の笑みを浮かべる。

「さあ、行こうか」

少しだけの沈黙。それもまた心地よく流れた。

少年は顔をほんの少しだけ赤らめ、しかし抵抗することなく榎風の歩幅にあわせて歩く。

端から見ればただの兄弟だが、周りの目を榎風は気にしない。自分さえよければいいのだ。

これほど単純明快な人は他にいないだろうし、こんな奇妙な関係の二人もまた他にいないだろう。

本当に今は、今だけ世界の何処より世界の何より二人の関係は楽しかった。

第2歩：OUTSIDE - 2（後書き）

第二歩目です！前話を見て次の話に目を通して下さった方々、どうもありがとうございます。心よりの感謝を述べます。
次回も見えていただければ幸いです。

第3歩：WITCH LOGIC

街は低く垂れ込めた雲の所為か、どこか鬱蒼としていて心に不安をあおる。誰もいない森林にでも迷い込んでしまったかのようなうだ。

榎風はどうかしないが僕はこの街が嫌いだ。

着たばかりのときは市場を通ってきた為か艶やかな街だと思えたが、一本道を外れるとそこはもう別世界の様に閑散としたスラム街。榎風はわざわざそのスラム街の最奥にある安アパートを借りている。出所は知らないが財力はあるのだからもつといい場所を選べばいいのに。

本人曰く、

「あんな他人の顔色をうかがって過ごすような所にいるぐらいだったら死ぬ方がましだ」

らしい。その後呆れたように言葉を続ける。

「それにここだったらちよつとやさつと騒いだぐらいじゃ、お国の警察に見つかからないだろう?」

まったく……あの人は今回は何をやらかすのだろうか。

国から逃げる様に出ていくことになるのだろうか。ため息がでてくるよ。

暴力事件などはないがそんな単純なものではない。もっと陰険かつ醜悪だ。紙幣偽造などはさらに車両強奪及び無免許運転、住宅の違法占拠等々 数えればきりが無い。

そんな榎風の横にピッタリとくっつけられ安アパートを出ていく。ちなみにこのアパートは珍しく法的な手続きをふんでいる。槍でも降るかもしれない。

「ここら辺は道が入り組んでいるから迷うんじゃないよ」

頷くだけの無言の承諾。

決して僕は方向音痴などではない。しかし榎風はドキツイ方向音痴だ。どうせツツコミを入れても、またあのよくわからない『モエ』なる言葉を連呼するだけだ。

ところでいつも思うが『モエ』とは何なのか？ 激しく疑問だ。人の名前なのだろうか？ そんなに僕はその『モエ』なる人と似ているのか？ だったら一度会ってみたいものだ。

「なあ、ハコ」

突然声をかけられたから曖昧に答えてしまった。

「あ、はい？」

榎風がにつこり笑って少し間をおく。また『モエ』とかなんとか言い始める気だろうか。

「ここはどこだ？」

……………ハア。

本当にこの人は何がしたいんだろう。天然なのかわざとなのか分からない。だいたい五分五分ぐらいでやってる気がする。

「知る訳ないでしょう」

結果をみると僕が考え込んでいる内に榎風が勝手に進んできて

しまったようだ。馬鹿なことに僕は信じきってついてきた訳だ。お互い情けないったらありやしないよ。

「ちょっと待っててください」

軽くため息をついて上半身裸になる僕。別にため息をこつも多くつきたくてついて居るわけではないし脱ぎたくて脱いでる訳じゃない。露出狂でもあるまいし。

これはあまり使いたくないのだが、この場合仕方ないだろう。街の中心部を手つとり早く見つける為にはそうするしかないし。

「えっと、いくぞ」

少しでも責任を感じているのかいつもより少しまじめな顔だ。

僕から無理矢理つないでいた手を離れた榎風。咳払いをしてから儀式的に、いつものように言う。

「認識番号4603『鴻の翼』発動許可承認」

僕が意識を集中した途端、背中に悪寒が走る。

背中が不自然に盛り上がり、現れたのは赤みを帯びた双丘。双丘はさらに形状を変化させる。長細く、平たく、いびつに物理的な事象を凌駕するように。完成したのは両翼三メートルはある紅蓮の翼。路地裏の黒に映える混じり気のない紅蓮の双翼。

「何時見ても格好いいなあ」

事を終えた榎風は僕を感慨深げに声を出した。背中の悪寒はすでに収まっているので普段通りに応答した。

「もう少し小さくしてくださいよ」

「その方が格好良くていいじゃない」

ほんとに自己中心的すぎるよこの人。終わりが良くなくてもすべて良し。何もかも自分が楽しければ肯定するのだ。

「飛びづらいですよ、ここじゃ」

榎風に向かって悪態ともいえないような悪態をつく。

出したのは良いが 何時見てもこの姿は嫌いだ。この姿を含め様々な能力を付与された姿を見ると自分が人間ではないと思ひ知らされる。

僕は榎風の魔術によって作られた魔術制合成生命体だ。俗に言う精霊や召還獣と言う奴。

魔術に疎いので明言はできないが僕は限りなく人間に近い存在として榎風に作られた。

これだけ精巧に人の姿を作れる榎風の技量は世界の魔術師の中でも抜きん出ている（と本人が豪語している）。榎風は奴隷として僕を作らず『永遠の恋人』として僕をつくった。生まれてから死ぬまで愛し合う。だからといって榎風は僕の基本知識にそんな物は組み込まず一個人として扱っているが。もちろん榎風は恋人という前提で僕に接してくることが多い。

余談だがおとぎ話にでてくる『魔法』と現代社会の『魔術』は似てまったくの否なるものだ。

魔術は学問として現代ではとらえられている。

魔術式により物と事象を『』でつなぐ。まるで数学のように。

魔術式は言葉であり、文字であり、絵であり その形態は様々だ。しかし、必要な知識の量は半端ではない。

おそらく今ある中で一番難しい学問分野であろう。医学部なんて比にならない。例えば大学の魔術の専門学科を終業したところで出来

ることなどたかがしれている。それに使用規制は世界共通で厳しい。故に何かと不便だ。

そして魔法は完全に解析不可な魔術、及び魔術式を必要としない魔術を指す。原理上そんなことは不可能なはずなのだが、實際世界には数えるほどだが魔法使いがいる。つまり本人の才気のみで魔術を超越する。

榎風はその魔法使いに魔術を教わったと言っていた。

話しはこれぐらいにしておいておこう。無粋に『誰に説明していったんだ？』なんて聞く奴はいないだろう。

朱に染まった羽を広げる。羽はたく度に土埃が舞い煙たかった。

「いつてらっしやゝい」

まったく、榎風は暢気に手をブンブン振っている。

もう少し自分のせいだと自覚してほしい。

「いつてきます」

それでも返事はしつかりとする。体に染み着いた礼儀という奴だ。

「なんか夫婦みないな会話だね」

演技じみた挙動で頬に手を当ててから顔を赤らめる。

返事が出来ない。今回ばかりはもう呆れを通り越した。

果てしないやるせなさを感じながら僕は空へと躍り出る。

今までちゃんと見たことがなかった所為か改めて違う角度から見るとこの街の『歪み』が見えた。小さい歪みが数え切れないほど。

発展途上国独特の無理に継ぎ足されていった城壁が無限の迷宮を作り上げている。

敵国が攻め込めば進軍に手間取るだろうし、土地勘さえあれば不

意打ちも容易だ。

しかしそこに住む物にとっては不便なことこの上ない。壁を挟んだ向かいに行くだけで何百メートルも歩くななんて他国じゃ考えられないぞ。

僕は二、三度上空をゆっくり旋回し街の全容をざっと覚えた後、羽を傾け足から下降していく。

「おかえりい」

見送ったときと同様に暢気に手を大きく振っている。榎風がこうでなくなったらなくなっただで恐ろしい。

「ただいま ええっ!？」

はて、何事だ？

下に降りた途端、榎風の後ろ辺りが昏い赤のペンキで塗り変えられていた。

「あ、これ？」

何事もないようにさっぱりと笑う。

「ちょっと私を襲おうとした不逞の輩がいたんで懲らしめてやったのよ」

笑顔で怖いことを言わないでほしい。慣れてない人が見ると失神する光景だ。

「あのですねえ、何もこんな殺し方する必要はないでしょう?？どんな魔術を使っただんですか？空気で圧迫したんですか？それとも、全

身の血液を沸騰させて爆発させたんですか？」

この手のことで榎風が必要以上に怒るのは珍しくない。詳しくは知らないが何でもトラウマがあるらしい。

「そんな酷いことはしないよ、ハコの近くで。」

僕の名前のところだけ強調する榎風。

「ただ単に『私が爆発する映像』と赤くてドロツとした液体を全身にぶっつけたただだよ。そしたらそいつら小便ちびって泣きじゃくりながら走ってどこかいったんだよ」
「それはお優しいことで……」

半分あきれながらそう言ってやった。

この人は言ったことをホントにやってるから恐ろしい。

これでその人たちは心に海よりも深い傷を負っただろう。おそらく次ぎ血を見たら小便を漏らして泣いて逃げるではないだろうか。相手がトラウマだよ。

「そろそろ行きましょう」

「あ、ハコ。少し待て」

何かに気づいたように声を上げた。今度は何を企んだのだろう。疑い深いという無かれ。目の前の榎風の様子は必ずと言っていいほど何かをたくらんでる。

それをわかっていつつも投げやりに返事をする。

「何ですか？」

「街までおぶってって」

やっぱり、正解。クイズ番組ならば10ポイントはもらえていた。
答えるのは当然、

「嫌です」

否定だ。これほどストレートなのはないだろう。

「何でよっ!」

「重いからですっ!」

榎風の『そんなバカな!?!』という感じの顔を見てとっさに怒鳴ってしまった。この時点で最早勝敗は決していたのかもしれない。

「鼻緒が切れたことにするから。その方が萌えるだろう?。」

「鼻緒って今スニーカーじゃないですか!」

典型的なボケとツツコミ。第一意味分らないし。

「じゃあ、靴擦れした」

「『じゃあ』って何ですか!?!『じゃあ』って!?!」

何が何やらわからない内にいつも榎風のペースに乗せられる。そして今回もその一例になってしまった。

「ええ〜い!四の五の言わずおぶれい!」

「訳わかんないですよ!」

言って飛びつく榎風。

まったくこの人は自由奔放というか何て言うか。

それでもやつぱりちゃんとおぶる僕はお人好しなのだろうか。

「やつぱり、ハコはハコだな」

突然しんみりした風に肩に顔を埋めながら耳元で囁く。

「子供に大人を背負わしといて何気取ってるんですか」

話を合わせしんみりと僕も答えた。ついてくのが大変だよ。

「だって、可愛いじゃない？」

いきなり転じて楽しげに言う。

やつぱりこの人はどこまで行っても分からない人だ。

第3歩：WITCH LOGIC（後書き）

第三歩目です

今回からハコの一人称での語りになります。
また読んでいただけると光荣です。

第4歩：N A U G H T

僕が榎風を先導しながら迷路のような道を着実に街に近づくよう30分ほど歩いた頃、榎風はようやく僕の背中から降りてくれた。本当に重かったよ。

しかも降りてからお礼も何もいわなかった。期待してたわけじゃないが有るのと無いのでは終わった後の心地が違う。

ちえ、やっぱり背負ってやるんじゃないかった。

「やっぱり、ハコの背中では気持ちいいなあ」

満ち足りたように笑う榎風。こう清々しげに事をされると調子狂う。

「何ラリってんですか」

呆れたようにつつこむと意気揚々と演技じみた拳動をとり始めた。

「もう、ハアハア、ハコの、ハア、ハコの吐息が腕に……！」

駄目だ。

この人はもう駄目だ。

完全な末期症状がでている。

こんな人といっしょにいるとろくに歩けやしないや。

結論。この場に破棄していこう。

「ハアハア……アアン！」

そんなことも知らず未だ悶えている榎風。

多分今足を忍ばせて移動すれば、自らを抱いて悶えているあの人が気付かれず移動も可能だろう。

一步一步確実に足音を忍ばせて横歩きをしながら僕は榎風の視界からゆっくり消えていく。

数分後、完全に後ろに回り込んでから今度は後ずさる。

それはもうゆっくりと、時間は永久ではないかと考えさせられるほどにゆっくりと。

ようやく曲がり角までつき、向きを変えてゆっくりと進む。

榎風の五感の範囲外をでるとようやく僕は疾風のごとく走り去った。

完全に道を覚えておいて良かった。覚えていなかったら今頃、街まではもちろん、国外へ『徒歩』や『正当な方法』で出ることはできなかっただろう。

そういえばまだあの人はまだ一人で悶絶しているのだろうか？そろそろ回復する頃だろうが早く酒屋を見つけて探しに行つてやらなといけないな。そうしない限り一人でさまよい続けるだろうし。そんな思慮が僕の頭をよぎった瞬間、

『ピンピロ、ポンポロ、ズツチャン、スツテン』　メル　メル　メル　

僕は全力疾走していたせいで思いっきり頭から地面につつこんでバウンドした後、空中で三回転半回り壁と全身で抱き合ってしまった。本気でいたいよ。どうやったらこけまで盛大に転けられるのか教えてほしい。

ともあれ先程流れた携帯電話の着メロは擬音語でも何でもない。あのままの声がそのまま流れたのだ。榎風の声で。

もちろん僕が設定したのではなく榎風が勝手に設定を変えたに決まっている。ちゃんと僕は普通の電子音にしておいた。

何にしる内容を見ねばなるまい。起きあがり土を払ってからメールを開いてみる。相手は榎風。まあ、僕の携帯電話の番号とアドレスを知っているのは榎風しかいないから当たり前と言え当たり前なのだが。

メールの内容を開くと画面一杯に電子的な活字が広がる。

『どう、お手製の着メロは気に入ってくれたあゝ？会心の出来だろう！』

この人の美的センスを心底疑った。そんなことは常時故にあえてスルー。

『それはそれとハコ。』

相手も放置した。ほんと無駄だ。

『勝手にいなくなるなんて酷いじゃない！寂しくて死ぬう！寂しくて死んじゃうよう！』

だからどうしろと言うのか。迎えに来いとも言いたいのだろうがそんなことで僕が迎えに行くと思ったら大間違いだ。

その後以後で付け足したかのように一文。

『ウサギは寂しいと死んじゃうんだぞ！』

死ぬわけ無いだろ。そうじゃない、話がそれた。

類推するに最後の一言は自分はウサギだと主張しているのだろうか？全く呆れて物もいえない。

ふと、よく見てみると画像がついている。なんだかあまり気は進まないがとりあえず開かなければならないような気がしてならなかったので開いてみた。

画像が開いた瞬間僕は計り知れない何かかはじけ、ふつふつと熱い物が体から沸いてくるのがはつきりと分かった。

あまり言いたくはないがその画像はいつの間に撮られたか知らない僕の裸の画像だった。もちろん風呂場。

何のためらいもなく激情のままに携帯電話を握りつぶし地面にたたきつけ踏みくだき、完全に携帯電話と分からなくなるまでバラバラにしてもこの怒り いや、そんな軽いものではない。言葉じゃ現せないような何かはいつこうに消えない。

今すぐ榎風の所に行つて殴りたい気持ちに従おうとしている体をかすかに残った自制心で押さえる。

「（これは何かの陰謀だ。そう、榎風の策。今行けば僕の負けだ。そう、負けなんだ。落ち着け。ドウ、ドウ、ドウ……）」

小声でつぶやき必死に体中に自制心を巡らせる。

成果はすぐに現れ火照っていた体はゆっくりと冷やされ熱い感情も一緒に体外へ排出されている実感がある。これで僕の勝ちだ。別に勝負なんかしてなかったけど勝った気分だ。そういうことにしたい。そうでもしないとやってけないんだ。

完全に自我を取り戻すと荒くなつた呼吸を整える。知らない内に結構走っていたようだ。次に汗を袖口で拭いて着乱れた服を手早く直すと完璧に家を出る前と同じ感じに仕上がった。

もう街は目と鼻の先だ。ゆっくりと歩いていくことにしよう。

足音は乾いた土を踏んだとき独特の乾いた音でなく地面は人通りが近いことを教えてくれる堅い音。

だんだん回りの色も近代的かつ艶やかな彩りを現してくると同様に人の心も弾んでくるのが自分でもわかった。

道が日光の蒼い光で途切れたようになってるのはこの街の二つの境界線を見せつけられているようで気分はあんまり良くない。

変な感情は気にせずその線を僕はあっさりと乗り越える。

出た通りはは街のメインストリート。そこには雑踏があふれ返り人のざわめいている。それがこの街の『動』『陽』『正』をひしひしと体で感じさせてくれるのはなんともいいことだと思う。

でも『陽』『動』『正』が強いところには必ず強い『陰』『静』

『逆』も同じだけの強さがある。何せこの世は『零』なのだから。

表がたくさんあれば同じ数の裏が必ずあり、世界は『零』を守るそう。それは世界で、国で、街で、村で、集団で、家族で、個人で必ずそうなんだ……、って榎風から昔教えてもらったことがある。その時の榎風はどこかを儚げに眺めながら言った。

本当かどうかは知らないが榎風の顔は真面目だったからきっと本当だろう。

この街はその模式図みたいに分かりやすい。

くつきりと分割された『静』と『動』の『動』の部分は『静』の部分とはうってかわって笑っているようだ。疑うことを知らぬ子供のように。

メインストリートの両側には明確に看板をあげる店や何をやっているか曖昧模糊な店が立ち並んでいる。

とりあえず自分がたっている隣はアクセサリーショップというところだけを確認し少しのぞいてみる。

「おう、少年！なんか一つどうだ？安くしとくぜ？」

フレンドリーなオヤジ。この対応は条件反射のようだ。

ありきたりな言葉を投げかけてきたその露店のオヤジはすぐに顔色を変え吹き出す。

「ぶははははっ！こりゃ可愛い奴だ！おまえにはこれが似合うから

まけにまけて2ドルでどうだ？」

オヤジの態度にはとてつもなく気に食わなかったが何もしないのに2ドルとは安い。

デザインもなかなかいいし記念に買おう。

「ください」

ぶつきらばうに2ドルを差し出して商品と交換し早速その場でつけてみる。

オヤジに聞くと太陽と月をかたどったアクセサリーらしいがよくわからない。

「まいどあり！少年！変なおじさんに襲われないようにな！」

『変なおじさん』はお前だ。と内心毒づいてみた物のオヤジの言葉が何か引かかる。

なにも分からないまま酒屋を探しそのまま街をぶらついてみた。

えてして不思議なことは続くものだ。今日ほどその言葉を意識したことは今の今までない。さっきのおやじを始め知らないおばさんにいきなりお菓子をもらったり、子供を抱いた母親にいきなり子供を抱いてやってくれと頼まれたり、少女にいきなり頬にキスされたり、最後には観光客と一緒に写真を撮ってくれと言ってくる始末だ。

一体何があったというのか？町の人全員に榎風が乗り移ったみたいで気色悪い。

ひとまずあまり人目に付かないように適当な路地に転がり込む。少し暗いがあんなところより数倍ましだ。

目の前には内側からカーテンの閉められた巨大なガラス。そこに映った自分の姿を見て愕然とした。そのことが余りに信じられずガ

ラスに穴が開かんばかりに凝視する。

目を擦り何度見てもやはり『それ』はそこにいたまま。今度はおそろおそろそこへ手を伸ばし触れてみる。

柔らかな感触。間違はなく『それ』はそこにあった。これはまさしく本物の感触。温度までちゃんとある。ガラスを通してじゃないとみれないが自分の頭にはしっかりと『ネコのミミ』が生えていた。それもしっかり根本まで頭とくつついている。

こんな事するのは間違いない一人。

「榎風いー!!」

自制心によって押さえる暇もなく僕はその名を叫んでいた。これが一番の間違い。

ずこん、と重い音がした刹那、彼女は現れた。

「呼んだあー？」

地面に穴が開き榎風がはいでくる。心臓が悪い方はご注意を。

「どっからでてきてるんですか!？」

「マンホール？」

即答で切り替えされてしまった。しかしこの国には元々マンホールはおろか地下水路はないはずだ。つまりは、

「ついに自分で下水道まで造りましたか？」

もう今日で何回呆れたことか。数えるのが面倒なぐらい呆れた。

「いいじゃないか!呼ばれたから着たのにあんまりだ。呼ばれて飛

び出てなんとかかんとかだ！」

「呼ぶでません！」

呼んでないことにしておいてくれ。今現実は見えなくなった。

「寂しそうだったから」

勘違いも良いところだ。

「僕がそう見えたのなら頭の中を検査してもらって下さい」

「肩をふるわせて泣いてたじゃないか」

何時泣いたよ。誰が泣いたよ。何故泣いたよ。

「誰が見ても怒ってました！」

もう少しこの考え方を変えてくれ結構いい人なんだけどな。本人の前じゃ口が裂けても言わないが。

「それは良しとします。」

今はそれどころではない。問題は別のところだ。

「それより何で僕の頭に『ネコのミミ』が生えてるんですか！」

「『ネコのミミ』じゃなくて『ネコミミ』だ。『の』は省いて

どうでも良い指摘だ。それでも饒舌に御託を並べる。

「やっぱり萌え要素として『ネコミミ』は欠かせないでしょ！私的

には『イヌミミ』の方が好きなんだけどハコはネコの方が好きだろ
う？ いやー、一週間ぐらい迷ったんだけどネコミミもなかなか萌え
るな」

すでに僕には意味不明で手がつけられないところに榎風は行つて
しまったが反論ぐらいは出来る。

「何の意味もなくつけないください！」

「意味なら『萌えるから』の一言に限る！」

大声で宣言された。僕の中で何かがはじけた気がする。

「一回本気で殴っていいですか？」

笑顔で僕は拳を固める。後に聞くとこのとき僕の後ろには修羅が
見えたらしいが さて何の事やら。

「お前が本気で殴ったら私が消し飛ぶからやめて！ごめん！謝るか
ら！」

仕方なく、僕は握った拳を開き『軽く』チョップする。軽くとは
言っても子供の本気ぐらいはある。

「ったあゝ……」

「今回はこれで許します」

腰に手を当てため息を吐く。この数十分で疲れきってしまった。
榎風の折檻は自業自得、因果応報だ。

「えっぐ、えっぐ……」

榎風がしゃくりあげる。何泣いてんだよ、この人は。うわ、ほんとに涙まで流してる。

「ハコが叩いたぁ……えっぐ……」

何事かと思えばそんなことがよっ!?

「大丈夫ですか……?」

とりあえず苦虫をつぶした様な顔で言ったが、「こつ言ってるよ必ず」

「ハコが撫でてくれたら治る」

と言うのだ。だが僕はそんな甘くない。

「子供みたいな事言ってるで、ほら、立ってください」「はぁ〜い……」

口をとがらせ不機嫌そうに榎風は言う。
どうにかしてほしいよまったく。

「さぁ、今すぐこれをとってください!」

忘れてもらっては困るが頭の上に生えている『ネコのミミ』をとってもらうのが目的なのだ。

「そりゃ無理」

「何即答してるんですか!」

笑顔で小さく手を横に振る榎風。

僕は静かに手を振りあげきっちり上に構える。

「wait！wait！stop！！待てえ！理由を説明するから」

焦ったのか懇願するような眼差しを榎風は僕に向けてくる。

「下手な理由を言つと許しませんよ」

榎風は何も言わず首を縦へ高速に振る。その後少し間をおいてからしゃべり始めた。

「えつとね、それは新しい装備で『幻夢の誘手』っていうの。それを出している間はみんな敵意が抱けない。どころか好意があることを相手の脳内に資格から刷り込む。」

確かにその場合目立つ方が刷り込みやすいのはわかる。でもこれはあんまりじゃないだろうか。

榎風はさらに続けた。何故か生き生きと。

「これで世界にハコがメロメロ！」

最後の一言がなければ少しは役立つと思えたらうに。全く無駄なことをする人だ。

とりあえず勢いよく榎風の横腹に手刀を入れておいた。榎風はそれをもろに喰らい金魚みたいに口をパクパクさせている。

気遣う言葉もなく不躰に言う。

「装備なら収められるんでしょうね？」

「一応……」

相当痛かったのか押さえつつもちゃんと答えた。
その答えを聞いてほっとした。

早速作業にかかる。頭に力を少し入れてみると徐々に神経が通い、ピクピク動かせるようになった。そうしてようやくそれがしまたえた。

「ふう、これで街でじろじろ見られたりしない訳か」

問題が解決したのでようやく落ち着けた。その途端榎風がいつものようにしゃべりかけてきた。痛みも治癒した様子だ。

「それにしてもなかなかかつこいいネックレスだな。買ったのか？」
「ええ、『幻夢の誘手』で安くしてもらえたんで」

半ば自嘲気味に言った。あの時は能力不十分の所為か思い切り笑われたし。

「よかったじゃないか。他にはどんな効果があった？」

やはり腐っても英知の神髄魔術師か。研究成果には興味があるようだ。他意はないと思い有ったことを簡単に話す。

「子供を抱いた母親にいきなり子供を抱いてやってくれと頼まれたり、少女にいきなり頬にキスされたり、最後には観光客と一緒に写真を撮ってくれと言われたり」

「何？」

榎風の目が恐ろしく光る。まるで獣のように。

「だから、観光客と記念撮影まで」

いきなり顔色を変えてどうしたというのか。

「その一個前だ」

「えっと、少女にキス？」

言った後に気づいた。が、時既に遅し。

「なあんだあとお！どこその奴ともしれんガキがハコに口づけだとお！」

狂ったように叫ぶ。あたりに満ちる狂気。

「ぶっ殺してやる！街ごと焼き払ってくれるわっ！」

やってしまった。

こうなってしまった榎風は僕以外神ですら止められない。神すらも殺す勢いだ。

「巨大爆破魔術式及び半径三メートルに防御魔術式を展開！」

半ば暴走気味に地面に魔術式を書き始める榎風。

さすがにまずいと思った僕は『本意ではないが』鳩尾に一発拳を入れて榎風を気絶させた。

倒れてきた榎風を全身で受け止めてやる。

「全く世話が焼ける人ですね……」

ため息が自然と漏れる。あんまり悪いため息ではない。

この人といると退屈はしないけど疲れるな。今日はぐっすり眠らないと明日に残りそうだ。

とりあえず榎風が起きるまで膝枕でもしてやろう。せめてもの詫
びに。

第5歩：HUMP

さすがに足が痺れてきた頃に榎風は起きた。

日はすでに傾き始め時刻は四時前後といったところだろうか？どちらにせよもう街を回る時間は余り残されていないだろう。あの暗い路地を遅くに歩くのはよいことではない。僕は大丈夫だが振り返りにあう素人の人々の方が可哀想だ。

「さあ、榎風さん。起きてください」

僕は恥ずかしいがわざわざ『幻夢の誘手』を出して起こしてやった。

気絶させるぐらいのパンチをした事への罪悪感がある。これはそのことへのささやかな償いだ。つくづく思うが僕って榎風に甘いよなあ……。

「おはよう、ハコ」

ぱっちり目を開け実に爽やかな挨拶だ。街を破壊しようとした後の顔とは到底思えない。

「おはよう、じゃないですよ」

とりあえず突っ込みを優しく入れてみた。

「いやいや、ごめん。お前のことが絡むとどうも自我が吹っ飛ぶからね」

じゃあこの人の自我は何時現れるのやら。いつも自ら絡んでくる

クセして。

「あー、気持ちよかった。やっぱりハコの膝枕は気持ちいい」

立ち上がらずに僕の膝の上で軽く伸びをしながら当然のように言
つてのけた。

「もしかしてずっと起きてたんですか？」

「そんなことはないよ。つい一時間ほど前からだ」

それって気絶してすぐ起きたってことじゃないか。はめられたの
か？

足まで痛めて介抱してやってた間この人はずっと気持ちよく僕の
膝の上に？

「お前への反撃だよ」

何も言っていないが意志を汲み取ったのか相変わらずの軽い口調
で言う。

そついわれては言い返しようがないが。

「まあ、ハコのネコミミも堪能しきったからお腹いっぱいだ」

「いいから早くどいてくれませんか？そろそろ痛いです」

いい加減足が本当につらくなってきた。慣れないことをすると余
計疲れるのだ。

「よっこいしょっと」

ずいぶんおやじ臭いかけ声で起きあがる人だ。もう少しぐらい年

齡相応のかけ声があるだろうに。

「さあ、デートを始めようか？」

にこにこ憎たらしい笑みを浮かべて手を差し出す榎風。

仕方なさげに立ち上がろうとしたが足が思ったように機能してくれない。そのせいで前につんのめってしまった。

「おやおや、動けそうに無いじゃないか、ハコ」

わざわざこんな芝居がかった声と動作で。誰の所為だと思ってやる。ってまさか、

「私がおぶってやろう」

やっぱりそうきたか。

「いいです、少し休めば」

「時間がないのはお前がよくわかってるじゃないのか？
それにさっきおぶってもらったお返しだ」

この人はとんだ策士だ。ここまで全部策を練っていたとは。ここでおぶられるということはこれからの主導権をすべて託すという意味だ。なんとという計画性だろうか。

実にすごいことだと思う。他のことに生かしてほしいものだ。
考えた末、

僕は無精無精ながら榎風の手を取りおぶさる。

榎風はこれまで何度も見てきている勝ち誇った笑みを僕に向けてきた。

「ああ、ハコの吐息が今度はうなじにいー！」

「にぎやー！なに鼻血出してんですか！」

とりあえず僕は鼻血が止まるまで榎風の鼻にポケットティッシュを当て続けた。

本当にこの先僕は大丈夫なのだろうか。

第6歩：IN THE SKY

榎風に僕はおぶられて（連行ともいう）とある服屋を訪れていた。店に入った瞬間少年を負ぶった女性が入ってきたという理由でかなり視線が集まった。

榎風が女性専門店なんかに入らなくてよかったと心底思ったがやっぱり服屋はイヤだ。

榎風はとにかく買い物が長い。とてつもなく長い。これも女性の性だ、とか何とかいって一向に店から出ようとしない。結果、僕は待ち続けなければならないのだ。

「ハアア」

深いため息をつきながら僕は試着室の前のベンチで首を力無く折っている。

ここでの経緯を簡単に言うと店内を回りめばしいものを見つけては手に取り、見つけては取り その繰り返しで十何着か手に抱えて試着室に入った。そうして着替えては僕に見せる。そのたびに僕は違う感想を口にしていく。そうしなければ全部買って帰りそうだからだ。いくら金があっても移動が面倒になる。

で、現在に至る訳だ。ちなみに今は八着目だ。

ラフな普段着からイブニングドレスまで榎風は千変万化する。

本人の前では絶対に口にしないが榎風は元がいいから何を着ても似合う。適当な文句を付けて買わせないようにするのは一苦労だ。

「ハコ、これはどうだ？」

ようやく着替えて出てきたようだ。

僕はおしゃれは大いに結構だと思う。しかしそれは時と場合によ

るものだ。僕らは今放浪中。これで分かってもらえるだろう。

「えーとですね」

僕は閉口した。いろんな意味で閉口した。

とりあえず一つを口にしてもう一つの問題は後に回す。

「何で中国の民族衣装がここに売っているんですか？」

「チャイナドレスと言え。チャイナドレスと」

少し怒ったように頬を膨らませ腰に手を当てる。

「売ってたもんは売ってたんだからいいじゃないか。気にしちゃいけないぞ。」

そういう問題なのだろうか？この人の中ではそういう問題なのだろう。

「それよりどうだ？否のうちようがないだろう？」

核心を突いてくるな、この人は毎度毎度。紅いチャイナドレスに身を包んだ榎風は今まで一緒にいた中で一番綺麗に栄えていた。

「あ、えーと……」

理由もなく顔が赤くなった感じにとらわれたので早口で言葉を紡ぐ。

「良いと、思います」

「よかったあゝ。これがダメだったら正直お手上げだったよ。
ありがとうな、ハコ。おまえが誉めてくれるとは思わなかったぞ
！」

一点の曇りもない無邪気な笑顔の榎風。本当に嬉しそうだ。
それにしても僕はここぞというときに自制心を欠くということが
改めてわかった。

今回はそれで良かったのかもしれないが。

「少し値は張るがこれを買おう」

「幾らですか？」

素朴な疑問。

榎風は僕の肩に手を置きながら残念そうに言う。

「ハコ……この世には知らない方がいいこともあるんだ」

そんなに高かったとはしてやられた気分だ。

「会計をすませてくるから先に外に出て待っていて」

「わかりました」

なんか一気に力が抜けた気がする。

足取り重く出口を出て数歩右にあるいた後、ゆっくり立ち止まっ
て人並みを呆けたように眺める。

喜んでいる者。

怒っている者。

哀れそうな者。

楽しそうな者。

色々な人間がいる。

色々な人間が蔓延っている。

人間の数だけ人生があると思うと不思議な気分になる。

人間の数以上に物語があると思うと落ち着かない気分になる。

そんなことを考えていると程なくして紙袋をもった榎風が店から出てきた。

「さて、そろそろ帰ろうか」

「もう大分暗いですから余計に神経使いながら帰らないといけないですけどね」

皮肉を言うと、

「じゃあ、『ネコミミ』出せばおそわれないぞ」

皮肉で返された。

確かにそうではあるが極力体内にある装備は使いたくないし特に『幻夢の誘手』は使いたくない。使うならせめて裏路地に入ってからだ。

「とにかく早く帰りましょう。これ以上暗くならないうちに。ついてきてください」

「わかった」

榎風にしては珍しい気のない短い返事をする。どことなく上の空。何を企んでいるか分からないし放っておいても問題だろう。

露店の脇を抜け一本道はずれて『幻夢の誘手』を発動させる。やはり用心に越したことはない。

先刻、『鴻の翼』を発動したときには榎風が何か呪文を唱えていたがあれはただの榎風の趣味の一部だ。あれは『ろまん』と言うものらしい。類推するに場を盛り上げる文句のことだろうか？

来たときと同じルートで帰る。

何もないところだからこそ不安を感じるがそれは大抵不安より上にはならない。

それだからこそ僕はこの何もない闇の中でも落ち着いて入れるのだと自己分析を冷静にしていられるのだろう。そのつもりがいつの間にか何か考えていないと落ち着けなくなっているとわかってしまい、その矛盾に軽く苦笑してやった。

「つかれた」

淡泊な声。

聞こえない。

「つかれたあー」

だるいした声。

なんにも聞こえない。

「つ・か・れ・た！」

強調した声。

何も聞こえないっいたら何も聞こえない。

「つうーかあーれえーたあー」

間延びした声。

これは幻聴なんだ！聞こえない！

「飛んで帰ろう、ハコ」

「でも、羽のサイズは加減してくださいよ」
「分かってるよん」

何故にこの人はこんなにいつも上機嫌なんだろう？

『幻夢の誘手』をしまい上半身裸になってから『鴻の翼』を発動する。

僕は二つの装備を同時に発動することはできない。『幻夢の誘手』と『鴻の翼』を併用できればかなり安全に帰宅が可能なのだが無理な者は無理として割り切るべき。それぐらい生命として弁えている。昼でも暗かった裏路地は今は真夜中のように暗い。漆黒の闇の中に紅蓮の双翼がいつもより小さく咲き誇る。見た目はいいが昼でも夜でも目立つこの翼は不便だ。せめて藍色や水色という空にとけ込む色にしてほしかった。

「はい」

僕は榎風に左手を伸ばす。僕は両利きなので別に軽んじてるわけじゃない。

「まさか片手で私を支える気か？肩がはずれるぞ」

軽く笑う榎風。

仕方なさに僕は右手も差し出す。

「だから、手だけじゃ痛いって。それに荷物もある」

にやつく榎風。

ようやくそこで僕は理解した。

「さあ、後ろから抱きつけ」

「それが目的ですか……」

榎風は榎風か。やっぱりいつも何かを企んでる。

「なんのことやらさっぱり見当がつかん」

この人がただで駄々をこねるわけがなかったんだ。

「ほれ」

背を向けて手を軽く挙げて脇腹にスペースを作る。

僕は泣く泣く榎風の腰に手を回しがっちり組む。

「いきますよ」

「うげっ！」

榎風は急に飛び上がった所為か変な声を上げたが聞こえない。断じて聞こえない。

徐々に高度を上げていきユラリとした飛び方に安定させた。

風が強い。夜風は今日の慌てふためいた出来事を世界に還元してくれていた。だからとても気分がいい。

そんなとき突然体が軽くなる感覚を覚えた。ほんの少し横を見ると深紅の羽が体の何倍もの大きさになっている。

「榎風！」

僕は翼を大きくした犯人に呼びかけるが返事はない。よくよく見ると白目をむいて気絶している。急に飛び上がった時だろうか？

風を切る音。

突然僕の頬をするように高速で何かがすり抜ける。

続くように聞こえる鈍い音。この鈍い音は聞き覚えがある。しかしそんなはずはない。

否定するため下を注視するとそこには飛来する黒い影。まさかの中した。動転し声を上げてしまう。

「た、対空放火っ!？」

こんな馬鹿なことがあってたまるか!いきなり対空放火はないだろ!？間違えたにしてもそれはやりすぎだろ!？

右に身を翻し緊急回避して榎風を揺さぶりながらたたき起こそうとする。

「起きてください!対空放火です!」

「はあ!？なんだって!？」

さすがに緊張感で一発で起きた。

この間にも照準をつけられているかもしれないため縦横無尽に空を滑る。

次の砲弾が飛んできて榎風のすぐ近くの空を切る。

「ううゝ!とんだ目覚ましだ」

少しは焦っているものもやはり余裕がかなりうかがえる。

「目覚ましに眠らされるのは御免ですよ!」

冗談抜きでヤバイ。非常にヤバイ。空にいれば格好的だし下に降りれば超至近距離での放火だ。

「ハコ!数秒止まれるか?」

無茶な注文をする人だ。状況を見て判断してほしい。

「無理です！砲口が多過ぎて止まれば落とされます！」

「クソッ！なんて奴らだよ！」

あらっばく悪態をつくと下を見て戦略を練っている。

「国の警察じゃないですよね！？」

「んなわけあるか！？たぶん私目当てのどっかのイカレタ集団だ！」

大抵の魔術師はどこかの集団に所属しているがこの世の中でも五本の指にも入るような大魔術師である榎風はどこにも所属していない。となれば何処でも欲しがるのは必至だ。

珍しい人だが榎風がどこかの集団に入れば世界のバランスは崩れるだろうし、集団を乗っ取りかねないからこれでいいのだと思う。

「本腰入れて私を捕まえにきたかな？このやり口や科学発展度からみて『ベルワナ』の奴あたりか？」

ベルワナとは現存する中で三つの大集団の一つだ。やり方が強引であることで有名な奴らで、最近では麻薬販売なんかも始めたそう
だ。

「私を後ろにおぶれ！それなら手が自由になって『断纏』とか使えるだろう！」

『断纏』とは僕の持っている小刀でふれたものをすべて断つ榎風からもらった頼りになる武器だ。榎風の説明だと分子レベルでものが切れる、とか何とか小難しい説明を言っていたがあんまり聞いて

なかった。要はよく切れる刀な訳だ。

「それはいいんですけど、どうやって背中にいくんですか？」

良い作戦ではあるがそれが問題だ。

「ちゃんと拾えよー」

「はあ！？」

聞き返したときには榎風は僕の手をふりほどき垂直降下中だ。
すぐさま羽を閃かせ榎風を僕の背中に着地させる。

「気持ちいい！」

白い髪 of 僕とは真逆の黒い髪をはためかせ明快に笑う榎風。

「あなたはいつも人を驚かせますねっ！」

心臓止まるかと思いましたがよっ！ほんとに。

「それよりハコ、前」

「へっ！？」

変な返事をしてしまったが無理もない。何せ数メートル先には黒い球体。反射的に『断纏』で粉々にする。

『断纏』特有の幾重幾方の太刀が迸り風すら断つ。

「上出来だ！三秒待て！」

難しいことを簡単に言っただけだ。

榎風は懷から青白く光を放つ『光踊石』を走らせ、空中にごく簡単な模様を描く。

「圧縮魔術式解凍！」

簡単な模様から緻密かつ精巧な線が三次元に延びる。

これが榎風の十八番、立体魔術式と圧縮魔術式だ。相手さん方はこの榎風特有の魔術理論がほしいが為にこんなことをしているわけだ。

「燃えろ、燃えろ、囂々と！轟け、舞い散れ、桜花の炎！」

このフリーズはただの榎風の趣味だ。

魔術式が桜色の炎へと変貌し矢のようなスピードで街へ急降下する。

砲口付近に降りていく桜の火が人にまとわりつく。

その間にゆっくりと家から少し離れたところに着地すると、『鴻の翼』をたたみつつあたりを確認する。

「榎風さんは家に帰っていったん準備して出て来てください。その間近くのは掃討します」

「頼んだ！」

迷いなく走ってアパートに向かう榎風を確認し僕は城壁の上を駆ける。

視認できるほど近くに三名。先ほどから対空放火をしていたのはこいつらと見て間違いないだろう。

無駄のない動作で『断纏』をたたき込む。その太刀に慈悲などない。確実にしとめたとは確認しなくても分かる。そんなことより残存した奴らがどこにいるかとか返り血を浴びないようにする方が大

事だ。断纏の太刀味は唯一無二の切れ味だ。助かるはずもない。今度は望遠及び暗視専用装備『梟騎の瞳』を開き人影を確認。そこまで静かに移動する。

わざわざ声などあげない。静寂に、無音に、音ごと断つ。たぶん向こうは未だ死んだことに気づいてすらない完全な殺戮。生の強奪。そろそろ他の仲間達は撤退を始める頃だろうが逃がしてなるものか。

これ以上『断纏』で近づいて攻撃するのでは相手全員に追いつけない。しかし基本的僕が持っているのは近距離専用の武器。だが何もしないよりはましだ。このまま続けるしかない。

それに榎風が出てくれば残存の奴らもたやすく掃討できる。それまではどうか。

（ハコ、戻ってこい。一気に片づけるぞ）

脳の奥に響くような直接通信。お呼びがかかった。

足の向きを変え転身、一直線に榎風の元へ行く。邪魔な壁はもちろん切って文字通り真っ直ぐに。

「どんな魔術を使うんですか？」

「新種をね」

長いつきあいだ、お互いの顔など確認しなくても分かる。

今の榎風は楽しんでる。

「少しばかり溶媒が必要だ。瓦礫を作れ」

前に言ったとおり魔術とは『』で結ぶこと。さっきの『光踊石』をつかった魔術は一度式を作り『光踊石』の中に保存しておいただけで火をおこすのに必要な溶媒は使用している。今回は一からの生

成。溶媒が必要になるのだ。

近くにあるものを手当たり次第壊し、瓦礫を出しているうちに榎
罈は『光踊石』で魔術式を手早く紡ぐ。

「そのぐらいでいい、ハコ。さあ、舞踏会の始まりだ」

かけ声とともに入れられた光で完成した途端、魔術式がほどけ蛇
のように石屑にかぶりつく。

「いつけえ！」

瓦礫はかけ声を聞くや否や消える。
おそらく高速移動させたのだろう。物体を別の位置にワープさせ
るなんて不可能だ。

『梟騎の瞳』を通して一グループを見てみると石に胸を射ぬかれ
ているのが見えた。

どうやらホーミングして相手を殺す魔術のようだ。

「掃討終了！さあ、疲れたから早く寝よう、ハコ」

これだけ手痛くやれば明日ぐらいは大丈夫だろう。

長かったようで短い一日が終わりを告げ、僕は家の中で深い深い
眠りについた。

第7歩：MIMIC

暗いはずのスラムでもやはり窓から入る朝日は眩しい。何処にでも平等に朝はくるのだとつくづく思う。

その朝日を顔に直接受けた所為で寝ぼける段階をとばして一気に起きられたが、やはりあんなことがあった後で目覚めが爽やかなわけもない。とりあえずボサボサの白髪をなおしに歩を洗面所に向けながら今日の予定を考える。

（あれだけ手痛く返せば早々襲ってくるとは思わないケド……）

適当に放ってあった榎風の櫛を手に取り頭の上に滑らせる。

（でもそれは相手が正気であることが前提だ）

コップに収まっている赤と青の歯ブラシの青をとる。

（相手の正体が『ベルワナ』とも限らないし）

青い棒の上にまっすぐ上に向かって生えたプラスチック毛に白い歯磨き粉を塗る。

（新興の集団だったら本拠地探しからか）

歯ブラシを口の中に突き立て、左右上下に低速で動かす。

（なんであれ、また面倒な話だ）

歯ブラシを口から抜くと口を濯ぎ洗面所を出ていく。

（二対百まではいいかもしれないけど万近くになるとつらい。正直、殺されるか仲間に下るかの二者択一か。）

狭いリビングにでると簡単に服を着替え黒い皮のコートを羽織る。

（榎風がいつものごとく起きる気色はないし）

転身してドアへと歩く。

（まあ、念のため）

ドアの前から榎風が死んだようにぐっすり寝ているソファを一瞥してから、

「（いつてきます）」

小声で小さく言う。

僕は何のためらいもなく外に出た。

ノブを軽くひねり、押すとさびた鉄が擦れたときの耳をつく嫌な音が辺りを占める。この音も聞き慣れたものだ。

剥き出しの鉄筋を横目で見ながら無機質で寒々しいコンクリートの階段を一步、また一步ゆっくり降りる。

外にでると全く変わってないはずの街は朝早い為何か違う雰囲気を感じ出している。城壁に囲まれている所為で朝霧をかぶりまさに一寸先は闇と言った感じだ。

（寒い……かな？）

僕の隣にはいつもと言っていいほど榎風がいる。その榎風が今と

なりにいない。それだけがこの寒さを感じさせている。

そういえば榎風とどれぐらい僕は一緒にいるのだろうか？長い間か記憶が曖昧だ。作られたからだろうか？

ふと、知りたくなった。知らなければならぬような気がした。しかし僕には知る術はない。うつむきながら考えてみたがよい考えは浮かばない。

冷たい風が吹いたので首を埋めてもう黒いコートを羽織り直す。顔を上げるとそこには紅い衣に身を包み腰まである黒髪を翻した中性的な美女が立っている。

「榎風……」

意図せず口から漏れたその名に反応して駆け寄ってくる。

「朝起きたらいないから驚いたぞ」

いつもと変わらない軽快な口調。

「すみませんでした。少し警戒のために」

やっぱり寒い。

感じている寒さは榎風がないせいではないようだ。

「うん、やっぱりかわいいな」

「訳わかんないですよ」

本人だけに楽しげな会話。僕としては何となく不愉快だが。

「で、何かおもしろそうなものはあった？」

「いえ、特に。杞憂だったようです」

「そうか、つまらん」

残念そうに言い斜め上の空を一度だけ見てから僕に視線を戻した。何がつまらないんだ？と問いただそうと思ったがやめておいた。屁理屈が必ず帰ってくるはずなので榎風に対してこれほど無駄なことはない。

「そんなことより早く帰ろ。お腹が空く頃だ」

「あ、はい」

僕は辺りを見回しながら返事をする。念のために。

「じゃあ帰ろうか、ハコ」

後ろを向いた榎風はスタスタと歩き出す。

拳が 閃いた。

相手が知覚した時にはもう遅い。

榎風が後ろを向いたのを確認してから僕は飛び上がった。体のバネを完全に縮め、一気に上45度の角度から足を降りおろす。相手が『失神しないように』急所をわざわざはずしたが相当痛かっただろう。

地面にたたきつけた『榎風の物真似をしていた人』に馬乗りになり、完全に押さえ込んだ。

「ちゃんとした顔合わせでいきなりこれはないんじゃないんですか？どっかの誰かさん？」

何かム力つく奴なので俄然拷問的なイントネーションになっていたかもしれない。

こんなことばかり何か榎風に似てきた気がする。

「お互い様じゃ、イテテッ」

軽薄に榎風の声を上げる。何か敵っぽくない尻軽な感じ。軽く腕を捻ってやった。やっぱりム力ついた。

「あなたは私が聞いたこと以外に答える権利はありません。」

こういう時は強気にいくのが一番。と榎風がよく言っていたのでただ今実践中。

「権利がないなんて殺生なことを言うな」

どうやら状況理解していないらしい。黙って『断纏』をコートの下から引き抜き、そいつの近くににあった石に突き立てる。

さも当たり前にそうなるかのように石は自壊した感じに切り刻まれ砂のように散らばった。

「こうなりたいですか？」

「イエ」

「よろしい」

聞きたいことは山ほどあるがまずは確認程度に当たり前のことを聞く。なおかつ一番の核心を聞く。

「あなたが所属している集団は？」

「それはもちろんかの有名な『ベルワナ』に」

もう一度近くに刃を突き立て地面に生々しい傷跡をつける。虎が爪研ぎしたようだ。

「嘘もこうです」

「なんでわかったのさ？」

不思議げに尋ねてきた。榎風の声で全く別の口調を使われるとやりづらい。

「あなた方が僕たちの力量をはかるような感じたからですよ。『ベルワナ』はしっかり僕たちの戦力を知り尽くしているから」
「そんなすぐばれちゃうとは、ね」

かなり残念そうだ。生を諦めているように残念そうだ。

「造作もないですよ」

こいつの小馬鹿にした態度は許せない気がしてならない。誰かに似ているような気が。

「話を逸らさないように」

危つく相手のペースに乗るところだった。やっぱりこいつというのは向いてないようだ。

「もう一度、あなたの所属している集団は？」
「……………」

相手は口を閉ざしたまま。つまり黙秘。組織への忠義は厚いようだ。

だが黙りを決め込むつもりなら僕にも考えがある。
迷いなくそいつの両手の指をすべてを切り裂いてやる。

「んぐっ……！」

痛みでうめきをあげるが僕の態度は変わらない。それにこいつは魔術師かどうかは知らないがこれで筆記系魔術を使えない。

「無駄な質問のようですね。期待してませんけど」

「なら指を切り落とすなよっ！」

まだツツコミする元気はあるようだ。

そんなものがあるうがなかるうが容赦はしないが。僕は生死についてはシビアなのだ。

「これからの質問の時にも同様にすると合図のつもりでしたが？」

次は足の指。その次は耳。末端から中心へ。

「さいで」

だがこの様子から見るとあまり問答は無意味のようだ。

「では、この質問にちゃんと答えたら解放を確約しましょう」

「答える訳ないだろ？」

本当に生意気な奴だ。

「榎風さんを人として必要としているのですか？それとも術式と『光踊石』ですか？」

予想外の質問に榎風の啞然とした顔を見る羽目になった。そして

少し考えてから、

「人として……だな」

「わかりました」

約束通りに退いてやる。有言実行は交渉の最低条件だ。

「まさか本当に退いてくれるとはね」

「ええ、ここならあそこと、あそこと、そこにいる人からの攻撃はあなたを縦にできるし、他の人のは避けられますし」

順番に指先を動かして、一人ずつさしてやった。そのときの滑稽な顔ときたらおもしろい事この上なかった。

「おどろいた？」

「おどろいた」

優越に浸ってみたのは良いが鸚鵡返しに答えるなんてつまらない奴だな。

「こっちから一つ質問していいか？」

「質問によりますね」

安請負はしないこと。生きるためには必要だ。

「何ですぐわかったんだ？ 外的要素はもちろん、性格まできっちり真似して『色々恥ずかしいこと』までやったのに……」

思えば榎風以外の人が『かわいい』なんていつてきたら身の毛がよだつ。つくづく慣れって恐ろしい。

とりあえずの安全は確認してあるし注意を注ぎすぎないようにしながら質問に答えた。

「いっぱいありますよ。」

まずこの時間帯あの人自分から起きれるはずがないんですよ。仮に起きたとしても家から出られないんです、ひもじくて。

百歩譲って家から出たとしましょう。だからってあの方は方向音痴だからここにこれない。

もしかしたらあの人には僕を見つけるレーダーがあるのかもしれませんが。それで遭遇してもあの人なら100%抱きつこうとします。

千歩譲って抱きつこうとしなかったとしてもあなたは最後に僕を『ハコ』と呼んだのがまずかったですね」

一息でそこまで全部言い切ってやった。

ある意味快拳だ。

「そんなに？」

「そんなに」

「マジで？」

「マジで」

相当自信がなくなったようだ。哀れな。

僕は笑みを浮かばせて鸚鵡替えしに真似をした。

「完全に俺らの負けか……」

「はい」

目の前のその人は生を諦めた。生きる権利を完全に放棄していた。望みに答えよう。

右手を神速で降り抜く。人間の知覚機能では見切れるはずもなく

無惨なバラバラ死体の出来上がりだ。

「最後に君で楽しかった」

彼、もしくは彼女は笑ったままだった。

「戯れ言」

それを僕は嘲った。個人的には嫌いだったけどどこことなく好きだったんだけどな。

血しぶきをあげながら無数の肉片となり地面に落下していくかつて人間だったものをすり抜けながら昨日の残党であろう奴らを再度認識、接近する。

数は五人つてところか。一分あれば十分。

十秒。

再後尾の敵に接近、『破壊』する。

二十秒。

散っていった敵の方向を確認、追跡を開始。

三十秒。

二人組の敵を同時に『破壊』、転進する。

四十秒。

三人組の一人に何のためらいもなく『断纏』を投げつける。

五十秒。

肉につきたった『断纏』を抜きそのまま横に構える。

六十秒。

横風にし、二個の球体が宙に舞う。

「ジャスト六十」

一人が死んで五人が壊れた。

最後に舐いだ首の血も『断纏』には全くつかない。血でさえも触れれば『断纏』に断たれる。

しかし黒いコートと顔は血だらけだ。

粘つく血液を早く洗い流したい。

こんなことを思う僕は残忍なのだろうか？

でも、

冷血と言われてもいい。

残忍と言われてもいい。

死神と言われてもいい。

僕が生きて行くにはそうしていくしかないのだから。

そう、

朝が誰にでも訪れるように、生と死、終わらない今日も必ず訪れるのだ。

それが榎凧と僕に来るまでの間を長くするためなら何でも殺してやる。

自分の

魂さえも

第8歩：B L O O D

僕はコンクリート製の限りなく安価なボロアパートの扉をガチャリと開け、血のついたコートを丸めて脇に置く。家につく前にほかの部分は洗い流せたがコートにこびり付いたものまではさすがに取れなかった。気に入っていたのに。

三歩歩いて気づいた。

こんがりと香る料理の臭いがする。とてつもなく食欲をさそるいい匂いだ。

そのまま、足早に調理場に行くとそこには、

「おかえり、ユナ。散歩？」

榎風がいた。

一気に壁まで後ずさった。とんでもない悪寒がする。

この際どうでもいいが僕の名前は『ユナ』に変わったらしい。

「どうしたの？ご飯なら少し待ってね。とびきりいいのができるから」

なんとということだ。あの、あの榎風がエプロンつけて台所に立っている！？

「ふん、ふんふん」

鼻歌まで歌っている。

世も末だろうか？そんなはずはない。確かに榎風のエプロン姿は似合っているし腕も一級だ。

しかし榎風は僕の料理が食べたいから絶対に料理をしない。食べ

たことがあるのは熱を出したときに食べた卵粥と疲れて動けなくなつたときの中華のフルコースが二回の計三回だけ。なのに何だというのだ!?

まさか料理の中に何か? いや、榎風はそんなに回りくどいことはない。直接襲ってくる。

「はいできた。朝だからすっきりしたものにしたよ」

テーブルに並べられていく多品目なおかずが、テーブルに花を咲かせるように鮮やかに彩る。それがいつそう恐怖をあとりとてつもなく怖い。

「さあさあ、座って座って」

促されるままに席に座り鎮座している料理とひたすらにらめっこ。

「めしあがれ」

ドンドン進める榎風。

結局恐怖と料理の味を天秤に掛けた結果、後者が圧勝してしまった。ああ、情けない。すでに口の中は涎でいっぱいなのだ。

榎風の作ったメニューは、まつの実チャーハン、ほうれん草の炒め物カタルニア風、ごま豆腐、ふき・たけのこと牛肉の炊き合わせといった具合だ。ずいぶん手が込んでいる。後で聞いて知ったのだがそこまで難しいものではないらしいがそれでも朝作るのは大変そうだ。

箸を使い口に運ぶと口の中に広がる美味。最終的には黙々と食べていた。

僕が食事をしている間、榎風はひたすら両頬で頬杖をつきにこにことしながらずっと見ていた。先に済ましたらしい。

「今まで作らなかった料理を何で今日になって突然？」

辿々しく僕は切り出した。

榎風は質問に答える前に急いた口調で聞いてくる。

「その前に料理の感想」

「えっと、その……」

ここであつたことをいえば面倒なことになりかねない。しかし僕は嘘が平気でつけない奴らしい。

「美味しかった……です」

「よかった」

空になった皿を手早く重ね調理場まで下げる。そしてせっせと洗い始めてしまった。当分は話せそうにない。

玄関まで歩いていき少しの末練はあつたが『断纏』で細かく切り刻み、マンションの裏手へ捨てた。今の榎風に見られたらどうなることやら。さわらぬ榎風に祟りなし。知らぬが仏。

普通の人間は真似しないように。真似したら逮捕されるぞ。

部屋に戻ると榎風もちょうど食器を洗い終わり片づけているところだ。

互いに視線を少し交わしてから席に着いた

「さて、ユナの質問に答えよう」

「じゃあ、何で料理を？」

さっきよりは落ち着いたので小首を傾げながら聞いてみた。

「決まってるじゃないか」

目を閉じてからふんぞり返る。いつもよりかなり断定的だ。

「そこに食材があるからだ！」

立ち上がってから明後日の方向を指さしながら声を張り上げた。
気のせいか指先が光ったように見える。

殺意がよぎった。

その雰囲気を感じてか、というのは冗談で、と早口に継ぎ足した。
ついでに席に座り直す。

「私はあることに気づいたんだ。

このまま私だけが萌えていていいのか、とね。

そこでだ、ユナ。

お前にも『萌』を分かってもらおうと思ったのだ！

だからこうして、家庭的な私を演じてお前に萌えてもらおうとしているわけだ！」

「は、はあ」

曖昧に相槌を打ってしまった。失敗、大失敗だ。

「そこで一つ疑問が起こるだろう。そう、ユナを萌えさしていれば私はどうやって萌えるのか、だ。

そこでっ！私は新たに『萌えている奴に萌える』という新しい分野の設立をここに宣言するっ！分かったかっ！」

「分かるか、ボケエツ！」

「アタアッ！」

どこからともなく取り出したハリセンをおもいきり振り抜いた。

ハリセンは榎風の頭をきれいにとらえこれまた見事に破れて使えなくなつた。思い切りが良すぎたか？

いや、それよりなんで古典的なボケとツツコミをしなければなら
ないんだ。

「酷いじゃないか！」

「知るかつ！」

何事かと思えば結局榎風の趣味か。損した気分だ。

「何が気に入らなかつた？エプロンの柄か？私の料理か？設定か？」

設定つてなんだよ、設定つて！そんなものがいつ決まつた。

「知りません！」

「知らない？そうか、お前は怖いんだな？」

すべてを諭した聖人のようなすんだ顔の榎風。

「ハア！？」

「大丈夫！最初はみんな怖がるけど慣れちゃえば気持ちいいから！」

そついいながら、榎風は小さな用紙に『世話好き×』と書き込んでいた。

誰かこの不毛な戦いを止めてください。

いつしか僕もヒートアップしてしまった。

「そついう問題でもない！」

「さあ、母さんの胸の中に飛び込んでおいで！」

立ち上がって軽く手を広げる。
再びハリセン炸裂。

「誰が母さんじゃ!」

「だって、作ったの私だし」

理論的にいえばそうかもしれないけど、違うものは違うのだ。認めてたまるか。

「『お母さんx』つと……」

「訳分かりませんよ」

お手上げ。投了。降参しました。
背もたれに倒れ込む。

「結局は主観の問題だ。気にしてはいけない。見るんじゃない感じるんだ」

「もう知りません」

そついつてそつぽを向いて座りなおした。

「いつまでここにいるつもりなんですか?」

困ったときの高速話題転換。ごく自然にかどうかは疑問だが話を
まじめに引き戻す。

「もう少し」

「危ないですよ」

淡々と切り返す。もちろんそつぽを向いたまま。

そんな僕を見かねてか、前まで来てソファ―に座った。

「あれだけやりや大丈夫だ」

「でも、ついさっき襲われました」

「は？」

そういえば言っ てなかった。すっかり忘れてた。

「一応、警戒のためにこちら辺を見て回ったら襲われました」

「なんて無法者な奴等なんだ」

軽い舌打ちをしてきれいな黒髪をかきむしる。

人に言えた台詞じゃないぞ、その人。あんたにぴったりの言葉だ。と言い返してやりたかった。それはおいとこう。

「相手は底をまだ見せてません。今の内に何処かに行方をくらましたほうが」

「無駄だろう。すぐ場所なんて割れるよ。」

それよりどつかで構えて迎え打った方がいい」

榎皿の意見はもつともだが自分達に戦力を貸してくれる人などいるのだろうか？いたとしても大分不利な条件をのまされるだろう。

例えば組織の一員になること。

例えば技術の提供。

それを考慮した上で榎皿は援助を求めに行こうというのだ。いわば賭だ。

「何処なんですか？」

不安そうにいうと答えはあっさりとはぐらかされた。

「場所は後で言うとしてその前にやることがある」
「変なこと言ったら殴り殺しますよ」

念押ししておかないとまた話がそれる。
さすがに榎風もちやんと答えてくれた。人指し指を立てて天を指す。

「手持ちの戦力を少しでも増やしておくんだ」

「ということは作るんですか？新しい魔術制合成生命体を？」

「ああ」

まあ、妥当ではあるだろう。しかし、魔術制合成生命体を作ると一時的に魔術による世界的干渉ができないらしい。詳しいことは知らないが『世界の均衡』とか『力の安定』の為らしい。
作者者の技量と作られる生命体の力量に比例するらしいが。
今度は親指以外の四本を立ててから言う。

「四日だ」

「四日ここを守ればいいんですね」

すぐに意図を察してから答えた。

四日とは瀬戸際の時間だ。大部隊がやってきてもおかしいことは全くない。

時間との賭。

死のゲーム。

「わかりました」

「頼んだ……」

申し訳なさそうに言いながらうつむく。すぐに顔を起こしたが。早速光踊石を空中に走らせはじめた榎風。僕は邪魔にならぬように部屋から出て見張りを始めた。

一日目

ひたすら考えた。何故今になって榎風が魔術制合成生命体を増やすのか。

先ほどは素直に受け入れたが幾つもの奇異な点がある。

まず何故今頃になってなのか？

もう少し前から作ってあればもっと楽に世界を飛び回れただろうに。一人や二人増えたところで移動速度は変わらない。むしろ上げるのではないだろうか？

次に自分達と対峙している組織についてだ。戦力を小出しにして攻めてくるは、榎風の偽物まで出してくるは やり方がとにかく気に食わない。

全体像もなかなかつかめないし。

何か考えただけなのにすごく苛つく。いつもの国家警察や世界警察、魔術集団に襲われたときは違う感覚にひたすら苛つく。

今までにないことが起きたから？

分からないことがつかえているから？

どれも違う。そんな非日常が日常なのに今更そんなことで苛立たない。しかもやっていることがしっくり来ないし。

もう苛立っている自分に苛立つ！ムカつく！

分からないことがこんなに疎ましいことだと初めて知った。

…… 結局

その日は悶々と、ひたすら悶々と考え連ねて夜を巡り朝を待っていた。

榎風のことだけ信じて。

二日目

考えすぎたせいでもう何がなんだかわかなくなった。

何に苛立つてるんだ？おかしくなりそうだ。

もう一度頭の中を整理してみよう。

いつもと違うのは敵の戦法とあやふやな正体、榎風の反応。新しい魔術制合成生命体

相手については的外れすぎる。

こんなに苛つくはずがない。むしろ冷静になれる。

榎風の反応は異常だった。敏感というよりも逃げ腰すぎる。いつもなら相手を引きずり出して壊滅寸前まで叩きのめすというのに。

これが気に入らないのだろうか？これは一番合理的で一番望むべき形だと分かっているのに心の何処かで受け入れていない僕がいる。まどろっこしい。

何で心は受け付けないんだ？

いつそ心がないように作ってくればよかったのに。

それは無駄な話だが。

榎風に変わって欲しくない。ただそれだけだ。

何せ僕は『永遠の恋人』なのだから

三日目

トントントントン

ひたすら指で、

トントントントン

床を連打する。そうしなければ眠ってしまいそうだからだ。

一睡もするわけにはいけない。

守らなければならない。

それだけで僕はひたすら目を開ける。　こんな時には自分が人間に近いことをとことん呪ってやった。

うう、視界がぐらついて微睡みが最高潮となって僕を襲う。何よりも最強の敵だ。

一日なんて考えてられない。後一時間、後十分、後五分を連続するだけだ。

その時だった。

確かに感じた。

一気に目が覚め高速で戦場把握思考が展開していく。

傍らに置いた『断纏』を指が白くなるまで強く握り立ち上がる。

徐々に張りつめるような緊張が肌をチリチリと焼く。

こんな中でうたた寝できたら大した者だ。

「いつでも来い……！」

独り言で意志を強く強く固め感覚を前方位に向ける。

あらかじめ道は前からしか攻められないよう処置をしておいた。

相手の行動を完全に封じるのではなく利用するのが本当の策士と

言うものだ。その点、自分は合格だと思う。

奥歯ががちと音をひっきりなしにたてる。

今まで感じたことのない戦慄に喜々恐々としている僕の前に影が現れるまでそう時間はかからなかった。

前回のようには人ではない真正正銘の化け物、鬼のような形相で毛の無い巨大な猿が無数に蠢いている。

手には剣や槍、斧などまちまちな武器を持ち盾など無い完全な捨

て駒の『猿鬼』の軍勢。

「さあ、来いよ。こっちはいろいろ憂さがたまってるんだ！」

挑発はするがこの位置からは絶対動かない。何があっても。

先陣きって飛び込んできた二匹の猿鬼を一匹は『断纏』で、もう一匹は左手でねじりあげ蹴り碎く。

まさに銃弾のように次々と群がる猿鬼を『断纏』で、手で、足で、口で捌いていき、一線を越えさせない。

左手に大太刀の兵装『葬倒天馬』を繰り出し鮮血にもかまいなしに力をふるう。

軌跡さえも追わせない神速から神速への技の連撃。

一匹、また一匹と切り捨て、叩き潰し、噛み碎く。

相手が人間ならば恐怖で声を上げ逃げたろう。しかし相手は僕と同じ魔術制合成生命体だ。恐れを本能ですら知ることのできない程、雑に作られているがそれでも同じ。

また一匹殺した。すでに殺すと言うよりも反射的に斬る程度でしかなくなっている行為だ。

『葬倒天馬』で両断された猿鬼の血液を頭からかぶった。気持ち悪さなどとうに消え果て、手は痺れ、膝は碎けそうで、体の諸々から滴る血液は自分のものだか誰のものだかは判別がつかない。

消耗が恐ろしいほどに早い。

それでも僕はここを退くわけにはいかない。通すわけにはいかない。

そんなことなど構い無しに絶え間無く迫りくる猿鬼。

斧、剣、槍 それぞれの重さが『葬倒天馬』と交錯し、蓄積し、遂に

酷く澄みきつた音で根本から折れた。

第8歩：BLOOD（後書き）

どうも西宮東です。

友達に漢字が読みにくいし意味が分からないとの指摘を受けたので解説を挟みます。

『鴻の翼』……『おおりのつばさ』と読みます。『鴻』とは大きな鳥の意味やコウノトリの意味などの説がありますが、ここでは『^{ほうおう}鳳凰』の意味で使われています。だから、紅い翼な訳です。

『梟騎の瞳』……『きょうきのどう』と読みます。『梟』はフクロウです。不吉なものとして昔から言われていますが、周知の通り夜目がすごい利きます。『梟騎』で勇ましい英雄という意味です。

『幻夢の誘手』……『げんむのいざないて』と読みます。説明は特にありません。

『断纏』……『だんてん』と読みます。字のごとく『たち』を『まとう』。つまり、どの部分でも切れます。

『葬倒天馬』……『そうとうてんま』と読みます。これも特に説明はありません。

といった具合です。わかっていただけたら光栄です。

分からないこと、指摘されること、アドバイス、があればどんどんください。

第9歩：DOUBLE LIGHT AND ONE BLAZE

高く澄んだ金属の悲鳴は耳を介し頭に響く。

でも、僕はそんな音を気にする余裕など無かった。

何せ身を断つような痛みが全身をかけ巡ったのだ。体中の感覚が麻痺しても不可思議なことは粉微塵もない。

『幻夢の誘手』にヒクつかせたり、『鴻の翼』の翼が羽ばたけるように僕についている兵装には神経が通っている。触られればなにかしら感じるし傷つけばいたい。

同様に『葬倒天馬』も肉をたつ感触が直に伝わってくる。故に『葬倒天馬』が折れたのは僕の腕が直接折れたのと同等の痛みが走る。

「
っ！」

顔をもろに歪ませて、涙、鼻水、唾液を垂れ流す。

痛さのあまり『葬倒天馬』の柄と『断纏』を取り落とした。『断纏』は僕の手から放れて効力を失い、カランと短い音を立て地に落ち、普通のナイフに成り下がる。

それでも膝は折れなかった。不幸中の幸いか長時間戦い続け神経が麻痺していたおかげというものだ。

落とした『断纏』を拾いたかったが、低い姿勢をとるとそのまま崩れて二度と起きあがれそうにないので止めておいた。

これまでと変わらない様子で猿鬼は武器を形無しに構え、こちらを凝視している。攻撃が止まったのは僕の様子が変わり事の行く末をみているのだろうか？恐怖を感じないのに状況判断するだけの知能があるとは。それとも何か？最初から僕は恐れるに足らない存在だったのか？

「ム力つくなあ

！！」

叫ぶように吐き捨てたが言葉。自分でも口が開けたことに驚いた。

まだ、力がある……

『葬倒天馬』を無に返し、

まだ、動ける……

『断纏』を拾い上げ、

まだ 戦える！

まっすぐ、まっすぐ前を見据えた。

「ウオオオオオオオ！」

獣のような叫び。

今まで動かなかった足を急速に動かす。

足の裏に爆発を起こしたかの如く跳躍し、一步で間合いを零にする。

「失せろおお！」

信念が折れた。

本能で動いた。

動かなかった腕を無理矢理動かし、一瞬一太刀で二十二の肉片に

猿鬼を解体する。

骨が折れようが砕けようが無くなるうが関係ない。

肉が裂けようが喰い砕かれようが決られようが関係ない。

見境無く、例外無く、目の前の障害物を動かなくしていく。

アパートの廊下を掃討し終わると、入り口まで前進する。アパートの廊下は既に紅いペンキに塗り変えられてベトベトくつつくし滑りもしたがかまわず走る。

榎風のいる部屋へいくために通らなければならない。安アパートの入り口まで出ると残された力をすべて『断纏』に込め、ひたすら強く握る。

飛びかかってくる猿鬼を軽くないなす様に肉片へと瞬く間に変換。

「雑魚共があ！」

反撃のせいで血が中からせり上がってくる。

血でのどが焼けて声を出すだけでも痛い、何か喋っていないと今にもひざが折れそうだ。

「穿てえ！」

『断纏』を持っていない左手で猿鬼の心房を直に握りつぶした。代わりに指の骨が砕ける。

なけなしの左手の力を振り絞り、また飛びかかってきた猿鬼をたたき落とすと、たちまちぴくりとも動かなくなった。

それと同時にもう左手も動かなくなった。全治三ヶ月と言った感じ。

なんて自己分析を冷静にしている場合じゃないか。

だらんと左手は重力に逆らえず下に下がっているが、右手は氣力を失うことなく上を向いている。両手とも辛いのに変わりはないのだが。

「グオオオ！」

「堕ちろお！」

無駄な雄叫びをあげて突進してきた猿鬼を肩口から両断し侵攻を阻む。

別の場所からまた飛びかかってきた猿鬼に気を向けた瞬間。

「グワァァ！」

最初はなにが起きたか分からなかったが痛みの走った右腕に目をやった瞬間にすぐに悟った。

さっき切り裂いたばかりの猿鬼が右手に牙を深く突き立てていた。

「　　っ！クツソォ！」

右手を大地にたたきつけ、頭を砕いて無理矢理はずす。

これで両腕が動かなくなった。足もろくに動かない。

「クツソォ！動けよ、動けよ、動けよぉ！」

呼びかける口からも血が溢れ言葉を遮る。

無情にもまだ数匹猿鬼は残っている。

もう少しなのに、もう少しで守りきれなのに。折れた信念は倒れて砕けた。

こんな簡単なこともできないなんて。

今榎風のところに猿鬼が行けば確実につれていく。魔術の使えない状態の榎風をつれていくのはたやすいだろう。

「グワァァ！」

僕が戦闘不能になったのを確認すると残りの猿鬼が群がってくる。こつなったら自分の体も盾にして守ってやる。絶対に通さないっ！

「飛ぶだけが……能生じゃないんだよね！」

『鴻の翼』をすべて展開。入り口を塞ぐように翼を自分の前に重ねた。

赤き壁。

猿鬼の無秩序に羽に食らいつく音が雨が屋根を叩くように規則的かつ断続的に鳴り響く。

飽きたかのように音が止まったかと思うと、今度は刃物を突き立てている音が響き続けている。

聞いていてあまり気持ちのいいものじゃないな。それに二度と聞きたくもない。

液体の滴る音に自分の血が流れているのかと思ったが違ったみたいだ。音が澄んでいる。

それがすぐに雨だとわかった。周囲に立ちこめていた鼻を突く血の臭いを鎮めていく。急に降り始めたのから見て夕立だろう。

白雨の音はいつもと比べものにならないほど優しく頬を伝い、僕の血も一緒に流してくれたようだ。

さつきよりずっと清々しい気分だ。傷口にしみるほどの神経が残っていないのがよかったようだ。

余りにそれが優しくて。

涙がでるほど優しくして。

その所為でついに

ついに僕のひざが折れた

今は翼にすがって身を起こしていると言った具合だ。

その翼も猿鬼にこじ開けられようとしている。あらがう力など疾うの昔に残っていない。『鴻の翼』の重みに開けられないでいるのだ。

ようやく猿鬼一匹が通れる感覚が開いた瞬間。
終わりの刹那。

光が、
落ちてきた。

それは比喻抜きで本当に落ちてきた。目が眩む眩しさが空中で炸裂したのだ。世の人はこれを閃光手榴弾と呼ぶ。

いくら考察能力のない猿鬼でも視覚はある。大量の光が目に入れば目はたちまち使いものではなくなるはずだ。普通の作りならばだが。

光が止まない内に何かが飛来してくる。直ではないものも目に光が入ったのでよく見えないが陰は二つあった。

「ヒッサアーツー!!」

脳の奥まで響くような高くて明るい女性、いや少女の声だった。赤髪紅瞳、短髪につり目。榎風に少しか似た明るそうな少女で身の丈ほどある棍棒を両手で力任せにふるう。破壊力は少女の見た目に反してかなり凶悪だ。

何故か いや榎風の趣味で装飾過多な白と黒を基調とするフランス人形のようなゴシッククロリータの格好をしている。

「掃討します つ！」

こちら少女の声だが先にでてきた少女よりも大人びていて落ちて着いた感じ。

蒼の髪と眼。髪は棚引くほどに長く美しい。こちらかなり長い刀を両手で鋭く素速く動かしている。和服という動きにくい格好ではあるが本当に強かった。

翼の合間からみた少女たちは瞬く間に残りの猿鬼を殺した。何の迷いもなく。

僕は見苦しくも生きている　そんな中途半端さに心が痛い。
それに新しい魔術制合成生命体は僕より強い。それなのに僕は必要なかと自分の存在に心が痛い。

「私の名前は茜だ！よろしく！」

「葵です。今後とも宜しくお願いします」

一通りやることを終えてからようやく二人は自己紹介をしてくれた。

小さな体をくの字に曲げた後、　僕が何も言わないのを了解取ったように茜は棍棒を三つにたたみ、　葵は刀を鞘に収めた。

「榎風さんは私たちを作った後に倒れました」

「まあ、能力を使い果たした上に三日三晩飲まず食わず寝ずじや当然だろうな」

榎風のことを聞いたとたん僕は榎風の側まで行こうと体を動かさうかとうとした。が、二人に制止された上に体がうまく動かなく座り込んでしまった。
情けない。

「榎風さんは倒れる直前に貴方様のことを保護及び治療を依頼されました」

「葵、言い方がかてえーよ」

「要約したまでです」

「だからあ、喋り方をくださいよあ」

「がさつ過ぎるのですよ、あなたは」

「どうでもいいから、言い争いよりも先に榎風さんのところまでつれていってください」

息が戻ったのを確認してから間髪入れず続いていた不毛な言い争いにツツコミを入れた。

どうやら性格は榎風に似ているようだ。まさかあの鬱陶しい行為が三人に増えるのではないのかという予感はやぎったがとりあえず今は忘れておいた。

「わかった」

「わかりました」

同時に返事をしてくるものだからこの二人が双子に見えた。って事実、双子なのか。性格が似てないことから人間で言う二卵生双生児なのだろう。

後ろを振り返り、安アパートの短い廊下に目をやった。さすがにグロテスク。吐きそうだ。

この光景を見るからに僕が戦っていた間にどんな顔でどんな雰囲気であったか容易に想像がつく。少なくとも好感は持たないだろう。さてこれからどうやって榎風のところまで連れて行って貰おうか？肩に担げるほど腕が大丈夫なわけがなく、他の場所も同様に然りだ。

悩んでいる最中。

ドンガラガッシャン！

続いて、

「あいてて……」

それはよく聞き慣れたはずなのにひどく懐かしく感じた中性的な美人。

「か……なぎ……」

自然に口からこぼれた女性の名。一度あつたら忘れるはずのない珍しい名前と独特の性格。

「久しぶりだな。三日会わないと、さすがに」

これほど動けないことが煩わしいと思ったことはない。すぐにも近くにいきたかった。

「足がふらつくから、そっちまで連れてってくれると嬉しいんだけど」

僕の向こう側にいる葵と茜をみながら言った。

「はい」

「わかりました」

僕の羽の脇をすり抜け血だまりを気にもせず、榎風の左右脇に立つて支える。

近くまできて気づいたが階段から落ちて転けた所為か、体中のあちらこちらと自慢の黒髪にも血痕がついている。すまないことをした。

そんなことを全く気にかけず、支えられながらだがしっかりと足取りで一步一步向かってきた榎風に途轍もない安らぎを感じるのは何故だろうか？

羽を納めてから無理矢理向きを転換し地べたに座り込んだ。

こちらまできてから屋根のあるところに座らせようと茜と葵はしたが榎風はわざわざ雨の中、地べたに座っている僕の目の前に座っ

てくれた。

榎風はいつもと同じように。いや、いつも異常に屈託のない笑顔を作っている。疲労の色も強いがそれでも綺麗だと僕は思った。

「ごころうさま」

榎風が言ったのはそれだけだったけど、それが心の奥まで染み渡ってくる。

ああ、もう！言ってやりたかった文句も全部飛ぶし、涙は出てくるし、最悪だ！人生最悪の日だ。

榎風はそんな僕をじっと見て、抱き寄せる。

「おまえが何かを悩んでるのはわかる。でも、おまえはいつまでもおまえで、私の『永遠の恋人』だ。

ほら、手だってこんなに暖かい」

血塗れになっている僕を気にせず頬に手をくっつけて両手でゆっくり包んでくれた。それがどうしようもなく暖かい。

白雨が止むまで僕は泣き続け、榎風は暖かく包み込んでくれた。葵と茜は立ち尽くして待つ。

雨は優しく頬伝って地に落ちた。

第10歩：TOGETHER WITH MALLOW

低く低く大海に船が鳴く。

「イヤァー！海風は気持ちいいなあ」

「快適快適い！」

太平洋上に白い線を引きながら貨物船は西へ進路とる。

その甲板の上では榎風と茜がきやいきやい騒ぐ。

十日前の傷はすっかり良くなり、日常生活に支障はない。治療力の高さを痛感した。しかしまだ力を入れると芯に響くような痛みがはしる。

「二人とも元気ですね」

葵の静かな声が微かに耳に届いた。

「ん？ああ、榎風はいつも通りだし茜はあれが本質じゃないのか？」

ここ最近はいつもあの調子で騒いでいる。少し暗めだった僕のために明るくしているのだと思うと強く叱れなかった。後でわかったが榎風は茜と気があって遊んでたらしい。

「そうですね」

僕の横に凜と立っている葵は僕によく話しかけてくる。

でも榎風や茜のように決して騒がずいつも冷静に事を傍観している。僕が今までであったことがないタイプの女性だった。榎風よりもずっと精神的に大人な部分があり僕も落ち着ける。

でも一つだけ困った事と言えば、

「ねえ、御義兄様」

「だから、それ止めてくれない？」

僕を兄と呼ぶことだ。

「無理です。」

名前の次に深く脳内に刻まれていますから」

「榎風も厄介なことをしてくれたな」

そつと気づかれないようにため息をついたが良かったことなのかもしれない。

葵と茜は家族だと思えるし、家族が増えるのはいいことだ。世界を渡るにおいて二人の年なら妹を語るのが丁度良いところだろう。

「でも、何で『兄』ではなく『義兄』なんだ？」

「『その方が萌えるから』だそうです」

長く重い沈黙。

先程よりも深いため息がお互いの口から溢れ出す。

「本調子ではないのですから座られてはどうですか？」

こんな細かい気遣いは葵ぐらいだ。本当に嬉しい。
ありがたくその気遣いを頂戴した。

「正直座りたかったんだ。ありがとう」
「いえ」

甲板の端にあるベンチに並んで座った。とは言っても僕が座った後に立ったまま話そうとしたのを無理矢理座らせたのだが。

「兄と呼ぶのを止めるのは榎風のせいで無理なんだろうけど敬語は止めなよ。それじゃないと変だろ？」

兄弟で敬語は変だ。辻褄があわない。

「変……なのですか？」

「ああ、変」

それに僕は敬語が嫌いだ。壁を作ったり作られたりしているようであり気分のいいものではない。

「だからさ僕の前だけでも良いから敬語は止めてくれない？」

強要はしない。ある程度僕の自己中心的な意見も入っているし。

「わかりました」

「違う」

臨機応変は苦手なようだ。それが少しだけおもしろくて小さく笑ってしまった。

「はい」

「それも違う」

相当だめなようだ。

僕の言葉に少し困ったような眉を寄せ顔を戻すと少し顔を赤らめて、

「……………うん」

ぎこちなく小さく声を発しながら笑顔で答えてくれた。榎凧とは違った笑みの綺麗さがある。

「じゃあ少し船内を回ってみよっか」

「はいえ、うん」

直すのは少し大変そうだ。やはり考えを押しつけている僕は傲慢なのだろうか？

「どこか行きたいところはある？」

僕の問いかけに葵は申し訳なさに答える。

「船についての知識はあまり……………」

よくよく考えたら生後十日なんだよな。生きている実感さえあるかわからないのに無茶だというものが。

グウ

ん？さっきのは聞き間違いだろうか？

あれは紛う事なき、

隣には顔を真っ赤にして葵が立っている。やはり　なのか？

結局、葵の腹の音が決め手となり足をレストランへと向かわせたのだった。

船内は単調な廊下が複雑に入り組んでいる。

まあ、貨物船だから客船のようにきらびやかさは必要ないだろう。故に高級レストランなどあるはずもなく食券と引き替えに食事を渡すような安っぽい食堂だった。

葵はこんなタイプ　と言うより赤の他人が作る料理を食べたことがない。僕が動けない今、榎風が作ってくれた。僕の料理へと変わったときに落胆しなければよいが。

目の前の事態に戸惑いが隠せないようだ。

「あの、えっと、その」

なんてずっと連呼しながらきよるきよる辺りを見回している。

それに周りは屈強な男たちばかりだ。外見が子供である僕たちの中にいれば奇異の目は浴びるし、尋常ではなく目立つ。

それに葵はアジアのごく一部でしか着られていない『着物』を着ている。榎風が同類のものを時々着ていたから慣れていれば慣れている僕とは違い、母国の人以外では偏屈なことこの上ないだろう。最近では母国の人も珍しがるそうだ。

最終的には僕の後ろでがっちり服の裾をつかんで隠れ歩いている。

「大丈夫？」

「……大丈夫です」

自信なさげに答えられた言葉に苦笑しながら自販機の前を歩いていく。服がちぎれんばかりに強く握られて歩き辛くもあつたが引きはがす理由もやる気もない。離れると言えばすぐにでも離れるだろうがその場から動けなくなりそうだ。

初めて見たときからのギヤツはとんでもなく薄げで今にも消え入りそうだ。

自販機の前までやつとの思いでたどり着きズボンの右ポケットに手をつ込んで財布を引っ張り出した。

榎風だと何かと危ないような気がするので金銭は僕が管理をしている。榎風に持たせると一日で底をつきそうな気がするならない。

「どれにする？」

「……食べたことがないからわからないです」

そりゃそーか。

機械的、辞書的には料理を知っているが正確な味までは知らないのだろう。

ということで適当に二つボタンを押す。

古めかしい機械音がして食券とお釣りがでてきた。小銭を驚掴みにし、財布の中に乱雑に放り込んだ。

そのまま横にスライドしてあるき、食券と料理を交換してくれるカウンターの前に立った。

にこやかなカウンターにいる中年女性は必要以上に話し込まれ無駄な時間を食ってしまったが急いでいるわけでもないし葵の言い経験になる。

偉くにやけていたが何なのだろう？こんな貨物船だし子供なのが珍しいのだろうか？

トレーを持ち真ん中あたりの席につく。右には僕のカレー、左には葵のうどんが乗っている。榎風に作り方を教わって作ったことがあるがうどんには癖があまりないから大丈夫だろう。

榎風のことだから箸の使い方ぐらい分かるように作っているだろう。僕が基本的に箸を使う食事をよく作るから。

これまでの十日間は僕のためにスプーンにしてもらっていた。

「いただきます」

「いただきます」

僕の食べているカレーは値段の割においしい。たぶんうどんもおいしい。

うどんを選んだのは正解のようだ。箸は和服に似合う。

「おいしい？」

確認程度に微笑みながら聞いてみた。

「……おいしい」

すると可愛らしく笑いかけてくれた。
そして鸚鵡返しに

「……おい……しい……?」

ぎこちなく聞き返してきた。聞いて以来顔を赤らめてうつむいて黙々と食べている。

正直にかわいいと思ったから自然に笑みがこぼれてきた。

「うん、おいしいよ」

そのとき周りの屈強な男たちがにやけていることを僕は知る由もなかった。

食事を食べてから一休みし、甲板へと戻る為にゆっくりと歩を進めた。

葵との間に流れる落ち着いた時間は好きだし、名残惜しい気がな

いと言えは嘘になる。しかしそろそろ榎風たちが心配を始める頃だ。でも二人の歩みは自然と遅くなる。甲板が近くになるのと比例して特に葵の足がゆっくりとなっていくのがわかった。このままだと甲板に着く頃には目的地に着いてしまいそうだ。それはそれで良いのかもしれない。でもそれでは榎風たちに迷惑をかけることになる。それはなるべく避けたい。

「……お義兄ちゃん？」

気づくと僕は止まっていた。深く考え過ぎてたようだ。

「疲れた？」

気遣いあふれる思慮を巡らせれるのは葵以外に僕は出会ったことはない。もっとも深く関わったことがあるのは榎風だけなのだが。

「いいや、ちよっと考え事をしていただけ」

「よかった」

何かと詮索してくる榎風とは大違いだ。

榎風は榎風のままでいいがこういう落ち着いた時の流れは必要だとしみじみ思う。

軽い衝撃が僕の体にかかる。いつもならどうという事はないぐらいの軽い衝撃。

だがいきなりの事に驚いて僕はとびのいた。しかし方向が悪かった。

たまたま手すりが弱っていた所為か加えた力が強かったのかは知らないが手すりが、キーンと高い音を立てて折れてしまった。

って冷静に分析している場合ではない。

「デワワワアア！」

重力に逆らわずに真つ逆様。速度を上げて落ちていく。でも安心。僕には『鴻の翼』がある。先の戦いの時に少し痛めたが使い物にならないわけでもない。幸い船から海面までは距離があるし、濡れずにすみそうだ。

無制御に広げた翼の面積のため止まるのに時間はさしてかからない。

予想通り止まったのは止まったが今度は上から落ちてきた陰に、ギョツとした。まっすぐ葵が降下してきたのだ。

すぐに姿勢制御を行い全身を使って止めたが、勢いを殺すため五、六m下へ。

「どうした！？」

理解ができずものすごく焦った。焦るなと言う方が無理だ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

だがひたすら目を潤ませて謝る葵。どうにもならないと判断した僕は頭をなでてやり、とりあえず落ち着かせた。

「いいんだよ。それより何で突然」

おそらくさっきの衝撃は葵の突撃だというのは予想がついた。が、タツクルは何故なのか理由が気になる。

落ち着きをお互いに取り戻し、少しだけ困っていた僕に葵は小さく話し始めた。でも胸の中にいたのでよく聞こえる。

「榎皿さんが」

「榎風さんが？」

言葉を切ったので相づちを入れる。

葵は全く動かない。

「三つのことを言いました」

三つ？なんなのだろうか？くだらないことは想像はつく。

葵は生真面目な分、真に受けたようだ。

「『一つ、あいつには逆らうな。絶対服従した上で萌えさせる。』

『一つ、二人きりの時には手をつなぐ、腕を絡ませる、抱きつきのいずれかをやれ。』

『一つ、それ以上に事を進展させたら殺す。』

……だ、そうです」

くだらないが、たぶん最後の『殺す』は本気な気がするよ。

そのところも含めたさなければ。

「えーと、それには従わなくていいよ」

「そう、なの？」

やっぱりか。

榎風に対しこんな馬鹿馬鹿しいこときいてちゃ身が持たない。

「うん」

何かホッとしたような顔だ。真面目な性格からか、結構なプレッシャーだったのだろう。

「じゃあ、上に戻ろうか」
「うん」

今までの中で一番いい笑顔で答えてくれた。
一羽ばたきでもと居た場所まで戻れ、葵をおろした後、『鴻の翼』
をしまつて着地した。

「これからよろしくね、葵」

右手を差し出した。

「うん、お義兄ちゃん！」

右手で握り返してくれた。

この『お義兄ちゃん』は止めてほしいが、これ以上葵に何かを言うのは良くないだろう。

お互い手を取りさつきより若干速いスピードで歩き始めた。

「おーい！葵いー！カウー！」

一番聞き慣れた声が僕を呼ぶ。
初めて知ったが今日の名前はカウのようだ。呼びづらい。

「義兄貴いー！葵いー！」

続いて最近よく聞く明るい声。

「どうしたんですか？」

騒ぎ立てる二人をなだめるように落ち着いたそぶりで振る舞う。

葵との時間の余韻もあるが。

「落ち着いてるな、随分」

「落ち着いてるな、随分」

「まねするな」

「まねすんな」

子供みたいな争いに頭を抱える。二人ともマイペースだよな。

「ついたんだよ、ついに」

目的地に着いたからこんなにはしゃいでいるのか。この二人ならば納得。

「結局目的地はどこなんですか？」

船に乗る前に確認したのだが目隠しして乗船させられたので全く知らない。これじゃ拉致だ。

「教えてほしいい？」

「まあ、一応」

「チュー一回で教えてやろう」

眼を閉じ口をとがらせて顔を差し出す榎風。改めて思ったがとても綺麗だ。

「謹んで遠慮させていただきます」

どうせ上陸したら分かることを無理をしてまで知る必要はない。

「冗談だつて！」

あからさまに本気の目立ったのは気のせいだろうか？

そんなことは遙か銀河の果てに追いやり服の下からマイクを取り出し、番組司会者のごとく、

「さあ、発表です！目的地は　　！」

どこからともなく取り出したドラムを茜が叩いている。

無駄なところに演出がこっているなあ、と素朴に関心。

真横からシンバルが爆音を響かせた。いきなりのことにびっくりして、ひっくり返るところだった。

葵も変なとこでのりがいい。

榎風はもったいぶっていた語を大々的に口で紡ぐ。

「日本だ！」

その言葉に開いた口が塞がらなかった。

第10歩：TOGETHER WITH MALLOW（後書き）

サブタイトル説明

” M A L L O W ” とは英語で『葵』を意味します。

つまり、” T O G E T H E R W I T H M A L L O W ” は『葵と
いっしょ』と言うわけです

第11歩：CAT MASK

短かったようで長かったようなよくわからない時間の感覚に戸惑いつつも船旅は驚愕を覚えるぐらい唐突に終わりを告げた。船旅は初めての事じゃなかったが、榎風以外の生き物　ましてや、人間なんかと旅路を共にしたことはない。そんな些細なようで大きな変化が僕の時間のとらえ方を変化させるなんて考えるどころか、頭をよぎることさえなかった。

あの日、あの時、あの場所で、榎風の胸の中、声を上げて周りをはばからず泣いたその刹那から、僕は何か変わってしまったようだ。今まで、榎風以外の他人を必要以上に遠ざけて暮らしてきたその世界観を馬鹿なものだと嘲り、葵や茜とふれ合うことを心の奥から心地よく思える。まるでコインの裏と表がひっくり返ってしまったかのように。

それだけ、あの日の出来事は僕に多大な影響を与えたのだろう。それが良いかどうかなんて今では分からないし、この先でも分かるものじゃない。

ただ、

後悔だけはせず、まっすぐ生きてみようと思う。

それで榎風を、葵を、茜を、これから関わる名前も知らない誰かを傷つけてしまったときは頭を地につけて謝ろう。

それが今僕にできる唯一のことだと思う。

そうでしょ、榎風？

埠頭から二十分程度歩いてから電車に乗り、数え切れないほど乗り換えた。車両の走る名もよく分からないローカル線の窓からはのどかな緑の山々と田圃。近くのもののは速く、遠くのもののは遅く流れ

ていく。

久しぶりにこんなのかな風景を見たせいか状況からはかけ離れ、ひどく落ち着いている。嵐の前の静けさという奴だろうか？

嵐と言えば目の前はすでに嵐だ。

初めて乗る電車に、葵は僕の隣に座って控えめに、茜は誰も車両にいないことを良いことにあっちに行ったりこっちに行ったりとおっぴらに興味津々だ。

榎風は榎風で待ちきれないかのように体を上下に揺すって、いつもと違う取り繕ったかのようなぎこちない笑みを浮かべていた。榎風に緊張なんてないかと思っていたがそうでもないらしいな。

時々咳払いまでして声をいつでも出せるようにセットしているような配慮を榎風がすると言うことは相当尊敬すべき人なのだろう。

この人の場合、米国大統領まで手懷けてしまいそうだな。

つまりこの人は米国大統領よりも地位が高いと言うことになる。

その榎風よりもさらに上を行くとなると 考えるのはよそう。

そんなことを気にしていたら今頃、僕は燕尾服をきている。

まあ、何はともあれもうすぐ終着のようだ。

「終点の一つ前で降りるからな。くれぐれも乗り過ぎさないようにしてくれよ。一時間に一本しか電車がいないんだからな」

偉くしつかりとしているな、今日の榎風は。やはり今から会いに行く人の影響だろう。

それにしても一時間に一本しか電車がいないなんて笑える。随分近代化が進んだここ、アジアの極東・日本にもこんな風にゆっくりと時間が流れているところだけでも驚けるな。

そう思っただけで視線を後ろに投げると夕焼けがえらく目にしみた。もうすぐ夜が来る。となるとそろそろ『カウ』って名前とお別れだろうか？

「カウー、荷物をこつちに渡してくれ。その橙色のボストンバックだ」

無言で言われたとおりにする。僕だって緊張して余裕がないのでこの対応は仕方ないと言えは仕方ないし、情けないと言えは情けない。その点茜は大物だ。

立ち上がって上に載せてある鞆の山の中から、奥の方にある橙色のボストンバックを周りのを崩さぬよう押さえながら慎重に引き抜いた。軽かったのでそう時間はかからずに引き抜けてよかった。

中身は布のようだが服だろうか？まさかここで着替えるなんて言い出したら気絶させても止めよう。

「あつたあつた」

少し鞆を探った後、宝物でも見つけた子供のように他の服などにせず引き抜いた。

白色電灯に照らされてきたそれは灰色でやすい麻で作られている巨大な布地だった。

「ふー、虫食いなんかなくてよかった、よかった」

布を広げながら一通り麻布を見て回り、安堵のため息をつく榎戸。

「何に使うんですか、そんなもの？」

一見何の変哲もない布だが榎戸にしてみればそんな偽装は朝飯前だ。答えないにしても聞いておく価値はある。

「ん？これか？」

お互いに首を傾げはかる変な二人。なんとなく恥ずかしかったので言葉を無理矢理絞り出す。

「それ以外に何があるんですか」

「着るに決まってるじゃないか」

よくよく見るとそれは巨大なフードがついている巨大なマント。

巨大なマントをつけた榎風は顔まですっぽりと包まれてるくに誰か判別できない。小さな子供向けとは違う、いかにも旅の魔法使いみたいなイメージを与える服だ。

まあ、逆に隠していることが特徴になってはいる事は言うまでもない。

それに実際こんな人、現代社会で見たことはない。

「ものすごく怪しいぞ、榎風」

強い口調で印象づけるように僕は言った。

「ヘンタイイ、ヘンタイイ！きやはははは！」

茜は面白がってるし、

「……こんな場合どうしたらいいんですか？」

葵は葵で対処に困っていた。

他人が乗っていたら事の収集がどれだけ大変だったことか。

「これで完成」

榎風はさらにバックからお祭りの露店で売っているような猫のお

面を顔にかぶせた。

確かにこれで完全な変人の完成だ。

「……どうしたらいいんですか？」

心許なく葵が何度目かの質問をする。そんな縋るような目で見ないでほしい。

「他人のふりをすればいい」

と苦笑しながら答えた。

「次は五十鈴、五十鈴駅」

車内アナウンスが流れ、程なくしてゆっくりとスピードを落とすていく。

慣性の法則で体が傾きそうになるが何とか踏ん張った。だが立っていた茜は転ぶ。そして何事もなかったかのようにすぐ立ち上がる。いくら何でも恥ずかしいようだ。

「茜、人が来るかもしれないんだから座って」

「はい」

茜はたいていのことは素直に聞いてくれるので反抗せずに葵とは反対側の僕の隣の席に座る。

それにしてもこのフリフリした服は榎風の策略なのだろうがどうにかならないものか。

空気が抜けたようなドアの開く音がしたので何気なく視線を送ると、ちょうど十五、六歳のかわいい女性が顔をのぞかせている。

顔たちは幾分か幼げに見えるためか、かけている眼鏡が剰り似合

っていない。

年をとると身に付く相応の貫禄も感じられない。それでも十五、六歳と分かったのはどこかの高校の制服を着ていたせいだ。

顔は俯いていて少し紅潮しているようで右手には地味な白いハンドバック、左手には綺麗に包装された包みを持っている。何かのプレゼントでも買ってきたようだ。

俯いた顔をゆっくり上げて薄い笑みを作り電車内を直視した後、文字通り石化した。

悲しいことに。

ドアの前には完全に変態と化した榎風がどでかい袖の中で腕を組んで直立不動にたっていたのだから無理もない。その上僕たちがそうしたように榎風もドアの方を見たのだ。

フードの中から垣間見えた猫の仮面とおそらく目線があってしまっただろう。普通の人なら間違えなく三步下がってそこから全力疾走で逃げるであろうその光景と。

その点を言えばこの女性は称賛に値するのではないかと僕は思う。多分、おそらく、自信も根拠もないが。

その硬直状態が長く続いた為か電車のドアは無情にも閉まっつき、結局女性は乗れずじまいだ。これから一時間以上待つ彼女のことを考えると少し痛んだが忘れることにしよう。

先ほどと同じように車内は四人だけの空間へと逆戻りし、目的地まで僕らを乗せて線路を滑る。

違うのは茜がまだ言いつけを守って静かに横へ鎮座していることぐらいのものだ。

日は既に遠き山に落ち、夜空には星がチラホラと閃き始めた。後ろを振り向けば月があるだろうがそこまでしてみたいとは思わない。それに気づいてたらおとなしく座っていると思っていた二人は僕によりかかって寝てしまっていた。

かわいい寝顔から小さな寝息が漏れているのを横目で見て、起こそうかどうかためらった。二人をこのまま担いで移動しても良いの

だが、そうすると荷物が運べない。

しかしこの二人を起こすのはどうにも気が引ける。

激しい葛藤の末、現実的に二人を起こすことにした。理想的なのは手が10本ぐらいに増えて一人ですべてこなせることなのだが、さすがにそれは無理。榎戸よりも騒ぎになる。魔術制合成生命体なんて早々いるもんじゃないからまず、手が10本ある人だと思われるだろう。もう手が10本ある時点で人ではない気がするがそれはおいておこう。

「もうすぐだから二人とも起きて、ね」

なるべく優しい口調で言っただけだが、相手にも必ずそうとられるとは限らない。寝起きを悪くしないと良い。

「ふあ？もう朝あ？」

「ううん、まだ違うよ」

茜は眠りから覚めたときには必ず、もう、朝あ？、と寝ぼけて聞かぬのが癖だ。そしてどんなに深い眠りからの覚醒にも五秒とかからない。

「はわあ！」

茜の対応をしている内に体が傾いてしまったようだ。より所をなくした葵が床に倒れ込んだ。やってしまった。なんてこった。

「スウー スウー……」

心配の必要はなかった。

茜とは対照的に葵は気が済むまで何をやっても起きないタイプだ。毛布をはぎ取るのが、くすぐろつが、逆さまにしようが決して目覚めない。榎風が実証済みだ。本人曰く、不本意ながらみんなの好奇心の代表としてらしいが。

まあ、言及する必要はないだろう。

「次は涼暮、涼暮駅」

名前に聞き覚えがある。ようやくついたようだ。それにしても日本には変わった地名が多い。

さっきの駅が『イスズ』、その次が『スズクレ』なんてよくわからない名前だ。

現地の人に意味を聞けば分かるかもしれないが、分からない確率の方が高いだろう。

どうせほとぼりが冷めたら去っていくんだ。関係ないか。

でもまさか、

この最果ての地・日本で

僕が生まれた意味を

知ろうなんて

思いもしなかった。

第11歩：CAT MASK（後書き）

これにて第一部は終わりと言った感じです。次回からは第二部で日本での新キャラたちと色々な日常を繰り広げていく予定です。

これからも末永くおつきあいお願い致しますm（　）（　）m

第12歩：ONLY TOWN

久しぶりに降り立ったアスファルトの地面は闇に紛れてろくに足下が確認できない。気をつけて進まなければ小さな段差でも引っかけり真つ逆様だ。両脇に荷物を抱えている現状では受け身をとれずに顔から地面にぶつかり皮がずる剥けてしまうだろう。それだけでは何とか回避したい。

結局寝たままの葵は茜に背負わせて僕は榎風のものも含め計四人分の荷物を抱えている。

いつの間に着替えたのか榎風はいつぞやに買った真つ赤なチャイナドレスに身を包み、その上から例の変態ファッションだ。手にはさつき渡した橙色の鞆とは別の鞆だけを持っている。確かあれは大きさに比べ異様なまでの重さがあつた鞆だ。

その鞆をなにやら漁りながらゴソゴソ体を動かしている。鞆の中を空にしたところを見ると、マントの下にしまい込んだようだ。

榎風のことだからあの中にショットガンやマシンガンのように危険なものが入っているのではないだろうか？そんな一抹の不安が一瞬走つたが、日本の税関の堅さを理由に打ち払つた。

でも不安はやはり不安で消えてもすぐに噴出する。そのせいでか鞆の重さのせいかは知らないが、足取りは自然と鈍くなつてしまつた。

「カウー、私よりも2、3歩後ろを歩け」

「あ、はい」

理由は分からないがとりあえず離れた。

もつともはじめから1、5歩程度離れていたのさして変わりないが。

ごくごく小さな無人駅とも呼べない駅を榎風が抜けたその刹那、

金属と金属がたたきつけあう重圧的な音が響いたときには何が起きているかは認識できなかった。

しかし半秒後には思考が覚醒し現実に戻り素早く現状把握をする。奇襲に気づけなかったとは何たる不覚。

眼前の榎風の両手からは日本伝統の刀が一本ずつ延び受け太刀をしている。右上方からと左下方から同時とは少しずらされた絶妙なコンビネーションの攻撃をうまく受けた反動でマントは広がっているが、大した乱れではない。そのことに少しばかり安堵した。

敵の素性は暗がりによく見えない。少しは電灯の明かりがあったが範囲外で全く意味がなかった。

急いで『梟騎の瞳』を開いたその瞬間、こちらにも現れる黒い陰。くそつ、気を取られて全く気づかなかった。急いで『断纏』をつ

！

「ああもう！朝熊君、明ちゃん！いきなり不振者だからって討伐したらだめって大地君が言ったでしょっ！」

場に似合わぬ高い声を発した陰はおそらく女子高校生。

しかし彼女は完全に注意をこちら側に向けて背を丸だした。敵意も感じられない。

「あのえつと……君たちは私が守るんで安心してください」

めっちゃめっちゃにマニュアルっぽい言葉。その言葉は僕たちに言ったのだろうか？たとえ僕らが一般人でもそんなことを焦った口調で言われて安心する奴なんて一人もいないと思うぞ。

それにコイツは年下と見てか『君』なんて子供扱いだ。まあ、外見的な事実だから仕方ないか。

「おまえ等 なんだ？」

唐突な質問だったが故にか彼女はさらにしどろもどろになり取り次ぐように口から言葉が漏れている。

「あ、あの、えっと、その、なんて言うか………通りすがりです」

間、間、更に間。もう一つおまけに途方もない間。いったい何なんだろ、この人。

素性は明かせないようだがとりあえず話を続けた。更に焦らして何か聞き出せば儲けものなので揚げ足を取ってみた。

「通りすがりの女子高生がそんなにでかい近未来的な杖を持っているとは思えませんね」

「さ、最近流行ってるんだよ、護身用にもなるし」

声がかなり上擦っている。本当に分かんない人だ。

「せめて、まともな嘘を言えよ」

それにこの女性はずれている事がよくわかった。

「あの人は私の連れなんだけど助けに行きたいから退いてくれないか？」

「そんなことをすれば君が怪我をするよ？」

突然落ち着いた彼女。おそらく本当に心配してくれているのだろう。

「それでもです」

迷いはない。

二対一で不利な榎風の為、一人でも動きを止めれたらいい。無理かもしれない。

腕を一本落として榎風が無傷ならそれでも一番いい。

「そんなに言うなら無理にでもここから傍観してもらいます」

何でいきなり戦闘モードに突入してるんだよ。

だが、なってしまったものは仕方ない。邪魔になる荷物を脇に放つてから『断纏』を構える。

よく考えればかなり不格好なままはなしてたと思うと恥ずかしい。彼女は幼げな顔立ちだが引き締まるとなかなかいい顔をする。率直な感想だったが、そんなよけいなことを考えている暇はない。相手はそれなりの手練れのような。油断はできな

「敵と相対して思考が止められないようじゃ駄目だよ」

それを聞き終えた頃には完全に地面に組伏せられ制圧されていた。何があつたかさえ分からない。反応さえできなかった。

体が本調子ではないにせよ、この前からの進歩の無さに歯噛みして悔しがった。しかし冷静に考えてここから抵抗するのは得策だとは言えない。

「おまえ等一体……？」

二度目の質問だ。さっきと同じボケをしたら三回目だ。三回で駄目だったら といった具合にずっと続けてやる。

「あ、私たちを知らないって事はやっぱり無関係の人？」

「そう思ってるなら退けよ」

なんか調子狂うなあ。

速く助けに行かないと榎風が。

「君は冷静を装ってる割には直情的だね」

ム力。

声に似合わぬ透かした言い方で言われるのがどうも癪に障る。

「あれ？おかしいなあ。押さえ込まれてもあんま暴れない人にこれ言っと何かとしゃべってくれてお姉ちゃんが言ってたんだけど」

彼女は頬に手を当てため息をつく。

そんなことを教える姉も姉だが実行するコイツもコイツというか。

「そんなことしなくても喋れることは喋るよ」

「そうなんだあ。よかった」

現状に似合わぬ動作で胸に手を当て暖かい息を吐く。

こいつと話すとなんだかペースがずれるなあ。

「じゃあ、話はもうちょつと後にしてゆっくり行く末を見ようか？」

「人の命がかかってんのに何でそんなに気楽にいつてんだよっ！」

自分でいって驚いた。これまで数え切れないほどの人の血で手を汚し、世界に悲しみを与えてきた自分が言えるような言葉ではないのにそんな言葉が自然と口から出るなんてあり得ない。

「あの二人は手合わせしてる気分で作ってるからだよ」

鼻をフンと鳴らして自信ありげに言う。訳が分からん人だ。

「何でわざわざ」

「でもあの人を場合によつては殺さない」と

彼女が落ち着いていくにつれ、僕はどんどん荒れていく。立場逆転。

「訳わかんないよ！」

激情に任せて吐いた一言。それでも彼女は動かないし、僕も動かない。

訳も分からない内に榎風が殺されるなんてそんなふざけたことがあつてたまるか！

「大丈夫。君を見る限りそんなことは絶対無いよ」

納得はいかないが今はこの人の言うことを信じるより他無い。精神のあらがいさえもやめ僕は榎風をみる。だがとりあえず一つだけ言うことがある。

「なあ」

「静かに戦いを見ようよ。せつかなんだから」

「そうじゃない。重いから退け」

さつきから我慢していたがどうにも息苦しい。ちょうど肺の真上に体重がきているせいだろう。

「ひどいこと言うね、女の子に向かって」

「人間誰でも四十キロ以上は」

当然の理論を言おうとしたが無理矢理言葉を重ねられてしまった。

「それでも失礼になるんだから絶対にいったら駄目だよ」

緊張感など丸でない。こんなところは榎風に似てるなあ、なんて素朴に思った僕も緊張感がない気がする。

「まあまあ、どっちにしてももうすぐ決着だよ」
「えっ……？」

唐突に言われて『梟騎の瞳』を開いた。この前の時からの影響で兵装全体に痛みが出たが短時間なら問題はない。

ようやく榎風と戦っている二人のおおよそがとらえれた。

男女の二人組で男の方が『朝熊』^{アサマ}、女の方が『明』^{アキラ}だろう。

朝熊と呼ばれた男は割とがっしりした体つきではあるが、筋肉が固まってできたような奴ではない。背は高めで体に似合わず機敏に動いている。

明の方は周りを一定の距離を保ちつつ左手には刀を持って、しきりに右手で飛び道具を投げて牽制。

確かに前衛とバックアップのコンビネーションはいいし、戦術も勝利の定石をふまえている。だが今すぐ決着が付くような戦況ではないし、相手は榎風だ。

しかしこの女の自慢げな態度。

日本の刀を流麗に流し、朝熊を弾き飛ばした榎風は明と一気に間合いをつめる。それに同調するようにバックステップで距離を保とうとするが榎風の方がスピードが速い。

それなのに明の方は口元を歪める。

何かいやな予感がしてならない。

「さがれ、榎風iiiiiii!」

考えなんて無かった。

この後の事なんて考えてなかった。

ただ、僕が

ただ、口が

ただ、目が

ただ、手が

ただ、足が

ただ、臓が

ただ、血が

ただ、心が

勝手に脈打って弾けるように翔ていた。

「えっ……!?!」

後ろの方で僕を組伏せていた少女は弾き飛ばされた為か驚愕の声を漏らしている。

そんなもの反応する必要さえ感じなかった。ただ疾風の如く地を飛ぶ。

後、二メートル。

明が意図を気づかれた為か後退しながら急いで手を挙げる。

後、1.5メートル。

アスファルトの地面に巨大な魔術式が浮かび上がる。榎風から一定の距離をとりながら動いていたのはこの為かっ!

後、一メートル。

口が緩やかに開き魔術式の言葉を紡ぐ。

後、50センチ。

言葉を介して地に走る式に力が通う。

後、30センチ。

魔術が世界を狂わせ、地に染み渡る。

もう、手が触れる。

同時に地が弾ける。

そのはずが後ろから聞こえた銃声によって止まった。
続いて、

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

挙げていたはずの手はいつの間にか頭を抱えるために下げられ、
手の主は小さくうずくまっている。その上小刻みにカタカタ震えて
いる。何となく不憫に感じたので心の中で合唱しておいた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

あ、謝ってる。

銃声は方角を変え朝熊の方へ。

「死ぬって死ぬって死ぬって！」

「大丈夫大丈夫。ゴム弾だから」

姿勢も笑顔も崩さない。

以外に悪魔だ。人の皮をかぶった鬼だ。

「痛っ！大丈夫な訳あるか！ゴムでも死ぬときは死ぬ！」

「急所は外してるし、威力は最低に設定してるから後は残るかもしれないけど死なないって」

ああ、何かすごい惨い光景を見ている気がする。

そんな光景をぶちこわしにするように榎風が喋り始めた。どうも榎風も目の前の光景に見入っていたようだ。

「カウ、飛びつくほど寂しかったか？それはすまなかった。可愛い奴だな！」

「頼ずりするなあ！離れろお！」

ちゃんとした理性が働いていれば、この人がこの程度で死ぬはずもないと分かっていた。何せこの人は最強だ。

「それにしてもこいつ等は相変わらずだなあ。はっはっはっ」

感慨深げな笑いを仮面の下から漏らす。何か不気味に感じたので引きはがした。

「知り合いだったんですか！ならなんで」

「あの」

傍らにはいつの間にか葵が立っていた。そういえばすっかり忘れていた。

「寝ていたので自業自得なのですが、状況が分からないので説明しなくてもいいですか？」

そういえば敬語に戻っている。今ははなおしている暇ではないだろう。

葵が反省の裏返しかあまりに真摯な目だったので僕も嘘偽り無く簡潔に、

「よくわからん」

とだけ率直に答えた。

「はあい、荷物う！」

茜は疑問は全くないように小さな体で器用に抱え込んでいる。葵も茜が持ちきれなかったものを抱えている。茜が大半を持っているのは寝起きの葵を氣遣つてのことだろう。

茜の荷物を三分の二だけ受け取り、とりあえずさっきまで僕を押さえていた女性に話を聞こう。榎風よりはましに答えてくれるはずだ。

杖からゴム弾をうち終わつたのか立ち上がってこちらにかけてきた。他の二人はというと地面に突っ伏している。

「さつきはごめんね。二人は折檻したから許してあげてね。悪い人たちじゃないから」

「それより詳しい話を聞かせてくれませんか？この人じゃ話にならないから」

軽く榎風に視線を送る。少し悩んだようにしてから彼女は、

「そのことで一つ聞いていい？」

「まあ、話をしてくれるなら答えれる程度の代償は払う」

「じゃあ、遠慮なく聞くけど……その後ろに立っている猫マスク変人は秋宮さんでいいのかな？」

いくら常識離れていてもこの格好は変に見えているようだ。

まあ、見知らぬ人にこんなことはなかなか言わないだろうし、榎
風の苗字を知っていると間違いなく知り合いとみていいだろ
う。

榎風が僕の後ろから突然低い声を出す。思わず飛び退くぐらい怖
い。

「風間……言うようになったな」

「それほどでも」

目線からは火花が飛び散り、口からなにも生まれない。

第三者から見ると痛々しい沈黙。この現状を打破するには僕が話
題を変えるしかない。

「とにかく」

「ああ、説明ね。ついてきて、立ち話するには長いし」

彼女　風間は榎風から目をはずし愛想良く答えてくれた。

「分かった」

榎風には任せられないので僕が変わりに答える。

まあ、信用は出来るからついていてもいいだろう。

「朝熊君、明ちゃん帰るから起きて」

寝ているいる二人の内一人にに指示を出す。

「アテテ……いつも容赦ないな」

「はいはい、分かったから明ちゃん担いであげて」

軽くあしらわれ不満げに一瞥した後、担いで前に進んでいった。

「紀伊の家でいいんだろ」

「そこ以外にどこがあるのよ」

後は二人で話を進めている。土地のことは任せた方が得策だ。

「久しぶりだなあ」

榎風は感慨深げに言い、二人について歩いていく。僕はよく理解できぬままついていくしかなかった。

第13歩：HEART TONE

「うわっ……」

僕は思わず嘆息の息を漏らした。

闇夜に勇壮とそびえる木造邸はいかにも日本古来の武家屋敷、といったところだ。もちろん二階はない。それでも闇夜の薄明かりだけでこれだけのものが見えるならば、日の下にさらせば果たしてどの程度なのかは計り知れない。まさに、圧巻としか言いようがないだろう。

今からこんなところに入り、何かと込み入った事情を話さなければならぬとなると正直なところ気が重い。榎風の知り合いだと言うがおそらく今まで聞いてきた内容から察するとどうあってもやはり気が重いな。

時をさかのぼることほんの数分、僕たちは駅を発った。

駅からまっすぐ延びる、車二台がようやくすれ違えるような道を直進した。

夜闇の中、微妙に張りつめた榎風と近代的な杖みたいな銃を持った少女の間に流れる緊迫感のせいで全く話が出来なかった。そのため目的地や町の構造はおろか皆のフルネームさえも分からず終いだ。目的地の『紀伊の家』にさえつけばいろいろ話せるだろうか、という疑問を抱きながらもゆっくりと歩を進めた。

ところで、

紀伊という人物はいかなる人なのだろうか？

これだけの騒がしい面子を束ね、敬愛さえされている。よほど人

物だろう。深い人徳と知恵にあふれた人か、あるいはカリスマの固まりのような人か。

どんな人であれ力は貸してくれなくても、知恵は貸してくれるのだろう。樂觀かもしれないが希望が今はほしい。

そんなことを考えながら現在に至る。

これからこの巨大武家屋敷に入らなければならない。今まで最小限より少し余裕がある程度の場所に住んできた所為で変な貧乏癖でもついたようだろうか？

開け放たれたままの門のしきりをまたぐ。何か得体の知れない拒絶感と悪寒が背筋だけでなく、地につけた足からぞつと這いあがってきたがこの際覚悟を決め無視をした。

だが一歩一歩が重い。地につける度に足を釘で穿たれ、引き返せと鼓膜が勝手に振動する。

こみ上げる吐き気と頭痛。

周りを認識できないほどに霞み、歪み、曲がる視界。
一体なんだというのだ。

辛い

辛い

酷く辛い

出来ることならこの場に身を投げ楽になりたいがそうもいかない。
ただ感じるのは

逃れようの無いほどの恐怖。
掴んで離さないほどの絶望。

逃げたい

逃げたい

早く逃げたい

苦しくて、辛くて目を閉じしつかりと結ぶ。

この感覚は

榎戸のために初めて人を殺した時に感じた感情。

生きぬくために人の心臓を初めて掴んだ時に感じた感触。

それにとても

とても似ていた。

暑い

寒い

何も分からない

光届かぬ闇の世界を手探りで 否、手の感覚等もうない。そんな気分なだけだ。

全身の感覚を斬られた体に魂だけが浮遊しているような状態で必死に前に進もうとし、必死に後ろに戻ろうとしている。

二つの意志があるなんて、なぜんだか隔離性同一性障害 俗に言う二重人格にでもなった気分だ。

くつくつ

くつくつ

面白い

何も無いのに、訳も無いのにいつの間にか魂は笑っていた。

この状況で笑える自分が今は何より怖い。

そして 憎い

このまま誰かをコロ

思考は緊急停止した。

唐突に生まれた場違いな引き戸を開ける音。

その音で一気に現実に逃避する。

「 アッ！！！！」

長いこと忘れていた呼吸を口で、胸で、肩で、腹で開始する。

「ア 、ア 」

今あるのは精が抜かれたようにのしかかる疲労だけ。 危惧すべきようなことは何もない。

「 ウ、おい、カウ！！！！」

視界の隅で玉のような汗を浮かべている榎風の姿を捕らえた。

何かすごく心配してるみたいだ。らしくない。そんな顔しないでいつもみたい明るく笑えよ。

「…………あれ？どうしたんだ、榎風？」

「どうしたんだじゃない！おまえがどうしたんだ！？いきなり止まったかと思えば笑いだして！？」

榎風は声を荒げて僕の方をゆする。それを目で確認しなければわからない。触覚はまだ回復してないようだ。

あの笑いは精神だけの話ではなかったみたい。信じてなかったが

心身一体というのはあながち間違いではないようだ。

そんな風に客観的に事実が捕らえられるなんてわりかし落ち着いている証拠だ。もしくは認識能力の欠落。

「どうやら いや、言うべきではないか」

乾いた土を踏む音と共に静かな歩み寄ってくる。

熱を帯びて霞む目でぼんやりとその人を捕らえた。

勘なんて曖昧なものじゃない、誰に説明されるでもなく確信めいた事実として僕はその人が『紀伊』だと分かった。いや、分かったというよりも刷り込まれたといった感じだ。

全てを押さえつけるような絶対性は皆無。

あるのは信用性と事実性。この人は世界の全てを知っているかのような錯覚さえ抱かせる存在。

そして僕はこの人に強いデジャヴを感じた。あったことがないはずなのに十年來の友にあった感覚。

ふと思いいったつた。

何かに、何かに似ていると思ったたら自分に似ている気がする。

それはたぶんあの頭から真っ直ぐ延びる癖の欠片もない白い髪の毛のせいだ。それ以外は似ても似つかない、浮き世離れた美麗さを形にしたかのような男性。

その眼孔は千里先を見通しているように深く透き通った琥珀色。

その肌は向こう側が透けるほど白く淀みがない。

その手はものを暖かに包むように広く、全てを隠すように冷たげ。その人はこの世界そのものの様に深く、浅く、広く、狭く、高く、低かった。

「やあ、紀伊。久しぶりにしては無骨な挨拶じゃないか」

「すまないな。これから寝るところだったんでな」

嘲笑するような口調だがそんなことは感じさせない。それほど代償無しに信じられる。

「おいおい、ずいぶん寝るのが早くなっただんな」

「騒ぎ立てる馬鹿がいなくなった上に、出来のいい友達が手伝ってくれているからな」

少し想像としていたのとは違うがやはりカリスマ性の高そうな人間だ。

「二人とも相変わらずだねえ」

途中で明が声を挟んで会話が止まる。いつの間に起きたんだろうか？

「朝熊君はあきれて帰っちゃったよ」

継ぎ足すように風間が言う。

「どうせ、あいつがいても話が騒がしくなるだけだろうに。さっさと、おまえ等も帰れ」

つっぱねる榎風。

それはお前だろう、とつつこむ紀伊。

それにあわせたように女性二人は不適に笑う。

薄い意識の中でその光景を不気味に思った。

「な、なんだ……？突然気色悪い」

榎風も共感して気持ち悪がり後ずさった。こんな榎風は初めてだ。

「実をいうとね秋宮さん！」

「私たちはなんと！」

大げさに声と手を上げ、文字通り目が光る。

さらに榎風は後退。何というか僕という時とは別な感じで生き生きしている。

「個々の家においては効率が悪いから時雨の提案で我が家に勝以外の全員が住むことになったんだ」

「っ!？」

あくまで静かに答えた紀伊に何か悪いものでも見たかのように顔をゆがめる榎風。

いつも思うが表情豊かだ。

「それも含み色々と説明されることと質問することがある。中に上がれ」

振り返り先に中に入ろうとする紀伊。

顔が格好よくてかなり様になっている。

「そうだね。さすがに長旅で疲れた」

さしてつかれてもない癖に『疲れてます』みたいなジェスチャーをする榎風。

僕も体は疲れてはいないがあんなよく解らないことがあったためか精神は存外疲れているようだ。眠い。

茜と葵も疲れているはずだと思い、横目でちらりと盗み見ると、

「スウ
「スウ
」
」

否、疲れているはずなのではなく器用に立つたまま寝れる程、しつかり、どっぷり、ずっぷり疲れているようだ。

そつと手を伸ばして茜と葵の荷物をとり、その荷物の上に茜と葵をのせる。

完成！荷物だるま！

バックに、シャキーン！なんて効果音がつきそうだ。
右に赤髪ゴシックロリータ・茜、左に蒼髪着物・葵。
この上なくバランスが悪い。

「大丈夫？」

明が首を傾げながら可愛く聞いてくる。

「聞くぐらいなら手伝えよ」

僕は率直に助けを求めた。

「か弱い乙女になんてことを……」

口に手を当て演技っぽい動作で顔を背ける明。

「すみませんごめんなさい大変だから手伝ってください」

感情無く字面だけで懇願してみた。

可愛げがないわね、なんて明と風間はぼやいてから一人二つずつ

計六つ（榎風はあくまで何も持たない）持ってくれた。紀伊も戻ってきて荷物を持ってくれた所をみるとなかなか良い人のようだ。

ドクン！

唐突に心臓がひととき強く脈打った途端に僕の意識はぶつっりとテレビのチャンネルを押したように切れた。

第14歩：MORNING - 1

なぜだかすごく暖かい。日溜まりの中で寝る猫の心境とはまさにこんな感じだろう。

それにふかふかの地面から程良く帰ってくる反動は体全身が水に溶けたみたいに気持ちがい。

このままずっと包まれていたい快感だがそういうわけにもいかない。起きあがって榎風と葵と茜のご飯を作らないと。

「……………ん」

布団の中で軽く伸びをして半身を起こす。

体には少しばかりだが疲れがたまっているが日がまだ完全に地平線から出てないのを見るとまだ早朝のようだ。日が顔を出せば起きるという習慣の勝利で起きた。

寝ぼけ頭でぼんやりと考えたがいっまでもそんなのでは始まらない。

ぶんぶん頭を降る。それに連動して白髪もなびく。それで完全に目が覚めた。

光が射して焦点が定まった目で当てもなく視線を泳がせた。

ベッドが四つ余裕を持つて並べられるほどに大きな木造の部屋。それに釣られてか木の優しい香りが香ってくる。

何故こんなにも大きな寝室にいるのだろうか？こんな立派な家に居座った覚えはないのだが。

「あ、日本に着たのか」

口にするまですっかり忘れていた。

欠落していた記憶が順を追って再構築されていく。

確か船から電車に乗って田舎の方まで入ってきた。涼暮って町で駅から出た途端、襲われたんだ。その後、誰かの人の家にきて、それから大きな家のしきりを跨ぎ

どうもそのあたりから記憶が曖昧だ。これまでたまった疲れの反動だろうか？今までこんなこと無かったのに。軽くショックだ。

ふと、目が眩んだ。

体を支えるために伸ばした手は踏ん張れず、空しくおれる。

どうやら本格的に体はヤバイようだ。

自由落下でベッドに倒れ込む。この世の全てがゆっくりになった気分が目が流れる景色を捕らえる。

すでに布団についている左腕と右斜め上に投げ出されている右腕。ああ、なんだか死人になった気分だ。そんな中、僕の視界はブラックアウト

「ウゲッ！」

しなかった。

それはいいことなのか、悪いことなのか。

それは置いておいて苦しげなうめきが一瞬間こえたのは放置してはいけないだろう。

見なくても解るが見なければならぬ。

「うう」

予想通りというか何というか、頭を抱えるしかない。

榎風が布団の中にいる。

ちようど右手が落ちたのが鳩尾だった所為か白目をむいて、口をぱっくり開けたまま完全にのびてる。

自業自得だ 多分。

とりあえず疲れてしまっている体に鞭打ち起きあがった。案外立

てばどうということはない。

屈伸など適当に体をほぐした後、ドアを探した。

臆気ながら紀伊という人の家だと記憶がある。

勝手に歩き回るのは無礼かもしれないが礼をしておきたいし。

さあ、どうするべきか。

「お義兄ちゃん、どうしたの？」

「ああ、葵か。おはよう」

突然のことに少し驚いたが顔には出さず、いつも通りに振る舞った。

「おはよう、お義兄ちゃん」

葵はずいぶん敬語を少なくするようになった。慇懃無礼という言葉もあるし敬語の使いすぎはよくないことだ。

それでも人前では反射的に使うときがある。

それにしても僕は葵に心配されるほど変な顔をしていたのだろうか？

葵に聞いたら聞いたで何かと心配されそうだし心配されるのは好きじゃない。

適当に話を逸らしてごまかすのが得策だろう。

「そういえば、葵。随分と早起きになったな。いつもならぐっすりと寝てる時間じゃないか。今日は雨でも降るかもしれないな」

「なっ、お義兄ちゃん、ひどいです！私だって早く起きることぐらいできます！」

むーと頬を膨らませ腰に両手を当てる葵。あまりにいつもと雰囲気違って可愛い。

葵はちゃんと起きたことがないからこそ言ってるのだけど。

「ごめんごめん」

ぼんぽんと頭を撫でてやると葵は沈静化。以外に単純らしい。

「ところで榎風がどうして僕と一緒にベッドにいるか知らない？」

呆れ果てているのか、はたまた困っているか、どちらともたれない感情で葵に尋ねた。

少し思案気な顔をした葵は憶測ですが……、と先に言い話しはじめる。

大事なことを喋る所為か敬語に戻る葵。畏まるようなことなのだろうか。榎風に限ってあり得ない。即否定。

「昨日お義兄ちゃんはしきりをまたいで数分後、紀伊さんと接触し倒れました」

曖昧で他人のような記憶だが、大丈夫だ。軽くうなずく。

ついでに言うなら葵は寝てた気がする。つつこまないでおこう。

「倒れたお義兄ちゃんを心配して紀伊さんが部屋を一室分けてくださいました。」

夜遅いこともあつて説明は翌日の朝、つまり今朝話してくれるそうです。

榎風さんは昨夜、その……えーとっ……」

何故そこでつまるのか少し気になったが静かに聞くことに撤しよ
う。

「どうしても……お義兄ちゃんと……その………ど、どどど」

口が回らずあたふたしながら必死に続けようとする。

「そんなに焦らなくていいから、ね。落ち着いて」

何か榎風をなだめるときと似た感覚で葵に深呼吸させる。

覚悟を決めたように顔を引き締めてもう一度しゃべり始めた。

「榎風さんはお義兄ちゃんとドウキンすると」

だんだん小さくなってそれより先は聞こえなかった。
銅金？

何だろう、それは？そこまで日本語に詳しいわけではない僕には
理解し辛い。後々、辞書で調べてみよう。

「お義兄ちゃんは疲労のせいでこうなったようなので一人でぐっすり寝かせる為、榎風さんを止めました。

その後大人しく床についたようですが」

すごい想像できた。3Dの上、色付きで。分かりやすい。

「そうか、分かった。ありがとう」

僕は疑問もなくなったので部屋を出ていこうとする。

「あ、はい。それと」

部屋から出ようとした僕を葵が押し止めた。
軽く返事をしてから半身だけ振り返りみた。

「紀伊さんが起きたら来てほしいと」
「ん、分かった」

何か言いたげな葵に無理矢理言葉を重ねる。悪い気もしたがあんまりここで時間をとる訳にもいかない。

今度こそ部屋から出る。

それにしても紀伊が呼んだ理由がわからなかった。説明なら個人ではなくみんなにするだろうし。

「ま、いけば分かるだろ」

乱れていた髪を手櫛で直す。幸い、服は昨日のままだ。
着替えさせられてたら逆に問題のような気もする。

あ、着替えてないってことは布団を汚してしまったってことだ。
後で謝っておこう。

「っ

」！

欠伸をかみ殺してまた伸びをする。
いつも通り体は動く。

引き戸に手をかけゆっくり動かす。

木がこすれる優しい音がして外の冷たい空気が部屋と交ざる。そのおかげで微かに残った微睡みさえも空気がぬぐい去った。

ゆっくりと板張りの床を歩く。

足をつく度ひたひたと澄んだ音が流れる長い渡り廊下。どうやら僕たちが居たのは離れのようなのだ。

さつきよりも少しだけ高くなった太陽は山から完全に顔を出し朝焼けが空を紅く染める。

だんだん足先も寒くなってきたので足を早める。音はたつたつと

音を変えていく。

長い渡り廊下を過ぎるとそこには髪の長い少女が立っていた。少女の外見年齢は葵達と同年程度だろう。身長も僕とさして変わらない。葵、茜、僕、そしてこの少女は皆、身長的には似ていた。顔は似ても似つかないが。

黒くて長い髪が膝まで伸び絡まることなく動いていた余韻かなびいている。

それに白いセーターがあまりにも似合っていて僕なんかより雰囲気はぜんぜん年上といった感じだ。

「おはようございます」

こちらに気づいたのか振り向いてお辞儀をする少女。礼節もしっかりしている。

「おはようございます」

少女の流れるような自然な動作に取り繕うように返事をして軽くお辞儀をした。

なんとつかしゃべると気圧されるような神々しさがある。

「初めまして、鏡と申します。こちらで大地さんをお待ちです」

返答を待たず厳かに向き直りつつ歩き始めた。

大地とは誰だろうか？待っているのは紀伊だからおそらく紀伊の下の名前だろう。

三歩歩いて突然しゃがんだ鏡。一挙一動がこちらを圧迫してる気がしてならない。

そして床に落ちている青い物体を拾う。

あれは

いやそんなことはないはずだ。信じたくはない。
でもあれは明らかに、
掃除用バケツだ。

「それは？」

一応聞いてみる。

「バケツと雑巾ですが。見たことありませんか？」
「いや、ただの確認」

自分で言っても訳が分からないし、他人ならなおさらのはず。それでも少し首を傾げただけで反応が薄い鏡。相当人間ができている。

「では、いきましようか」

こんな少女が健気に掃除していれば絵にはなるかもしれないが鏡の雰囲気加われれば別だ。ただの空恐ろしい風景となりかねない。しかしよく考えてみればこの少女は凄い。こんな朝から掃除をしていたと言うことはおそらく僕より前、日の出前から起きてずっと掃除をしていたようだ。そういえばここに来るまでの窓に結露が全くなかった。ずいぶん早起きでないとやっていけないだろう。

静かに歩く。

きれいに掃除された廊下を静かに歩く。

まっすぐ板張りの冷たい廊下を静かに歩く。

大きいので迷子になるかと心配するような作りかと思ったが、廊

下に角が少ないためそうなることはないだろう。増築などがされて
いない証拠だ。

ぴたりと鏡が止まった。

それにあわせて僕も止まる。

「ここです」

手を軽く挙げ一つの扉を指した。

他のところと変わりないただの引き戸。しかしその奥には廊下が
続くのにもう扉がない。ずいぶんと大きな部屋のような。それに無
駄な作り。

ノックをしてから返事も聞かず戸を開ける。

「入ります」

深く礼をしてから部屋の中へと踏み入れた。

鏡の後について中にはいる。

その部屋はひたすら大きかった。それなのに絶対的な圧迫感があ
る。今にも潰されると錯覚するほど窮屈。

その部屋の真ん中に白銀のような彼はただ腰を据えていた。

「やあ」

彼は無作為に薄く笑みを浮かべた顔を向けた。

第15歩：MORNING - 2

広く、高く、遠く、長く、果てなく広がる砂漠のような木造の巨大な部屋。

部屋を八分割するように奥に並び、部屋の半分をしめる高さ五メートルはあるかという七つの本棚。感じた圧迫感の原因はこれのようだ。梯子などは見あたらないが一体最上部の書籍はどうやってとるのだろうか？

本棚の中にある本は隙間なく並び溢れだしてさえいる。そのすべての本に刻まれている文。単語。文字。この部屋は知識の塊、この家の脳に当たるはずだ。それ故か空気を伝う音は皆無。格式高いはずなのにゆるりと止まっている大河のような時が流れる長閑さ。

本棚から入り口近くまでは木製の長テーブルが並び、机には汚れもくすみもない。あるのは木目と少しばかりの溢れ出た本だけ。掃除が随分行き届いている。

入り口を入ったすぐ横にはカウンター。これだけの貯蔵量があるのだ。この町の住人に貸すぐらいの余裕はある。そこら辺の図書館なんか戦う必要はないが敵ではない。

そんな部屋で不思議と僕はただ立っているだけだった。それだけで何か冬も近いこの日に暖かささえ感じる。

この部屋を僕は気に入った。離れようがない程、束縛されているかのように心打たれた。

その中心に陣取るのは白銀。琥珀。

「やあ」

淡く薄い笑み。

読んでいたハードカバーの本にしおりもせず、ポンと柔らかい音を立てて閉じた。机に積みあがった本の上に本を重ね、風景の一部

に返す。

それだけの動作でさえ美麗。無駄がないとかそういう綺麗さではなく感覚のみに与える美しさ。

「おはようと言つべきかな？それとも初めましてかな？」

空気を伝う透き通る声。すべてのものを魅了してやまない音がひたすら僕の聴覚を刺激し続ける。

「お、おはよう……」ざいます」

僕はできるだけ平静を装ったがその努力は無に等しかった。何故か凄く空しいし。

最近は人に会う度に緊張してしまつて取り繕つてばかりだ。この現状は如何なものだろうか？性急に打破せねば。

「そんなに堅くなるな。私は一介の高校生だ。政府の官僚な訳じゃない」

むしろ政府の官僚であつた方が相応な気がしてそれなりに安心できそうではあるが。

「鏡はもう戻つてくれていい。少しばかり　そうだ。秋宮が起きたらつれてきてくれ。無理に起こす必要はない」

「かしこまりました」

そういつて部屋を後にした鏡。終始一貫落ち着きがある物腰でそれは眼前の紀伊さんにも引けを取らない。これほどの人物に敬称をつけなかったのはなんたる無礼だろう。

鏡が出て数秒。紀伊さんが神妙な面持ちで切り出した。

「よく眠れたか。いや前置きは飛ばそう。単刀直入に聞くが」
「はい」

ガチガチになりつつも相づちを入れる。目を薄く閉じた紀伊さんは芸術品の域だ。

紀伊さんの顔に似合う引き締まった思案顔で訪ねる。無動作それでいて無情に。

「その白い髪は生まれつきか？」
「はい」

聞いた後に静かに琥珀の目を開く。

その質問にどのような意味があるのだが知らないがあまりに真摯な眼差しなので嘘偽りなく返答した。

その返答を聞くや否や紀伊さんは深いため息をもらし、苦虫をすりつぶしたような顔になる。

それも一瞬。すぐに元の顔に戻った。

「ありがとう。疑問はいくつか残るが解決した」
「あの……それだけですか？」

呆気なさすぎる言葉。思わず前のめりになり、眉をひそめる。

「ああ、それだけだ。すまなかったな、足をわざわざ運んでもらったのに」
「いえ」

この人にこんな風にお礼を言われると空恐ろしく感じてしまう。それに拍子抜けにもほどがある。僕は『実は死んだ弟に似ている

んだ。私の弟になってくれ』と言われても良いほどに覚悟していたのに。

体制を元に戻しながら顔も元に戻した。

「もう一つ質問がある。いいかな？」

「はい？」

小首をかしげ聞き返す。再び気をつける。

「名前を覚えてくれないか？意志の疎通が大変になる」

ふつうの質問に再び気を抜く。伸びていた背筋も緊張感が抜け楽な体勢になる。

だがこれは困った。非常に困った。

名前が変わる僕にとって一番困る質問だ。名前を聞かれる機会なんて今までほとんどないし第一に聞かれたところでその日のつき合いがほとんどだ。

紀伊さんとはおそらくこれから長いつき合いになるから適当にはぐらかすことはできない。それにまず通用はしないだろう。

「えっと……」

仕方なく僕は理由を言わずに真実を言う。

「僕に名前はないんです。正確に言うつと変わるんです」

無言で一瞬睨む琥珀の眼。魔術にでもかかったかのように全身の筋肉を固まらせる鋭いその視線はすぐに閉じ、先刻と変わらぬ淡い笑顔に戻る。

「そうか……すまないことを聞いてしまったな」

残念そうに紀伊さんは言う。どこか演技じみている気がしたが僕を騙すつもりなら分らないほど巧妙にやるはずだ。この人にはそれが出来る。

「いえ……」

紀伊さんに氣遣ってもらい悪い気がしてならない。

無駄に漂う気まずい雰囲気。これは非常に辛い。

沈黙が流れる。

榎戸といるとあり得ない沈黙。

これが誰かと面と向かっている状態で初めての静寂かもしれない。

「そういえば」

紀伊さんは突然口を開いた。自分が気まずく思ってたか僕を氣遣ってくれたのかは知らないが、どちらにせよありがたいことに代わりはない。

「あの少女は存外パワフルだな」

「はあ……」

有り難いのは有り難いのだが突然なまでの話題転換だった為、曖昧に相槌を打った。

話をにこやかに続ける紀伊さんは他愛もない世間話をする旧友のようだ。

本当に初めてあった気をさせない。

思い出して少し苦笑しながらも楽しげに語ってくれた。

「最初にあつたときはずいぶんと物静かだと思ったが　眠かった
せいな？」

君を寢室に運ぶ辺りからずいぶんと活発に動いてくれてずいぶんと助かったよ。秋宮が作ったとは思えない」

紀伊さんはどことなく懐かしげに言葉をひたすら連ねる。

「そこまでは『普通』の良い子だったんだけどね。

寢室に入った途端、秋宮がお得意のわがままぶりを発揮してね。相変わらずだよ、まったく……」

昔を思い出すように語る紀伊さん。

今も昔も榎風は榎風のような。

自然と僕の顔からも笑みがこぼれた。

「君が寝ているベッドの横で言い合いが続いてな。

秋宮は駄々をこねるはもう一人の子は立ったまま寝るは枕は飛ぶは鞆は飛ぶはでいろいろ大変だったよ」

うわー、何か榎風の周りだけは凄い想像できた。

「でも一番驚いたのはアレだね。

いや久しぶりに面白い物語を見た気分だった」

顎をさすりながら薄く笑う紀伊さん。目もどこと無くにやけていた。

初めてあつたときの僕からかけ離れた　いや、人間から逸脱したようなイメージは減り、良い意味でこの人も人間と思えてきた。

「あまりにも秋宮がわがままだね。私が止めようかと思ったが……

まあ、秋宮のわがままの内容は君に添い寝するというものだったんだ。

あの少女が君は疲れているというのを理由に断固阻止しようとした結果」

くすりと紀伊さんはほんの僅かに表情を変えて語り続ける。

「何故かそこに置いてあつた金属バットを握りしめ、秋宮の後頭部にフルスイングした」

ポカンと口を開けて呆とする僕。さぞ間抜けであつただらう。

「アレは近年まれに見るほどのナイススイングだった。

何せ一本足打法だ。いや、あの角度からするとかなりのアッパースイングだったよ。どちらにせよホームラン級のジャストミートだったな、うん。

それで秋宮は完全に鎮静化して事なきを得た」

ホームラン級のヒッティングをする方も方だが、それを直撃して無事な榎風も榎風だ。とんでもなく恐ろしい。

「ところで紀伊さん」

本当に聞かなくても解る細かい疑問なのだが一応回答確認のために尋ねておこう。

「『紀伊さん』なんて他人行儀なことはしないで良い。ああ、そういえば自己紹介がまだだったね。名前を聞いたのに自分の名前を言わないなんてとんだ失態だ。改めて、初めまして。紀伊^{キイ} 大地^{ダイチ}だ。呼ぶのは大地で良い。よろしく」

あくまで自然に手を差し出す紀伊さん。もとい、大地さん。
僕はそれに応じてゆっくりと大地さんに手を重ねて、握り、握手した。

「こちらでも改めて宜しくお願いします」

お互いの手を離し、時に流されるまま、さっきの質問を続きを言った。

「榎風をバットでフルスイングしたのは茜　　紅い髪の子ですよね？」

単純な知的欲求だ。他意はなく、帰ってくる言葉はもちろんイエスのはずだ。

「いいや、蒼い髪の着物の子だ」

ただ事実のみを大地さんは言う。

このことは追求しないでおこう。それが世のため、人のため、みんなのため、そして何より自分のために。

それから他愛もない世間話がひたすら続いた。

机に腰掛け目を合わせて語る白髪の二人。

今の現状やこの町のことにはあえてふれず僕が旅をしてきた間のことや今と昔の榎風の性格について。

そんな話が無性に面白かった。

現状にあえてふれなかったのは無意識のうちにこの楽しい状態を終わらせたくなかったのかもしれない。

ずっと他愛もない世間話が続いた。

そろそろ時間もよい頃合いだ。長年の勘からすると、

「ワアアアアアアアアアアン！！！！」

「やつぱり来たああああ！！！！」

榎風は僕めがけて一直線に滞空し激突、押し倒した。

「ワアアアアアアアアアアアアアア！！！！えっぐ、えっぐ」

ひたすら泣きじゃくる榎風。手の甲を目に押し当てて鼻を齧る。

「どうしたんですか、一体！」

それでも榎風は泣きじゃくることをやめることはない。せめてマウントポジションはやめてほしい。

「うわああ！！鼻水垂らしながら頬摺りするなあ！！！！」

「だって、おまえが、昨日倒れて、朝起きたら、いなくなっただけ……」

しゃくりあげながら必死に言葉を紡ぐ。大の大人がみつともない。

「話は聞くから離れて、ね？」

その一言で榎風は泣き止み、僕から離れた。そして自分の足でしっかり立つ。あわせて僕も立ち上がる。

本当にこの上なく世話の焼ける人だ、まったく。

「つくづく思うが良い意味でも悪い意味でも相変わらずだな、秋宮」

あきれ顔の大地さん。対する榎風はというと。

「これは渡さないからなあ！！！」

そういつて榎風は僕を抱き寄せた。それはもう力一杯、首が折れんばかりに思い切り。

会話もまったく成立していない。今の榎風に何を言っても無駄だろうが。

「こいつはなあ、私のものを何でも取る悪い奴」

余りに嘘くさかったので声を出してしまった。

「何言ってるんですか。大地さんは良い人じゃないですか……」

ぼつりと言ったつもりだったのだが榎風の耳にはしっかりと届いてしまっていたようだ。

再び瞳からは涙が溢れだし止まらなくなる。

「ウワアアアアアン！！！！紀伊が私のものをまた取ったあああ

……」

「鬱陶しい」

ぽこんと景気の良い音がした。

大地さんが榎風の頭を本で叩いたようだ。さすがに二日連続で殴られた榎風に合唱。チーン。

「そんなことよりこいつの名前を教えろ。わざわざ魔術抵抗までつ

けて分からなくするなんてな」
「いやだ」

きつぱりとはねのけた榎風。さっきとはうって変わって眼には真剣と言つより覚悟を据えたようなきつい眼をしている。火花を散らすようなにらみ合いと言つ奴だろう。

正直こんなに局面が変わるとついていきにくい。しかも未だに抱きしめられたままだ。

「どうせお前のことだ。なにを言ってもただはぐらかすだけだろう」
折れたのは大地さんだった。

どちらかと言えば最初からそのつもりのようにとれたが真意は不明。

「しかし、とりあえずでもいいから名前を付ける。それでないと戸籍が作れない」

戸籍が作れないって……まさか。

「わかったよう」

すねたように言い捨てた。同時に僕も解放される。

「んじゃ、大河。どうせお前の親類じゃないとだめなんだろう？ だったら名前も似せるよ」

あーあ、完全にいじけちゃってるよ。

「ということだ『大河』。ここでしばらく住むために戸籍を作る。

俺の弟としての戸籍になるから『紀伊大河』と名乗ると良い」

偉くさっぱり言う大地さん。そして手帳を取り出して何かを書き込んだ。おそらく今のことだろう。

僕も存外さっぱりしていた。始めて手に入れる戸籍に対しても名前が付いたことも大地さんの弟になることも。

「戸籍の話はこれで終わりだ。明日までに手配しておこう。そろそろ本題に入りたいからな」

そういえばすっかり忘れていた。今一番大事なのはそのこと。

そして僕は戸籍のことなんてすっかり忘れて大地さんの話に注聴する。まったく疑問にも思わずに。戸籍の作り方も知らずに。

第16歩：MORNING - 3

一通りの話を終え大量の本の置いている大きな部屋を出る。名付けるとすればさしずめ大図書館と言ったところだろう。となれば大地さんは司書にあたる。

その大地さんに先導され部屋を出た。これから屋敷の案内、屋敷の住人の紹介、その後に現状確認するらしい。まあ個々に説明していたらそれこそ不合理なことこの上ないから妥当な案だ。

現在の時刻は七時半過ぎ。人が起き始める時間を少しばかり過ぎたぐらいだ。だが人によっては違う。例えば僕の真横にいる人。

「ああー、眠い……大河あ、おぶつてえ……」

本当に眠いのか泣きつかれたのかは知らないが目が半開きのまま先ほどの剣幕はどこへやらと言った感じに榎風は僕に言う。当然返事も待たず寄りかかる。

僕との身長差のせいで榎風はかなり体を曲げていが、顔はトロンと溶けていた。

そこまで眠たいのなら部屋まで帰ればいいだけの話なのだがあいにくそこまで榎風は物わかりがよくない。むしろ悪い。帰れなんて言った日には連行されてなにされるかわかったもんじゃなし。拉致監禁されてしまう。それならまだいいが変な魔術で離れられなくなったりしてしまいそうで何も言えない。と言うわけで現状に甘んじている。

これが僕の日常風景で落ち着くと言えば落ち着く。しおらしくなった榎風なんて想像するだけで恐ろしい。

「秋宮、少しはわがママを直せ」

「いいじゃないか。これはこれで大河も気に入ってるんだから。ね、

大河」

そついつて猫をなでるかのように頬摺りしながら甘ったるい声を出す。

「気に入ってるわけ無いじゃないか」

ぼそつと音にもならないような声で言っただはすなのにどこまで地獄耳なのか、いまにも『泣くぞ!』と言いそうな顔と涙のたまった瞳で僕をみる。

本当に感情が変わりやすいと言つか気持ちの転換が早いというか一体何がしたいんだろう。

でもそんな目をされたらこの人の付き人として逃げ道がなくなるじゃないか。

「ね、大河」

さっきと同じ様にもう一度聞く榎風。ここで無視すれば榎風がとる反応は決まっている。
しかたない。

「はい、気に入っています」

「かわいいのお、かわいいのお!」

先刻より強く頬摺りする榎風。正直つきあいきれない。

「大河、お前は多難だな」

そんなことを大地さんがボソツと言ったのが聞こえるはずもなかった。

歩くこと一分程度。家の中を行き来する単位が分なところあたりが如何にもこの屋敷の巨大さを物語っているようでなんとも恐ろしい。

僕たちがいた離れから比べれば近い位置に僕たちは案内された。相変わらず榎風は寄りかかったまま、僕はされるがまま、大地さんは放置。光景的には異様だ。

そつと見上げた木製の引き戸の上にはデカデカと『LIVING ROOM』と書いてある。

「ここがこの家の中心にあたるリビングだ。公共の場にして絶対安全地帯。何かから逃亡している場合は迷わずここに駆け込むこと。なおこの中で争いを起こした場合、厳しい罰があるので肝に銘じておくよう」

大地さんはつらつらとリビングの説明をし躊躇無く戸を開けた。途端に流れ出てくる暖かい風とご飯を炊いているとき独特の香しい匂い。

「あ、大地さん。お早う御座います」

そしてこちらを振り向き、すつと頭を下げる流麗な美少女。鏡
だ。一度会っているのにさらに挨拶するなんて律儀な人である。

「おはよう、鏡。秋宮は勝手に起きてつつこんでくるのは予想できたのに朝から無駄な頼みをしてしまつてすまなかつたな」
「いえ」

無感情に短く言つともとあつた方に向き直る。どうやら朝食を作っているようだ。

どっかの誰かさんも見習ってほしい。

「おい、紀伊」

短い問いで真摯な眼差しで紀伊を見据える榎風。ようやく静かになったと思ったのに。

「今度は何だ」

問いについて大地さんは適当にあしらわず真面目に応答した。

「おまえ……」

さらに視線を強める榎風。真剣さが増している。鏡について何か気づいたのだろうか？

「ロリの趣味があつたんだなっ！ いや、全く気づかなかつたよ、こればかりは！ 人間やはりどこか『萌のストライクゾーン』があるものなんだなっ！」

お約束のぼけをどうもありがとう、榎風。そう皮肉気に言つてやりたかつた。一瞬でもシリアスになった僕が馬鹿みたいじゃないか。大地さんも聞いて呆れているよ。

だがさすが大地さん。突っ込まずに話を変えた。

「榎風、大河。お前の連れ二人を連れてきてくれ」

そうだった。二人にはすっかり忘れてた。

大地さんの言葉の後、榎風はようやく僕から離れ不真面目そうに片足重心で立つ。

「んー」

生返事をした榎風の後ろをついて入ったばかりの部屋をあとにした。

榎風と歩くこと数分。この間がものすごい大変だった。僕が一方的に大変だった。しかし榎風と何より自分の名誉のためにここはあえて描写しないでおこう。まあ、進行スピードが四分の一程度になったただけ言っておいて後は他者のご想像に任せる。

結果を言つと渡り廊下まで戻ってきた。

そこから見えていた朝焼けの鮮やかな朱の空は表情を一変させ天高くそびえる紺碧の壁となっている。

ひたという足音もすうという木擦りの音も何一つ変わっていないというのに僕はこの数十分で飛んでも無く変わってしまった気がする。

戸を開けると目の前に飛来する赤。朱。紅。あか。アカ!?

まるでテレビゲームのゲームオーバーの画面のように赤かった。

ものすごいビビった。本当ビビった。マジビビった。

犯人なんて二者択一だった。三段階でちまうよ。

一つ、犯人は茜か榎風。これは決定事項。世界が割れても覆ることはきつとないはずだ。

二つ、榎風は僕の後ろで何も用意して無かったのは長年の経験より確認済み。確認を怠り何度辛酸をなめたことか。

三つ、だったら茜しかないじゃん!? 消去法で犯人を決めるのは良くないけど事実じゃん!?

なんて三段階で茜に犯人決定！

だいぶ榎風の性格が移ってきたような気がするが放置。現実逃避とも言う。

一抹の不安がよぎったが躊躇い無く叱咤した。

「こうらあつ！茜えつ！」

「ひゃあ！ごめんなさい！」

ピンポンピンポン、大正解。だがやたら空しい。

そういえば目の前に現れた赤の正体を確認してなかった。一步下がって全体図を確認する。

なんだかとても見覚えがあるぞ。いや人型なだけだ。

虚ろな沈黙の後、頭を抱えるしかなかった。

これは全くの予想外。仕掛けた当の本人がブランとぶら下がってるんだからこれは予想外。ある程度予想はできたけど予想外ということにしておきたい。

「ほーどーいーてー」

一生そうしてろよと言ってやりたかったが、さすがにそれは可哀想だ。

近づいてゆつくりと解きつつ頭から落ちないように体にしがみつかせた。榎風に手助けを頼むと

「ヤダ」

と問答無用言語道断一刀両断された。助け合いの精神がないのか、はたまた面倒なのかは言及しないでおこう。茜がこんなことしたのかも言及しないでおこう。

だが経緯だけは聞いておく。茜は頭の後ろをかきながらあやふやに述べていくがそんなことじゃ僕は騙せない。

「縛ったはいがほどけなくなった、と？」
「にはははは」

自分でまとめておいて何だが、どこぞのギャグマンガでもあるまいに。

最近頭を抱える回数が当社比三倍って感じた。葵は葵で二度寝してるし。

起こすのはまさに死闘だった。

そんなこんなで部屋に三十分ほど留まった。大地さんをだいぶ待たせてしまったのが気がかりだ。なるべく急ぎつついこう。

白い前髪を書き上げながら密かに僕は思う。

今更ながらどうも今日は疲れる長い一日になりそうだ。

第17歩：BLEAKFAST - 1

僕たちが四人になってリビングに戻って来た時、そこに居たのは三人だった。大地さんと鏡はもちろんの事、もう一人女性が増えていた。

女の子といえない年ではあるが大人の女性ともいえない微妙な年齢の人。おそらく大地さんと同じ年齢だろう。

その女性は大地さんと同じくらい目を引く黒い髪だ。

長さは椗風より長いが鏡よりも短いぐらい長さ。細く艶やか髪質はこの場の誰より綺麗だ。身長は座っていてわからないし着ている着物せいで体のラインも見えない。でもすべてにバランスが整っていて絶世の美女といった具合。それに着ている着物は僕の着ている服の一桁も二桁も三桁も違うはずだ。何かの拍子に汚さないように気をつけて行動しよう。

座っている場所は二十人は周りを囲めるのではないかという程大きな長テーブルの上座に座っている大地さんのすぐ真横。上座に二人座ってゆとりがあるとは何とも豪勢だ。

白銀の髪の大地さんと漆黒の髪の女性のコントラストは一枚の有名な絵のようでいつの間にか見入ってしまった。

「あつ、お早う御座います。あなたが大河君ね？」

ジングウ 神宮 ナユキ 夏雪です。宜しく願いますね。

それと呼ぶのは下の名前でもいいですよ。ここではみんな下の名前で呼びあっていますから」

淡く笑う夏雪さん。とても優しい人のようだ。

紀伊さんはあえて反応していない。

「初めまして、夏雪さん」

なるべく粗相のない様に丁寧に頭を下げた。

榎風は後ろの方で

「いつの間に下の名前で呼びあうなんてルールがつ!？」

と言いつつワナワナ震えている。相当ショックのようだ。

僕は続けて後ろにいる茜と葵を紹介する。榎風とは知り合いのようなので省いた。

「秋宮、大河、葵、茜。いつまで戸口にたっているつもりだ？」

視線をあわさない大地さんにせかされて席に着く。大地さんのほうに上座に近い順に僕、榎風、夏雪さんのほうに葵、茜が座った。

こう人が居ると変な感じだ。今までの榎風と二人でとっていた食事が嘘のように寂しく思える。それはそれで楽しさがあつたが大勢で卓を囲んでみるほうがなんだかよい感じた。性に合っている。

やることもないので根暗だと思うが人間観察を試してみた。本当は談笑したりしたいところなのだが何分話題というものを持ち合わせていない。

まず隣に座っている榎風。何か警戒した猫のように辺りを頻りに確認しつつ、時折思い出したかのように僕をみる。悪いことを企んでいなければよいが。

反対側の隣にいる大地さんと言うと、本を注視しつつ時々目をはずしお茶を飲む。ページをめくるスピードが異様に速いのを除けばさしておかしな所はない美少年読書家だ。美少年の時点で異常だがそんなことを言っているのはこの人全てが異常だ。

その隣の夏雪さんは落ち着き払ってのんびりと緑茶をすすっている。すごく癒されるといふか和む風景をみている感じ。

向かいには葵。まだ完全に眠気から抜け出せていないのか、薄く目を開けたままうとうとしている。そのまま前に倒れる事はここ数日それはなかったから大丈夫のはずだ。いざとなれば茜が止めてく

れるだろう。

その茜はというと見る物全てが珍しいかのようにそわそわしながらすごいスピードで視線を変えている。生後一ヶ月未満なのだから当たり前のような行動なのだがそれが少しだけ面白かった。

その人々からはずれた位置でせつせと料理を作る鏡。一体何人前作っているのやらと言つようなでかい鍋の前で切り刻んだ野菜などの具を入れていた。

手伝うべきなのだろう。昨日泊めてもらったお礼も込めて。有り難迷惑と言われれば素直に引き下がればいいと思い重い腰を上げた。七、八歩の距離なのですぐにたどり着き、手伝わしてくれと切り出そうとした瞬間、

「その豚汁を混ぜていてください」

と視線も交えず言われた。

客だと言われ追い返されるならわかるが、事前協議もなしに突然豚汁を混ぜていてくださいとは驚きだ。

「わかりました」

どちらにせよ手伝いにきたのだから言われたことをやろう。いろいろな行程が省けたと思えばいいし。

鍋の中につつまれてお玉を持ち、具を崩さぬようゆっくり混ぜた。いやゆっくり混ぜざるを得なかった。

重い。とんでもなく重い。

豚汁を途中で混ぜるかどうかわ僕は知らないが混ぜると言われたのだから混ぜるのだろう。

その横で鏡は焼き鮭を皿に並べている。皿の枚数実に12枚。

僕らが四人だからこの住人は計八人ということか。家のサイズからしてみたら少ない。

鏡は一通り並べ終わるとご飯茶碗とそれとほぼ同サイズの器を1枚だして作業をやめた。全員そろってからご飯をよそうのdarou. 僕も具に火が通ったことを確認してからガスコンロの火を消した。

「ありがとうございます。助かりました」

視線を合わせて微笑する鏡。素直に可愛い。

「いいよ。いつもの仕事だから」

最近はやさしかったが毎日食事を作るのは僕の役目なのは事実だ。

「秋宮さんの手伝いでですか？」

条件反射のように微笑んでいた顔は元の無表情へ。それでも視線ははずさない。

「いや、あの人は料理うまいけどしないから」

文脈的にそうとられてしまったようなので淡泊な声で無動作に全面否定した。

事実なので罪悪感はない。でも料理がうまいとつけたのは榎風への情けだ。

そのまま鏡と少しの会話を終え席に戻る。

特に決まった席順はないようであつて来た人からつめて座るようだ。後ろの方で戸の開く音がしたので振り向く。

「はよ……」

トーンの低い声とともに現れたのはこれまたボサボサに乱れた髪

の女性だ。

どっかで見たような気がする。

それにしても女っ気のかけらもない人だ。

「おはよう、明」

「相変わらず寝起き悪いわね、明ちゃん」

大地さん、夏雪さん　二人とも視線をかすかに送ってからまたもとに戻る。

ああ、明って昨日の。何とも変わり果てた姿になって全く気づかなかった。時間って時を変えるんだな、うん。少し言い回しが違う気もするが変えるものは変える。

「はわあゝ……」

一つ欠伸してすんと入り口から近い榎風の横に座った。

明は髪は黒い髪から少し色が抜けたような茶色を肩口まで伸ばし、身長は平均並の女性だ。今は寝起きのせいで髪はボサボサ、黒い目は半開き、服はパジャマのままだったが顔の輪郭や体軀は綺麗に整っている。

「そいつの名前は早苗^{サナエ} 明^{アキラ}だ。見ての通り寝起きは非常に悪いが普段は明るくいい奴だ」

性格が明るいのは昨日の一件でわかっている。

そういえば一つ確認として聞いておかなければ。

「明さんは魔術師なんですか？」

忘れていたわけではないがただ単に聞くチャンスがなかっただけ

だ。その所、勘違いしないでほしい。

「ん？昨日、明が使ったのか？」

もしやまずいこと言ったか。

そういえばそんなこと言ってた気がする。

昨日の事はわざわざ顔まで隠した榎風が悪いのだから責められるようなことがあれば庇わねばなるまい。

「あいつは魔術師と言うよりもサポーター、みんなにあわせて戦い方が変えられる器用な奴だ」

読んでいた本を閉じて大地さんが説明してくれた。

「はい、お茶」

「ありがと」

眠気のぬけ切らぬ明さんの前に急須から暖かいお茶を注ぎ、差し出す榎風。

ああー、すごい怪しい。怪しすぎる。絶対何かある。

そんなことを知る由も無くぐびっと一気に口の中に流し込んだ。沈黙は痛い。痛感した。

おそらく明さんの口の中では第二次世界大戦級の戦争が起きている。銃弾が飛び交い、戦車が駆け巡り、誘導弾が発射された。

見る見るうちに顔が赤く変色し、その後、黄、青、最終的に緑になった。人の顔とは思えない変わり方だ。

大丈夫な訳なかった。

そして今、

「ギヤアアアア！！！辛あああああ！！！！」

原子爆弾が炸裂したようだ。ABC兵器を総動員で攻撃されたくらい苦しんでる。

台所に駆け込んでみっともなく蛇口に口を付けそのまま飲んでい

る。
その光景を大地さん、夏雪さん以外は啞然と見、葵と茜は目を完全に覚まされたようだ。

だから沈黙は痛いって……誰か話題を出してほしいものだ。

そこに救いの　　というより順当の叫び声があがる。

「こらあっ！榎風、一体何入れたあっ！」

明さんが掴みかからんばかりの勢い、否、つかみかかった勢いで榎風を怒鳴りつけた。

「お茶に決まってるじゃないか」

つかみかかられたのにあらがいもせずあくまで冷静にしらを榎風は切る。

「そのお茶の中に何入れたって聞いてんだよっ！」

「なんだ、お茶の葉でも入っていたのが気に入らないのか？全く……」

……

いつもと違う榎風の対抗の仕方が何となく新鮮だった。揚げ足を取る姑息なやり方。あまり気に入らない。

「聞き方を変える。何使って入れたらこんな人外の飲み物になるんだよ」

「この急須」

榎風は机においてある急須を手にとり余った手で指示する。完全なまでの不真面目な対応だ。顔は笑ってないし。

「その急須の中に何入れた」

「中には元々お茶が入っていた」

未だに表情を崩さない。理論が矛盾して真っ向対決しているのにあからさまな異様さ。

「嘘つくなっ！」

遂に明さんが限界に達したように本当に起こりだした。

時間だけではなく、感情も人を変えるのだとつくづく思う。

僕を挟んで行われている水掛け論を止める方法はないだろうか？
とりあえず榎風の正面に立った。視線も外れぬように睨みつけた。

「榎風さん、本当のことを言うてください」

考えた結果、この騒動をどうにかするためには自分が動くしかないようだ。

「私は一言も嘘を言ってないぞ」

「でもそれじゃあ」

話が最初に戻る、と続けたかったが新たな参加者の声で遮られた。

「この今で喧嘩したら」

と、大地さんがボソツと言う。

たったそれだけで二人が硬直して冷や汗を滝のように流す。
入るときに言われた罰はそこまで恐ろしいのか？ 僕も怖くなって
後ずさる。

「喧嘩なんてしてないっ！絶対にしてないっ！」

「そうだ、紀伊！断じて否！そんなことはしてないぞ！」

肩を組み、笑いながら必死の釈明。情けないというか哀れだ。
だがそれでは根本が解決していない。それに大地さんも気づいて
いる。

「秋宮、今の内に白状すれば不問に処す。犯人はおまえか？」

硬直した末、榎風は壊れた人形のようにカクカク首を縦に振る。

「でも、私は本当に嘘は言ってないって！」

まだ言っている。相当偽証罪に問われたくないようだ。

「じゃあ、いつ変なものを入れたのよ」

怒りを鎮静化させた明さんが聞くと榎風は素直に答えた。

「急須の中に」

「やっぱり嘘ついてるじゃない。質問したとき確かに」

明さんは腰に手を当てながらあきれた口調で言った。
明さんの言う通り確かに榎風は矛盾している。

「何を言う！あるとき私は『中には元々お茶が入っていた』と言っ

ただで『変なものを入れた』とは言っていない！」

屁理屈だ。清々しいまでの屁理屈だ。いつも通りの榎風に戻った。しかしここで明さんも不用意に責めることはできない。そんなことをすれば忽ち罰が待っている。

その後、明による激しい報復攻撃があったのを知るのはずっとずっと先のことだった。

第17歩：BLEAKFAST - 1（後書き）

はじめに……

読者のみなさまのおかげで閲覧者数が千人を超えました。この場を借りて深くお礼をします。

これを励みにがんばります。

さて、ようやく、人物が増えてきます。ぞくぞくわらわらと……

現在が榎風、大河、葵、茜、大地、夏雪、鏡、明、朝熊、風間、の十人ですから、本文から計算した後三人近い内に登場します。

あ、あとABC兵器とはATOMIC、BIOLOGICAL、AND CHEMICAL WEAPONSの略で原子・生物（細菌・昆虫）・化学兵器の総称です。

第18歩：BLEAKFAST - 2

肌がチリチリするぐらいのプレッシャーがこのリビングに渦巻いている。しかも僕の真横で。

膠着状態の続く国々の国境にでも立たされている気分だ。宣戦布告の準備も万端。後はことを待つのみ。第三者の僕から見ればたまったもんじゃない。

大地さんと夏雪さんはわれ関せず、葵と茜は僕同様に扱いかねて困っていると言った具合、鏡は鏡でどっちつかずな態度をとっていた。

「はよお」

軽快な口調で右手を挙げながら誰かが戸を開ける。

救いの手が悪魔の手かどちらになるか分からないが誰かがやってきてくれた。もう進展してくれるならどっちでもいい。

僕は完全な物臭な態度で傍観を決め込んだ。

「いやあ、お腹空いた空いた！あれ、ご飯は？」

この人は超絶的に空気に鈍感らしい。そのおかげか空気はほんの少しだけ柔らんだ。

見覚えのあるその人は昨日僕を押さえつけた人。顔と似合わぬ変な敬語もとれ枷が外れたかのようなマシンガントークを始めようとしたのをすんでの所で大地さんが言葉を重ね制止させた。よかった。このままだと会話の一方通行が成立するところだった。

「そいつは風間 カザマ 麻紀 マキ だ。うるさいがよろしくやってくれ」

「誰がうるさいって！そんなに人を貶しちゃダメだよ！」

腰に手を当てかわいげのあるポーズで怒った真似をした。
軽率に反論した時点で大地さんに軍配が上がっている。

大地さんとの会話に飽きたのか今度は目線のあった榎風に話しかける。

「やつほあゝ、榎風！元氣してたあ？こっちは相変わらずドタバタしてるよ。あ、その顔はまた明ちゃんと喧嘩したのね。もう子供じゃないんだから」

クスリと口に手を当てて笑う麻紀さん。完全独走状態だ。

麻紀さんの話し相手を捜す目は一部始終をすべてみていた僕にも当然目が合う。

「君は昨日の！私のことは麻紀でいいよ。昨日はゴメンね！あーしないと君突っ走って転けちゃいそうだったから。本当にゴメン。許して！ね？ね？」

次々と目で追えないような速度でジェスチャーしながら話す麻紀さん。最後には合唱しながら迫ってきた。

相手がポカンとなるほどよくしゃべる。そしてうるさい。その中、僕は分かりました、とかうじて声を絞り出した。それにありがとう！、と麻紀さんは目一杯の反応をした。

大地さんはやっぱり嘘は言わない。言葉を返す暇さえない程うるさい。

しかも喋る相手に向かってずいずい、どんどん近づいてくるから質が更に悪い。

麻紀さんはごく日本人的な黒目黒髪、小顔で小柄な短髪の活発少女という言葉であらかた説明つく。

パジャマのままの明さんと違ってしっかり着替えた麻紀さんは明

さんの隣に腰を下ろす。

今度は斜め前の葵と茜に話しかける。その大半は長い長い意味不明な質問ではい、かいいえ、だけ聞いて話をいきなり転換させる。話を続けようにも余りに強引なのでどうしようもないのだ。

間に挟まれている鏡に心より合唱。

「鏡、残りの三人を起こしてきてくれ。なかなか話しも始められないから」

「分かりました」

大地さんの助け船のおかげでその場から脱出できた鏡は少し疲れたような顔で部屋を後にした。

その大地さんも夏雪さんに少し何か言い、うなずいたのを確認してから鏡の後ろから部屋を出た。

直後部屋は大騒ぎになった。大地さんという枷をはずしたため今まで少しにセーブしていた感情が爆発したようだ。

まるで学校の教室が先生が忽然と消えてしまったのと同じような状態。つまり無法地帯化だ。

まず榎風は明さんと喧嘩を始める。バックに龍と虎が見える。このまま魔術を駆使した大合戦なんかにならなければよいのだが。

麻紀さんは押し倒さんばかりに葵と茜に詰め寄る。今にも鼻がぶつかりそうな距離なのに本人は全く気づいていないかのように話し続ける。

なぜか僕は取り残されたかのようにポツーンと座っていた。平和が一番。

かすかに何か音が耳に届いた。

幻聴が聞こえてくるほど精神が参っているのか？それとも昨日の後遺症でまだ疲れが？

はあとゆっくりため息をし、視線を落とした。現実から逃げた訳じゃないがこれ以上近づきたくないのもまた事実だ。逃げたと言わ

れても仕方ないかもしれない。

何気なく手を胡座の中央に手を入れるとチクツとした。不可思議に思って、手を眼前まで持ってきた。

首を傾げる。指から流れるのは赤い体液が滴り落ちている。どういうとこだ、これ？

下を見て原因を認識するまでの四秒半、あたりは完全な沈黙に包まれた。

それはもう恐ろしいまでの静寂だ。背中に冷や汗がつつと流れるのが音として聞き取れるのではないかと思うほどの静寂は地の果て極寒の地に飛ばされるのと同感覚の恐怖と言えはわかってもらえるだろうか？

前触れ無く榎風が爆発した。

「貴様あつ！！大河にいつ！！」

「ワアアアア！！事故つ！これは偶然にも起きた不幸な事故つ！！」

手を榎風に突き出しながら必死に明さんは抑止を試みる。恐怖が伝わったようだ。

「問答無用！！」

結果的に明の行動は無為に終わった。

何処のマンガだよ！！この展開！

飛来した原因は明さんが榎風に向かって投げた手投げナイフだった。そのナイフの流れ弾が偶然にも僕の股の間に刺さったようだ。

榎風は何処から出したのか真剣を構えている。指先切っただけなのに真剣使って喧嘩するか、ふっ？

ってそこで明さん！すっかり小太刀両手に持って応戦しないで応戦しないでくださいよ！！

心の中の叫びは誰にも通じなかった。

ジリジリとだんだん詰め寄る二人は真剣な顔そのものだ。だから何でそこまでするんだ？ 激しく疑問。

ハイトーンの耳をつんざく音が耳に届いた。

その音が聞こえたのは榎風の方からでもなく、明さんの方からでもなく、ちょうど真ん中から。

二人とも弾かれてつんのめった様子でその手にはまだ武器が握られたまま。しかし新しく鈍光りするものが現れていた。

長刀 それが武器の名。儀礼的なもののようは無駄な装飾などではなく、担い手にすべてを任せるように限界まで研ぎすまされた刃が不相応な木の棒から生えている様は何とも滑稽、のはずが絶対的な強さを醸し出している。銃口なんかとは比べ物にならないそんな物体がこちらを向いて待機。

木の棒を辿るとそこには手がしっかりと握っていた。

今度はその手を辿ると当然のように体がついて、体の上には頭がやっぱり当然乗っているわけで にっこり笑っている。

誰かに似ているのは気のせいだろうか？ でもこれは間違いなく夏雪さんの顔だった。

おもむろに口が開いた。

「ここでは争いは禁止のほすですけど。理解できてないのですか？ それなら精神科か脳検査の必要がありそうですね。今から行きます？」

鉄のように笑いは崩れない。

怖いっ！ とんでもなく怖いっ！ この世の終わりをみた気分だ。

それは皆同様のようでその必要はない！、と力一杯否定した。それが失敗だったのだ。

「ということは故意にやったということですね？」

榎風と明さんの顔に青筋が走る。

夏雪さんの話術はなかなかなのかもしれない。少なくとも僕よりは上だ。

「罰を与えます」

冷淡に一瞬。凍る様な刹那。それで決まってしまった。

明さん、榎風、麻紀さん、三人ともが長刀の柄のほうで頭に直撃を受け動きを止めた。止められた。息も止まってないようだ。しかしなぜ麻紀さんまで？、なんて聞く勇氣は僕にはなかった。

「じゃあ少し席を外すけど喧嘩しちゃだめよ」

夏雪さんは優しく微笑む。

それだけいって三人を引きずりながら部屋から出ていった夏雪さん。さようなら、あなたたち三人のことは一生忘れません。どうかお元気で。合唱。

ポツンと残されてた僕らになにをしろというのか？喧嘩なんかするはずない。できるわけない。

とりあえず、硬直して時間を過ごすしかない人間外の三人だった。

第19歩：BLEAKFAST - 3

取り残された僕ら三人は一応他人の家なので勝手に物色するわけにもいかず、特に何もすることなくただただ座っているしかなかった。

窓から見える風景は広い庭に幾つか見える葉が落ちきってすっかり茶色くなってしまった枝だけの木と薄く高い雲をちりばめたような空、この家が一段高いところに示すように見える色とりどりの疎らに広がる屋根。

木枯らしで舞い散る枯れ葉さえもないその風景は何処か空寒い。

さっきいた位置から移動して葵と茜の近くに腰を下ろした。さすがに股の間にナイフが刺さったような場所で朝食は食べたく無いかといつてナイフをそのままにしておくわけにも行かず、左手で軽く引き抜き右手に持ち変えて軽く弄んでいた。

くるりくるりと回る銀色。

投擲用ナイフのためなるだけ軽くしてあった。これならばいくらか持つても苦にはならないだろう。だからって明さん、持ち歩かないでほしい。

三人だけの時間もそう長くは続きはしなかった。

まず大地さんが帰ってきた。昨日の朝熊という人に電話してきたらしい。そうして元いた席へと戻る。慣れているのか、ただ興味が無いのかどうかはこの人の場合計り知れないが僕たちだけになった理由は尋ねてこなかった。

それを追うようにして夏雪さんも戻ってくる。目を薄く閉じしつとりとした感じで部屋に入ってきたものの後ろに引き連れられた人々のせいであたのホラーなものでしかなかった。後続の人々のことについてはあえてコメントを控えようと思う。

これで鏡以外のものメンバーはあっさり帰ってきた訳だ。

木擦れの音。鏡も帰ってきたようだ。鏡が残りの人を起こしてき

たのならばこの家にいる全員がそろったことになる。皿の数から数えると十二人が一つの部屋にいるわけだ。部屋が広くあっても何故だか圧迫感を感じるような人数である。

鏡の後ろには大地さんと同年代の男性が二人と少女が一人いた。入ってきた順番はまずわりかし普通っぽい感じの少年だ。何というか優しい面もちではあるが、明らかな一般人オーラがでている。寝起きがいいのか眠たげな感じを少しも見せていなかった。

次に入ってきたのは普通より少し格好の良い少年だ。しかし寝不足なのか目の下には濃い隈が出来ている所為でそれが台無しになるどころかただの不健康な人というイメージしかかわせない。

最後に入ってきたのは年端もいかぬ少女だ。鏡と同年齢ぐらいの筈なのだが、鏡とは対照的に年相応といった外見だ。まだ眠いのか頻りに目を擦っている。

それにしても子供が多い。十二人中僕を含めて年端もいかないのが五人とは異常だ。僕や葵、茜は榎風によって作意的に作られたからよいにしろ、他の二人は現状に役立つのだろうか？

「始めに入ってきた順に間宮 マミヤ 和湖 ワコ、希崎 キザキ 時雨 シグレ、浅辺 アサベ 由愈 ユユだ」

横から淡々と大地さんが説明してくれた。相変わらず少しも動きはしない。ただ琥珀色の瞳が動くだけ。

無関心に時雨さんと由愈はそのまま席に着いたが和湖さんは僕たちの近くまで歩いてきて握手を求め、右手を差し出してきた。異様なまでのこの落ち着いた全員の反応は何だろう。慣れているのか？和湖さんの握手にに右手で答えようとして右手にまだナイフを持っていることに気づいた。ナイフを左手に持ち変え改めて右手を差し出した。

あまり強く握らず儀礼的な交わり。が、その手からはしっかりと温もりが伝わってきている。

僕の右手から手を離し、隣の葵、茜と順に握手の相手を変える。

その間、和湖さんは一言も声を発さずただ笑いかけるのみ。一番好印象を与えるようなシチュエーションの筈なのにどうにも好きになれそうになかった。

食事は至って静かなものだった。

原因の大部分は騒ぎ立てていた三人が完全に沈黙し、機械的に箸を動かしていたせいだろう。今まで榎風がここまで言葉を発しなかったことがあるだろうか？ いや、まず無い。

そんな苦々しい沈黙の中でも朝ご飯をおいしく感じられたのは本当においしい料理であつたのと、久しぶりの食事だつたおかげだろう。

それにしても間延びしている時間は絡みつくように動きを鈍重にする。おかず一つとることまで一苦労だ。

このときばかりは大地さんや夏雪さんも助け船や話題を出さず黙々と料理に箸をつけては口に運んでいた。もしかしたら二人にとつては食事は静かな方が好きでいつもそうなのかもしれない。だがそれでも少しは現状打破してくれると期待していた。その希望も完全に打ちのめされ、今やただの絶望へとなり果てている。どうにも出来ない僕は少し、いややつぱりだいぶ情けない。

そんな中、一種異才と言っても良い程浮いていたのが由愈だ。年齢のせいだ鈍感なのはいざ知らず、場の空気など気にせずスプーンで飯を笑顔で書き込んでいる。由愈の存在がなければさらに、それこそ戦場の様に殺伐とした風景になっていただろう。

しかし由愈は遙か遠く、テーブルの反対端に座っているので全体的には変わっても僕付近は大した代わりはない。むしろ目前に榎風たち三人がいるので空気が荒んでいる。とんでもなく恐ろしい。もうどうにでもなれってんだよ。

第20歩：AUTOCRAT

話は飛ぶ。非常に突然だが飛ぶものは飛ぶのだ。頼むから飛ばさせてほしい。できるだけ思い出したいくないのだ。

それでは何のことかさっぱりわからないので苦しいながら軽く説明しておこう。ここで誰に説明していいしてるのか、なんて野暮な質問はやめてほしい。知らぬが花と言うものだ。

あったことをそのまま言ってもただ馬鹿な話なので全ては語らない。と言つか語るためには相当の精神力を必要とするので語れない。余りに無意味かつ不毛な話だ。

食事を終了した後の小一時間、ひたすら阿呆な騒動が続いた。

陰湿なイタズラなんかではない。それはもう清々しいほどに表だった、イタズラとは呼べない程のイタズラ。もうこれは計画的犯罪と言って差し支えない気がする。これで悪意がない上、馬鹿騒動をやめる気がないのだからハイウェイをフルスロットルで逆走するくらい馬鹿な人たちだ。

そんなことが自分の周りで続いていれば誰だって滅入る。ちなみに僕も滅入り、精神崩壊にまで陥りかけた。

あくまで誇張表現だ。

だが馬鹿騒ぎ具合はそのままだ。むしろ消極的に表現している。賭けても良い。

これから先、一時間や二時間、一日や二日先ではなくもつと先。様々な意味でどうなることやら際限無く心配だ。

果てなく続く空間。
引延ばされた本棚。
数え切れない書籍。

停止した無限回路。

釘づけられた英知。

放置された保存脳。

ここは動くことない。動することを放棄した大図書館。

本来、宿主を必要しないこの部屋は大いに賑わっている。しかしその機能は滞ったままで空間の役割を果たす　つまりただ空しいことに広い部屋としてしか使われていないのだ。まったくもって嘆かわしい。

これほど全てに近いほどに満たされている空間は世界でも有数だろう。一生かかっても深淵を見ることはできない。吸収するなんて以ての外だ。

「と言う訳です」

僕は座ったまま説明を終え、合図として目を閉じた。

ここに来るまでの経緯をなるべく丁寧を知っていることを包み隠さずある程度類推を含む言い方でその場にいる全員に説明した。こういう場合、僕ではなく榎風が説明すべきだと思っただが使いものになりそうにないので代わりに言うては何だが僕が説明している。

「はあ……」

麗端な顔には似合わぬ重いため息が大地さんの口から漏れた。

正直なところ、大地さんならば顔色一つ変えず打開策を打ち出してくれそうで期待していたのだがそれは無茶な注文というもの。だから裏切られても落胆しなかった。裏切られても落胆しないと言うと余りに無感動な人　実際人ではないのだが　だと思われるかもしれないが、現実の所そんなものなのだ。

「やっかいな火種を拾ってくるものだな、お前は」

白銀の綺麗な髪を掻き揚げながら苦いか顔を大地さんはする。ここまで露骨に大地さんが毒づくほど事態は芳しくないようだ。他人のような言い方かもしれないが実際、情けないことに僕は現状が確認できていない。ただ漠然と

「ああ、今危ないなあ」

ぐらいでしか捉えられていないのだ。

「で、俺等に何して欲しいわけ？結局のところ」

冷たく払いのける声と目。先程まで一向に声を発そうとせずにした時雨さんのもつともな意見。もつともな意見だけに尋ねたこちらとしては元も子もない。

問題に答えられない子供がとる行動といえば二つ。

単に解らないことを知らせるために甘え押し黙る事。

そして僕のように、

「決まってるじゃないですか」

下らない見栄を張って、

つまらない事に執着し、

疑問に恐れおののいて、

勘違いの自己満足する。

簡単に言うと思ったかぶりをするかのだちらかだ。

別に意地が張りたかったわけではないし、格好をつけるほど伊達や酔狂な訳でもない。

なんとなく自分の中に疑問があるというのが気に食わない。さすがにこの世の総てを知っているわけではないが知らないということに気づいた事で消化できない異物を飲み込んだような違和感が生まれてしまうのだ。まるでナルシストな探偵。

「だから具体的にどうして欲しいのかって聞いてるんだよ。別にそんなあやふやで有耶無耶にする様な誤魔化した答えを聞きたいんじゃない」

射抜かれたような衝撃を伴う時雨さんの視線が容赦なく僕に注がれる。

ここまで冷徹にされるとは思ってもみなかった。さすがに重要なことなので僕には答えられないことだし。

「まあまあ、落ち着いて」

新しく加わった柔和な声。南雲^{ナグモ} 朝熊^{アサマ}さんだ。軽く腰を浮かばせ
険悪なムードを必死に声を紡いでいる。

がっしりした体に凄く似合わない一重の目。気は優しくて力持ち。まさにヒーローのような人を連想させる。見た限り性格は吃驚する程その通りだ。

「お前だって安請負出来ないのは分かっているはずだ」

視線は向きを変え朝熊さんの方へ。それだけで簡単にたじろぐ。

「それは、そうだけど……」

先の説明に一つ付け加えるならばセオリーと言わんばかりに気が弱いことだ。特に気が強めの時雨さんには逆らう意志すら持てていない。

「だったらお前、変な同情で口出すな。迷惑だ」

これほど気が強い時雨さんだから朝熊さんでなくても怯むだろう。しかしさっきのは少し言い過ぎと言うものだ。

「ちょっと、それはないんじゃない、時雨君！」

正義感が強いというか、感情の赴くまま立ち上がり麻紀さんが机を叩いて怒鳴る。衝撃で椅子が倒れ机が揺れた。

当の本人なのに冷静にそうとしか思えないのは僕が人間では無い所為なのか？

「確かに言い過ぎたかもしれないが、本当のことだろ？」

言われて唇を噛むしかない麻紀さんは収まりきらないように席に着いた。

「今は感情論を述べるより先に現実論だ。そうだろう？」

反論できる者はいないし時雨さんは正論を言っている。

それでも納得いかないのか麻紀さんはもちろん、明さんや朝熊さんも顔が沈んでいた。

「時雨、そんなことを言ってる場合じゃないだろ。それに大河を問い正すのは見当違いだ。詰問するなら秋宮の方にしろ」

それで時雨さんは喋るのを止めた。

やはり大地さんがいないと話が進まない。大地さんはここには無くてはならない存在なのだろう。

それに比べて榎風さんと言うと話に出ているなんて知ったことか、我が道突き進む！てな具合に

「あわゝ、希崎。相変わらずペシミスト&リアリスト！もしかし

て私が帰ってきたことに怒ってる？爆発寸前？危ない感じ？スリリング？」

とやけにハイテンションで意味不明なことを曰っている。

『ただいま暴走中』とでも首から札でも下げていて欲しい。最終的に僕が止めなければならぬのだが完全に精神が磨耗している現在に止められるはずはない。もう少し時間をかけて休みたいところだが仕方がない。止めなければ悪化するばかりだ。

「榎風、少し落ち着　」

隣に座っている榎風に抑止の言葉をかけた。最後まで言えなかったが。

「おお、大河！今日も相変わらずかわいい！ベタ惚れ！必殺、瞬殺、天誅殺って感じ！？」

全部言い終わらないうちに榎風はどんどん言葉を重ねる。

皆さんすいません。僕の手にも負えませんでした。

刹那、乾いた紙を振るい叩いた音。世に言うハリセンを使った音というのがしっくりくる。

同時に、ホゲツと漏れる声。当然榎風の物だ。

その後ろには大破した真っ白いハリセンを振るった後の格好で勇壮とそびえる夏雪さん。ハリセンを何処から出したのかという疑問よりも本当にハリセンを使ったことにひたすら驚いていた。

「では、話を戻しましょうか」

あくまで微笑を浮かべたまま全員に有無をいわさぬ質問をしハリセンをゴミ箱に入れた。

大地さんがカリスマで制御する表の支配者ならば夏雪さんは恐怖

で押さえつける裏の支配者だろう。もちろん権力は夏雪さんの方が強い。

しばらくの間、皆が皆、体感温度は気温を大きく下回っていた。

第21歩：DECIDE

夏雪さんの一喝により一斉に静まり返った大図書館。これが本来のはずなのだがそれを久しく取り戻したかの如く懐かしいものだった。ああ、本当に沈黙って愛おしいよ。

「静かにしたのは良いがな、夏雪。それで、どうする訳だ」

長い前髪を書き上げてため息をつきつつ仕切り直す時雨さん。もう少し睡眠をとれば女性の誰もが振り向く美男子になると思うんだけど。どうして寝ないのだろう。

時雨さんはいつもこうなのかもしれない。誰かを突きはねるように距離を置いて、それでいて正確なところをしっかりと指摘する。そんな酷く悲しい生き方。

「時雨……、うるさい。そんなだと話が進まないよ」

今までぼつんと座っていただけの由愈が軽くたしなめた。その年であの時雨さんに意見するとはなかなかの度胸の持ち主だ。さてはて、時雨さんは女には容赦ないと分かったが子供にも容赦なく言葉を放つのか。これは結構興味ある。

「そう……、だな」

そう言っただけが悪そうに言葉を紡ぐのをやめた時雨さん。由愈は由愈で事も無げに座って眠そうに目をこすっている。

あれ？

あれ？

予想外だけど何か物足りないというか予想外なことが普通すぎた

というか訳分らない心境に僕は陥っちゃってるんですけど。
誰か一体どんなトリックで状況になったのか教えて欲しい。

「（時雨君はロリコンなんだよ）」

戸惑い顔の僕に明さんがそつと耳元で小さく説明してくれた。榎
凧という特殊性癖の人間が近くにいた分それであつさり納得。よく
よく考えれば鵜呑みにすべきことではないし明さんの略式説明だつ
たのは明白だったのだが、ややこしいことは今のところ考える気が
しない。というわけで頭の中でしつかりと『時雨さん』ロリコン』
と定着してしまった。

反対意見の時雨さんは黙ったので大地さんがおもむろに声を出し
た。

「俺は秋宮に手を貸したいと思ってるんだがみんなはどうだ？」

大地さんが言うとなぜか重く聞こえる。実際命を賭す血生臭い戦
いとなる可能性が高い重たい決断のはずだ。それをこつともあつさり
と決めさせる決断力とそれに至る判断材料は何処から来るのだろう。
大地さんの深淵を見透かすような琥珀色の瞳はどこか一点に固定
され回答をひたすら待っているという様子。一見すれば何かを忌む
ように睨んでいるともとられかねないほど鋭い。飢えた獅子などで
は甘いと評されんばかりに尖っている。

「大地さんに委ねます」

最初の同意は夏雪さん。目を薄くつむり微笑みかけるように大地
さんに向かうなずく。

「ベリーベリーオーケー!!」

続いて明さん。最早意味を成していない言葉だが同意としてとっていいだろう。笑いながら両手親指を上向きに立てて満面の笑みをなぜか僕に向けてきた。

「いいよんっ」

「賛成です」

麻紀さんと鏡。そして、由愈が眠さが抜けぬまま首を縦に振る。三者三様の行程の仕方があって他意はなくおもしろかった。

「うん」

短いが一番普通の回答をしたのは朝熊さん。居てくれるだけで癒してくれるこの人とは今後仲良くしておきたい。

和湖さんは少し思案げに顎をさすった後、出会ったときと変わらない無機質な笑顔で一回だけ音も立てず消して早くはない動きで首を上から下におろした。

これで八人があっさりと受諾してしまった。

疑心暗鬼なのかもしれないがおかしすぎる。何か頭の隅に引っかかったような不自然な違和感。何処か演技じみている不可解な既視感。何時か裏切られると思っている不愉快な絶望感。

明らかなまでに両方が持っている情報が少なすぎるのに簡素すぎる。淡泊すぎる。

相手が確実に決定に値するだけの何かが裏にある。そう思えて仕方ない。

「選択の余地なし、か……」

時雨さんが何拍かおいてから言った。多数決の原理で逆らいよう

がない。

でも、

何故か、

時雨さんが言ったその言葉は僕に語りかけているように聞こえる。
気のせいだ。

僕にはよくある気のせいだ。

そうやって一生懸命事実から僕は目をそらして榎風だけに目を向
けている。

その時はまだ、

判断するだけの材料なんて僕の手元にこれっぽっちもなかったと
も知らずに。

第21歩：DECIDE（後書き）

長い間更新せずにいて申し訳ありません。

ひたすら短編を書いていました。もしよろしかったらどうぞ。『風
の中でそつとつぶやく。』という小説で一応恋愛です。

第22歩：TRUST（前書き）

2006/02/23（木）にて第一～二十歩の修正が終わりま
したのでよろしかったらどうぞ。同時に勝手ながらサブタイトルも
変更しまし戸惑わせたのを深くお詫びいたします。

第22歩：TRUST

一応ある程度解決したので各々ごとに部屋を出ていく。

まず時雨さんが不機嫌そうに退室し、それにぴたりくつつく様に由愈が出ていった。端から見ると仲の良い兄弟みたいで微笑ましい。

次に麻紀さんと明さんが榎風と葵、茜を連行していった。榎風はかなり反抗しそうな気がしたが案外あっさりついていった。茜と葵も楽しそうで良かった。

その後幾分かして夏雪さんが部屋から出ていく。だが出ていった直後に扉をまた開け鏡を連れ出した。夏雪さんは退室前に大地さんと少し話し何回かうなずいていたが距離があつて何を話しているかは分からなかった。

そして朝熊さん。唯一この家に滞在していない人間故に一言だけ挨拶してから家に帰っていく。

最後に和湖さん。皆が部屋を個人個人で出ていく中、たった一人で手の届く範囲の本棚の本をさつと見てから一冊だけとって出ていった。出ていくときもにつこり笑ったままで音も発さず部屋から消えていった。

また二人になった。

ただ二人になった。

特に何も出来ることが無く取り残された僕と椅子に座ったまま僕と目線を意識せず交わす大地さんだけ。

腰を浮かせないまま目の光を少しだけ強めた大地さんは僕にそつと語りかけてきた。あまりの唐突さに少しだけ驚いたが表面には出さない。

「どうだ、感想は？」

すぐに何のことが分かった。此処の住人たちの異常さについて。平均年齢が二十歳より下であるというのに平気で死を賭した戦いを承諾する。そして何より一体何故その人々たちが集まっているのか。

「確かに外見から見れば戦力にならないかもしれないが」

回答など答える必要ないほどに僕はよまれている。

大地さんは落ち着き払った顔で姿勢をかけらも崩さない。細胞一つ一つが完璧。完全無欠とはこの人に与えられた代名詞なのだろう。

「おまえも麻紀から実感させられたように本当に強い」

力強い眼差しで、

信頼した口調で、

自然体の清音で、

曇る事無き顔で、

断言した。それ以外のことを完膚無きまでに否定。それでも尚、全く動かない。

昨日のことはすでに大地さんの耳に届いているようだ。

それも含めて、経験したことを総て考慮して言えることはたった一つ。

「信用は できません」

どうにも引つかかる。何かが引つかかっていて落ち着かない。

だから僕の答えはこうなったのだ。それで今回の手助けの件を白紙にされるかもしれないと言う危惧はあったが言わないよりは遙かにマシ。

だが返答はあっさりとしていた。

「だろうな」

椅子にさらに深くかけ直し薄くため息をはいた。予想をしてはいたもののそれ以外を期待していた様子。

その状況をすぐに立て直しまた元通り凜とした大地さんに戻る。

「無知に信じれる人間は少ない」

悲しそうに、哀れむように大地さんは目を伏せた。

そんな大地さんは体が受け付けようとしないうちに止めてほしかった。自分がとても愚かに見えて直視できず目をそらした。

「だから」

そのままの格好で紡がれる大地さんと僕を繋ぐ免罪符。世界の総てを許す断罪の言葉。

「もっと知ってほしい、俺たちのことを」

僕が顔を前へと戻すと同時に大地さんも顔を上げた。

交錯する視線が暖かい。和らいだその人の笑顔は別人のようで凄く落ち着く。

どこに行けばいいかという漠然とした不安も、いつまで悲しいこの世界が続くかという途方もない絶望もこの人となら忘れられた。

「じゃあ教えてください」

感情に浸るのはこれぐらいにして許しが出たのなら信用が出来るまで聞こう。

「大地さん　　貴方達は一体何なんですか？」

僕はまどろっこしいことはせず、ストレートに確信を尋ねた。
すると大地さんは困ったように目を伏せ、やがてゆっくり口を開いた。

「俺ではうまく答えられない。たが……」

言葉を切り眉間にしわを寄せる。自分自身が出した回答に未だ迷いがあつて言い出せないらしい。時間はあるのだからゆっくりしてもらっても僕としては構わないのだが。

だが不思議だ。中枢にいると思われる大地さんが喋れない。大地さんは話が下手なわけではないようだし。他に何が理由となりうるだろう。

「和湖に聞くといい。部屋を出てすぐの階段を上ればいるはずだ」

考えは大地さんの言葉により途中で切れた。

和湖さんか。

あまりあの人に好印象を持っていない僕としてはやりずらいが大地さんがいうならば間違いない。

「分かりました」

短く返事をした僕を見て不思議がる大地さん。不思議がる大地さんの方がよほど不思議な気がするがそれは置いておこう。

「何故すぐ返事ができる？」

大地さんの疑問はもつともだ。この人は真実を知って聞いている

のかもしれない。

僕は立ち上がり戸まで行ったところでキザっぽく答える。最後に見栄を張ってみた。

「あなただけは信用してるからですよ」

戸を開けて廊下にでた。返答はない。

僕の目に最後に映るのは肩口まで伸びた長く細微な白髪が頬をくすぐっている大地さんの切なげな表情だった。

第23歩：NO F O U L W O R L D

部屋を出ると一方は行き止まりなのですぐに方向は定まった。

廊下を少しだけ進むと十字路にさしかかる。家の中にこんな交差があるとは何とも豪勢だ。少し迷ったが、最初鏡に連れてきてもらったときも今から此処に来るときも階段なんてなかった。二つとも別方向から来たので残った一つが正解だろう。

長い廊下を中程まで行くと案の定、平屋にはあり得ない木製の階段があつた。途中で折れ曲がつて先の見えない階段。

本当に此処であつているか迷ったが他にありそうもない。とりあえず上がってみれば分かることだ。

一段一段を軽快に上る。規則的に籠もつた音が連なる度に角に近づく。明かりがなく酷く暗い。続く場所から射し込む光さえも。

だがそれは長くは続かなかった。

暗ければ当然視界が無くなる。ならば何かにぶつかるのは当たり前だ。

「うぐつ！」

鼻をぶつけなかったのは幸いだった。何故なら頭のとっぺんをぶつけたから。

不意のことだったのでかなり痛い。頭を押さえながら階段から落ちないように必死になって踏ん張る。

何が起きたのか未だに理解できていないので把握するため『梟騎の瞳』を開いた。普通では集められない光が限界まで吸収・調整されて辺りがよく見えるようになる。最初からこうすれば良かったのだ。それでもあえて使おうと無意識にしていたのは漠然とした嫌悪が僕の中にあるからなのだろう。

頭を押さえていた手を外して激突したのを見るとそれは天井だ

った。脇道らしいものはないのでどうやら間違えたらしい。

引き返そうと思ったがよく見てみると取っ手が付いている。と言うことは開閉可能なだろう。

正解らしい。

とりわけ急ぐ必要もないので壊れたりしないか確認しながら慎重に開く。同時に『梟騎の瞳』を閉じた。おそらくこの先に和湖さんがいるのならば光源があるはず。ならば装備は不要だ。

少しだけ上に向かって押すと天井にしろいひびが入る。着実に開いている証拠。

それを確認したので一気に総て開いた。

「うわぁ……」

思わず漏れた嘆息。

空は雲一つない快晴。深い藍色の空と太陽光が僕を魅了してやまない。

汚れなき離れた世界は例えようもないほどに美しく　とても儚く見えた。

第24歩：TRUTH - 1

外へとつながる階段を上りきるとそこは物干し場だった。病院の屋上のように真つ白いシーツが大量になびいてはいないが八人分の多個性多色の服が風上から風下へと流れる風に乗っていた。それほど風が強い。風上には涼暮の町が簡単に一望できる。道路、学校、商店街全てだ。

その風景を見るためにわざわざ来たわけではない。僕の立っている物干し場にはいない和湖さんを捜さなければ。

物干し場はそのまま屋根へと連なっている。たぶん屋根伝いに行けば会えると思いき、斜めになって段差になっている黒塗りの瓦屋根に飛び乗った。

滑らないよう気を付けながら上に上っていた。理由はあまり無いが何とない直感だけだ。

一番上まで来るとこの家の広さを改めて実感した。そこに何枚の河原が使っているのかわからない。果てなく続く黒き大地。

夜、外から見ると分からなかった人一人分だけ突き出た部屋の屋根に和湖さんはいた。

こちらには気づいていない。焦点の合っていない瞳で街を眺め、風になびく髪を直そうともしない。脱力と言うより放心状態。先程まで見せていた笑顔の片鱗さえない、見ているこちらが悲しくなるような哀愁を帯びた雰囲気。

一人にさせてあげたかった。僕の時間はいくらでも代替がきく。でも和湖さんのこの時間を僕の一存の所為で消え、代替がなければそれは強奪だ。

時間を改めてまた来よう。僕には時間が有り余っているのだから。

「どうしたんですか？」

一瞬耳を疑った。

高く澄んだその声の持ち主が一体誰か分からず振り向く。そこにいたのは初めと変わらない不気味なまでの行為的な薄い笑みを浮かべる和湖さん。

どうやらここに来た時点で和湖さんの大切な時間を奪っていたようだ。

「こっちに來たらどうです？」

和湖さんはよりいっそう笑みを強め首を傾げる。友好的な和湖さんの言葉と態度に偽りはないと判断して和湖さんのところまで移動。和湖さんのいる高い屋根には梯子など無かったのでジャンプして屋根の縁に掴まりよじ登った。迎えてくれたのはやはり笑顔の和湖さん。

「どうしたのですか？こんなところまで」

僕が疲れていないのを確認した為かもう一度同じ質問をされた。こんなところまでと言うところはもっともな質問だ。だからありのままの事実を述べた。説明じみた口調でしゃべっていた。

内容を要約すると、

「大地さんに分からないことは和湖さんに聞け」

と言った内容。

もちろん僕は丁寧語でしゃべった。

僕が喋り終わるや否や和湖さんは苦い笑いをし、黒い髪をかいた。どんなときでもやはり笑っている。だから余計さっきの哀切さが引かかってしょうがない。

「私に話せることなら何でも話すよ」

風が吹いて髪が頬をくすぐる。そんなことが気にならないほどに単純明快な答えが僕にかえされた。

まず最初にここに来た理由。

「何で話すのが大地さんでは駄目なんですか？」

些細なことかもしれないが気になっていた。話し以前の疑問はなくしておきたい。

少しだけ考えた和湖さん。他人のことだけに簡単には答えられないと思いきや回答はちゃんと帰ってきた。

「たぶん大地は知りすぎているのでしょう。私たちの知らない話してはならない真実を」

大地さんの悪口を言っているような気がしてならない。少なくともあまりいい気持ちでは。

和湖さんは風で乱れた髪を手櫛でなおして話を始める。

「私はこの家の中にいる誰よりも古株です。時雨や夏雪、大地や秋宮よりもかなりの差があります。それでも大地より知らないことの方が多い」

悲しみが笑いと混じり不思議な顔を和湖さんはした。それにっられて僕も変な感じがする。

それにしても不可解だ。大地さんや夏雪さん、時雨さんは分かるが榎戸よりも古株ってこの人はいったい何歳なんだ？

僕は先程から変わらない格好でストレートに疑問を尋ねる。

「貴方は一体何時から此処に？」

少し和湖さんは困った。そんなに答えにくいことなのだろうか。決心したかのように笑い顔を払い顔を引き締める和湖さん。真剣な話ならと僕も顔を引き締める。ゆつくりと和湖さんは口を開く。

「私は三十年前から此処にいる」

僕は自分の耳を疑った。

「私は君と同じ人外の生き物 ヴァンパイアなんです」

僕は自分の頭を疑った。

第25步：TRUTH-2

和湖さんが言ったことは剩りに荒唐無稽すぎてなかなか理解が追いつかない。ヴァンパイア？そんなものがこの世に存在するわけ無い。血を吸うだけで生命活動をどうやって維持する。あり得ない。存在し得ない。僕の頭に否定だけがかけ巡る。

それはいつの間にか口に出ていた。未知が現れた科学者のように恐怖におののく子供のように首を振り目を見開いて否定する。

「うん……」

僕と同じ　その言葉の所為で全く違う和湖さんが自分を写す鏡に見えて仕方ない。和湖さんを人間以外と見なしてしまえばそれは自分も完全に認めてしまうことになる。それだけではどうしてもイヤだ。

先程より強く首を振り、ひたすら否定。息が荒くなり、視界がぼやける。

「うそだ……」

過剰な僕の反応に和湖さんが心配の声をかけているようだったが
声の振動さえ感じられない。

白髪をかきむしり振り乱し、見開かれた目をいつの間にかきつく閉じていた。

「うそだ。 うそだ。 うそだ、 うそだ、 うそだ、 うそだ、 うそだ、 うそだ、 う
そだあ !!!」

割れんばかりの絶叫。壊れんばかりの悲鳴。どうしようもないほ

どに僕は壊れそうだった。自分でも分からないほどの過敏な反応の理由が分からない。まるでアレルギーだ。

「目を覚ませ」

パチン、と乾いた音と和湖さんの綺麗な声がようやく僕の耳に届いた。

それが何だったのか僕には分からない。和湖さんの黒い瞳が淡泊に、無機質に僕を睨む。ただそれですごく落ち着き、冷静に混乱した。

「あー、えー、ヴァンパイアってあのヴァンパイア？」

「そうです。吸血鬼のヴァンパイアです」

即答された。

眉間にしわを寄せて頭を抱える僕とまた笑い始めている和湖さんの図はあまりに滑稽だ。誰も見ていないのだから気にする必要はないが、とりあえず突然人が現れては困るのでいつも通りの顔に戻した。まあ、現れる人間がいるとすると榎風。他には……思いつかないや。

ところでヴァンパイアの定義とは何だろう。

血を吸うこと？

光に弱いこと？

銀を嫌うこと？

聖を恐れる事？

死なないこと？

残虐非道な事？

一般的にはこんなものだろうがどれもピンと来ない。だったら一体何が定義なんだ。そもそも人間とそれ以外を区別する定義って？今そんな深いことを考える必要はないだろう。ヴァンパイアの概

要さえ分かればそれで。

聞こうとすると言うまでもなく和湖さんは説明を始めてくれた。

「ヴァンパイアはほぼ人間なんです。それは人間より寿命は長いですが、魔法が使えたり空が飛べたり力が強いわけではないんですよ。中には規定外の逸脱者はいますが……」

驚くほどふつうな感じた。確かに魔法が使えたり力が強かったりする道理はどこにもない。ましてや太陽に当たれば塵となり銀により深い傷を負うなんてこともない。そもそも銀なんて柔らかい金属でどうにかなる分けないか。

「ただ血は吸うことが出来ます。吸わなければ死ぬと言うことはないですが少しだけ寿命が縮みますね。理由は分かりません」

残念そうに和湖さんは顔を伏せた。このことを昔から調べているのかもしれない。それでも分からないならば鬱になるの当たり前だ。

「さ、ヴァンパイアの話はこれぐらいにして質問に答えましょう」

淡い笑みを僕に向ける。果たしてこの笑みの向こう側には何があるのだろうか。幸福、憎悪、樂觀、執着、不拔、哀切、恐怖、侮蔑、合理　僕には分からない。

一つだけ知ったのは僕の感情。最初に和湖さんを見たときに感じた不快さ。あれは和湖さんの笑顔がそうさせたのではない。偽りなく実感したのは途方もない同族嫌悪だった。間違えようがないほどの強い同族嫌悪。

そう、和湖さんは僕と変わらない『人間外』と最初から心の何処かで気づいていたらしい。だけど今は打ち明けないでおこう。
変わらない淡い笑み。

僕が聞きたいのは幾つもある。一息に聞きたい気持ちを抑え僕は口を開く。

「じゃあ、

」

僕は一つ目の質問をする。

返事が返って来るまで時間はそうなかった。

第26歩：TRUTH - 3

「じゃあ」

許しを請うような小声で伏し目がちに尋ねる。この質問で互いに逃げ場を失うことへの罪悪感があつたのかもしれない。それでもどうしても聞きたかった。

「一体……あなた達は何ですか？」

返事が返ってくるまで時間はそう無い。

短い時間だが不安が頭を行き交うには十分すぎた。辛うじて保たれている均衡がずっと続いてほしいと願う僕の拒絶心と真理が知りたいと望む探求心。それさえもすぐに崩れさった。

「ねえ、大河君」

空を仰ぎながら和湖さんは語り始める。

「君は『神』を信じていますか？」

これはまた突拍子もなくファンタジックな話だ。クリスチャンでもない僕からすれば神なんて本気で信じたことは一度もない。そんな雲の上にいるかも分からない寄りかかれるだけの存在概念を信じるぐらいなら近くにいたる榎風を信じていきる。

それにしてもヴァンパイアの和湖さんから神を信じるかなんて言われてもいまいちピンとこない。第一、和湖さんがヴァンパイアだと証明する証拠なんて一つも出されていないのにさらに神なんてど

うなっぺんだよ。

「いいえ、信じてないです」

僕は良くも悪くも正直者だ。こんな場面で嘘をついても意味がないことも分かっている。

「そうでしょうね」

予想通りの模範解答のようで酷くつまらなそうに和湖さんに答えられた。そんな中でも淡い笑顔と空を見上げたその視線は変わらない。

「でもね、大河君」

光の射していない不気味な笑顔のまま僕に切なげな眼差しを投げってきた。逃げ場を無くした小動物と腹を空かせた肉食獣に同時にあったような不思議な感覚。どちらに味方すればよいのか僕には見当もつかない。だから選ばないことにしておいた。

「現在『神』は計二百五十六体確認されています」

これまたかなりの飛躍だ。天から地へ、北極から南極へいくぐらの飛躍。ヴァンパイアもすごかったがここまで来ると途方もない。だが和湖さんの顔は本気。だからと言うわけではないが無視するわけには行かない。

「神っていうと『ゼウス』とか『アポロ』とかですか？」

僕が知っている『神』の名の類と言えばこのくらいだ。偶像や虚

像を信じて生きれるほど生易しい現実を見てきていない。故に知る機会がなかった。

そんなどんな顔をしているのか分からないほど考え込んでしまった僕を軽く笑うようにまだ説明を続ける。

「そんな神話上のものじゃなくて私らと似たような存在だよ。それに一般的に言われてる『神』だけじゃなくて『天使』や『悪魔』、『魔神』も含んでそう呼んでるんだけどね」

和湖さんは薄く笑う。

僕は目線を交わさず聞き入った。

「私達ヴァンパイアと『神』、一緒にしてもいいのですが決定的に違うところがあります」

和湖さんは薄く笑う。

僕は目線を交えて聞き入った。

疑問符を投げかけたかったが首を傾げるだけにしておく。わざわざ水を差して話を妨げる必要を僕は見いだせなかった。

「違うのは子孫の残し方。ヴァンパイアは哺乳類と同じ方法　　つまり性交です」

恥ずかしさも何もなく事務的にいつてのけた和湖さん。何だかこっちが恥ずかしくなってくる。

「対して『神』。あれはもう生物の規定を外れた物だ。子を産まない。かといって不死な訳でもない」

確かにそれは生物として成り立っていない。種が保存できないの

ならそれは種ではなくただの突然変異だ。

「『神』は死の瞬間に輪廻する。記憶も何もかも無くして零から」

それが本当ならば確かに『神』だ。生き物ではない。

すべての完成形である完全なる独立。因果無しで生きる絶対的な孤立。滅びること無い種。

それこそがこの世界における『神』だった。

そんな『神』は身近にいても気づかずに僕は和湖さんの話に聞き入った。

第27歩：TRUTH - 4

『神』とは何か。それは大凡　　と言つか表面上の概念はよくわかった。で、それが何だというのか。

僕が聞いたかったのは『大地さん達は一体何なのか』と言つことだ。もしかして和湖さんにうまく話を逸らされてるのか？

一抹の不安が僕を行動へとかき立てる。

「一体それに何の関係があるんですか。そろそろ本題に入ってください」

「人の話は最後まで聞いてください」

二人の声は静かに響く。舞うように、楽しむように、踊るように、愉しむように、廻りあう言葉。

僕の声に蔽かさや神々しさは微塵もない。あるのは話の続きを知りたがる子供の短絡さだけ。

気持ちだけが急いて仕方ない。時間は有り余るほどあるというのが気持ちだけが倍速で進んでゆく。

「『神』が『零』に戻ると言うことがどういうことか分かってますか？」

責め立てるように聞かれ僕は身を引いた。

「ヒントは『神』とは『人＋』と言つこと」

突然問題を出された。

分かるわけない問題だ。数分前に聞いたことを駆使したところでどうにかなるほど薄っぺらいわけではないはずだ。仮にも『神』な

のだから。

それでも考えるべきであるということぐらい理解している。

人間が『零』の時。それだけで沢山ある。

『零』。例えば、調和。正と負が均一。足して、加えて零になる。人で言うならば『成人』。

『零』。例えば、空洞。内容量が虚偽。器だけ、外見だけの存在。人で言うならば『誕生』。

『零』。例えば 無。持たざる者達。入れず、持たずの完全化。人で言うならば『死者』。

どれが真実なのだろう。調和、空洞、無 それとも『
』

？
結局回答はでない。どれもこれも明確ではなく推測の域を出ない。もしかしたら明快な枠がないのが答えなのだろうか。

最終的に僕はこう答えるしかなかった。

「分かりません」

「そうですか……」

残念そうにため息をついた和湖さん。いつの間にか仮面のように張り付いた笑みははがれ落ち、最初に見たあの崩れ落ちそうな切なげな顔が瞳の奥から垣間見えた気がする。それも一瞬。また恐怖すら感じる微笑。ただそれは僕ではなく空に向かって投げられていた。

「正解はとても簡単」

和湖さんは目線をあわせず空に語りかけた。

「赤子に戻る。たったそれだけのシンプルな出来事です」

語り辛そうに、ノドの奥につつかえているかのように、悲しげに

和湖さんは言葉を連ねた。

答えはまだ、僕の中には何一つ返ってきていない。

第28歩：TRUTH - 5

何で和湖さんはあんなにもつらそうに言葉を並べるのだろう。

僕はただ答えが知りたかったただけなのに。

僕はただ真実が知りたかったただけなのに。

そんな顔で返されたら聞けなくなる。答えと真実を理解してはいけない気がしてくる。

笑いの仮面をかぶって喋って欲しい。それが答えを知りたがっている僕の免罪符なのだから。和湖さんの笑顔が怖かった訳じゃない。和湖さんの笑顔が無くなる時が一番怖いと本能的に理解していた。理性的に誤認していただけ。

だから……笑っていて和湖さん。

そんな小さな僕の願いは脆くも崩れた。

和湖さんは笑わない。顔の断片さえも、顔の欠片さえも顔の緩みなき無表情で語る。

「『神』は人間と変わりません」

話を聞くだけの余裕が僕から欠落し始めた。

今は和湖さんの笑顔が欲しい。なぜ笑ってくれないんですか。誰でもいいから教えてください。

「これで分かりますね」

和湖さんが僕の間を見ながら語る。

僕は和湖さんの目を見ながら聴く。

木枯らしの吹く冬の日、緑の匂いがない空気、日の当たる黒塗りの瓦の上で僕らは初めてちゃんと視線を交わした。

目から伝わる口よりも鋭利でストレートな感情。

和湖さんの目は悲しげに口ではなすことを拒んでいる。

答えは自分で察するしかないようだ。和湖さんの笑顔のためにも、自分自身の安定のためにも真理は自分で模索し立証するしかない。前のようにネガティブではなく、もっとポジティブに真実を編み上げよう。

世界には『神』がいる。

『神』は輪廻する。

輪廻で『零』になる。

『零』は赤子になること。

『神』は人間の類似形。

導き出される答えは一つ。

繋いでいけばどうとでもなる。鎖のようにいつかどこかにたどり着くはず。僕がある居ているのは螺旋階段ではなく人よりも少しでこぼこしていて曲がった道なだけだ。

僕はひたすら思考する。

『神』が輪廻し、赤ちゃんになる。それは人間も同じ。人間の場合にはただ両親がいて、場合によっては兄弟がいる。たったそれだけの違い。

それだけ？

類似形なのだからそれ以外は同一と仮定しよう。ならば……そういうことか。

僕は思わず気づき目を見開いた。そして、自分の愚鈍さに失望した。

それを察し和湖さんは答えを綺麗な声で言葉を結った。

「私たちは『零』になった『神』を育てる為の集団」

僕の考えた回答は正解のようだ。

和湖さんは少しだけ付け加えるように囁く。

「私らは神々の死に立ち会い、生と向き合う。故に付いた名は『神々の墓守』」

たったそれだけいって互いに口を閉じた。

第29歩：TRUTH - 6

『神々の墓守』

通称『フラグメント（断片）』。『ベルワナ』と並ぶ、いやそれ以上の實力を持つとされた最も権威のある魔術集団。知らない人間などおそらくこの世にいない。その割には目立った活動もしていない不思議な人々。分かっているのは構成員数人の二つ名のみ。

最強の騎士『理由なき剣』。

役目無しの『断罪の血族』。

人形師『フェイカー』。

堕天使『ファースト』。

『フラグメント』の宗主にして、『神々の墓守』が有名になった理由、現存する数少ない魔法使い『ギフト』。

世間に知られている情報といえばその程度だ。

その『神々の墓守』がこの人たちだというのが。あり得ない。年齢的にも人数的にも。

「それ、本当ですか？」

「そんな疑いのまなざしで見ないでも……」

話を終えた和湖さんはまた笑顔を作ってくれた。もう恐怖は感じない。と言うより恐怖を感じるような仮面としての笑顔がはがれ落ち、本当に自然な笑顔になった所為だろう。

さっきのが仕事をしている和湖さんなら、これが素の和湖さんだ。ところで和湖さんの二つ名は何だろう。騎士って感じじゃないし、一番古株なのに役目がないはずもない。人形師っていうよりは、ポーカーフェイスな役者だ。堕天使ならば人ではないしシツクリくる。もしかしたら知られていない名なのかも知れない。

気になったので僕は当然のように聞いてみた。良くも悪くもスト

レートに。

「和湖さんって堕天使ですか？」

ポカンとされたよ。何かすごく痛いキャラみたいですからやめてほしい。

「いや、私はさっき言ったとおりヴァンパイアですよ」

そりゃそうだ。

テレパスでもない限り話を通じるはずがない。確かにこんなことを前触れなく聞けば痛いキャラだ。

と言うわけで訂正。

「あ、そうじゃなくて、和湖さんの二つ名は堕天使『ファースト』ですか？」

「いいえ、ちがいますよ」

即答された。しかも否定。

そして、淡い笑みで続けた。

「さ、私が言うのはこれで終わりです。後は夏雪さんや時雨君にでも聞いてください。私はここで本を読みますから」

急かすように屋根をたたされ、黒塗りの瓦屋根を歩いて半ば無理矢理家に戻された。

まだ太陽低く、空は青い。

結局聞けたのは『神々の墓守』のことだけ。まあ、それが目的だったからいいか。

次は誰から真実を聞こうか。

閑話1歩：ON THE NEMELSS ROAD（前書き）

ここで一端、閑話（無駄話）を挟みたいと思います。あらずじに『放浪記』と書きつつ全く放浪してないので放浪してた時代の話

……

短編調に仕上げたので全く本編と関係ありません。ただ単に最近説明ばかりでつまらなかったのでちょっと休憩にと思ったただけですから、読みとばしてもらっても結構です。

それでは、『名も無き道音上で』の話を楽しんでもいただけたら光栄です。

閑話1歩：ON THE NEMELSS ROAD

青々とした草原を二分するように通った茶色く乾いた道を一台のサイドカー付きバイクが走っていた。紺碧の空の下にもうもうと土埃と排気ガスを立ち上らせ、我が物顔で疾走する漆黒のバイク。どうせ他の車両など通りはしないのだからそんなことはちっぽけな出来事だ。

運転手である妙齡の美女は秋宮 榎風という。当然のごとくノーヘルで黒く艶のある長髪を無造作に靡かせて走る。風避けの為にゴーグルだけはつけていた。

サイドカーには幼い少年がちよこんと座っている。白い髪の上からしっかりとヘルメットをかぶり膝の上に置かれた荷物が飛ばないよう必死に押さえているその姿は何とも微笑ましい。

少年に名前は無い。

別に誘拐されたわけでも、『我が輩は猫である』なんていう見れば分かるようなことを言う猫な訳でもない。単純に人外の者として榎風に作られ、固定した名前を未だに付けてもらえてないだけだ。そんな二人が名も無き道上をひたすら走っていた。たった二人きりで。

旅行ではなくただそうしたいからそうしているだけのお気楽な紀行。

「なあ、ユキ」

突然、榎風が口を開いて少年に語りかけた。どうやら今日の少年の名前は『ユキ』らしい。

とりあえず、ユキは返事をした。

「何ですか？」

風が強くて喋りづらい。その所為で少しだけ不機嫌に言葉を連ねた。

「おりよ？どうしたんだ、ユキ？いつもなら『どうして今日の名前はユキなんですか』ってそのプリティーな声で聞いてくるのに」

すごく残念そうだ。結局のところ、理由が聞いてほしいらしい。何かと榎風は人騒がせな人だった。それはもうこれ以上無いくらいに。例えば いや、これを話すのはまたの機会になるだろう。ユキは無精無精ながらもちゃんと聞いてあげた。何というかとてもなくお人好しだ。

「何で今日の名前はユキなんですか？」

ふふん、と鼻を鳴らし榎風はこっちを向いた。
まっすぐな道だし大丈夫だろう。

「それはおまえの髪が真っ白で雪みたいに綺麗だからさ」

榎風は断言した。そんなに自信を持たれて言われるとユキは反論する気はなくなるし、脱力するしかなかった。

「で、それでどうしたんですか？名前呼んだからには何か用事なんでしょう？」

「そりゃあたり前じゃないか」

こっちに向いたままずっとはなし続ける榎風。
そろそろ怖くなってきたユキは前を向くように言おうとしたがそんなことはお構いなしに榎風は言葉を重ね続ける。

「さあ！私にも『あなたはなぜ榎風なの』って訊くんだ！」

もう全くもって訳が分からない。ひたすらユキは混乱した。だがそれでは何も解決しないと気づいた。それに榎風をこのまま放置するには余りに可哀想すぎる。

「あなたはなぜ榎風なの」

妥協案として無関心な声のまま、無表情に榎風の要求に応えることにした。

それでも榎風には十分な反応だ。もの凄くうれしそうな顔で、

「それはお前がお前だからさ！」

と声を張り上げた。

こつちを向き、至極の笑みのままハンドルから右手を離し、親指を立てている榎風。返す言葉が見つからず、かといって取り繕うこともできなかったユキ。

二人の間に流れる永久のような沈黙。この世に二人だけにされたかのようなそんな感じだ。バイクのけたたましいエンジン音も二人の体に裂かれている風の音も沈黙の中では完全なる無意味の存在。むしろ引き立てる道具になっていた。

沈黙は終わらない。空の匂いも、土の薫りも、草木の色も、風の味も感じられなかった。

だが、沈黙と静寂、法と悪は得てして破られる。昔からそう決まっているのだ。

「これから何処へ行くんですか？」

破ったのはユキ。

歓喜した声は上げなかったが喜んだのは榎風。顔がこの上なくやけている。基本的に榎風は沈黙を嫌い、少年との会話をこの上なく愛す。嫌いな物が消え、好きな物に変わったのだ。喜ばずに入れまい。特にこの榎風ならば。

子供のように無邪気に笑い、悪事を企まず、直情的であり、それらを超越した部分で美麗。それがユキが、少年が思い描いている榎風だった。

少年の疑問に榎風はストレートに答えた。いや、答えようとして口を開きながらユキに目をやった瞬間の出来事だった。だんだんバイクが減速し始めた。

ユキと榎風は何が起こったか把握できず、バイクが止まるのを待つ。アクセルは入っているのにノロノロとしか動かず、最終的には動いているのか分からない程までになってから止まった。

「ありや？エンジントラブルでもないし……」

バイクから降り、ゴーグルをはずしてから点検を始めた榎風は不思議そうに顎に手を当て、首を傾げた。

ユキは手伝おうと思い、膝の上から荷物を下ろして立ち上がる。そのとき何気なしに見たハンドルの前についているメーターを見てユキは頭を抱えた。

「榎風いー、ガス欠みたい」

本当に漫画みたいなオチだ。リアルにこんな事をしないでほしい。とりあえず、ユキはバイクから降りた。いつまでも動かないサイドカーに乗っていてもむなしいだけだと悟ったからだ。

「これからどうするんですか？」

行き場の無くなった声が榎風の耳に届く。

榎風は少し考えるような顔つきをして目をつむった。そして、すぐ意を決したように言い放つ。

「バイクは放置して歩く！」

何とも物欲のない上、早い決断だろう。だが、ユキはそれをすぐに受け入れたように元気よく、はい、とだけ返事をした。

二人で荷物を下ろして肩に背負う。

なんだかとても辛い状況のはずなのに二人とも明るく笑っていた。そうこれが日常茶飯事であるからこそその余裕。楽しむだけの余裕があった。

少年は榎風にもう一度尋ねる。

「これから何処に行くんですか？」

榎風は少年に至極の笑みで答えた。

「道の先に見えたところだ！」

二人で茶色の道をゆっくり歩いた。この旅がこのままずっと死ぬまで続くお気楽紀行になると信じて。

これは大地さん達にあうずっと前の話。

第30歩：VICIOUS ANGEL - 1

和湖さんから離れ、広い家の中を行く宛もなく僕はさまよっていた。

ここがかの有名な『神々の墓守』本拠地であると分かった以上、勝手な行動は慎むべきなのだが、やることもない。結果、こうして言っても問題なさそうな道を慎重に歩いているわけだ。

それにしても無駄なまでに広い。榎風だったら当然のように迷子になる。探すのも大変なのに迷惑きわまり無い。と言いつつも、僕自身、今たっている場所が分からなくなってきた。人にいえる立場じゃなさそうだ。

これ以上闇雲に動けば本当に迷子になる。

そう思い、僕はきびずを返してもと来た道を戻る。さすがの僕もそれぐらいの記憶力はあった。

まあ、おそらくここら辺でお約束ならば誰かに会うところだろう。歩合は榎風八割、その他二割。榎風八割のうち、迷子になっている確率は95%ぐらいだ。つまり、四分の三以上の確率で迷子になった榎風と遭遇することになる。恐ろしい。

「あら、大河君。こんな所でどうしたんですか？」

お約束とは必然で起きることらしい。この世には何とも複雑奇怪で戦々恐々とするセオリーがあるのだろうか。

起きてしまったことは仕方ない。それに二割の出来事が起きたのだ。分の悪い賭に勝ったようなもの。喜ばしい。

だが、あまり気に入らない。筋書き通りなのはあまり好ましくない。

かと言って声を無視するわけにもいかず、振り向いた。そこにいたのは夏雪さんだった。

「和湖さんに話を聞いた後、行き先もなかったんで……」

僕は率直に現状を言った。

そんな僕に夏雪さんは柔和に笑いかけながら、ゆっくりと話しかける。

「なら少し私について来てくれませんか？」

僕にとっては願ってもない提案だ。

それに二つ名についても聞けるかもしれないし、僕は喜んで首肯した。

今のところ僕が信用がおけると、判断したのは大地さんと和湖さんのみ。この二人だってほとんど仮にと言った感じである。当然、夏雪さんはまだ信用していない。それでもついでにこうと思ったのは二つ名の事、和湖さんの言葉、現在暇という事実、いろいろ理由はある。

でも一番大きかったのは、まだ仕掛けてくるに早すぎると踏んでいるからだ。少なくとも後三日、長くとも後一月は大丈夫だ。

ところで僕には一つ、とても気になることがあるのだ。

それはもう、ついさっきから頭について離れず、もの凄く困っている。

「あの……夏雪さん」

「はい、なんですか？」

うわ、なんかとても聞きづらいきらびやかと言つか艶やかと言つか、とにかく凄く美しい笑顔で返された。どうしよう、僕の行き場の無くなった質問。

やはり聞くのは止めるべきなのだろうか。なんかそれはそれで癢

に障る。

それに僕の知的欲求は中途半端に強いのだ。負けるわけにはいかない。

「何でジャージ着てるんですか？朝は着物着てたのに」

凄く気になる物は気になるのだ。

第一印象は高そうな着物に身を包み、髪がさらりとなびく清楚なお嬢様が、突然ジャージで身を固め、髪をおそらく邪魔になると言う理由だけで適当に結い上げられた姿で目の前に現れたら誰だって気になる。

やっぱり聞かなければ良かったのかもしれない。だが、僕は聞いたことに悔いはない。欲求に忠実に生きたのだから。

「来れば分かりますよ」

夏雪さんはそれだけしか答えなかった。和湖さんとは別種のナチュラルな微笑のままで歩きだした。

少し思っただが、ここににいる人たちって何かと話をじらす。回りくどい。

そんなことはそつと心の隅に置いて夏雪さんの後ろを静かについていった。

第31歩：VICIOUS ANGEL - 2

いや、この所驚きの連続だ。世の中、仰天することはまだまだ沢山あると実感した。

何せ、家の中に広々とした道場があるのだ。離れなどに作ればいいのにわざわざ家の中に作るなんて何とも無駄というか、豪勢というか。もしかすると、探せば屋内プールとかテニスコートとかあるかもしれない。

道場があるという事実を知っていると言うことはそこに一度行ったことがあるから。でも今回初めてこの地にやってきた。つまり、今現在道場にいるわけ。

夏雪さんがジャージを着ていたのも納得できる。これから道場に行くのに着物を着ている方がどう考えてもいびつだ。

ところで夏雪さんについてきたのは良いが、いったい何を始めるのだろうか。道場に来たからにはやることなんてある程度限られてはくる。だけど、それでも僕は気になって仕方なかった。

「あの……」

僕はできるだけ響かぬよう低い声で夏雪さんに話しかけた。努力とは裏腹に静かな道場に声は響いたが、夏雪さんの耳にはしっかりと届いたらしく、こちらを振り返って一言だけ形の整った唇で僕に喋りかけた。

「そこで少しだけ待っていてくださいね」

それだけ言って夏雪さんは奥にある倉庫らしき部屋に入っていくた。

この場所を見ているとまるで学校の体育館だと言う印象がわく。

用具庫まで完備と来たら本当に言うことなしだ。

「お待たせしました」

幾秒かして夏雪さんが戻ってきた。

「はい、どうぞ」

これまた夏雪さんにそぐわない物を持って。

夏雪さんが持ってきて、差し出したのは木刀。差し出した反対の手には木の長い棒を持っている。僕のみ間違いでなければあれは棒術に使う練習用の奴だ。

「これで何をしろと？」

思わずタメ口を聞いてしまう程、僕は対応に困ってしまった。とりあえず木刀を受け取ったのは良いもののそれを眺めるしかできず、僕は固まる。

そんな僕をみて夏雪さんは笑いながら当然のように言った。

「手合わせしましょう。お互いの実力をみるために」

所々夏雪さんって榎風さんに似ている気がしてきた。容姿的にも髪が綺麗だし、根がしっかりしてそうなところとか特に。

「大河君は私を信用してないみたいですから。私も弱い人に背中を任せたくありませんから」

ぱっさり言われた。ものすごくきっぱり言われた。もしかしたら、榎風よりキツいかもれない。それでも理にかな

ってるし手つとり早い。

初めにあったときは清楚で大和撫子というイメージを受けたが、今やものすごいがっちりした感じた。特にさっきの発言は偏見かもしれないが、かなり男っぽい。

「それじゃあ、始めましょうか」

強制のようだ。

夏雪さんは棒を構え、僕は木刀の切っ先を棒と交えた。

僕の中では久しぶりのリアルな戦闘。怪我のリハビリもかねて僕は本気になることにした。

第32歩：VICIOUS ANGEL - 3

偽りの殺意の矛先を互いの体に向けたまま、僕たちはそのまま立ち続けた。

そうしていると一つ気になることに気付いた。

夏雪さんは僕との信頼を築くためこうして武器を交えると言った。それに対しては何の依存もないし、大いに賛成だ。僕が疑問に思っただのは夏雪さんのあの言葉。

「弱い人に背中には任せたくありませんから」

この言葉から推測するに前線で戦うつもりらしい。男女差別をすすめるつもりは微塵もないが、何とか以外だ。

それに今から剣を僕と交えようとしているんだ。それなりの自信と能力があるんだろう。

閑話休題。

始まりの一太刀がもうすぐ交錯するかもしれない。いつまでも無駄な考えを頭に残しては夏雪さんに失礼だ。

それに麻紀さんの二の舞になるのだけは嫌だし。あれは結構な屈辱だった。

いけない。言ったそばからまた話がそれた。集中力の無さは僕の欠点らしい。

出来る限り集中力を鋭利化。針のように研ぎすまし、夏雪さんに突き刺す。

木刀を握る手に汗がにじむ。

始まりは一瞬。

僕はいつも通り右手一本で木刀を振るった。真剣より若干軽いが

問題ない。

狙ったのは右脇腹。しっかりと足を踏み込み、五割の力で打ち込む。

夏雪さんは刀の動きを見た後に先の方で悠々と止めた。お互いそれぐらい予見している。

だから、追撃の用意もしっかりしていた。右足を軸にして左足の踵で頭を狙う回し蹴り。

木刀の攻撃方向とは逆回転の攻撃だったが意表は十分につけた。手に持っているものが武器ではない。相手を害するものが武器である。

そう仮定したならば、僕の体は武器で出来ている。

弧を描くような軌道で夏雪さんの頭に迫った踵はあっさりと止められた。夏雪さんは素早い判断で片手を棒から離し、うまく力を殺され、受け止められてしまった。

まだ終わりじゃない。僕は捕まれた左足を軸にして回転。左足で頭を狙う。体は完全に宙に浮き、不安定な蹴りだったが入るだけの確信があった。夏雪さんの両手はしっかりと塞がっているし。

なるだけ早く回れるよう体を小さくし、狙いを研ぎすます。間違はなく入った、そう思ったのが大きな間違いだった。

夏雪さんは片手でもっていた棒の角度を少しだけ変えた。たったそれだけであった。棒の先端を僕の蹴りの軌道にあわせてただけ。必中の一撃だと思っていたその蹴りを赤子の手を捻るより簡単に止められた。

それは動揺するには十分すぎる材料。次の行動が全くとれない。思考が完全に停止してしまった。

そんな僕をいともたやすく片手で投げ下ろした。

受け身さえ取れず、顔面から落ちた。呻く声さえも上げられなかった。それほどの圧倒的な絶対差。

それを見せつけられて終わりだった。

所詮はただの紛い物でしかない武器の体。磨きあげられた本物に

は勝てるはずが無いのだ。

僕は一人倒れているしかやる事がなかった。出来ることはそれだけしかなかったの間違いか。

とこしえの沈黙が道場に流れている気がする。

やっぱり、どうあっても上には勝てない。弱いものはどうあっても所詮弱い。嘘勢は所詮張りぼてであり、押せば脆く崩れる。

……待て。

いつからだよ。いつから弱いと決まった。いつからそんな『ちつぽけな理由』で言い訳するようになった。とんだお笑い草だ。勝手な理論を作り上げて納得してるだけだろ。

いや、止めた。こんな無駄な考え止めた。言い訳するのも、それを否定するのも全くの無駄だ。

閑話休題。

もう少しだけ夏雪さんと戦ってみたくなつた。無駄な考え抜きで叩きつけられた衝撃で少しだけ体に痛みがあるが全く問題ない。今までののはすべてリセット。

ニューゲーム スタート。

わざわざ手足を使う必要など最初から無かつたのだ。むしろ使つたのが失敗。初撃をゆるめに打ち、引こうとしなかつたならリーチの関係上、足がくることぐらい誰でも分かることだ。それに初めなのだから意表を突こうとしてくるのは常識。それを逆手に取れば造作もないことだ。

追撃にも問題はある。今回はただの棒だつたからよかつたものの槍や矛ならば足が串刺しだった。武器を持っている人間に素手で挑むなんて愚かにも程がある。

だから今度は剣技のみで戦う。

新たに剣を構えなおした僕を見て、夏雪さんも棒を構えなおした。夏雪さんは下段に構えている。攻撃してきたところ払い上げて、腹をつくつてのが簡単な戦法だろう。だが、さっきのを見て分かつた。夏雪さんならもっと他に色々仕掛けてくる。

警戒のために右半身を前に出し、的になる部分を小さくした。それは意味の内容に見えて大事なこと。

相手に踏み込みの位置を見せないようにすり足で移動。構えた棒を軽く払い、間合いを出来るだけ短くする。相手の方がリーチが長いのでから離れれば不利になる。

大きく振り上げれば隙をつかれ、小さく振り上げればダメージを与えられない。必要なのは最小限の動作で最大限のダメージを与えること。

僕はそれに突きを選んだ。

狙うのは的の大きい胸周辺。生物ならばそこに核がある。うまく突けば結果は死。

夏雪さんは慌てず騒がず突きの軌道を棒で払い、逸らした。ここで足を使い、追撃すればさつきと同じだ。それは全くの無意味な行動。

だから僕は間合いをつめるため、体当たりをした。棒は何処でも攻撃できる代わりに、密接した状態では不利になる。この完全密接した間合いでは棒はふるえない。

そんなことは夏雪さんの方が分かっているはずだ。おそらく後ろに飛んで間合いを取り、自分の得意な距離をとるはずだ。そこへ追撃を重ねればどうにかなるはず。

「!？」

読み誤った。

逆に体当たりし返され、脇をすり抜けられた。行動が巧すぎる。すり抜け際、夏雪さんは僕の耳元でそつと笑いを含んだ声で、

「読み合いでは私には勝てませんよ」

とつぶやいた。

少しだけムカつくけど、どうやらその通りらしい。
もっと別の方法を僕は探さなければならなかった。

第33歩：VICIOUS ANGEL - END OF DREAM

僕は木刀をしっかりと両手で持ち、何度目か分からないが夏雪さんへと構え直した。武術を習っていない僕に型なんて無い。ただ、実践のみで培ってきたやりやすい体勢。それは日本剣道中段の構えに類似してはいるものの、やはりどこか見た目に違和感がある。そんな不安定な構えでいいのかは疑問だが、他の答えを今の所、僕は持ちあわせていない。夏雪さんに勝つためには実践の勘に頼るのみ。後は己の才能の片鱗を信じ、喰らいついていくだけ。

「　　っ！！」

音にならない声で力を込め、まっすぐ夏雪さんの脳に向けて振り下ろす。

当然夏雪さんは棒を使って受けようとする。

が、すぐに棒を斜めにし、流す体勢へと作り替えた。当然の事。先ほどと違って僕は十割以上の力を持って、夏雪さんに向けて攻撃をたたき込んでいる。それをともに木の棒ごときで受けれるはずもない。先ほどの五割程度の力ならまだしも、そんなことをすれば棒ごと折れる。

その点、夏雪さんの切っ先のスピードを確認した動態視力と冷静な判断力には恐れ入る。読み合いで勝とうなんて笑止千万だ、こりや。

流された木刀の勢いを殺さぬようしなやかに曲線を描きながら脇腹を斜め下からねらう。ただ、先程より威力は若干落ちる。

夏雪さんはバックステップをし、追撃を避ける為、棒をふるった。しかも的確に僕の頭を狙ってくる。避けるほどの威力ではなかった。ので木刀で弾いた。

気づいたときにはもう遅い。夏雪さんが意味のない攻撃をするは

ず無かった。追撃されないなんて理由は小さすぎて話にならない。防御と攻撃の同時化、それが戦闘の最終形態。それを夏雪さんはやってのけた。

棒の特性　どの部分であっても攻防どちらも使用可能ということ。忘れていたではすまされない事実。

弾かれた棒の先とは反対側の先で肩を狙われた。木刀は間に合わない。

屈んで辛うじて避けた。本当に危ない。何せ僕の白い髪にかすったぐらいだ。夏雪さん、今の本気だったし。当たってたら失神してたよ、間違いない。

ほんと、容赦ない。

低姿勢のままで後ろに引く。

だが、次の瞬間には夏雪さんの殺気に感応されるかのように僕は前へと踏み込んだ。

ほぼ無心に。

ほぼ無我に。

ほぼ狂気に。

体と心が離れて。

心と体が離れて。

そう、

狂おしいほどの感覚で夏雪さんに切りかかっていた。

i n s i d e

一体、僕はどんな目をしているのだろう。

狂気に満ちた紅い目？

慈愛に満ちた蒼い目？

空虚に満ちた白い目？

恐怖に満ちた黒い目？

そんな簡単なことでさえ分からない。解らない。判らない。

まるで誰かの見ている映像を見ているかのように無感覚。気持ち悪い浮遊感。

手に木刀を握っているはずなのに手のひらの感覚はない。そのくせ、握っている意識は確かにある。更に意志にあらがうかのようにどこからともなく迸る電撃。痛みによる雁字搦めの拘束。鎖。鎖。鎖。

そう、呪いの鎖。

鋼鉄の刃が切れぬよう鞘ではなく、鎖を巻かれた。僕はそんな気分だった。

一体、

そういえば、一体

今いる僕は僕ではなく、誰なのだろう？

outside

高速で降りおろされる木製の刃。帯状に広がる茶色い閃光。

かん、と言う乾いた優しい木の音などその場に響きはしない。あるのは風を切る音と時々鳴る木々の擦れる声。

一斬、一衝撃がすべて必殺。

繰り返される圧倒的な暴力。

止まることを知らない破壊。

終わらなく続ける終焉。

誰もが言うだろう。素人目にも判る。これは既に手合わせの域ではない。完全な殺し合い。

対峙し合うのは白銀の髪の少年と黒瞳黒長髪の容姿端麗な女。演劇の殺陣のように踊るような軽快さもなければ、武道のような真剣さも二人にはない。そこにあるのは喉が渇く冷めきった熱。

二人を例えるならば　それは凍り付いた炎。

少年は切りかかる。

少年は女へと切りかかる。

少年は縦横無尽に破壊する。

少年は女を縦横無尽に破壊する。

女の存在を否定するように、

女の存在を拒否するように、

ひたすら斬った。

反撃されれば崩れてしまう、 つついてしまえば壊れてしまう

そんな脆く弱い感情。

少年は正に今、 弛んだ縄で綱渡りをしていた。

進んだ先に栄光などない。

戻った後に汚名などない。

そんなことぐらい少年にも分かっている。むしろ、他人より結末をより深く、 広く知っている。

それでも、

それでもなお、

少年は進む。

その姿は荒々しくも猛々しく、 不変に不規則に、 蠢き迫る。

少年は蹂躪する。

木刀の切っ先だけで女を檻の中に少年は閉じこめた。 もう、逃げ場など存在しない。

少年は蹂躪する。

少年はあえて女の得物を狙い、 弾くように切り上げた。 殆ど勝負などついているが誰も止めない。 誰も止められない。

少年は蹂躪する。

女は少年から与えられた大破壊でさえ、その細い腕で踏みとどまった。でも、もう無理。手先の感覚もはや途絶えた。もしかしたら折れているかもしれない。

少年は蹂躪する。

女は両手で棒を横にかかげた体勢。ぴくりとも動かない。少年はあえて木刀を逆手になるよう半回転させた。少年にそんな癖はない。ただ、今だけ不規則にリズムを刻んでいるだけ。

少年は蹂躪する。

迷いなく上から下へ下ろされる殺意^{やいば}。が、少年は女の体ではなく棒をねらった。

少年は蹂躪する。

二つが衝突した。
二つとも折れた。

少年は 蹂躪する。

衝撃で宙を舞う刃などに見向きもせず、女を押し倒した。女はされるがまま。抵抗する力も気力も残ってない。

少年は

少年は折れてとげとなった木刀を両手で持ち、女の喉元に構える。

少年は壊した。

棘を女の喉に降り下ろした。

少年は壊そうとした。

降り下ろそうとした。

少年は壊せなかった。

降りおろせなかった。

少年が壊れた。

電池切れ。

時間終了。

少年早すぎた。

何をするにも早すぎた。

リセット。

終わったテレビの電源は消えた。

【This is bad image .
It's enduring memories .

B
u
t

n
o

r
e
m
i
n
d
.

第34歩：FACE - 1

夢を 見ていた。

透き通ったように綺麗な、日溜まりのように暖かな、それでいてナイフのように冷たい夢。

夢だから凄く臆気だけど内容はしっかりと覚えている。

そう、それは

それは時代錯誤な騎士と姫君の話。

断片的な夢ではあった。話のつながりが分からない部分も無数に。おそらく時代は中世辺り、場所はよく分からないがヨーロッパ系の人がいた記憶がある。

石で囲まれた部屋の中、幾人かの人と話した。

いたのはそう、城の中だ。

交わした言葉の記憶は重要でなかった所為か、かなり薄い。

夢は途切れ途切れ進む。

そしていつの間にか、石の世界は炎の世界に変わっていた。

周りの世界が、城が、絨毯が、調度品が、家具が、人が燃える。

それでも立ち止まっていた。

夢の中で動けず、ある女性の前でひたすら立ち尽くす。

夢の中にも時々でてきた姫君。

でも彼女はいつものような華美な服も、^{ドレス}豪華な王冠^{クラウン}も付けていない、

町娘のような軽装。それでも彼女は 姫は笑っていた。絶望の欠片も感じさせない満面の笑みで笑っていた。そんな彼女と炎の中心で少しだけ話す。音は聞き取れなかったが、とても嬉しかった。そして、二人しかない部屋に誰か、殺意の固まりみたいの人が入ってきて

そこで夢は終わった。

話の大筋を話すとこんなもの。もの凄く在り来たりな安っぽいストーリー展開。

夢は起きればすぐに忘れてしまう。もしくは、夢を見たことさえ覚えていない。それでも今、考えるほど印象に残っている。

理由は簡単だった。

僕は夢の中で騎士に自分を無意識に重ねてみていた。

そして　姫君に榎風を重ねてみていた。姫君の向こう側に榎風がいた。

これは僕が心の底で思っている榎風との終焉なのかもしれない。こんな風に誰もいない何処かで炎に巻かれながら、榎風のため戦って、そして二人で死んでいく。

そんなカラストロフが一番ベストな終幕の迎え方なのかもしれない。たった一つだけの冴えない終わり方。

それでも、

それでも僕は、

榎風と終わりが迎えられるなら、それでいいと思ったんだ。

いいと思えたんだ。

体中痛かった。

骨も、肉も、目も、鼻も、耳も、口も、頭も、腕も、足も、関節も、内蔵も、心臓も、細胞全てが痛かった。

心中痛かった。

憤怒も、快樂も、哀切も、愉悅も、絶望も、歡喜も、墮落も、慶福も、罪惡も、良貴も、感覺全てが痛かった。

それでも僕は生きていたい。

情性になろうと、形振り構わず生きていたい。

だから僕は、泥になった神経と鉄になった身体を繋ぎあわせて、重い瞼を開いた。同時に感覺も鋭利になる。

背中には冷たい木の感觸。

夢から覚めた僕はフローリングの上に寝そべっていた。仰向けで。

永いこと目を瞑っていて目に光がしみると思ったが、どうやらちようど陰のようで大した抵抗も拒絶もなかった。それでも、疲れている所為か焦点がなかなか合わない。

世界はあまりいい色に見えない。

赤くもなく、青くもなく、白くもなく、不健康そうに黒ずんだ薄橙色だった。

いい夢見た後はどうも、現実では良いことが起きないのはセオリーらしい。

ピントのあった僕の水晶体ひんみに映ったのは僕の一番苦手な人だった。右手をビシッと擬音語がつきそうな勢いであげて口を出したその人。

「よう」

その人、希崎 時雨さんは笑って、めっちゃめっちゃフレンドリーに挨拶された。

正直、ギャップのありすぎで気持ちわりい……。せめて目元のクマを無くしてからだろ、その挨拶。なんてことは心の中に仕舞っておこう。

仕舞ったのはいいが一体このテンポにどう対応しろというのか。とりあえず、

「……よう」

とだけ言っておいた。

「何だテメエ、いきなり馴れ慣れしいんだよ」

ひでえ……。

即答で拒否られたよ。あんまりだろ、自分で言っというて。

ちょうど横から僕の顔の上にしゃがんで顔を出してる所為で起きあがれないし、とにかく凄く邪魔。

「すいませんでした……」

「なに謝ってんだ、キモいな」

もう訳わかんねえ……。

誰か助けてください、お願いします。

「もう一度聞こう。俺に言うことは？」

一体、一回目はいつあったんだよ。

そんな在り来たりなボケと突っ込みは置いておこう。うん、それが得策だ。

「一遍、死んでください」

「おう、わかった。ここは日本人らしく切腹か、はたまた自由を愛する意を込めて投身自殺　　って嫌じゃ、ボケッ！」

ノリツツコミだ。月並みなノリツツコミだ。それと切腹は日本人ぽくないし、投身に自由の意味は込められてないですよ。

と言うか、何でここで漫才してんだろ。激しく疑問だ。

僕はまた目を閉じて考える。

道場で夏雪さんと手合わせを始めたのは覚えている。負けて、立って、もう一度負けて　　。はあ……、また記憶が曖昧だ。ちぐはぐで継ぎ接ぎだらけの上、穴だらけで矛盾しまくってる。

マジで欠陥かもしれない。所詮、人為的に作られた魔術制合成生命体　欠落して壊れていても無理はない。むしろ、完璧な方が不可思議だ。何処か壊れていた方が、世界との折り合いがつく。足りなかったのがたまたま記憶を保存できる要領と考えた方が超自然。

何で、何で今まで気づかなかったんだろう？気づいたことすら忘れていたのか？

そんな風に考えると、何だかとても……悲しかった。涙が出そうになるほど悲しくなった。

「おい、寝るな」

「寝てねえよっ！」

時雨さん、せっかくのシリアスな思考と場面が台無しですよ。あの朝の鋭い目をした時雨さんはどこへ行ったんですか。

「人の世界レヴェルのノリツツコミをそのまま寝るなっ！！無視かっ！？放置プレイかっ！？あぁっ！？」

この人ほんとに時雨さんですかっ！？まだ僕は夢の中なんですかっ！？

「とりあえず、退いてください。立ちたいです」
「ん？ああ、わりいわりい」

どういう風な筋肉の使い方をしたのだろうか、と考えさせられる程に無動作で、後ろに一メートルぐらい跳躍した。しなやかに美しく弧を描き、音も立てずに着地。

それに少し見とれながらも、気取られぬようそつと普通に立ち上がった。これでようやく落ち着いて話せる。

だからって気がゆるめれる相手でもないけど。天と地と程のギャップがある性格とまだ交わしていない信頼が大部分の理由だ。

「で、お前。俺に言いたいことは？」

「一遍、死んで」

「おう、わかった。ここは日本人らしく切腹か、はたまた自由を愛する意を込めて投身自殺　　って無限ループさす気がよっ！？－
コマ目に戻れとっ！？」

やべ、時雨さんって結構おもしろい。癖になるかも……。

だけど、そろそろ止めとかないと話が進まない。それに時雨さんが不機嫌そうにポケットに手をつ込み、目をそらし始めた。

和湖さんが時雨さんに話を聞けと言ってたし、重要な話を聞き逃すのは忍びない。

よし、頭を切り変えよう。

閑話休題。

第35歩：FACE - 2（前書き）

今回は七割方セリフです。あえてそういう使用にしております。決して手を抜いたわけではないですよ。決

第35歩：FACE - 2

向き合い僕らは語り合う。まずは取るに足らない話から。

「何で、そんなにも性格にギャップがあるんですか？個人的には今の方がいいんですけど、いまいち落ち着かなくて。疑問が払拭されないのは居心地が悪くて仕方ありません」

僕は言う。

「ん？ああ、あれね。やっぱ、最初っつーのはインパクトいるじゃん？それにさ、あそこで誰か反論しとかないと不格好だし無覚悟に話が進むだろう。大地以外に反論できそうないし、その張本人も賛成ときた。こりゃ、反論するしかないだろ、ん？それに、」

時雨さんはシニカルに笑い、

「そうした方が面白いだろ？」

とだけ言った。

本当に楽しそうに、一片の哀切もなく愉快に、声を踊らせる。言ってることは自分本位で、やってることも自分本位、それなのにどこか他人を巻き込んだ口調。

「はい、次っ！聞きたいことが山ほどあるなら、ちゃっちゃと聞け。俺は誰かさんの所為で忙しいんだ。いや、忙しかったと言っべきか。いや、忙しくなると言っべきか……」

視線を逸らしブツブツとつぶやく時雨さん。だけど、意味が分か

らない。時間的にめちゃくちゃだ。そんなことはどうでも良いとして、ばやくほど忙しいならわざわざこんなところ居るんだろ？居なくなったら居なくなられたで困るけど、何ともお人好しとしか考えられない。

大地さんも、和湖さんも、夏雪さんも　　なんかみんながみんなお人好しだ。

時雨さんに言われた通り、僕は問う。

「じゃあ、二つ目の質問です。何であなたはここに居るのか？恥ずかしい話ですが、僕の記憶力はかなり薄弱です。僕は夏雪さんとここにいた記憶はあるはあるんですが、僕がここに寝ていた覚えも、あなたが居る理由も分かりません。ある程度推測はできますが、根拠がないので確証がもてないんです。知っていたら是非教えて下さい」

あくまで静かに、無感情に僕は問う。

時雨さんは僕に目線を会わせ、また皮肉った笑みを浮かべて、饒舌に話し出す。

「いちいち話しが長いんだよ。理屈っぽくひねくれやがってっ！長い文は無駄無駄無駄。はっ！記憶力が薄弱う？推測はできるが根拠がないい？度々そんな言い訳、言ってんじゃねーよ。不要だな、無意味だな、無意義だな、存在価値ゼロだな。それに、知ってたら教えて下さい、だ？こっちは聞きたいことがあつたら聞けつつつてんのに、何で今更再確認とってんだよ。ウザいな、片腹痛いな、滑稽だな、笑止千万だな」

うわ、酷い言われようだ。完膚無きまでに、隅から隅まで駄目だしされた。

今思っただけで、時雨さんの言葉も十分長い。絶対口にしな

けど。

「あー、何だっけ？ああ、そうそう『俺が何でここにいて、何で夏雪がいないのか』だったな。ふん、いちいちどうでも良いことを聞きたがるな、お前は。まあ、質問されたからには疑問の欠片が欠片も残らないよう欠片を組み立てて答えてやろう。まずは俺がここにいる理由だ。根拠無くてもできる推測だろう、こんなの。誰かの替わりに誰かが居るって事理由は二つ。偶然通りかかって猫のようによって来たか、必然的に誰かに頼まれ犬のように待っていたか、の二つ。

俺さっき忙しいつつつたよな。

誰が猫みたたくいちいちよってくか。

自分をそっちのけでそんなのやる奴は朝熊か大地、和湖、夏雪、明、麻紀、鏡、そして由愈ぐらいだ。ああ、榎風もしそうだし、あのちつこい二人もやるな。ってこれ、全員じゃん！？俺ってそんな冷徹人間かつ！？つか何でいちいち一人漫才せにやならん！話を戻すと、俺がここにいるのは夏雪に頼まれたから、分かったかつ！薄弱なお前の脳細胞に焼き付けたかつ！」

思い切り僕に人差し指を向けて、怒鳴る。怒鳴ると言うより叫ぶか、これ。

かなりテンション重視な時雨さんの発言の仕方だ。もう、第一印象なんて木っ端微塵に砕かれてしまった。

時雨さんはなおも喋ることを止めない。

「お前それなりに戦えるんだろ？榎風にくつついて回ってるって事は。あいつは馬鹿だからな。いや、阿呆と言うべきか。まあ、大した意味の差はないからどっちでもいいんだけどさ、あいつってかなり自由奔放で強欲で自己中じゃん？無理ばっかするから敵味方含めて人間が山のように集まってくる。生まれつき因果が多いんだらう

な。そんな奴の近くにいて生きてるなんて相当なもんだ。でだ、そんなおまえが倒れてたんだろ？って事はさ、不意打ちとかじゃなく真っ正面からやられたわけだ。つまり夏雪に熨されちゃったってこと。それはまあ、あつさりと。夏雪は結構期待してたろうな。それが蓋を開けてみりゃ、この様だ。あまりの弱さに落胆し、呆れてどっか行っちゃった。その途中でたまたま俺を捕まえて、お前の介抱に向かわせたんだ。俺って不運だな。そのときのあいつの目と来たら怖くて怖くて……」

すげえショック。余りにズバズバ言われて、もう立ち直りが効かないぐらい。そこまで僕は弱いですが、そこまで僕はカスですか。榎風と居るだけなのに知らない間に期待されていた、だからってそんなものに僕は答えないといけないのか？んなもん、知るかっただ。

でも、榎風の件については否定できない。

だけど肯定もできない。確かに榎風は自由奔放で強欲で自己中だけど、それでも颯爽としていて格好良くて優しく。良い面の方が多いくらいだ。悪い面だけ取り上げて言われるのを黙って聞いていられたこと、自分がなにより驚いている。ギリギリまで我慢した。でも、もう我慢が持たない。僕が口を開いた瞬間、

「冗談だけだな」

と時雨さんが冷笑をかました。

本当は時雨れさん、悪意に満ちて僕と会話してるのかもしれないと思わせるほどの嘘だった。この程度の冗談なら榎風から何度もうけているから慣れてるけど。

「どこら辺から冗談かというと、落胆して呆れてどっか行っただけからだ。あつさり熨されちゃったのは本当。まあ、無理もないけ

どな。経験の長さが違う。お前なんて良くて三年程度。夏雪は十年ぐらいいつてんじゃないか？つまり、そんだけ差があるって事。埋まらない絶対差だ。そんな差があるのにお前は驚くべき快拳を成し遂げたんだ。それさえも記憶にないなんて前代未聞だな。

うん、前代未聞。

そろそろもつたいぶらずにサクサクいこう。

お前は夏雪に熨されて意識がなくなった瞬間、いや、なくなる直前かもしれないが今は些細なことだ。

覚えていないのだからな。

とにかくその瞬間、お前は木刀で夏雪に不安定な体勢で打ち込んだんだ。絶対差がある中こんな事をできた時点でかなり希なケース、滅多にみれない。だがそれだけではいちいち話に取り上げる程の事でもない。驚くべきなのはこれからだ。お前は不安定な体勢で打ち込んだのに一瞬で二、三発、しかも『骨を折るような重い打撃』をだ。もちろん木刀でな」

そこまで聞いて僕は首を振り、もういいです、と口でそれより先を聞くのを拒否した。いくら鈍感な僕でも分かる。つまり僕が夏雪さんの腕を折ってしまった。簡単なことだ。単純なことだ。ここに夏雪さんがいないのは治療中で、替わりに時雨さんが僕が起きるのを待っていていたのか。

「お前、後で夏雪に謝るなり何なりしておけよ。自分を傷つけたことで落ち込んで欲しくないらしく、なにも言わないでくれと言ってきやがった。だが、ここで言わないのは筋道としておかしい気がしてならなくてな。だから一応言っておく。夏雪に言われたとおり落ち込むなよ。お前を熨した後に気を抜いた夏雪にも非がある。お前がここに来て一日二日で悪い記憶を残させたくない夏雪の行為を仮初めにするんじゃないぞ。それに目の前で落ち込まれたら目障りだ」

時雨さんは相変わらずシニカルに僕に笑いかける。その奥に隠されている真実は読みとれない。演技でもしているかのように無色透明で淡泊な瞳。夢と現し世の境界がこの人には見えている。と言うかこの人には現実しかない。だから、こんな風にいつでも悪意と皮肉に満ちた冷笑を浮かべて入れるんだろう。

「他にも聞きたいことはありますが、これで最後にしておきます。ここは彼の有名な『神々の墓守』の本拠地なのは和湖さんから聞きました。そこで一つ質問です。最強の騎士『理由なき剣』、役目無しの『断罪の血族』、人形師『フェイカー』、堕天使『ファースト』、魔法使い『ギフト』　あなたは何ですか？」

僕は時雨さんみたいにうまくはできないが、可能な限りシニカルに笑い、時雨さんに遊びのつもりで聞いてみた。

時雨さんはそんな僕を鼻で笑い、悪意のない笑顔で僕に答える。

「したいのにしないなんて、ほんと欲のない奴だな。榎風の連れとは考えられない。それに今度の質疑応答は実に簡単に終わりそうだな。だから実におもしろい」

時雨さんはおもむろにサバイバルナイフをポケットから取り出し、宙に放った。

ゆるりと回転しながら弧を描き、僕と時雨さんのちょうど中程まで来た所で動きを止めた。もちろん空中で。

時雨さんはまたシニカルな笑みに戻り、

「俺は魔法使い『ギフト』だ」

とだけ言った。

第36歩：FACE - 3

「そうですか」

僕は素っ気なく突き放す様に答えた。僕はまだ時雨さんを信用しているわけではない。だからこの三つの質問は参考程度に聞いたままで。

もっとも時雨さんは僕の反応が気に食わないらしく、不機嫌そうに毒づく。

「なんだよ、それ。人が折角ものすごい重要な事暴露したって言うのに酷すぎるんじゃないの？ま、んなことどうでもいいか」

時雨さんはシニカルに笑い、宙に浮かんだままのサバイバルナイフを回収してから踵を返して道場から出て行った。音も立てず、颯爽と優雅に。

そして二秒も立たず戻ってきた。いや、戻ってきたというより戻ってこされたのほうが適当だ。何か強い衝撃を叩きつけられたかの如く、ゆるい弧を描いて受け身もままならず、変な音を立てて床に落ちた。

犯人なんて見なくても分かる気もするけどここはあえて黙秘権を行使しよう。

「すいませんごめんなさいもうしません……」

起き上がったかと思うと念仏のように謝罪の言葉を土下座しながらつぶやいている。もちろん僕ではなく入り口に向かつて。

そんな滑稽な光景の中に侵入者、もとい乱入者が現れた。それは

もう颯爽と風のように荒々しく火のように、疾風の如く怒濤の如く、全てを破壊せんばかりの勢いで。言わずと知れた我が主、秋宮 榊 風、その人である。

「こうら、希崎！貴様誰に断つて大河と二人きりになってんだ、ああ？！悪意を向けた笑みを浮かべてんだ、ああ？！」

「はいあなたが仰っていることは何一つ間違えではありませんだからお許しくださいませ榊風様……」

文字を一度も区切ることなく、ひたすら退魔の呪文のように言葉を時雨さんは連ねている。実を言うと時雨さんって『神々の墓守』の中では地位がものすごく下に思えてくるほどに低姿勢。実際はそんなことはないのだろうけど。僕の知らない昔から決まっている順位なんだ、きっと。

そう思うと時雨さんが少しうらやましい。僕の知らない榊風を知っているのだから。今まで榊風の昔話を聞くような話の流れもなかったし、そもそも気にしていなかった。今度調べてみるのもいいだろう。

「おい、大河。ちょっと来い」

唐突に僕に声をかけてきた榊風。そのあまりの前置きのにさに僕はまったく反応できず、いざ動こうとしていたときには榊風がこちらに向かって歩いている最中だった。当然のごとく土下座中の時雨さんは放置して。

あまりにもかわいそうな光景だったんで思わず声をかけようとはしたが、声をかけられたらかけられたで時雨さんが惨めなことに気づいて止めておいた。まあ、僕が時雨さんのところに駆け寄るのを警戒してか、榊風が僕と時雨さんの間に入るように立っていたから無理だったけど。

「お前、あいつに何もされてないよな？」

顎で時雨さんを指し、僕に同意を求めてきた。見ての通り僕は心身ともに時雨さんには害されていないので、首肯する。

それでも心配なのか、僕をボーディーチェックするかのようにくまなく触り始めた。気恥ずかしくなり、飛び退こうとしたが榎風は存外強い力で押さえつけて逃げられないようにしているので、大人しく触られていた。そして最終的に僕の肩に手をおくと大きく頷いて一言だけ口にした。

「うん、何もされてないみたいだな」

いくら榎風でも心配のし過ぎだろう。それに当面の仲間になると選んで僕を連れてきた本人が疑ってどうする。本当にこの人は何がしたいのやら。

「大河」

いきなり甘い声で名前を呼ばれ抱きつかれた。

やっぱりなんの前触れもなく自由奔放に、自分のテンポで僕を自分の中に手に入れようとした。そしていつも通り僕は抵抗する暇もなく、されるがままだったんだけど、何かいつもと違う。

失うのを恐れる様に。

迷いを打ち消す様に。

壊れるのを守る様に。

逃げるのを捕まえる様に。

死にゆくのを生かす様に。

望みを繋ぎつづける様に。

本当に必死に、その手の圧力で潰れてしまいそうなぐらい、強く

抱きつかれた。多分こんな風に力任せに抱きつかれたのは初めてだ。少し戸惑ったけど、やっぱり榎風から伝わってくるのはいつも通りの暖かい熱。だから僕はそのままだった。

抱きついたまま榎風は囁くように弱い声で、折れそうに細い声で、透き通る綺麗な声でしゃべる。

「お前は死んだりしない。ずっと私の横にいてくれ。笑わなくてもいい。時には泣いてもいいから、ずっと、ずっと、側にいる」

それはほとんど独白に近い言葉の並び。僕に言うというよりは自分に言い聞かせるように紡いだ独り言。

でも表面上は僕を慰めるような甘い囁き。僕はその裏に隠された真意を聞きたいとも、考えたいとも、知りたいとも思わなかった。それが榎風のとった行動なら僕はそれを素直に受け取る。ここで慰めの言葉なんか必要ないとしても。

「ありがとう、榎風。ずっと、側にいさせてくださいね」

それだけというのが精一杯だった。それ以上言えば壊れてしまいそうだから、二人のこの楽しく愉快的な関係が。

榎風は突然身を離し、

「いやー、久しぶりに大河に抱きついたから思わず感慨深くて涙が出そうだ」

いつもの調子で何々大笑した。まあ、そんな風に笑殺してくれた方が榎風らしくていいけど。うん、さっきのが余りにも例外すぎたのだ。目の前にいるのはいつも通りの榎風であるのが一番心地いい。

「まあ、私はあそこで床に愛撫している馬鹿なんかには用はない。私の行動理由はただ一つ！お前のみだぜ、大河！」

両手人差し指で指名された。今日はいつにもまして浮き沈み激しいなあ……。

僕はそんな榎風にため息を一つついて、返事をした。

「で、なんなんですか？」

「いいから来い来い」

榎風は僕の背中に回り込んでぐいぐい背中を押してどこかにつれていこうとする。さすがにそればかりは遠慮しておいた。移動中に見られたら恥ずかしい。

恥ずかしいといえ、さっきのは相当赤面ものだ。誰かに見られたら……って、時雨さんがいるのすっかり忘れてた！どうしよう、まともに時雨さんと顔合わせられないかも知れない。

そんな事を考えつつ急いで部屋を出た。

去り際、榎風が振り返り時雨さんに向けて一方的に、

「ありがとなー」

とだけ言ったのが少しだけ聞こえた。

第37歩：DAYS

ここに来てまだ一日目だというのに、いろんな道を歩いて、いろんな所へ行き、いろんな人にあつて、いろんな話を聞いた。

その所為かすっかり裸足で歩く冷たい板張りの廊下に慣れてしまった。もつとも今はスニーカーを履き、寒いので黒いオーバーコートを着ている。隣にいつもいるあの人はダッフルコートを羽織つて、よほど寒いのか飾り紐とトッグルを全て留めていた。

今までは家の中で靴を脱ぐことなんてなかったし、考えもしなかった。なんだか少しずつ変わっていくのが楽しいようで、不安だった。知らない間に何処かに皆が行ってしまうのではないかと、いつの間にか自分と誰かがすり替わってしまうのではないかと。

そんなくだらない心配が心の底からふつふつとわいてきて酷く気持ち悪い。吐き気がする。

特に時雨れさんと道場で話して、シニカルに笑わせたあの時から酷い。

そんなのは張りぼての不安でいつか消える。そんな不安はいつでもあつた。だから今回も、すぐ……消えるはず。

いや、消えた。

否、消された。

目の前にいるあの女性の快活な笑いで、それこそいつも通り。……僕の希望としてはそんな風だったら良かったんだけど、現実とは反転するくらい違うものだ。

いつも通りなのはいつも通り。ただ単に不安が払拭されたのは榎風の笑みの所為ではなく、目の前に広がる馬鹿騒ぎの予兆と僕の予感の方が不安より上回っただけ。

「で、何ですか、これは」

「見ての通りお前も何度か乗った事がある乗り物だ」

乗ったことがあるのは借り物だけだな、と榎風は調子よく付け足した。

ほとんどが盗難物ですけどね、と僕の声が重なる。

僕の目の前にあるのは真っ赤な真っ赤な流線型。タイヤも、ライトも、ハンドルも、エンジンも、ブレーキも、アクセルも、あまり詳しい知識はないけど、僕の知っている限りでは必要なものは一式ちゃんとしている。むしろチューンアップしており、従来の物の限界速度を軽く凌駕しそうで怖い。体中がたがた震えるほど怖い。

「これは僕が『榎風に乘せたくない／乗せてはいけない乗り物ランキング、堂々の第一位』^{バイク}じゃないですか」

「ああ、そうだ。『大河を後ろに抱きつかれていちゃいちゃしながら乗りたい乗り物ランキング、ダントツの一位』^{バイク}だ」

どっちもどっちだけど無駄に細かいランキングだ。意図としては全くの逆だけど。

二人の目の前には赤いバイクが映ったまま、長い沈黙が流れる。立っているだけで冷や汗、脂汗が滝のように流れる空寒い沈黙。

これは逃げるべきか、逃げるべきなのか？この地上に二百体以上確認されている神様たちが僕に逃げるとお告げしているのだろう。だったら逃げるのは……今！

「ぶへっ！」

僕が百八十度回転し、家の中へ逃げようとしたその瞬間に襟首をつかまれ引つ張られた。喉がつまって変な声が出てしまったのはそのため。

そのまま無言でズルズルと引きずられるようにしてバイクの前までつれてこられた。なんか久しぶりに乱暴な榎風だ。

まあ、逃げるのにしたって冗談だったからいいけど。このバイクに乗っていくのはいささか抵抗が、あるが榎風にこの町を案内してもらえならそれでもいい。内容が案内ならの話なんだけど。そうであることを切に願う。

榎風はバイクのサドルに乗せてあった工事現場でかぶるような頭に乗せるだけのヘルメットを手渡した。

先ほどから思ってたんだけど今の榎風はどこかおかしい。普段ならヘルメットなんてつけない榎風が僕にヘルメットを渡すなんて普段を知っている僕からしてみればありえないことだ。それに今、榎風自身はフルフェイスのヘルメットをかぶっている。本当にどうしてしてしまったのだろうか。

やはりここに古い知人なんかいて顔を見せたくないんだろう。そんな適当な理由をつけて僕は自分自身を納得させた。

「さ、いくぞ！」

「あ、はい」

榎風がバイクのエンジンを入れると、機会独特の低いくぐもった音が辺りに満ちる。

爆音とまではいかないが音は相当でかい。玄関先でこんな音を鳴らしては日本家屋の作りの関係上、どれほどの大きさは知らないけど屋敷全体に聞こえているはずだ。

何となく、後ろを振り返った。

屋根の上にはまだ和湖さんが本を読んでいたのがちらりと見えた。こちらに気づいたのか手を振っているの、振り返す。すると、やっぱり笑顔の仮面をかぶったまま本に目を戻した。

意外といえば意外な気もするが、和湖さんの隣には大地さんが座っていた。だけどこちらには気づいていない様子。おそらく一度本に熱中すると周りが見えなくなるタイプと見た。かなりの読書家のようだったし。

屋根伝いに視線を移していくと物干し場では鏡と明さん、麻紀さんが洗濯物を取り込んでいた。鏡ははじめて見た時と同じように黙々と、明さんと麻紀さんはふざけ合いながら楽しそうに洗濯物を抱え込んでいる。

由愈と時雨さん、夏雪さんと朝熊さんは目に映るところにはいなかったけどこの家の中にいるはず。あ、でも朝熊さんはここに住んでないから家に帰ったんだっけ。

これがここの日常的な風景なんだろう。回り続けている車輪の一部。

いつの日か、僕はこんな当たり前の風景の中に溶け込んでいくんだろうか？

そうなるといい。すごく楽しそうだ。榎風と一緒にいるときとはまた別の楽しさ。ぜひ味わってみたい。

そんな思いを心のどこかに忍ばせ、向き直り榎風に歩み寄る。

「行くのはいいんですけど、一つ聞いてもいいですか？」

「ん、いいぞ。これからどこかに行くのかなんて不粋な質問じゃないならな」

行き先なんて聞いても仕方ない。榎風と出会ってから今までの間、未だにともに答えてくれた事なんて両手の指で数えられるぐらいなんだから。

僕が聞くのはそう、物語の輪からはずされてそろそろいじけてるんじゃないかと思われる二名の事。

「葵と茜はどうしたんですか？」

「不粋だぞ、それ」

質問を聞くが早いか、即答で回答拒否された。

フルフェイスのヘルメットの所為で表情は見れないが、腰に手を

当たっているのと声色から考えると、頬を膨らませプンプンという形容がぴったり来る表情をしているのは容易に想像できた。年齢不相応だからといって似合わないわけではない。むしろ可愛い。本人の前では絶対言わないけど。

「これからデートするって言うのに他の女の子のこと聞くなんて。罰としてずっと後ろから抱きついてろ」

表情はやっぱり見えなかったけど絶対に笑っていた。いつも通り快活に、明朗に。不安なんて馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばしてくれるであろっその顔で。

そんな顔をしているのがわかったから僕は仕方なしに、本当に仕方なしにバイクに跨って、不本意ながらも榎風の後ろにしっかりと抱きついた。

第38歩：LOVERS

大地さんの家を出て、榎風のバイクの後ろで揺られること数分。僕はやっぱり榎風の操縦によるバイクの後ろなんかに乗るんじゃないかな。思ったと改めて後悔した。

今になって思ったわけじゃない。大地さん宅から公道に入ったその瞬間に思った。

榎風にとっては軽くアクセルをかけたただけなのかもしれないが、あの人のスピード感覚ほどあてにならないものはそうない。制限速度を超えるどころか、百キロ出ていたと言われれば領けるほどのスピードだった、間違いなく。途中ですれ違った人には赤いものが通った程度でしか認識できていないはずだ。

それだけならまだしも、そのスピードのまま大地さんの家の裏手にある山を登り始めた。それもちゃんと舗装された道ではなく、獣道。走ってる途中で枝が体に当たるし、石は跳ねるしでとにかく危険なことこの上ない。榎風がフルフェイスのヘルメットとダッフルコートを着てきたのに今更ながら納得。

とかく山頂までやってきた。

榎風はぼろぼろになったコートは脱いで、ヘルメットと一緒にバイクのサドルに乗せていた。コートを脱いだ榎風は、この場に全くそぐわない赤いチャイナドレスに身を包み、惜しげもなく抜群のスタイルを見せびらかしていた。

「んんー！！」

運転で疲れたのか、両手を目一杯空に突き上げ伸びをする榎風。ふと僕は、その手はどこまでも伸びていき、空全体を覆いつくすような錯覚を覚えた。時雨さんが言っていたとおり榎風は強欲だ。たぶんその気になれば空さえも支配可能だろう。そのとき僕はやっぱり

り止めるべきなんだろうか？それとも榎風の手助けをすべきなんだろうか？

「空気が美味しいなあ！」

無造作に髪を風になびかせて、僕に一点の曇りもない笑顔を見せてくる榎風。その顔を見ていれば、答えなんて出ているも同然だ。

僕はきつと、誰を敵に回しても、世界を敵に回しても、ずっと榎風の側に居続けるだろう。だって僕は　榎風を愛している。それを許されて作られた『永遠の恋人』だから。

それはさておき、榎風の言ったとおり、ここの空気にはよどみがない。ある種、聖域じみた空気だ。そして眺めが最高にいい。地方の隠れスポットここにあり、って感じ。

「ここ綺麗だろ？お前と一緒にいろんな所見てきたけどさ、やっぱりここが一番好きだ、私は」

まだ夕焼けにはなっていないがだいぶ低い位置にある太陽が、榎風の黒い髪を照らす。そういう一瞬一瞬が思わず思わず見入ってしまうほどに綺麗な榎風。

僕の隣に立ち、榎風は視線も交わさず話を続けた。

「お前と出会ってからいつかは一緒に来たいと密かに思ってたんだけど、こんなに早く実現するなんて思いもしてなかった」

言ったことが恥ずかしかったのか、それともただ単に笑いたかったから笑ったのかは知らないが大声で笑う榎風。

僕も榎風が『作ってから』じゃなく『出会ってから』といってくれた事が素直にうれしかったから、つられるようにしてがらにもなく大声で笑った。最近、こんな風に笑ってなかった。一月前なら何

の疑問もなく笑えたんだろうけど、今はいろいろ抱え込みすぎてたらしい。もう少しだけ、榎皿とか葵とかに頼って楽に行くべきなのかもしれないと素朴に思った。

「おーし、決めた！」

「何ですか、突然」

いきなりの事で驚いた。でもその場から飛び退いたりせずにかろうじて切り返せたのは普段からの慣れの賜物といえるだろう。

榎風はびしっと天に右手人差し指を突き上げ、左手を腰に当て、排気空気をため込む。僕にも緊張が走りのどが勝手にゴクリとなった。

「秋宮 榎風は旅を止める！」

「へえー……つて、ええええええええええええ？！」

いつもこの人は突拍子がない。だからって少しばかり突然すぎる。さすがの僕も心底驚いた。

ところで今、下ろしている突き上げた右手人差し指は何の意味があつたんだろう？ 決意の表れという奴だろうか。榎廐にとつてもこれは大きな決断だったのだろう。

「旅を止めて、何をするんですか？」

素朴な疑問。純粹な懷疑。僕は旅しかしたことないから、何をしたいのか分からない。だからって止める事そのものに反対意識は欠片もない。榎風がやるって言ったらやるし、止めるって言ったら止める。僕の思考回路なんてそんなもの。後は二の次だ。

やっぱり榎風は視線を合わせず、少し含みのある間をおいてから話し始めた。

「今まで私は幸せなんてものは動かなきゃ見つけれないと思っていた。でも散々動き回って気づいた事は、幸せは動かなくても向こうからやってきてくれることもあるってことだ。動いて見つけれれる幸せは一通り見てきたから、そろそろ動かない幸せって奴が見たくなってきたんだ。たったそれだけ。だから、ちよっと人里離れたところに住もうと思う。幸い、働かなくても金なんて有り余るほどあるしな」

『場所はここから見える山の山頂で』とか、『家は白くて大きな三階建て屋上つき』、『庭には家庭菜園を作って自給自足っぽくしたい』、『時々紀伊たちを招いてパーティー開くのもいい』など、実に多様な自分の楽しい計画を子供のように榎風は僕に披露してくれた。僕にとっても本当に壮大な計画で実現したい。いや、実現するんだろう、きっと。何せ榎風は自己中心的だから邪魔なものはことごとく除外して、地球を真つ二つに裂いてでも実現させるはずだ。

榎風は僕へと顔を向け、いつも通りの笑顔で言う。

「この面倒くさい状況を解決したらさ、一緒に住もう、大河」

顔が熱い。視界が暗い。耳が遠い。口が閉じない。言葉が紡げない。脈が速い。足が動かない。

いつも通り、当たり前前の事をこうして改めて言われると、こうも恥ずかしいとは思いつかなかった。本当に今日はどこかおかしい。

一日なのに数年の時間が過ぎたように感じ、そのくせ今過ぎていく時間は異常に早い。

はるか遠くでは太陽が沈み始めている。榎風が急いできたのはも

しかしたらこの美しい光景と一緒に見たかったからなのかもしれない。

二人の間に流れる悠久の時。本当に今日の時間感覚は忙しい。それはそれで楽しいからいいか。榎風が一方的にしゃべって、僕が時々相槌を打つ。こんなに幸せで贅沢な時間だったとは思ひもしなかった。これが榎風の言っていた動かない幸せなのかもしれない。

「大河」

不意にまた名前が呼ばれた。

少しの間、続く沈黙。なかなか話を切り出さない榎風を不思議に思い、僕は伺うように榎風を見る。

世界が真っ赤に染まった。

大地も、地平線も、空も、何もかもが見えない。何があったか僕の頭が理解できていない。

でもたった一つだけ分かる事は、榎風の顔が目の前にあるという事実だけ。少しは夕日の所為だったのかもしれないが、本当に真っ赤だった、面白いぐらいに。

眼前にあった榎風の顔がちよっとだけ後ろに引き、より明確な事実を教えてくれた。

「……ははっ、キスしちゃった」

いたずらが成功したような子供の用に満足げに榎風は笑う。顔が赤い所為かはいかにんでいる様にも見える。そんな榎風が無性に可愛くて僕は、

「……榎風」

思わず名前を呼んだ。そしてできる限り背伸びをして、榎風の顔に顔を近づける。

続けられる包み込むような淡く甘い接吻。

その日、僕たちは《初めてのキス》を二人で味わい続けた。

壊れゆく日常

目覚めるとそこは横たわる下らない世界だった。

斑な蒼き奈落と波打つ茶色い天蓋。 たったそれだけ。

気づけば逆転している。 斑なのは空で、波打っていたのは大地。
そこにただ横たわっていた。

熱い。 熱い、熱い。 熱い熱い熱い。 極度に熱せられた砂は溶解した鉄板みたいで本当に熱い。 でも耐えれないほどじゃなかった。

それでも立ち上がる。 こんな下らない場所にいたくないわけではない。 向かうべき場所があると知っていたから立ち上がる。

身の回りを見回すと、自分と同じように横たわっている一振りの剣。

重さで断ち切る西洋剣で、その大きさは大体百六十センチ程度。

自分の身長よりも大きかった。

剣を手にする。 やけに冷たい刀身だ。

まるで、何かを拒絶するかのように。

まるで、何かを否定するかのように。

ひたすら冷たい刀身だった。 だが自分には関係ない、冷めているなら温度調節に利用すればいい。

片手で持ち上げてみると重さは感じなかった。 なおさらいい、持つていくのにはそれに越したことはない。

剣は大きすぎたので引きずっていくことにした。

一步。 また一步。 憎しみに駆られて前へと一步。

砂漠の越え方など知らない。 夜を越えてその先へ。

大会の渡り方など知らない。 夜を越えてその先へ。

残していくものは足跡と剣で引いた直線。 足跡からなにが生まれようが関係ない。 それは所詮、過去。 必要ないから置いていく。

たとえ、残したもののから自分が傷つけられても知ったことではない。 結果がすべてだった。

進む。ただ進む。目的を果たすために進む。

過去に追い抜かされても。夜を越えてその先へ。

未来が遠ざかって。夜を越えてその先へ。

見つけた。やっと見つけた。これでようやく終着点が見えてきた。

あの白い頭。間違えない。自分の過去たちはとつくの昔に遭遇している。でも、そんなことはどうでもいい。

狂喜乱舞する。ようやく自分の存在意義が見えたのだ。無理もない。

さあ、壊そう。全て壊そう。嫉妬、羨望、憎悪、憧憬、自分の全ての対象だったあいつを壊そう。

だから、ばれないように呟いた。

「よお、《失敗作》」

そうして深い眠りについた。

驚いて飛び起きた。

また、夢だ。こんな風に何の意味も持たない、誰が主人公かもわからない夢をこの一ヶ月何度も見た。大体、二日に一回程度。

夢を見るだけなら、いくらだって構わない。だけど、夢から覚めた後にやってくる偏頭痛はどうにかならないものだろうか。

まあ、そんなことは置いておいて。

この一ヶ月、大地さんの家にずっと居た。いや、もうどちらかと言えは住んでいるといった感じだ。

とりあえず今の所、事に大きな進展はない。目立った侵攻はないし、明らかになった情報もない。さすがに『神々の墓守』相手では侵攻に慎重になるのはわかるが、情報が一つも明らかにならないのはなんとも不思議だ。

かといって、この現状もなかなか悪くない。

榎風は一人でフラツとどこかに行く、

葵の敬語癖は直らない、

茜は騒がしい、

大地さんは本を読んでいる、

夏雪さんは大地さんに寄り添う、

和湖さんは遠くを見ている、

時雨さんはシニカルに笑ってる、

鏡は家事をしている、

由愈は眠たげ、

明さんは榎風と喧嘩してる、

麻紀さんは喋り捲ってる、

朝熊さんは頼りない。

それが当たり前の日常。変わることのない当たり前。いつまでも終わらない、そう思っている僕が居る。だけど、

壊れるのは簡単だと、

壊れるまで気づかなかった。

第39歩：幻影鏡界1

崩壊とは生物に与えられた特権である。

ドサッ

そんな音が僕の崩壊の開始音だった。

僕の眼前で起こった出来事は理解し難い光景だった。

世界の不可解な光景、外れた日常、無に帰す安寧、コワレルヘイワ。僕の脳は理解を拒絶する。伝達はされてくるのだ、余すところなく、無慈悲に。

浅く傷ついた木の柱。

少しくすんだ白い壁。

血飛沫のような液体。

へこんだ銀色の容器。

広がり流れる漆黒線。

何も写していない虚ろな少女の目が、無情に僕の前を下降していく。

手に持っていた銀色の鍋からは70度近い、ちょうど良い具合の味噌汁が入っていた。目と同じように意思がなくなったその身体の末端からは、当然のように味噌汁は手からはなれ、近くにいた僕に降りかかる。

……熱かった。当たり前だ。だが、そんなことが気にしてられないほどに触覚が、感覚が、神経が、脳が麻痺している。呆然としているわけじゃない。怖いわけでもない。とるべき行動も理解している。それでも動けなかった。動こうとすれば動こうとするほど動

けなかった。まるで意識が反転している。世界は一方に向かって着実に時を刻んでいるというのに、僕の意識だけが逆方向に走っている。

結局のところ、そんなのは言い訳でしかないわけで、この状況に僕は酔っていただけなのかもしれない。泥酔にも近いぐらいに、感情の制御が利かなくなっている。目の前の少女を助けるのも、苦しめるのも自分の一存。圧倒的な優越感が僕の全身を支配している。理性、そう理性だ。それが外れてしまったんだ。だから、早くかき集めないと。取れてしまったピースを当てはめて、助けないと。そうしないと全ての取り返しがなくなってしまう。特に自分が、自我が崩壊してしまう。

脳内を手当たり次第に探す。真っ暗闇を這いつくばって、醜悪に手に当たるものは全部当てはめては、捨てる。

……見つけた。これに違いない。

叩きつけるようにピースをはめた。正解。理性が正常に起動。状況を再確認が自動的に行われ、理解する。理解したくない事実を理解する。

「……っあ」

やっと出たのは泣き声のような微音。半径1m以上には届かないような掠れた音。そんなんじゃ、榎風だって来るはずない。

可笑しい。理解したら理解したで、何も出来ないなんて可笑し過ぎる。あまりの可笑しさに奥歯がかみあわない。ガチガチカチガチと耳の奥の方で不協和音を奏でている。とんでもなく鬱陶しいが、止めるすべを僕は知らない。

そうだ、目をふさごう。そうすれば、落ち着いて考えに浸れるはずだ。

そう思ってまぶたを動かそうとするが、うまく閉じてくれない。両目をつぶろうとして右半分の世界だけ欠け、もう片方も閉じよう

とすれば左右が反転するのみ。本当に僕は一体どうしてしまっただのだろうか？

仕方ない。ここは手で世界をふさごう。幸い手配とも簡単に動いてくれた。

視界に映る手はかつて無いほどに震えている。そんなことはお構い無しに、血がにじむほど強く押し付ける。

それでも世界は一向に消えない。指の間、揺れる枠組みの中、僕はようやく少女を直視した。

「アツ、あう、アア、ひつ、ガツ、

！！！」

音にならない絶好を叫ぶほか、僕には何も出来なかった。

絶叫を聞きつけて、壁をぶち抜いて檀風がやってくる。それまで僕は少女　鏡の前で座り込んで絶叫していた。

第39歩：幻影鏡界1（後書き）

長期間、投稿を停止してしまして誠に申し訳ありませんでした。
これからは、なるべく早いペースでやっていきますので、見捨てず見ていただけるとありがたいです。

第40歩：幻影鏡界2

《 んでも、壁を壊すのはやりすぎだ、榎風！》《大河の一大事なんだぞ！壁の一枚や二枚でとやかく言うなっ！》《お前は計十二枚の壁を壊してんだよっ！治すのは俺に回ってくんだから……。ちつとは加減しろ！》《お前の苦勞と大河を天秤にかけると？ハア？お前は××××か？天秤にかけたとしても天秤が壊れる勢いで大河の方が縦一直線に下に来るわっ！》《時雨、榎風、いい加減静かにしろ。病人の前だ、好ましくない》

そんなやり取りを意識の海の底から聞きながら僕の意味はようやく覚醒した。

薄く目を開ける。木目の走った天井が視界に広がり、色々な薬のにおいが鼻についた。どうやら僕は大地さんの家の何処かの部屋（それも治療専用の）に寝かされているらしく、柔らかい布団に包まれていた。

僕の意識が戻った事に真っ先に気づいたのは当然の如く

「たいがああああー！！！！！！」

榎風な訳で。地面と平行に涙を流しながら飛んでくる。涙で泣きはらした赤い目とぐしゃぐしゃになった顔が突然せまってきたら当然怖い。怖いけど、横になった僕に避けようはないし、何よりここは感動の再開を演出するべきなのか？となると僕も涙を流さないといけないのだろうか？待て待て待て、準備できてないぞ。困った。いや、ここは困惑したようなふりとかをして惚けるべきか？それとも、あなたは誰ですか、とか言って新たなドラマ展開を用意してやるべきか？

そんなくだらないことを考えているうちに激突寸前っ！！

衝撃に身構えたその瞬間、僕の上を銀色の何かが薙いだ。当然の如くそれは榎風の顔面に直撃し、榎風が木の葉のように3m近く後ろに飛んでった。榎風の頭がなくなっていないかどうかが僕の唯一の心配です。

僕は意識をなくしてはいたものの、身体的異常は何処にもないらしく違和感なく身体を半身起こす事が出来た。そして、榎風を吹っ飛ばした犯人と会話を始める。

「僕は榎風を吹っ飛ばした事について怒るべきなのか、危機を回避してくれた事について礼を言うべきか……」

「きつと私を褒めればいいんだと思います」

僕は心的要因からくる頭痛に頭を抱えながら、まるで年五十本ホームランを量産する野球選手のような見事なスイングを見せた葵に顔だけを向けた。葵の手には金属バット、爽やかに、にこやかに、まるで本当に野球してきたかのように汗を拭う。心の汚れた人と特殊趣味の人間にはあまりにまぶしすぎる光景だろう。幸い僕はどちらにも該当しないので直視できる。

葵の敬語癖はまだ残っているが、これはもう丁寧語といったレベルだ。服装も麻紀さんや明さんに弄り回され、和服などではなく現代的なファッションになっている。良い変化だろう。茜はといえば相変わらずゴスロリファッションで騒がしいが。

「さあ、思う存分、私を褒めてください」

葵の一番変わったのはこの積極性だ。これは榎風の悪影響の一言で説明は済む。細かい説明を付け加えるなら、榎風自身が組み込んだ僕への好感という感情。それが裏目に出て、嫉妬による抑止力と化してしまっただけ。有り難や、嗚呼有り難や、有り難や。

僕の推測と長年の経験より榎風は残り約三秒で活動を再開する。

その間では葵を褒める事はもちろん、叱ってからちゃんと執るべき行動を教える事は不可能。僕は頭を撫でられたいがために頭を突き出している葵を放っておく事にした。

しかしながら、無視したのは更なる暴力の種をまく結果となる。

僕以外の手、すらりと長く、白魚のような指ががちりキヤツチ&スロー。って、スローッ！？いくら子供といっても少なくとも二十キロはあるかという人間を握力だけで掴み上げ、投げ飛ばすって……正直言つて女性が片手で出来るとは思えない。

「私を差し置いて、何するつもりかな？」

変に力の入った言葉でぼろきれの様に転がっていた葵に上から物言う榎風。幾らなんでもやりすぎだ。ここは一つ僕から言っておこう。榎風なら僕の言葉はそれなり、場合によっては致命的に聞くはずだ。

だがその必要はなかった。本当に悪い事だが、今の今まで意識の範疇外にいた人が僕の役目を実行してくれた。

「てめえはちつと静かにしとけ」

時雨さんは不機嫌に、心底呆れたかのように言い放つ。ため息も忘れずに、限りなく自然に吐いた。

だが、榎風の一瞥だけで、ひいつ、という女々しく頼りない声を上げてそそくさと部屋から時雨さんは退散していった。弱い。あまりに弱すぎる。時雨さんはきつと、何か榎風に関するトラウマがあるんだろう。それが僕が一ヶ月間見ていて行き着いた回答であった。でも、それにしては何かと榎風さんからんでくるよなあ、時雨さんは。

そんなことはさておき。時雨さんがいなくなったからには今度こ

そ僕が言わねば、と意気込んだ矢先、また別位置から声がした。どうやら、今この時間この場所に存在する神様は僕に榎風を注意させたくないらしい。

「秋宮、程々にしておけよ。程々に、な」

なんとなく含みがある口調で大地さんはそういった。結して厳しくはないが破ると怖いぞ、見たいなイメージを何処となく沸かせる。だが、榎風はそんなそんなものは何処吹く風、世界の中心は私だ、的な不遜で不躰な態度で大地さんの言葉やら雰囲気やら何やらを尽く無視して僕に抱きついた。そうしてようやく念願になったといった風に数秒別時空、異次元ヘトリップし、やがて真顔で言い放った。

「私は自己中心でね。自分と自分のものがよければそれでいいんだ」

言い終わるや否や、僕に頬擦りを開始する。正直言って、たまらなくウザイ。

それにしてもとんでもない暴言を言ってくれちゃったもんだ。この人なら自分が思いたてば、地球だって真つ二つにしてみうだろう。そういう考えにいたらないように僕が努力しないといけないんだろう。先が思いやられるよ、まったく。

「まあ、そんなことはどうでもいい。……調子はどうだ、『紀伊大河』？」

まるで僕の名前を確認するかのようにフルネームで僕を呼ぶ紀伊大地さん。実際のところ確認かもしれない。僕が本当に僕であるかの。正常にこの家出の与えられたキャストをこなしているかの。大地さんの言動はいまだにつかめないものが多々ある。掴んだところでどうにかなるわけではないのだが、好奇心ぐらい僕にもあつ

た。

変な事を勘ぐってもそれは結局疑いの域を出ない。嫌疑は嫌疑であつて、事実にも真実にもなりえない。まれに一致する事もあるが。

「よくもなければ悪くもないです」

そんな当たり障りのないような言葉が口から勝手に漏れた。しかし、そんな僕の言葉はよほど信用が無いようで、

「熱は？」

「痛みは？」

「食欲は？」

などと色々聞きなおされたあげく、熱を測られるなどの検査とも呼べない民間的かつ簡素な確認が行われた。諮るら最初から聞かなければいいのに、とぼやくと大地さんはなんとも取れない微妙な薄い笑顔をその均整のとれた美顔に浮かべるだけだった。

さて、そうこうしている内に時間は過ぎてゆき、もう日は完全に地平線に没しようかという時だった。

倒れたわりになんともない僕を見て榎風がここぞと言つばかりにじやれて来る。抑止力の役割をしていた葵も明さんや麻紀さんに（玩具として）連行されていつてしまい、されるがままに僕はなつていた。大地さんはまったくもって無関心のように無表情でその光景を眺めている。せめてリアクションぐらいしてほしい。助けてくれるならベターだ。

そんな僕に救いの手を差し伸べてくれたのは実に意外、冥王星が惑星じゃないと決まってしまったぐらい予想外な人物だった。

「そのくらいでやめたらどうですか？」

凹凸のない声。それは先ほど逃げるように出て行った時雨さんではなく、無論和湖さんでも、朝熊さんでも、麻紀さんでも、明さんでも、由愈でも、夏雪さんでも、大地さんでも、葵でも、茜でも、当然僕の付属品にでもなろうかという榎風本人でもなかった。

不甲斐ない事に今の今ですっかり忘れていた。悪い。

入り口から土鍋を持って足音無く歩いてきたのは他でもない、いっしょに倒れたはずの鏡だった。

「倒れた時にはお粥です」

微妙にずれており、間違った見解を何の前置きも無く言い放ち、無言のまま大地さんの隣に着席。

いやいやいや、待てよ。僕の記憶は飛んだのか、おい。いくらなんでもそりゃ無いだろ。確かにあの時、鏡が目の前で倒れていつて……あれ、鏡が倒れたんだっけ？鏡が倒れると何で僕まで倒れるんだ？すっかりしろよ、僕。思い出せ、思い出せ、思い出せ。記憶を性格迅速に引っ張り出せ。

そんな記憶混乱中の僕の横で、大地さんは何語の無いように半から顔を上げ、もう大丈夫か、と聞いた。

あ、そうか。ただ単に僕が目覚ます前に起きて、部屋を出て行ったんだ。事実とはそんなもん。違いない、そうに違いない。

すつと視線だけを大地さんに向け、変な間があつてから首肯した。正解正解大正解。ホームズもコロンボもコンも吃驚の推理だ。

「ん、どうした、どうか調子悪いか？」

僕の思考は相当外見に出ていたらしく、空が落ちてくるのではないかというくらい心配した顔で榎風が僕の顔を覗き込んでいた。まったく、心配性にもほどがあるぞ、榎風。

僕は例え通りそれが要らぬ心配、杞憂である事を示して、榎風の

頭を遠くに引き剥がす。 んでもって、病み上がりの鏡が甲斐甲斐しく作ってくれたであろうそのお粥を受け取ろうと体ごと向きを変える。

鏡の身体が倒れている最中だった。

どうやら鏡はまた倒れてしまったらしい。 幸い、鏡の身体を恐ろしいまでの反射神経で大地さんが引き、土鍋ごとお粥を弾き飛ばしたおかげで無傷であった。

それに僕も今回は倒れなかったらしい。 何故かって？ 頭にかかったお粥が目覚ましの役割を十分に果たしてくれたからさ。

第41歩：幻影鏡界3

正直に言つて、鏡が目の前で傾いていき、それを大地さんが引つ張り戻した時、間違いなく僕は動転していた。何せ、一月ばかり同じ屋根の下いつしよに暮らし、同じ釜の飯を食い、それなりに仲良くなった。とは言い難いが、とにかく見知った人間の少ない僕にとって余り気持ちのいい事態ではない。簡単に言えば僕はこういう状況に酷く不慣れで、その上対処法も習った事も無い。

だからどうした、と言われてしまえばそれまでの話なんだが……。とにかく、その瞬間に榎風に指示されるまで、何の身動きも出来なかった僕を出来ることなら許してもらいたい。これもまた誰に對して言つてるんだか僕には見当がつかない。

でもとりあえず、僕はまずしなければならぬ事がある。早急に、限りなく迅速に。

「~~~~~!!!」

倒れかけた、鏡のすぐ近くで絶叫するわけにも行かず、脊髄反射であげそうになった絶叫を理性をもって噛み殺した。しかし動転した割には良く耐えれたものだと思う。目の前に手鏡でも置いて自分を褒めてやりたい気分だったが、そんな恥ずかしい行為はこれまた理性が許すはずが無く、僕の使える残りの理性は電子の質量ほども無かった。

榎風はといえば当の本人より早く痛みに気づいたらしく、葵と茜を両手に掴んで投げ飛ばし、水を三秒以内に十ガロンもってこい、と意味不明な指示を飛ばしているのが耳につく。

僕と同じく榎風も動揺してたんだろう。これはわざわざ僕のために動揺してくれる、いつもは完全無欠のよくなポテンシャルを持つ榎風に好意を抱かなければならないシーン

なのかもしれないが、僕にとってはむしろ投げ飛ばされたにもかかわらず文句の一つも言わず甲斐甲斐しくも無体な命令を守るために旅立った二人に好意を抱くね。誰だってそうだろ。それにきつと榎風のことだ、これも演技、即座に考え付いた計略だと思うのは僕が人間不信な所為なのだろうか？

まあ、僕の場合この程度ならすぐ『直る』だろう。

僕にお粥がかかった所為で、榎風の意識の外になってしまっている鏡の方が問題だ。見た目的には年齢にさほど差は無いが、僕は『魔術製合成生命体』、鏡は『人間』なんだ。致命的にこの差は大きい。いくら料理が上手で、仕事が速く、掃除に抜け目が無くて、仕草にそつが無く、感情を押し殺したように出来ても、言い方が悪いかもしれないが一般人だ。

僕の危険度とは長い目で見れば雲泥の差がある。そんなわけだから榎風、早く鏡の倒れた原因を調べろ。僕のことなんてほつといてさ。別に拗ねやしないから。

何てことが自分の口からは吐き出せなかった。なんせ口が利けないほど痛い。尋常じゃない。初体験といっても良いぐらい痛い。ちよつと待て、いくらなんでもおかしいぞ。この程度ならもう痛みは治まって当然、のはず。治癒能力が早々なまとも思えない。いたいお粥は何度だったんだ。百度か？二百度か？はたまた五百度か？その程度なら意識のはつきりした状態で斬られるより、痛くはなはずだ。

前言を撤回させてほしい。榎風助けろ、哀願でも何でもしてやるから助けてください、マジで！！

「鏡を早く遠ざける！！急げ！！ぶつ殺すぞ！！」

そんな榎風の罵詈雑言を聞きながら僕の意識がブラックアウトしそうになる。ブラックアウトしてやるもんか。特に意味はないけど足掻いてやる。見苦しく抗ってやる。榎風がそこまで言うのなら、

僕は榎風だけのために醜態でも何でも曝してやる。

ズキン

ズキン

ズキン

頭が痛む。

体が傷む。

心が悼む。

止まること無く、

歯止めが効かず、

痛みが、

害悪が、

身体中に蔓延していく。

呼吸がしたい。水が欲しい。欠乏している。枯渇している。どうしようもなく、満ち足りて無い。欲求不満だ。眼が充血してしまっただろうか、世界が赤い。紅い。朱い。否定。赤くなんて無い。いつもの色だ。理性で 欲求を悉く拒んでやる。

痛い。痛くない。

欲しい。欲しくない。

怖い。怖くない。

助けて。助けなんて要らない。助けて。助けてほしくない。助けて。助けて。

助けて。助けて、助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて。助けて！

榎風。榎風。榎風。榎風。カナギ。カナギ。カナギ。カナギ。かなぎ。かなぎ。かなぎ。かなぎ。

貪欲に、醜惡に、助けを求める。

無欲に、純潔に、榎風を求める。

何処に居るんだよ、榎風。手をさしのべてくれよ、榎風。榎風が近くにいてくれたら、何も要らない。榎風が触れてくれるなら、他の感覚なんて

喜んで捨ててやる、そう考えが行き着く寸前に温もりが、僕を包み込んだ。

柔らかく、しなやかな感覚。

僕の感覚はこれを感じるためにあったと言っても、過言どころか全然足りないほどだ。愛しく、恋しく、狂おしいほどの安心感。鼻をくすぐる甘く、艶やかな香りは……榎風の紙の芳香だろう。抱きすく

められる形になっているだろう僕は、榎風の唇が耳元に近づいてくるのを敏感に感じ取った。首にかかる息がくすぐつたい。

これでもか、と言うほど体が密着し、接触するほど口が近い。そこで、榎風は数秒の間を、実際時間など経っていなかったのかもしれないが、榎風は一言だけ呟いた。

「大丈夫　、私は此处に居る」

それは言葉を用いた『魔術』ではなく、それは論理で固めた『魔術』ではなく、それは現実の顕現の『魔術』ではなく、それは奇術にも似た『魔術』ではなく、種も仕掛けもなく、

卑怯も虚偽もなく、偶然も必然もなく、

れっきとした『魔法』として存在する、限りなく単純な、誰にでも使える、けれど誰に対しても使えるわけじゃない、暖かい、暖かい、涙が出る程暖かい　『魔法』だった。

もう、痛さなんてない。

もう、助けなんていらぬ。

全て、喜びも悲しみも榎風がいればそれでいい。

「榎風　愛してるぜ」

「知ってるよん、大河」

とりあえず、コレくらいの冗談と本音の境目ぐらいのことを言つとこう。これが僕らの、榎風と僕の関係だ。今までも、今も、今からも、悠久に、永遠に、天穰無窮に続く関係だ。

その為にも、

永劫を途切らせないためにも、

この茶番を終了させよう。
この疑問を解決させよう。

この単純命題を、

余すところなく、

完膚無きまでに、

証明してやるよ。

さあ始めようか、

『神々の墓守』、

僕と勝負しよう。

榎風と対決しろ。

なめてかかると、

痛い目を見るぞ。

白状は今のみだ。

榎風のためなら、

僕は執拗だから、

覚悟しておけよ、

『神々の墓守』。

場合によっては、

完全に滅ぼして、

最悪見せてやんよ、世界。

第42歩：幻影鏡界4

鏡に対しての疑問点は、大まかに纏めると今のところ二つと云つてよい。細かく分けていけば、それなりの数に上るのだが、そんなものは聞くものじゃない。ある程度、考え、推測し、穴埋めする事だ。聞きすぎるのは、逆に相手にヒントを与えることになる。そんなのアホらしい。馬鹿馬鹿しい。

さて、行こうか。証明をしに。

さて、始めようか。終わりを。

鏡に聞くのはお門違いな気がする。否、本人でさえ分かってないだろう。第三者、かつ深い関係を持つているあの人、あの人ならば分かるはず。きっと本人より事態を理解し、それなのに手を出さない彼の人。智で勝てる気がしない、力で勝てる気がしない、徳で勝てる気がしない。

それでも戦つてやろうじゃないか。どんなことで負けても、最終的に勝つてやる。何せこつちには榎風がいるんだ。僕が覚悟を決めるだけで、勝負が決まる。楽勝の必要性なんて皆無、圧勝の意義なんて無視。

深呼吸。音もなく息を深く、深く落としていく。よし。

僕が立っているのはこの家の脳こと、大図書館の前。ここに、紀伊 大地という人間が居る。僕と同じ白銀の髪の持ち主。

ガラリと戸を開く。デジャブだ。前に来たときは……奇しくも鏡と一緒にだったな。因果か、縁か、偶然か。何にせよ、どうだっていいんだ、今はな。必要ならば推測するまでの話。

「やあ」

大地さんは一ヶ月前と何ら変わらない口調で、表情で、体勢で言い放つ。ああ、確か前は緊張してたんだっけ。あの吸い込まれるよ

うな琥珀色の目を見て、事実、精神が吸い込まれていた。

今は違う。

緊張なんて欠片もなく、あるのは冷えきった理性と冷酷さ。むしろ、あちらが緊張しているようにさえ思える。あの清閑な顔に冷や汗なんて似合わないにも程がある。人一倍鋭いが故に僕の覚悟を感じとったのか……。即時否定、覚悟なんて大地さんにとっては紙同然、指先一つ、口先三寸で打ち破ってしまうだろう。冷や汗は別の起因、さしずめ焦りと言ったところだろうか、そこから来ているようだ。

本来ならこんなところに居たくないはずだ。鏡の横についてやりたいのだろう。でも、大地さん。そんな事は許さない。貴方にはちゃんと与えられた『役割』を果たしてもらいます。そのあとにどうしようが、見逃してやるし、干渉する来もない。

さて、証明を始めよう。

これが僕の戦い方だ。総合力で、榎風への忠誠心で、勝利して見せようじゃないか、紀伊 大地。

問一。

まずはスタンダードな質問だ。確認と言ってよいほど明らかな事なのだが、こればかりはどう調べも見つからない。明確な証拠に欠ける。『証明問題』においてこれは大きな痛手だ。だからこそ、聞く。

「大地さん、一体鏡は……何の『神』なんですか？」

あんな幼子が此処にいて、

ここは神が輪廻する場所。

十分すぎるまでのヒントじゃないか。ヒントの出しすぎでこつちが怒りたくなる。でも、これは状況からの推測で神と言ったまで。状況が揃えば十分だと思うけど、一々『神』には別々の能力が備わっていると話は別だ。処理・対処の仕方がたった一つの要項に左右

されるなんて、不平等の極みだ。平等にする必要なんて無いが。

ほう、と全く意外そうじゃ無い顔で、意外そうに嘆息する。時雨さんのように巧くはないが、演技がかった癪に障る行動だ。だが、癪癪を起こすわけにはいかない。

私憤に流されるわけにはいかない。

努気を含むわけにはいかない。

激情を覚えるわけには行かない。

冷静に、沈着に。

泰然と、自若と。

磊落に、鷹揚に。

従用と、恬然と。

オーケー。問題ない。僕はいつも通り、人の揚げ足を取るようにして、相手を追い詰めて、叩きのめすのだ。或いはそれが七歳の子供であろうが、或いは八十歳の老人であろうが、或いは理由もなく剣を振るう最強の騎士だろうが、或いは贖罪を生まれた瞬間から義務付けられた一族だろうが、或いは人形を用いて孤独を排除した人間だろうが、或いは優しすぎたが故に全てを放棄した患者だろうが、或いは人にして人の全てを超越可能な魔法使いだろうが、或いは製造かつ生成物である個体だろうが、或いは 自由奔放かつ強欲、憎らしくも愛らしい、世界最高の魔術師たる女性であろうが。

いつも通りにやればいい。

それが、僕のスタンスだ。

紀伊 大地。答える時間をくれてやる。さつさと答える。言っておくが容赦なんて、つい先程忘れちゃった。残念だったな。

僕は顔を歪める。不適に。

僕は口を曲げる。不敵に。

僕は気が短いんだ。この可愛い顔に反してね。……これは冗談だが。

「君の知性と、直感を誉めるべきか。はたまた、私の迂濶さと、愚

鈍さを厭うべきか。はは、こんなことを言つては揚げ足をとられてしまいそうだ。長い喋りは時雨の十八番、か。全くその通り。私は自分のロールを守り、単純明快に『事実』を語ろう」

僕は喋らない。唯の聴衆となり果てよう。無駄に文を長くしたくないしね。

「彼女、鏡の能力が故につけられた二つ名は、いや、忌み名は『逆転の女神』」

僕は喋らない。唯の受信機となり下がろう。説明に曲解を交えたくないしね。

「彼女が出来ること、起こすこと可能な現象は実に簡単で、単純だ。しかしながら、彼女は神達の中でも、純然たる力で敬われている」

僕は喋らない。唯の記憶装置に貶められる。一言たりとも聞き逃したくないしね。

「至上最強・最果の力とまで恐れられた所以の彼女の能力は『反転』」

僕は喋らない。喋りたくないから、喋らない。

「有りとあらゆる事象を感じるがままに、意図するままに『反転』させる。君の存在を有から無、無から有なんて、朝飯前。当然の如く、生死だって同じだ。ま、君にとっては仲間なのだから、関係のない話だ」

僕は

「くっだらねー」

とだけ言い放ってやった。

「最強？最果？どこがだよ。寧ろ、最弱だ。寧ろ、スタートラインにすら立ってない。ああ、これもあれか？《反転》とやらの力のせいとか？なら尚更、弱い。最弱なんて称号さえも勿体無い。攻略なんて楽だ。ま、そんな事はどうだって良いんだ。もつと訂正しなくちゃならないことがある。一つだけ言っておく、『紀伊 大地』」

もう彼に対する敬いなんて、なくなった。榎風が口添えでもしない限り、二度と尊敬なんてしてやるものか。

「てめえを仲間なんて思ってたねえよ、少なくとも今はな。精々、榎風の知り合い。よくても、榎風の仲間の仲間だ。覚えとけ」

僕は紀伊 大地と言う人間を睨み付ける。睨み付けたのは良いが、正直言えばこれ以降の対応に困っていた。何せこれだけの大見得を張り、啖呵を切ったのだ。今更、さあ次の質問です、何て言えやしない。策を練らなかつたのが、決定的、致命的なミスか。さてはどうしたものか。

まあ、案としては今から謝って、関係をの回復を図るという手や、このまま踵を返して消え去る方法があるが、どっちもとりにたくないね。となると、反応待ちか。後手にまわる見たいでやだね。

ま、このことを聞いて分かったこと、というか推測のついたことが、一つある。一番気になっていたことだ。

僕が倒れた理由。鏡の能力が何らかの原因で、暴発したと考えるのが自然だろう。意識があつたこそ倒れた。逆に意識がなければ起き上がったんだろうか。そんな仮定はどうでも良い。ソレにしても、

意識にまで作用するとは、なかなか《便利》じゃないか。となると、あのお粥があんなにも熱く感じるのは僕だからこそか。なんともまあ、限定的に作用するなんてやっかいな。あ、あるとき榎風が離れると言ったのはそのためか。つーか、榎風。そう考えると知ってたのかよ。全く人が悪いっというか……。榎風なら良いんだけどね、それぐらいなら隠されても。

改めて、紀伊 大地を見てみた。彼は深さのある目で僕と視線を交わしている。が、やがてその目は次第に深さを失っていった。それどころか、含み笑いまで始め、結局的に最終的に本当に笑い始めたのだ。これはいくらなんでも酷い反応じゃないか？一応、僕だつて真剣に言ってたんだけど。

「ハッハッハ、やっぱり《君》は《君》か！どこまで言つても代わり映えせず、なのに新しいことばかり観させてくれる。流石、秋宮の恋人だ。私なんかでは全然適わない。《君》が《君》であるならそれで良い。君が仲間と思ってなくても、私が一方的に独善的に仲間だと思つて、信頼させてもらうよ。君は秋宮のためだけに、私を『神々の墓守』を利用するがいい」

何というか……。悔しいけど、人徳じゃ紀伊 大地には勝てないらしい。勝てない、か。勝つ必要なんて何処にもないんだけどね。それでも勝ちたいと思つてしまうのはやはり、子供じみたことで、徳がないんだろう。無いものは無いで、欲しいんだ。子供っぽくもね、人間ではない僕が言うのも滑稽だが。

「あと、一つ言っておくなら、秋宮はかなり一途な奴だから、浮気なんてしてやるなよ？」

こんなオチまでつけられたら、それこそ僕の完敗じゃないか。榎風のことに語ったことは許してやろうじゃないか。って待

て、ちょっと待て。これじゃ僕が独占欲の強いやつみたいじゃないか。訂正、訂正。むしろ、消去だ。いや、榎風はその、なんつーか、えっと、端的に言えば好きだけどさ。独占欲がないわけではない。でもそれは、あくまで榎風の仕事であって……。

彼の一言でここまで惑わされている時点でさらなる負けを喫したことも、考えていることが全て顔に出て百面相していたことも、それを見て紀伊 大地が笑いをこらえるのに必死な表情だったことも、気付くのは随分後の話だった。

第43歩：幻影鏡界5

問二。

今までのことを勝手に全て水に流し、僕は疑問を投げ掛ける。でも実のところ、九割九分九厘の疑問が最初の質問の中に含まれていて、今から聞くのは単なる暇つぶしのようなこと。別に質問の中心が鏡でなくなつて、紀伊 大地だろうが、希崎 時雨だろうが、誰だろうが、関係のないことだ。この問の例外は唯一人、秋宮 榎風のみ。

「鏡と僕は 何処かで何らかの因果が繋がっているんですか？」

単純に、鏡と一緒に倒れたのが《僕》で、今、紀伊 大地に鏡について問いたただすのが《僕》でなければならぬのか。
そんな哲学を含んだ疑問。

此処に何かの必然性が隠れているならば、隠されているならば、話は大きく変わってくるが、紀伊 大地ならほぼ100%に近く、偶然という解を持ち出してくるはずだ。僕はその偶然という言葉が聞きたい。だから、榎風については無駄、僕と榎風は宿命付けられて運命の延長線上で出会ったんだから。ロマンチックに言えばね。

「はっ、『因果』ね。胸糞悪い言葉だ。テメエの考えてる『因果』つつーのは何なんだよ、え？《生まれながらにして持っていた縁》ってか？くったらねえ……。そんな言葉を持ち出して、物語の主人公にでもなつたつもりか？阿呆め。んなもんが、この世にあつたまるかよ。偶然も必然も後付けだ。机上の空論だ。哲学者の詭弁だね！そこで出会った事実以上に何の意味を求めてんだよ。そんなことを考えて偉くなつたつもりか、小僧が。そんなことを考えてること自体が馬鹿なんだよ。下手に考え巡らしてねえで、とつとと事実

対処してんだ。それがテメエの、いや《物語の出演者》達とでも言っておくが、目に映ってる奴等の限界なんだからな」

当然のことながら、こんなくだけた喋り方で、長々と無意義に口を開く人はこの家の中にたった一人、かつ僕の知り合いの中にもたった一人だ。見ないでも分かることが幸か不幸か、不幸中の幸か否かは、全く関係のないことだが頭の奥の方にふっと沸いた。それに添付するような形で彼人の名も浮上する。

希崎 時雨 自称・魔法使い『ギフト』。

そういえば、自分で魔法使いと名乗って以来、特に魔法使いらしい行動を僕は見ていない。

魔法使いらしい行動がどんなものかと問われると答えようはないが、とにかくそれっぽい物を見ようともしていない。

理由は分かりやすく、そんな気分じゃなかっただけ。

魔法使いなんて今まで僕にとって架空上の人物、御伽噺の住人、夢物語の産物レベルでしか思っていなかったから、時雨さんの言っていることを認識できていないのかもしれないし、はたまた本能的に自我の奥底の方でいつのまにか受け止めてしまっているのかもしれない。だから 自称。証明されていないからこそ、自称がとれない。ナイフを浮かせるなんて、よく考えなくても魔術で実行可能なんだよね。

時雨さんは僕の後ろから声をかけた訳じゃない。前方にいる紀伊大地の上からだ。別に中に浮いている訳じゃない。巨大な本棚の上に座り、足を気だるげに足を虚空に揺らし、こちらを蔑むように見下している。果たして僕に気付かれずに、あの位置にたどり着くには……。

天井をはって来たのか！？

わざわざあんな皮肉を言うためだけに、埃が積もっているだろう狭い天井裏を葡萄前進のようなことをしながら移動し、ばれないようにそっと静かに天井を開け、汚れたであろう服を綺麗にしながら、

いそいそと時雨さんがスタンバイしていたとしたら、何となく心の奥の方に切なさを感じる。

あるいは　魔法で一瞬で、か。

ま、時雨さんの言った通り、そこにいるという事実があるのだから対処しよう。だからといって、僕は必然や偶然について考えるのをやめたりはしないが。

「それは僕と鏡の間に因縁はない、ということですか？」

「はっ、それぐらい自分で考えやがれ。考えても分かんねえなら調べやがれ。人に聞いたなら教えてもらえるような甘っちょろい世の中じゃねえんだよ。けっ、それともあれか？秋宮に甘やかされて続けさせ　っおわ！？」

ぐらりと、本棚が傾いた。巨大な本棚が意図も容易く倒れ始めた。とある人の所為で。言うまでもなく、見るまでもなく誰か分かる。

本棚の上に座っていた時雨さんは重力従い、落下する。

そのまま僕は何らかの方を用いて着地すると思っていたが、まさしく人外のごとく、魔法使いらしく　空気を蹴った。そこに見える板でもあったかのように跳躍して方向を変え、僕ね後ろにある扉まで三度連続空中をジャンプすることによりたどり着いた。僕の上を過ぎていくときに軽く舌打ちしていった。それだけの余裕があると思いきや、その顔は壮絶なまでに恐怖に歪んでいた。そこまで必死に逃げるか、普通。

僕は一步も動けないまま、時雨さんを見送ることしか出来なかった。考えても見てほしい。外見的にも、精神的にも年上の人間がこの世の終わりを目視したような顔で過ぎ去っていくところへ、声をかけられる人間が果たしているのかどうか。きっと僕は世界の人口の一億分の一もいないと思う。この国の人口で換算すると約一人だ。そんな一人に僕はなりたくない。

「コリア、マテや！」

当然のごとく、僕のなかの一億分の一可能性と言う壁を越えてしまった人は、自分が言ったことも何処吹く風、銀河の彼方に忘れてきたと豪語してしまうだろう。雰囲気を纏って颯爽と部屋奥から走ってきた。恐ろしく早い。選手には悪いかもしれないが、世界陸上に出たつて、周囲に大差をつけて優勝してしまうだろうね、きっと。その人こと榎風は時雨さんを追いかけていたにも関わらず、僕の近くに来るや否や直角に近い角度で無理矢理轉身、僕の方に突進してきた。歪な軌道の所為で避けることも叶わず、がっちり捕まってしまった。捕獲されたと言っても良い。後ろから抱きすくめられるような形となる。

「大河っ、何も変なことされてないかつ！？ 傷つけられてないかつ！？」

時雨さんとは別の起因からくる必死の形相が、僕の左側に張り付いている。いつの間にか頬擦りまで始めやがった。別に良いんだけど。

何かしら返答しようと思った瞬間。

トサツと、一冊の本が落ちてきた。

鍵付きの金縁のされた荘厳は雰囲気をもつ分厚い書籍。

鍵がないことには開けることができない作りになっており、内容を把握することは無理。

背表紙にも何も書いてないし、裏表紙も同様。ただ、表表紙には何かしらの文字が綴られてはいたが、僕の知っている言語ではない。部屋を埋めつくすの蔵書数を誇るのだ。僕の知らない言葉で書かれたものがあっても何の不思議もないのだけれど、無性に気になって、

榎風を僕から引き剥がし手にとって見る。

屈んで本に触れたのと同時に、横にもう一冊本が落下してきた。それなりに僕は驚き、上を見上げ

「おわっ!？」

る間もなく、後ろに引かれた。本は咄嗟のことに放してしまつて、随分と前方の方に固い音をたてて、床と接触した。あ、本は前方に落ちたわけではなく僕が後ろに下がったのか、とか、角でも床にぶつけて傷が入っていないか、などとどうでも良いことを考えている内に『崩落』は始まった。

ドサッ

一冊落ちる。今まで落ちてこなかったのが不思議だったんだ。当然のように落ちてくる。

ドサドサッ

二冊落ちる。歯車が噛み合つてようやく車輪が回りだすように、時間が緩慢と動き出す。

ドサドサドサドサッ

四冊落ちる。時間を止めていたのは恐らく時雨さん。逃げながらフォローもするなんて何ていい人だろう。

ドサドサドサドサドサドサドサッ

八冊落ちる。僕より近くにいた紀伊 大地は大丈夫だろうか？あ

の人に対しては無駄な心配だろうけど。

十六冊落ちる。本や書籍が。

三十二冊落ちる。指数関数的に。

六十四冊落ちる。滝のように慟々と。

百二十八冊落ちる。カストロフだ。

二百五十六冊落ちる。一種の自然災害。

五百十二冊落ちる。圧倒的な質量。

千二十四冊落ちる。数えるのを止めた。

この部屋の大半を占めていた本棚が、ドミノ式にあっけなく全て倒れる。

格言じみた風に言う訳じゃないけど、崩壊って怖いね。エントロピーは増大するものだけどさ、いくらなんでもこの場合まで当てはめることはないんじゃないか？いくらなんでも惨すぎる。

当たり前の話だが、この部屋が本の海になった事により随分と大きな音が出た。いくら巨大な家だからといって、隅々にまで聞こえないはずがない。そこから導き出される答えは簡単なことで、家人総集合するだけ。

僕と榎風と紀伊 大地は呆然とするのみ。まあ、紀伊 大地に限っては初めに夏雪さんがやって来る直前に覚醒し、いそいそと片付けに入っていたが。本に近づいていくとき、うつすらと目に涙を浮かべていたのは、かわいそうなので言わないでおこう。パーソナルと随分ずれている気がするし。

でもあえて、一言だけ言っというてやる、紀伊 大地。

……ご愁傷様。

もしかしたら手伝ってあげるかもしれませんが、榎風に言われるまでは手伝いませんよ、僕は。しかしながら結局、葵と茜が小さな体で労働しているのを見るに見かねて、後々自主的に片付け始めるだけだね。

このお話が平和な日々の一ページ。
ここまでが平和な日々の僕の日記。

さあ、終わりの始まりだ。
『
×××××』の話。

第44歩：幻影鏡界6

僕達、もとい、榎風一人が崩落させた本棚を家人総動員で改修、復元をローテーション体制をとり、実務に勤んでいる。勿論の如く仕事サイクルの中には犯人張本人の榎風を筆頭に榎風のお付きである僕、茜、葵を含み、体調不良の鏡は組み込まれていない。

そんな自業自得的な忙しさの中、僕は紀伊 大地に紀伊 大河個人として呼ばれた。自分で『あんなこと』を言っておいてなんだが、現在の僕に個体と識別出来る名前らしい記号が大河と呼称されたまま。あんまり好きじゃないんだけど、特に苗字が。名前は榎風がつけたからいいけど。

というわけで、現在僕が立っているのは、全く関係のない訳ではないか、第三者の鏡の部屋の前。障子の引き戸の向こう側に紀伊 大地がいる。存在している。

考えても仕方ないと僕は障子に手をかけて、横に開いた。木と木が擦れる音と引き換えに、向こう側の世界と対面した。

中に居たのは想定通り、紀伊 大地。いや、寧ろいなかったら困るか。加えてもう一人、当然といえば当然なんだけど、部屋の主たる鏡も部屋にいた。着ているのは現代的な普段着ではなく、寝巻きなどでももちろん無く、純白の浴衣。染み一つない白妙の、光を反射して眩しい皎白の、見るに耐えない鮮白の、吐き気がするほど真っ白な薄手の生地で作られた一繋ぎに作られた服。蒼黒の髪と蒼白の衣のコントラストが美しくも醜く、僕の目に映る。

言葉を掛けられるどころか、見向きもされなかったので僕は一言、失礼します、と断って入室する。畳敷きの床を一步一步、音を押し殺し、気配を消滅させ、恐怖心を押さえつけて、鏡と紀伊 大地の元へ歩いてゆく。

近づいて、布団の上に掛け布団もなしに寝かされている鏡。普段より断然、『神』らしい姿。皮肉だ。あまりにもシニカル。体調が

悪くなった現状になって、ようやく『神』らしくなるなんてアイロニーを通り越して、コミカルだ。しかしよく見てみると、鏡の頬はやせ細り、肌は枯れ、目の光は消えて、胡乱に、空虚に、伽藍洞に、そこに存在していた。

「……………酷い、ものだろ？」

と、紀伊 大地は鏡に視線を向けたまま、痩せてしまっている鏡の髪を撫でながら、虚空にでも話しかけるように呟いた。いや、実際誰に向かつて喋っていなかったんだろう。たまたま僕がそこにいただけで、たまたま時間が合致しただけ。偶然の産物。時雨さんの前で言ったら、また机上の空論だとか言われそうだけど。

何をするでもなく、ただ僕は立ち続け、紀伊 大地は悲しげな目で鏡を見ている。……………酷いかもしれないけど、感傷もし無いし、感慨も無い。

「ああ、悪いな。そろそろ話をしようか」

十分程度の時間が過ぎて、ようやく自我を持った言葉を僕に向けってきた。どちらかと言えば、紀伊 大地、貴方の方がよっぽど酷い気がする。初めての事じゃないくせに、何故貴方はそんなに悲しむんだ？僕には分からない、分かんない。

その時だった、鏡が僕の方を体を半分だけ起こしてみていた。否定、いつの間にかそうしていて、今更ながら気づいたのか。鏡はじつと、無感動に僕を見つめている。僕の向こう側でも、僕より近くでもなく、僕という一点を見ている鏡。まったくもって無駄なのに、まったくもって無義なのに。

ポツポツポツポツポツポツと聞こえないほど小さな声で、連呼する。恐怖しかない。

周りが静かな所為か、だんだん耳が慣れてきて聞き取れ始める。

「……貴方は……誰……？……貴方は……誰……？……貴方は……」

正直に言えば、おぞましい以外のなんでもない。

だって、一月も一緒にいたんだぞ？昨日まで一緒に食事をし、掃除をし、笑いあつてはないけど顔を突き合わせていたのに。あまりにも唐突に、事前の準備もなく、僕は 忘れられた。忘れられた。忘れられた。忘れられた。忘れられた？なんの前触れもなく、否、伏線はあつた、否否、伏線にすらなりえていない証拠と事実があつた。なんで……気付かなかった。

鏡はなおも僕に貴方は誰貴方は誰貴方は誰貴方は誰貴方は誰あなたはだれアナタハダレと問い続ける。僕に一体何を問うているのか、僕は一体何を答えてやればいいのか、理解不能だ。もっとロジカルに、理路整然と、順をおつて説明してくれよ、なあ鏡。

見下すような位置から向けていた視線を反らし、紀伊 大地に向けてみる。鏡という腫れ物から目を背ければ、そこには鏡以上の腫れ物、いや、それはもう切り傷、切断面、末期的な癌だ。見るだけでこつちも痛めつけられたような感覚。惨めで惨めで惨め過ぎる。僕はこの二人に何をすればいい？誰でも良いから、教えてくれ。もう考えるのも……嫌なんだ。

そして、僕は誰も教えてくれないから、考えることを放棄した。

紀伊 大地に全部聞こう。推測も証明も揚げ足取りも全て辞めて、ただ口を開いてくれるのを待とう。赤の他人を待つのは慣れていないけど、待とう。口を割らせる文句を考えるさえ、僕にはない。

鏡の傍らに紀伊 大地に倣って腰を下ろす。流石に痩せ細つたりはせず、人類の中でもあり得ないほど整った顔はそのまま、比率の狂つたように胸が短く手足が長い身体もそのまま、癖のない白銀の紙もそのまま。心だけが、精神だけが摩耗し、肉体の中に入っている存在。

さて、僕はどうしようか？

決まってる、待つんだよ。

「外に出ようか」

一時間ばかり待ち続け、紀伊 大地は淀みない口調で僕に提案した。

ようやく、か。

僕は肯定の言葉も否定の言葉も口にせず、立ち上がる。言葉はなくともこれは肯定。

紀伊 大地もそう思うはずだ。この状況下で否定にとるほど認識力は錯誤していないだろう。他人の心なんて知ったこっちゃないけど。

案の定、紀伊 大地は僕に続いて立ち上がり、先行して部屋を出た。どうやら一時間という長い時間は無駄に座っている為のもではなく、整理をつけるための時間だったのか。鏡に対する折り合いはつかないだろうけど、僕に説明するぐらいなら問題のない思考時間という空白。

僕は後続して廊下に出る。裸足の僕にとって板張りの床は冷たい。家の中で靴を脱ぐのが日本の習慣であるのは知っていたし、一月も経てば慣れてくる。それでもこういう、ふとしたときに靴履きの生活が恋しくなる。

そんなことは一切切り捨て、無意識と言って良い事務的な動作で紀伊 大地に続く。方向で言えば玄関。考えるまでもなくそれなりの期間ここに住んでいれば、迷路の如く入り組んだ通路故に行き先が感覚として分かる。正直、嫌でも一ヶ月という時間を認識させられて落ち着かない。榎風と僕にとって異例の長期滞在に戸惑う。

榎風がそれで良いなら良いか。

一分もしない内に玄関に辿りつく。

そこで靴を履き替えようとして、また惑う。

いや、今までのに比べればほんのささやか、取るに足りない事だけど、精神的に嫌悪。僕は裸足だ。繰り返す、僕は裸足だ。いまから外に出る僕にとって如何せん、これは危惧すべき懸案事項。素足で靴を履くのは抵抗がある。靴下を履いていないならサンダルという手もあるが、この寒い時期にそれは避けたい。第一、僕はサンダルというものを持っていなかった。

迷いに迷い、迷いきった挙げ句の果て、仕方なく素足でスニーカーに足を入れる。日本に来て榎風と買いに行った安物の靴の為、肌触りは悪い。あの時、榎風の言ったように高くて生地のしつかりした靴にしておけばよかった。あの時点でこんなことを想定できるはずは、微塵もないから後悔しても仕方ないか。

そんなこんなしている内に、紀伊 大地は庭の乾いた地面を通り抜け、門前で立ち止まって僕を待っていた。僕の方に視線を向けているが、避難の色はない。僕の方を向いているだけで僕を見てはいない形だけの目線が気持ち悪い。それでも僕は待たせては悪いと思い、小走りに近づく。

僕が追い付くよりも前に紀伊 大地は早足に歩き出した。だか所詮は歩き、すぐに追い付くことができた。でも僕は紀伊 大地の一步後ろを、着かず離れずの距離を保ちつつ、まるで尾行でもしているかのように、ゆっくりと歩いていく。

足音は一つ。

重なっている訳ではない。

僕のパタパタとなる不似合いな可愛らしい音のみで、紀伊 大地の足音はない。足音を立てずに、己が存在を消したいように、消音して歩く。消しているのはきつと意図した行為ではなく、生まれついで綺麗な歩き方のおかげ。いや、歩き方のせい。これも才能か。一体この人はいくつの《才能》を持ち合わせているのだろう。僕の及ばない《才能》を。

どれだけ物理的に時間がたったかは計っていないから分からないが、

体感時間にして一時間程度で目的地の入口らしき所に着いた。

山。

僕と。

榎風が。

愛を。

将来を。

夢を。

語り合った、

宣告した、

名言し合った、

山。

山が同じなだけであって、僕らが立っているのは山の中腹まで続いていそうな長い長い石段。鳥居さえあれば古めかしくも有り難みのある神社として信じれそうな、威圧感をもっている。あまりにも排他的なイメージが強く植え付けられて、入りたいとは思わない。理性とか倫理とか道徳とか精神とか肉体とかそんな次元の話ではなく、事実としては入りたくないのだ。

僕に問うこと無く、意に介さないままに石段を登り始めた。一歩踏み込むと始めて紀伊 大地宅に入ったときのように吐き気が込み上げてき、嫌悪感が渦を巻く。だが、所詮は精神論、スピリチュアルな思考だ。メンタル面の制御が出来なくて、榎風の恋人なんて勤まるものか。

自分で考えておきながら赤面。

これも気を逸らす為にしたこと、と自分に嘘をついておいた。

枯れ木や落ち葉が階段上にはたくさん落ちており、ペキペキパリパリ秋色の音を奏でる。流石の紀伊 大地でさえ。

中程まで上がってきたところで、紀伊 大地が僕を気遣うように、大丈夫かい、と随分と達観した言い方で話しかけてきた。嘗めてもらっては困る。僕はそこら辺のアスリート何かより先天的に体力があるんだ。作られた側であって自慢することではないのだけれど。

が、氣遣い自体は嬉しい事だ。辛辣に返すのは悪いと思い、大丈夫です、とやりわり告げる。返答はなく会話終了。

そのまま登り続けて頂上に紀伊 大地は到着。僕も三段ほど遅れてだがなんなく上りきった。

どうやらここが目的地らしい。

緑の森を切り開き、平坦にされた空き地。

空き地というのは誤解が生じるから訂正しよう。

その土地の大半は木を三本ほど束ねたような太さを持ちながら、高さは周りの木と大差ない木によって潰されていた。その木の幹は朽ち果て、何かが刺さっていたような穴が貫通している。先細りの長い穴。まるで大きな西洋の剣でも刺したかのような穴。傷口から考えると穴が相手から相当経過しているようだし、幹が朽ちているにも関わらず、青々とした大きな葉が生い茂っていた。歪で怪奇な樹木。

紀伊 大地が木から背くようにして石段の最上段に腰掛けたので、いつまでも木に気をとられているわけには（冗談ではない）いかず、僕も隣に座ることにした。ただし、一人分ほど間を開けてだが。

僕が座るのを確認してから、覚悟もなにも雰囲気さえも漂わせず、話を始めた。

「君は今の鏡をみて、どう思う？何を感じる？」

どうもこうもない。ただ単に体調が悪いだけだ。そんな軽口を叩けば、僕は間違えなくこの階段を転がり落ちることになるだろう。あくまで物の喩え。

真剣に考えるとして、実際僕は何を思っているんだ？

憧憬？

能力に対して？

嫌悪？

人柄に対して？

渴仰？

才識に対して？

仇視？

風格に対して？

一体、僕は何を思考する？

本当、僕は何を思惟する？

正直、考えたことも無い。

結局、考えることは無い。

答えなんて、その辺にゴミの様に、塵の様に、芥のように落ちて
いるんだから。

拾って、しかるべき場所へ……投げ捨てる。

「そんなの」

僕は明言する。

「決まってるじゃないですか」

僕はただ事務的に、回答を出す。

「僕は鏡なんて、なんとも思ってます」

殴られると思った。実際、腕を振り上げられ、胸座を掴まれた。
それを僕は酷く冷めた目で、冷めて冷めて冷め切った目で紀伊 大
地を見上げていた。所詮、人は人。紀伊 大地も、人でしかない。
怒る時には怒る。当然のことで、当然のことが当然過ぎて、つまら
ない。

だから、振り上げた拳を下ろし、胸座の服を離れたときは正直、
面白くて仕方なかった。

あまりにも喜劇的。

あまりにも奇劇的。

あまりにも悲劇的。

あまりにも非劇的。

何事も無かったかのように、紀伊 大地は前置きなんて関係も無く、話を始めた。

「鏡はもう、輪廻寸前だ。君はそう思わなかったかい？」

確かに存在は希薄に思えたけど、そこまで切迫したものとは思えなかった。現実味を感じていない所為か、動揺も無い。

「もう 二、三日といった所だ。昨日はあんなに元気だったんだぞ？もう指数関数的に……止まることは無い」

疑問はある。それは根幹といっても良い、この鏡の話題に対す話のルーツ。

「ちょっと待て。和湖さんに聞いたけど、『人』も『神』も寿命は同じなんだろ？なのは何でだよ？」

思わず言葉が荒くなる。意図しているつもりも、意図していないつもりも無い。話の流れとしてなんとなく、殊更考える事も無く、言葉に表す。

そんな事は気にも留めず、説明に説明を重ねる。

「言っただろう？鏡の能力は《反転》だぞ？君は生まれてから成長しているだろう？」

それだけ聞けば十分だった。要は《反転》の能力が故に、最果ての力が故に、彼女は、鏡は、

「鏡は最強の状態で生まれでて、最弱となつて死んでいく。君のことを忘れていたように、知っていたことも忘れ、あったものは無くなり、掬えば掬うだけ零れていく。順番も何も無い、いや、無いんじゃないなくて《あべこべ》なんだ」

そういうことだ。

鏡が死ぬ。輪廻する。それが 事実として叩きつけられた。

「ここは歴代、というのも変な話だが、前例の神全てがここで輪廻している。鏡も数日の内で……」

それ以上、紀伊 大地は何も語らなかった。今にも泣き出しそうな顔で振り返つて木を眺めていた。僕は……どうすれば良いのだろう？ そんな答え、何処にも落ちていなかった。

断罪血族

others

《びようびよう》と吹き荒ぶ風。

《ひうんひうん》と鳴き叫ぶ声。

とある冬。

とある夜。

漆黒の作りの荒い地面すれの丈を有するロングコートを着た少年。

優しそうな笑みを浮かべ、年齢を計りかねるような雰囲気纏う少年。

希崎時雨と間宮和湖二人そろって周囲の警戒をすと言う行為は実に珍しい光景であった。正直なところまったく意味が無いからである。

この見回り、わざわざローテーションを組んで一定のサイクルで自分の番が来るのではなく、その日その時で時間の空いているものが自発的に二人以上の人数で行っている。誰もやりたがらないときは滅多にないが、そんなことが有った場合は籤引きで決めるという適当さ。誰が行ったところで結果に大差はないので、民主的かつ平等ではあるが。

普段ならばそれでよい。が、今は違う。この二人は組まないよう皆が配慮してきた。

希崎時雨は『神々の墓守』中最強中の最強。ワイルドカード的存在。

対して間宮和湖、『神々の墓守』中最弱中の最弱。ジョーカー的存在。

この二人は相性、性格、その他諸々が一番合わないペアリング。

しかしながら、『神々の墓守』で未だに破られた事の無い最強のコンビネーション。平時の際は強力すぎる。

「だりいな、おい」

「そうですね」

「うつせえ、しゃべんな」

何故そんな二人が、わざわざ街中を歩き回り、警戒なんかをしているかといえば、差し迫る鏡の転生の護衛な訳である。神が転生するともなれば、それなりに大きな力を使うことになるのは必須。その期を突いて『神々の墓守』を崩壊させてしまおうとする輩や、神の力を取り込もうとする輩、さまざまな招かれざる客がやってくる。前者ならまだしも後者が目的の奴の相手をするのはダルい、と時雨はいつもの様にぼやいた。当然といえば当然だ。無理な事を無理と知っていながらくるのだから。正直、ウンザリしてくる。

和湖はいえ、いつものように能面を貼り付けたような当たり障りの無い、気味の悪い笑顔を浮かべているのみ。感情なんて欠片も見せない。こんな些細な点でさえ、二人は反発しあう。

「まあ、鏡ちゃんのためです」

「知るか」

「予行演習だと思えば良いじゃないですか、誰のかはあえて言いませんが」

「……………」

駅に差し掛かる。

闇夜に沈んだ駅は薄気味が悪いが、二人ともそんな事ごときで恐れおののくような人間ではない。

だが、そんなことには一切切関係なく、まるで虚構の現実のような、汚れきった純潔の、昏んだ真昼のような、スイカを割ったよ

うな笑顔を浮かべた、トマト潰したようなグチャグチャの、

真っ白い、 ソレ が立っていれば、

まったく話は別だ。いるはずのない、 ソレ 。死んだはずの、
ソレ 。幽霊などでは勿論無く、人間であるはずも無い、 ソレ
。

純潔で醜悪な、
仮定で結果な、
乱雑で精緻な、
無敵で薄弱な、
罪悪で正義な、
明確で胡乱な、
有限で悠久な、
特殊で凡庸な、
群衆で孤高な、
異常で一般的な、
宵闇で燦然な、
慈愛で憐憫な、
事実で架空な、
英知で稚拙な、
地獄で極楽な、
無為で人工な、
終焉で起源な、
矛盾が矛盾しすぎて更なる矛盾を孕んだ矛盾的存在に
飽和しきって濃縮しきって終了しきった矛盾的存在に
不運にも…… / …… 幸運にも

ソレ に出会った。

時雨は顔を歪め、和湖でさえも眉を動かす。

殺してもなお足りないの、殺したという事実さえも殺して、更に殺す。

ひとしきり、大体百回程度繰り返して、ようやく時雨は止まった。疲れているはずも無いのに、目が血走る。息が上がる。傷がつく。イタイイタイイタイイタイ。

「んで、もう終わり？」

退屈しのぎ見ていた番組が終わったような気軽さで、ソレが話しかけてきた。

ナイフが刺さりっぱなしの肉塊から“では勿論無い”。地面でも踏むかのような気軽さで、止めのように深々と肉塊に突き立てる。何本かナイフを吐き出す、元生物。地面まで貫通し、抜けそうに無い剣の柄の上に、ひょいと軽業師のように座ると、またベタベタした笑いを浮かべる。

「元氣、じゃねえよなあ。どっちでも良いけど」

時雨が前に手を突き出す。同時、ささっていたナイフが宙に浮く。言葉無き魔術。陣なき魔術。魔法。更に加える事、ナイフがロングコートから躍り出て、空をたゆたう総計百八つのスローイングナイフ。

「未だにわかんねえな、その手品。こええこええ」

キシキシ、軋むようにキシキシ笑うソレ。

そんな事はお構いなしに、手を惑うことなく、歪むことなく相手に向けたまま固定したままの時雨。ピクリたりとも動かない。ただ、ナイフがふわりふわりと敵を俯瞰、凝視している。

「数にや数であてるのが上等だとおもわねえか？なあ、時雨？」

話の脈絡も何も有ったものじゃない。本能の赴くまま、感情の傾くまま、子供のように、動物のように、喋る ソレ は、ようやく行動に移った。否、移させた。

ギャツギヤ、ギャツギヤ

キャツキヤ、キャツキヤ

GYAHAGYAH A

KERAKERAKERA

猿のような、鬼のような、気持ち悪い笑い。猿のような鬼、鬼のような猿、猿鬼達が待ちわびた狂宴に招待されたかのごとく、一匹二匹と現れる。

宵闇の陰とはいえ、総勢二百を超えるような人クラスの化け物たちを隠す事は出来まい。この猿鬼達はきっと、この瞬間、ソレによって生み出された架空のような現実の産物。

「さあ、遊ぼうか、時雨？」

踊り狂う波、押し寄せる命。

「さあて、クールにいかうか」

構えない、時雨。青く光る目。ヒンヤリとした微笑。行つ事は手を振り上げるだけ。一方的殺戮。虐殺。

ピチピチ 雨降り。

チャプチャプ　水遊び。
ランランラン　はい、終了。

えげつない血の海。
残るは二人と一個。

「十分持たなかったぜ、ビックリだな」

何も答えない。未だにナイフは宙を旋回中。人形劇のように、歪
なに統制の取れた動き。
グチャリ。

一人倒れた。歳に分からぬ、存在理由不明のヴァンパイア。尋常
じゃない出血。

「まさか、十分も持たずに一人死ぬなんて思いもしなかったぜえ？
なあ、和湖？」

血の海に彷徨する死体。
空には血濡れのナイフ。
大刀を振り抜いた白いソレ。
まさに　地獄絵図。

「バアカ、一人ジャネエーッテノ」

ゴポゴポゴポ。血が喋る。
間宮和湖の声で、喋る。
尋常ではない血量が、声を発している。
ドクンドクンドクンと、脈打つ大気。しんぞう世界が間宮和湖で、間宮和

湖が世界。魔法とか魔術とかそんなものですらない、得体の知れない何か。

「俺ヲ殺シタ罪　贖ワセテヤンヨ」

白い ソレ も、時雨さえも驚いていた。

死んだという不測事態に次ぐ、更なる不測事態。

ソレ を血が飲み込む。ジェルのように動き回り、足を体を手を首を顔を髪を存在を飲み込む。

間宮和湖は明らかに死んでいた。それでもなお、敵を葬る間宮和湖。

「クソが」

時雨が呟いた。 ソレ も呟いた。

ソレ が呟く事で血は切り刻まれ、時雨が呟く事で己がナイフ時雨が切り刻まれた。

圧倒的とは言わないが、 ソレ は勝利を収めた。意味の無い、実力も垣間見せないまま、雌雄は決した。

ソレ は尚も彷徨っている。

残されたもの。

四肢を切り刻まれた人形師。

胸部を切りきられた役目無。

あと、若干の謎と血、たったそれだけ。一夜でそれだけのものを産み出した。

B・E・

第45歩：絲状災厄1

それは酷く、この上もなく酷く、凄惨たる、陰惨たる光景だった。
未だに渴ききつていない血。

むせかえるような鉄の臭い。

血がまるで自立した意思でも持って移動したかのように、広範囲にわたり広がっている血痕の所為で、僕はまるで血染めの服を着、手を血で濡らし、血を浴びているような錯覚に教われた。

その光景を例えるなら、中世の戦場。あるいは 地球が、地球が血を流しているようだった。

僕は今まで榎風と旅をし、色んな戦場をみて、自らの手でもそれを作り上げたりした。けれど……こんなのは今まで見たことがない。そして、その地球の核（中心に）には、称えるように、崇めるように、

和湖さんが横たわり、

時雨さんが散らばっていた。

膨大な、大量の、血を二人で流したかのように、中央に存在している。時雨さんは《バラバラ》だというのに、和湖さんの体は不可思議なほどに無傷。

なのにどうして分かるのだろうか？

なのにどうして知っているのだろうか？

間宮和湖が言い訳の余地もなく、死んでいると。

まるで、自分が殺したかのように、死の感覚が生々しい。

悲鳴を忘れて俯瞰する。

死人の顔を。

彼名を忘れて俯瞰する

死人の顔を。

「ううう……………」

唸る。唸る。唸る。喉が勝手に唸る。

俺は何故、こんなところに来てしまったのだろう？

俺は何故、こんなところで生き続けているのだろう？

涙なんて流していないのに、

悲しみなんて存在しないというのに、

僕は間違えようもなく、泣いていた。

僕はついに目の前の光景に耐えられなくなり、膝の力を抜く。地球に重力がある以上、僕の体は下に向かって引っ張られるので、後に向かって仰向けに倒れる。

倒れ、られなかった。

まるで、当然のように僕の体は榎風を支えられる。僕の小さな体をゆっくりと、衝撃を殺し、硝子細工を慈しむかのように抱き止められた。

僕はいつも抵抗する行為をそのままに受け入れ、体勢を変えることなく、榎風の顔を仰ぎ見る。

榎風は……彼女は笑っていた。

いつも僕に向ける笑顔を、

僕だけが見られる笑顔を、

何ら変わることなく、

何ら変えることなく、

戦場の真ん中で、

傷口の真ん中で、

嘘偽りなく、
間違えなく、
美しく、
優雅に、

笑っていた。

そして、ただ一言、僕に言う。

「行くか、紀伊ん家に」

僕の心を読み取るように『帰るか』ではなく『行くか』と。
僕は仰瞰していた顔を下ろすことで、頷くことに変えさせてもらった。それ以上、僕は動きたくなかったから。

僕らは今日からみれば昨夜、巡回に出たまま帰ってこなかった希崎 時雨、間宮 和湖を今朝（とは言っても午前四時前）になつてから探しに出ていた。そして、持ち帰った、持ち帰ってしまった、『希崎 時雨、間宮 和湖、両名の死亡』
という重大な報告をした割には、みんな落ち着いて、異常なほどに落ち着いて対応していた。
ただ、一人を除いては。

「え？え、ええ？」

混乱して、目を見開いて、ただ驚く。

「あ、あ、あ……？」

認識して、後ずさり、ただ受け入れる。

「噓、時雨……噓、時雨……」

理解して、頭を振り、ただ拒絶する。

そして……

「イヤアああアアああアア

！」

悲しくて、悲しくて、ただ悲しくて、絶叫する。

鏡ほどではないにしろ、見たものじゃなかった　浅辺　由愈

の姿は。

ある意味、いや、普通の意味で由愈の行動は普通だった。

普通がここでは……異常だった。

《異常な行動》をとった由愈は、夏雪さんにつれられて、自室へと戻された。

夏雪さと由愈、鏡ん以外の全員、時雨さんと和湖さんを欠いた全員、紀伊　大地、南雲　朝熊、風間　麻紀、早苗　明、この四人が『処理』に向かった。榎風が茜、葵も手伝わせると言ったが、紀伊　大地はそれを断り、四人だけで出ていった。

僕は榎風に抱きすくめられたままだったが、ようやく落ち着いてそれをふりほどいた。そして、一人になりたいと言って、榎風の元を離れていく。

榎風が……ついてくることはなかった。そのかわり、二、三分撫でられ続けられたが。

榎風は何があつたところで変わりやしなかった。少なくとも旧知の人間が“死んだ程度”では。一体、榎風は……何があれば変わるのだろう。僕には、予想もつかなかった。

思考の海に沈む前に、僕は考えるのをやめた。

僕は榎風を疑わない。

僕は榎風を信じてる。

だから、僕は榎風を、榎風存在を、考えない。

僕は別のことを考えるため、紀伊邸の中を彷徨する。

そして、たどり着いたのは、大図書館。

まだ片付け終わらず、雑然とはしているが、静かに思考するには十分だった。

雑然としているからといって、妨げられるような思考でもない。

妨げられたからといって、困るような思考でもない。

考えるのは鏡のこと。

鏡の輪廻のこと。

死者に思いを馳せたりは、しない。

一体、鏡の輪廻は本当に無事終わるのだろうか？

一人死に、二人死に、僕は裏切り、僕が言うのもなんだが、大丈夫とは思えない。

大丈夫ではなかったところで、僕がなにかできるわけではないけど。でも、鏡のことは心配だ。

「つと」

考えながら歩いていたせいで、本につまずいた。

当然のことだ。散らかっているんだし。

つまずいた本を手にとってみる。金で縁取られた豪華な本に、対角線状にかけられた革製の紐の交差点で嚴重に閉められている。

酷く気になった。

鍵に触れてみる。

ガチリ

と、鍵があく。いや、壊れたというのが正確なきがする。

鍵も使っていないのに、錠が外れるはずはないのだから。きっと、古い鍵がつまずいた瞬間に壊れたに違いない。

そんな『適当な』、『都合合わせな』、『後付けな』理由で僕は本を開く。

一ページ目は……白紙。

めくると、次のページにはこう書いてあった。

『ネクロノミコン』

日本語でそう書いてある。宗教に詳しくない僕でさえ知っている本の名前だ。和名は確か……『死者の書』。

題目らしいその言葉の下には手書きで右肩上がりに、作者らしき名前が書いてある。

『ユリウス・F・ラグヴェイス』

僕の知らない名前だ。知らないからなんだというのか。

僕は本を読む。

思考を捨てて、

思考を忘れて、

ただひたすらに……読んでいく。

僕は、己が目を疑い、目をそらすため、逃げるために本を閉じた。

第46歩：絲狀災厄2

何事もないまま、希崎 時雨と間宮 和湖の死亡から一日後、鏡の輪廻予定日を迎えた。今日、明日辺りに……鏡は一度死ぬ。

予定日とは言っても、有機物相手なだけあって、極稀にずれることがある。逆に言えば稀にしかずれない。

ほぼ確定的な、死別。個体として同じだからといって記憶をなくし、体が変わるのだから、人間の死と何が変わるのだろうか？きつと、何ら変わらない。

だから、こんなにも紀伊 大地が悲しんでいるんだろう。

だから、こんなにも僕は何も思うことがないんだろう。

今、こうしてあの大樹の前に簡易的な祭壇が作られていても。

今、こうしてあの大樹の前に病的に白い鏡が横たえられていても。鏡は白い浴衣に黒い帯をまいたような服をまとっていた。体のあちこちは衰弱し、黒い絹のような髪も、麻布のようにボロボロであった。かつての面影など、微塵もない。

あまりにも……惨め。

鏡ではなく、紀伊 大地が。

分かっていたことを受け入れられていない、彼が。

当然の感情を見せている彼が。

この場には紀伊 大地と僕しかいない。他の皆は周りの警備にあたっている。“あの”二人が殺されたのだ。警備を怠るはずはない。榎風や茜、葵も例外なく狩り出された。

神宮 夏雪、茜、葵が駅付近。

南雲 朝熊、風間 麻紀、早苗 明がこの場所に向かう階段の麓。

紀伊 大地、そして僕がこの場所、鏡の直接守備。

そして、

そして、

そして、榎風はそれ以外の場所全てを。

あまりにも、アンバランスな人数配置。

あまりにも、パワーバランスのとれた人数配置。

僕は予想する。

榎風が本気を出せば、魔法使いなんて目ではなく、万全の鏡ですら勝てないと。

僕の過大評価なのかもしれない。あるいは、鏡の過小評価なのかもしれない。

それでも、僕の思い過ごしでも、僕のなかでは、それは紛れもない……事実。

でも、それが、たった一冊の本で崩れようとしている。

榎風の強さではなく、

その強さを信じる心が。

ユリウスさん。あの本の書いたユリウスさん。本の中身は事実なのですか……？そう、本人に尋ねたかった。本人はもう、存命ではないようだが。

しかしながら、おそらく、彼に、紀伊 大地に尋ねれば、正誤はすぐに答えてくれるだろう、なんの躊躇いもなく。そして……それは間違いなく正しい。

いま、こうして答えを訊く前であれば前であれば、冷静に判断できるが、訊いた後に今のように思えるかどうかは、正直自信ない。いや、答えを否定する自信がある。

僕の根幹が壊れないために。

僕が『永遠の恋人』であるために。

それが僕の全てだから。

人格を捨てても、

身体を捨てても、

喜悦を捨てても、

憤怒を捨てても、

怖駭を捨てても、

快楽を捨てても、

忌悪を捨てても、
忻悚を捨てても、
忿毒を捨てても、
悩悩を捨てても、
情偽を捨てても、
悼懼を捨てても、
榎風への、思いは捨てられない。
捨てたくても……捨てられない。

「来るぞ」

あまりにも唐突だった。
前振りなんてなにもなく、伏線もなにもない。
終わりの始まり。
絲状に繋がった災厄の始まり。
史上かつてない最悪の始まり。

ブウンと、

ふさわしくない音をたてて、始まった。

まず、何て何もない。最初から全速力で壊れていく。

例えるなら、いきなり大黒柱がおれるようなもの。唐突な……崩壊。

鏡の回りが霞んで見える。ぼやけて、ぼやけて、境界が曖昧になっていく。あまりにもあやふやで、有耶無耶になった幻想じみた鏡と世界の境界線。

鏡が世界に溶けているのか、世界が鏡に溶けているのか、そんな単純なことさえ、当たり前でなくなっている。

僕は知覚した。

これが『逆転の女神』が能力、《反転》なのだと。

《あつた》ものが、《なかつた》ものに。
《なかつた》ものが、《あつた》ものに。
それをひたすらに繰り返す。

気持ち悪いほどに何度も何度も。

存在がアナログではなく、デジタルに。

世界が連続から、断続に。

彼女の回りのみ、塗り替えられていく。

ブワンプワンプワンプワんと、音がひたすらに。

横目で紀伊 大地をみると、彼は彼女から目を背けて階段の下を俯瞰する。まるで、気をまぎらわせるために敵を欲っしている目で鏡を見るのに耐えられないのだらう。そんな彼を見るのも耐えがたいものが、僕にはあるが。

僕も……鏡から目をそらす。彼女を守護する必要はないだらう。近づける人間も、ものもない。それこそ、山ごと吹き飛ばしたりでもしない限り。山ごと吹き飛ばしたところで、その事実さえも《なかつた》ことにされそうではあるが。

紀伊 大地をの隣にならび、俯瞰する。

俯瞰して、思う。自らに迫る危機を。

希崎 時雨と間宮 和湖、二人が死んだ事実には、何も思うところはない。ただ、殺された以上、誰が殺したことになる。

それが、僕に迫っているとなると話は別だ。警鐘を僕に鳴らす程度の意味はあつただらう。逆に言えば、その程度の意味しかないのだらう。

だから僕は俯瞰して、待つ。殺人者を。

紀伊 大地は忘れるために敵を待っており、僕は面倒なことを早々に減らすために敵を待つ。

ドクン

どこかで感じたことのある……悪寒。

ドクン、ドクン

まるで何かに共鳴するような感覚。

ドクン、ドクン、ドクン

身体中に血が巡り、敵を待ち受ける……感覚。
間違いない……何か来た！

思い悩んでいたことを全て投げ捨て、臨戦態勢をとる。

服の中から『断纏』を、腕の中から『葬倒天馬』を構え、軽くふる。ひうんという、空気を斬る音。問題ない。十全だ。十二分過ぎる。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、
ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、
ドクン、ドクン、ドクン！

心地よく血が駆け巡る。頭が痛いほどに血が流れる。紀伊 大地
が視界から消えるほどに、強く、激しく、血が つ！
そして、僕は聞こえるはずのない声を、耳にする。

「さあ、そろそろ始めようか？」

絡まる糸のような、史上最悪の災厄が、僕に、榎風に、世界に降り注ぐ。

第47步：絲狀災厄3

V・S・夏雪・葵・茜

「まったく、なんだというのでしょうか」

儀礼様のように美しい薙刀を構える夏雪。

「きゃはは！ いっぱいいっぱいー！」

身の丈に不釣り合いに長い棍棒を構える茜。

「また、同じものたちが…… よくも御兄義様を……」

持てるのが不思議なほどの日本刀を構える葵。

対峙するは不気味なまでに増殖した、不気味な容姿をした、猿を模した……鬼。

ギツギ、ギツギ、ギツギ

ガツガ、ガツガ、ガツガ

ギツハ、ギツハ、ギツハ

理性など存在しない。

本能など存在しない。

ただ、目の前にあるものを蹂躪する。

だから、それらはこんなにも喜んでいるのだろつ。役目を果たせ

ることを。役目を一度果たしたこの場所です。

まだ、血の臭いがとりきれしていない。

戦場には、申し分ない。

ただ、彼女達は知るまい。それらが時雨と和湖を殺したということ。だが、知る必要はない。知らなくとも予想ぐらいついた。

だからといって、彼女達は何も感じない。

夏雪も……感じない。

一匹が踊り来る。持っている武器は……戦斧！

だが、どんな武器を持っていたても関係無い。そんなものが届く前に、

「ハッ！」

一息に、夏雪は薙刀で首を刈り取る。無だな動きなど欠片もない。

絶対的なリーチの差を持って、無傷の勝利。

首の刈り取られた胴体が倒れる。

それを開始の合図としたかのように、我先へと踊り来る。死に急ぐ。

三人は互いに邪魔をしないように距離をとって、敵を倒す。

とめどなく溢れる敵。

とめどなく溢れる血。

「セヤア！」

夏雪に上から襲いかかる猿鬼を首を跳ね飛ばして、体が自分と激突しないように、切った勢いでそのまま回転、薙刀の柄に引っかけて別の猿鬼と衝突させる。

柄を振り下ろした勢いでまた回転、背後から剣で斬りかかろうと
していた猿鬼を縦一文字に両断。

構えなおすなんて悠長な事をしている暇はない。流れに任せて、
最短距離を持つて隣にいる構えてもいない猿鬼を斜めに切り上げる。
切り上げるといつても、完全には上げきらず、自らの腰辺りで方
向転換。猿鬼に深々と刺さっているなど感じさせない、勢いに任せ
て、横に一回転。倒れること、八体。

未だに彼女に武器を届かせる圈内に入ったものはない。

漆黒の髪を踊らせて、血しぶきを敵にあげさせている姿はまさに
堕天使『ファースト』！

天賦の才を持って、彼女は薙刀を繰る。
軌跡さえも描かないほどの超高速連撃。
先の連撃にかかった時間はわずか二秒。
途切れる事ない……連撃。
終焉する事ない……暴力。

グキリという鳴ってはならない音。
グシャリという響いてはならあい音。

「キャハハハハハ！」

この場にそぐわない無邪気な笑い声。
だが、茜のしていることはこの上なく、この場に沿うものだった。
純然たる力による破壊。
考えもなく、技巧もなくただ棍棒を振るう。
真っ赤に染まった棍棒と茜の四肢。返り血なんて気にしない。あ
って、ないようなもの。

元々紅い髪はより赤く。紅よりも赤い朱へ。自分の色を塗り替え

て、突き進む。

棍棒を一度振るっただけで、一体死ぬ。二度振るえば、二体死ぬ。一撃必殺の攻撃。

右へ振るえば左へと返し、
左へ振るえば右へと返す。

たまたま、地面に棍棒が当たる。途端、アスファルトが弾けとんで、猿鬼達に直撃する。単なるアスファルトの破片でさえ、彼女の手にかかれば弾丸となり、破壊の道具として扱われる。

アスファルトが刺さっただけで、猿鬼達は死んでいく。

あまりにも脆い、脆すぎる《失敗作》のように。

攻撃しては避けて、
避けては攻撃する。

「フッ！」

短い呼吸音と共に、長い日本刀を猿鬼の胸に突きたて、返り血を浴びる前に、離脱する。

派手さなんて欠片もない。

狂気なんてどこにもない。

ただ、事務的に殺す。

怒りを持って事務的に。

静寂な……戦場。

日本刀の長さという長所を使わずに、急接近、急離脱を繰り返す。夏雪とはまったく別種の速さ。武器が見えない高速さではなく、体そのものをとらえさせない、特殊な速さ。

客観的にみればそれほど速くはないが、接近戦において、視界をかいくぐり、死角に入り込む状態把握の早さ。

何にしろ、普通の人間からしてみれば、十分な速さではあったが、背中に回り込み、突きたてる。

腹部に潜り込み、突きたてる。

猿鬼の体構造は人間と大した差違はない。むしろ、劣るぐらいだ。骨が足りなかったり、筋肉が欠けていたりと。

弱すぎる。あまりにも。

だが、葵にとってそんなことはどうでもよかった。ただ、憎むべき、彼を傷つけた憎むべきそれらを、ひたすらに殺していく。

終わることなく跋扈する。

終わることなく蹂躪する。

無限に現れるそれらを。

元をたたねば意味がないと知りながらも、彼女達はひたすらに殲滅する。

彼女達に与えられた使命はここで戦い続けること。

磨耗してもなお、

疲弊してもなお、

この場でひたすらに戦うこと。

無限に続くと思われるような、この戦いを。

ひたすらに、

ひたすらに、

誰が終わらせてくれると信じて、

ひたすらに、

ひたすらに、

愛すべきものたちを守るために、

ひたすらに、

ひたすらに、

始まったばかりの戦いを続けて、

ひたすらに、

ひたすらに、

無事に一柱の神を輪廻させる為、

ひたすらに、

ひたすらに、

ひたすらに、

殺し、

ひたすらに、

ひたすらに、

ひたすらに、

守り、

ひたすらに、

ひたすらに、

ひたすらに、

待ち、

ひたすらに、

ひたすらに、

彼女達は 愛し、戦う。

第48歩：絲状災厄4

V・S・朝熊・明・麻紀

見渡す限りの猿鬼。猿鬼。猿鬼。

文字通り、足の踏み場もないほどに、この場に群れていた。

狙いは明確に……鏡。

目的は分らないが、狙いは鏡であった。

狙いが味方であるならば、守らねば。

そんな単純な論法で、彼は仁王立ちする。“たった一人で”壁となる。

周りなんて邪魔だった。

いれば確かに、心強いし、戦力も上がる。でも、それ以上に今の姿を見られるのはつらい。

「もう、誰も見ていないよ？」

彼女の一言がスイッチ。

そう、彼は　朝熊は既に、いや、最初から人ではなかった。

「今、力を見せなくていつ見せるの？」

性格がシフトしていく。

血を欲して。

身体がシフトしていく。

力を欲して。

「さあ、始めよう？」

筋肉が隆起する。
皮膚が硬化する。

「行つてらっしゃい、私の使い魔」

彼女は言う。明は言う。

自らに下された命令を遂行するため、彼は立つ。
そして……絶叫する。

「！」

人ざる声で、絶叫する。

人でなくなつたもの、人になり損ねたもの。
かの者どもが激突する。

朝熊は動く事なく、猿鬼と工作する。一対無限の戦い。まるで、
一人で津波を受け止めるようなもの。

だが、

そんなこともできないで、何が使い魔か。武器など必要ない。

片腕で全てを風ぎ払う。

鎧など必要ない。

皮膚はなにも通さない。

身体そのものが兵器。

「！」

力任せに一薙。軽々と猿鬼が吹き飛んでいく。消し飛んでいく。

一撃、一撃がまるで嵐。

嵐が津波を飲み込む。

ギツギ、ギツギ、グシヤリ

ガツガ、ガツガ、グシヤリ

ギツハ、ギツハ、グシヤリ

全てを破壊し、破壊し、破壊しつくす。

一匹、腕にかぶりついてきた。歯もたてる事すらできず、もう片方の腕で消し飛ばされた。

足にかぶりついてきた猿鬼はその足で、ふりほどき、踏み潰す。

暴力、暴力、暴力。

乱闘、乱闘、乱闘。

ただ、暴れて、力をふるい、

ただ、乱れて、闘い続ける。

「

！」

守るものなんてどうでもいい。

ただ、命令にしたがつて、

もう、命令に従っているかさえ怪しく、

「

！」

ただ、血を欲する。

そんな陰惨で凄惨な現場を近くのように遠い、遠いように近い場所で見下げる者が一人。

「こんなに相手が多いなんて……離れてて正解だったよ」

片手でスローイングナイフをもてあそびつつ、彼女は 明は一人ぼやく。

「数えても限がないよ……私一人がどうこうしても仕方なさそ」

ナイフを上には投げては柄をとり、また投げては柄を掴む。くるりくるりと曲芸じみたテンポで宙を舞う、凶器。

「まあ、その分、《私の》が二人分働いてくれればいいんだけど」

ナイフを上には投げては刃をとり、また投げては刃を掴む。ひうんひうんと殺陣じみたテンポで宙を舞う、凶器。

「それにしても……麻紀ちゃん、どこいったんだろ？スタンスだから仕方ないと思うけど」

ナイフを上には投げてはまた上に投げ、柄を掴んでは刃を掴む。くるりひうんと宙を舞う、殺人道具。

「さて、私はどうしようかな？ここにいても仕方ないし」

ひうんひうんひうんひうん。
くるりくるりくるりくるり。

手のひらの上で、ナイフが宙を舞う。

「とりあえず、此处、移動しようかな。そろそろ、ヤバそうだし」

足下には群がる猿鬼。

此処は木の上。ギシギシ軋む木の上。

そんな木の上から別の木へと跳躍する。

「まあ、とりこぼしもあるだろうし、そっちを私は請け負うことにしようかな?」

ひゅんひゅんと。

くるりくるりと。

軋む木から軋む木へ。

夜を飛び、夜を渡る。

「ふふ、私が働けば私が三人働いたことになるし、頑張ろうかな」

ひゅんひゅんと。

くるりくるりと。

楽しげに。嬉しげに。

宵闇を蹂躪し、宵闇を跋扈する。

彼女は、明は今宵、眠らない夜を堪能する。

この終わらない夜を堪能する。

タンタンタンタン。

連続のくぐもった音の発砲音。

腕にもつのは、自家製の 正確に言えば、希崎 時雨作のスナイパーライフル。

一見杓杖のようで、銃身が以上に長い特別なライフル。
タンタンタンタン。

またも四発連射。

自分に近づいてくるもの、計画に邪魔になりそうなものを、一撃必殺で射ぬいていく。まさに針の穴に糸を通すような、弾道のずれない射撃。

タンタンタンタン。

弾倉が空になったので素早くリロード。

それさえも、一糸乱れぬ精緻さでこなしていく。

タンタンタンタン。

だというのに、彼女はさも適当に、まるで片手間にでも行っているような態度。

欠伸をし、首の骨をコキコキと鳴らす。

怠惰に、ただ怠惰に猿鬼を撃ち抜く。

タンタンタンタン。

当然といえば、当然だ。

彼女にとつてこれはどうでもいいこと。

彼女が所持している才能からすれば、こんなことは目をつぶっていても、なんなくこなせる。

タンタンタンタン。

残弾、零。弾倉に十二発、鉛玉をセット。まるで無駄なく完了。

撃ち抜く準備は整った。

タンタンタンタン。

整った瞬間に、四発打ち込む。

見えるはずのない、一直線の軌跡を描いてうちこまれた猿鬼たちが倒れる。

タンタンタンタン。

倒れた猿鬼たちを踏み越えて、更に四体。迷うことなく鉛玉で頭をうがつ。

悲鳴をあげている気がした。聞こえたところで、躊躇などは生まれたりはいしない。

気にしているのは残弾ぐらいのもの。こちらに悲鳴をあげられては堪ったものではない。

タンタンタンタン。

迫っていた敵に一発ずつ二体にくれてやり、遠距離の敵二体にも一発ずつはなつ。タイムラグなど生まれはしなかった。

また、弾倉を補充。そして

タンタンタンタンタンタンタンタンタンタンタンタンタンタン。

猿鬼を小さき槍で射抜く。

ただ自動的に……自動的に、風間 麻紀は銃を扱う。

第49歩：絲状災厄5

V・S・榎風

紅いチャイナドレスを身に纏い、黒い髪を靡かせて、一人、女性
が立つ。

周りには美しい彼女には似合わない下種な取り巻き。

「さあて、困ったなあ……」

極めてのんびりと、この場にそぐわないほどゆっくりと彼女は言
う。

「あいつ、あの名前気に入ってなかったんだ……。ショッキング
」

この場にまったく関係無いことを、まるで周りに誰もいないかの
ように、一人でぼやく。

「でも、ふふふ……これで毎日の楽しみが増えるな！ああー、明日
から楽しみ！」

誰にでもなく話しかけ、キシシと笑う。本当に楽しそうに。今に
も走り出してしまいそうなほどに楽しげに。

「うーん、『恋』の字をとって『レン』なんてどうかなー？ぴった
りだと思っなー！」

独り言は終わることなく、一人で延々と続く。独り言は一人でするものであったが、此処には無数の聴衆がいたが。

「それとも、綺麗な『愛』と純粹な『零』をかけて、『ラブ』なんてどうかな？ ちょいストレート過ぎるか……」

顎に手をあて、腕を組み、目をつむって、黙考する。それでも聴衆は何もしてこない。

「あはは！ やっぱし楽しいな、これ！ 久しぶりだし、楽しくて楽しくて、止まらないなあ！」

自らを抱き、身をくねらせて、悶える。此処にいない少年を思い、一人で楽しみ、一人で笑う。孤独なんて感じない。いつも一緒なんて安い感覚ではなく、会えないこの時間さえも、彼女にとっては楽しい時間。

だから決して、聴衆がいるからではない。

聴衆は 猿鬼たちは、一歩たりとも、指一本さえも己が意思では動かすことは叶わない。

ギッ

ガッ

グッ

声をあげることさえも許されない、彼女が有する絶対的な圧力仕掛けは単なる魔術式ではあるが、遭遇した瞬間に魔術を思いつき、数秒で魔術を完成させて発動し、

この場にいる無数の猿鬼たちを、
一匹残らず魔術でとらえて、鎖で縛る。

魔術の材料としてアスファルトの舗装を使用してしまったため、
地面が剥き出しになってしまったが、逆に言えば、それ以外何も傷
つけることなく敵を無力化した。

無力化しただけ。彼女が本気を出せば、縛り付ける必要もなく、
瞬殺できたものをあえての無力化。

彼女にとって、労力としては大差無い。ならば亡骸を求めて新し
い猿鬼が来ないようにする方法は、足止めとしてはもっともな正解
の一つ。正しい回答の……一つ。

数量的には一対無数。

実質としては……無敵対矮小。

「ところで……」

今度は明確に周りに向かって言葉を紡ぐ。音を発して、声にして、
意味を持って、センテンスを繋ぐ。

「漫画とかでさ、決め台詞ってあんじゃん？お前は既に死んでいる
とか、またつまらないものを斬ってしまったとかさ」

無意味という意味をもって、文章を繋いで、無意義という意義を
もって、言葉を紡いでいく。

「そこで私も一つ考えてみたんだ。格好よく決めてやろう」

ニタア、と宵闇に貼り付くようなベタベタした笑顔を、常夜の恐
怖の象徴のようなネトネトした笑顔を浮かべる榎。

淡くエメラルドグリーンに輝く光踊石を顔の前に掲げ、ギラリと
睨んで宣言する。

「デメエら、零秒くれてやる……。その間に自殺しろ」

睨んだ目は爛々と、

見えた歯は煌々と、

示す笑顔は恍惚と、

彼女は、榎風は勇壮に、莊嚴に、華麗に、一人で無数の猿鬼に囲まれても、怯むことなく存在を続ける。止まることなく回り続ける。口を開く。放つのは言葉ではない言葉。

……
魔術。

「口を使った魔術ってな、ただ文字を羅列するだけだと思われがちだけど、実際もつとメンドイんだよね」

榎風は知能がない相手に説明をしていく。親切心や自己満足はなく、ただ、榎風は自分らしさの演出として、それを語る。

「声の大小、高低、速遅。声の質から波長まで全部纏めて魔術なんだよな。つまり先天性な訳だ」

ニヒルに笑い、宣告する。

「つまり、それができる私は天才なんだよ！」

自信過剰で厚顔無恥。

天下不頼で傍若無人。

そうして紡ぐ、一つの魔術を。

「天の杯は血で満たされた」

高い声で高々と。

「転の逆月で地は満たされた」

低い声で朗々と。

「血は溢れ、世界へ注ぎ」

早い口調で早々と。

「紅き月が、世界を包む」

遅い口調で遅々と。

「ハジマレ」

高くて低くて早くて遅い声が“一つの口”から“多重で同時”に
声が響く。一人でハーモニーを奏でるあり得ない現象。

そして、榎風は魔術を締めくくる。一つの単語を美しき地声で。

「赤色の世界」

ガチリ、とまるで歯車が噛み合うような感覚。時計の短針のよう
に動いてるのが観測できないほどゆっくりと、世界が“ずれていく”。

世界が“ずれて” “ゆがんでいく” 所為で猿鬼達が動き出す。加

速していく　死という終わりの方向へ。

ギギギギギギ

ガガガガガガ

ググググググ

軋むような猿鬼達の呻き声、叫び声。あげるはずのない、あげる必要のない鳴き声にも聞こえる喉奥から出る波長。

そんなものは幻覚。

彼らにそんな感覚などないのだから。

そんなことはお構い無しに榎風はせせら笑うかのように、嘲り笑うかのように宣告する。

「アッハッハッハ！弱え弱え！テメエらが一億匹かってこようが、一兆匹かってこようが、一京匹かってこようが負ける気がしねえな！」

その言葉を合図に世界が『融解』を始める。猿鬼達が融解を始める。

目の当たりにしたら生きていくのも辛くなるような光景。例えるなら、この空間が生命で傷から血を流しているような風景。

そんな周囲をもとめせず、額面通りに物とも思わず、歩いていく。

「さあて、次は何処に居ようかな？あいつに近い方がやる気が出るけど、近すぎるとバレたとき不味いしなあ」

猿鬼たちをかき分けて、手を使わずにかき分けて、榎風は夜を歩

いていく。

自分のために。

ネクロノミコン

著：ユリウス・F・ラゲヴィス

この本が開かれているということは、俺はやっぱり死んでいるんだろう。逆に言えば死なないと開かないように仕掛けてたんだが。俺の魔術を解体できるようなやつはこの世にいるはず無いだろうし、と言うことは、やっぱり俺は死んでいるんだろう。

そう考えると、あながち『ネクロノミコン』っつー名前も間違っちゃないか。

まあ、そんなことはおいといて、本書を書くに当たって何個か言っておこうと思う。こんなこと書いてると本当にものを書いてると実感してくるな。

まず、この本の意味について。俺が死んだ後、俺が持っている魔術の能力を風化させるのは忍び無いから、本にして残そうと思った、それだけだな。誰かをはめようと思ったとか、そんなんじゃないから安心しろ。

次に、この本を読むにあたって。素人がよんでも分かるよう、こっと細かく書くつもりだから、素人でも安心してよめ。ただし、この本は最初に開いた人、つまり“お前”にしかよめない。自分のためだけに使うもよし、他人に伝えていくのもよし、好きにしろ。

んで、最後に。

この本は魔術書です。用法・用量を守って正しく使ってください、なーんてな。

0	・前書き
1	・魔術と魔法の違いについて
2	・魔術について
3	・魔法について
4	・魔術の法則
5	・魔術の種類
6	・特殊な魔術について1
7	・特殊な魔術について2
8	・声帯魔術について
9	・陣式魔術について
0	・後書き
*	・魔術の具体例

.....

.....

.....

【第6集】
特殊な魔術について1

.....

.....

.....

第32項

この項では主だって、魔術製合成生命体　いわゆる、使い魔、場所によっては悪魔の子ともいわれるものを制作する魔術技術の一つの分野について説明しよう。

このジャンルは大きく分けて二つある。

まずは、単純魔術製合成生命体。これは主に、戦闘用、局地労働用など人体では危険を伴い行えないに使う。機械のように、設置に経費や時間を伴わない上に、ある一定以上の自立思考が可能なため、上述のような単純な雑務には最適、とまではいかないものの、向いてはいる。

しかしながら、欠点も多くある。

一つ目は食事、衛生などの生活面だ。魔術製合成生命体とはいえ、有機生命体であることには変わらない。有機生命体であるならば当然、食事もあるし、寝る。食事については現地で調達できるように調整すればいいし、睡眠はローテーションを組めばいい。

一番厄介なのは健康面だ。機械のように解体して点検するわけにはいかないし、そのまま捨ておけば、伝染する可能性がある。まあ、患部を取り除いて、残った部分を、言い方が悪いがリサイクルしてしまえばそれでいい。患部を発見したり、患部をどう処理するかなどの問題はあるが、結局のところ、問題は一つに集約される。

要は、資金面だ。食事を調達する個体にしろ、ローテーションを組む個体にしろ、患部を処理する個体にしろ、作るにはお金がかかる。一体一体の材料費、技術費はそう安くはない。逆に言えば、資金さえどうにかすれば便利なことこのうえない道具なわけだ。

二つ目は、ある程度自立思考は可能だが、誰かしら命令する人間がないと成り立たない、という点だ。

人間と指揮するにも、ロボットを管理するにも上に立つ人間というものは必要なのだから、欠点とはいえないかもしれないが、命令しなければならぬ量が半端無い。

人間ならばミスをすれば、思考してフォローする。ロボットならば一度プログラムすれば、終わることなく続ける。でも、単純魔術製合成生命体は違う。人間のようにミスしても何も思わない。ロボットのようにつけることはない。毎日、毎日のように新たに命令を更新しなければ動くことを忘れる。そんな奴等だ。

だから、指揮をするやつらは単調な日々にはノイローゼや精神疾患を引き起こすケースがいくらか報告されている。よって、これは間違いない欠点としてあげておくべきことになのだろう。

三つ目は、これがもっとも危険な問題だが、暴走の可能性。

指揮する人間がノイローゼや精神疾患を引き起こす件数ほど多くはないが、数件ほど報告されている。かくいう俺も一度、暴走させた経験がある。

その時のことは俺の汚点だから多くは語らないが……精度には関係無く量を多く、具体的に言えば平均して10体以上を同時に作ると暴走する可能性が非常に高くなる。

相互的に何かしらの干渉をして、生成された後に変性を起こすと俺は仮定し、色々研究したが、結局途中で飽きてやめた。

というわけで、テメエがいくら考えてもわかんないだろうから、とりあえず作るなら8体くらいで作るのやめとけ。まあ、8体も作れたら上出来だ。俺みたく1000体を同時に作れるはず無いしな。

さて、魔術製合成生命体のもう一つの分野、複雑魔術製合成生命体についてだ。複雑とついているのは単に単純と対称比較するためにつけられたもので、複雑魔術製合成生命体は複雑なんてレベルではない。

魔術式で説明するなら、単純魔術製合成生命体ね魔術式の約2695・196倍に相当する量が必要となる。

この俺でさえ一生に一度書けば、もうそれでうんざりできる量だったな。二、三回はやったけど。

そして、製作に掛かる時間は平均して　もちろん俺を除いた平均所要時間は約192時間。勿論連続の作業詰めだ。おおよそ一人

でやることは無理だろう。かといって複数名でやれば、シンクロナイズしなければならぬ。この難しさは、説明するまでもないか。複雑魔術製合成生命体をつくるより、思考の同率稼働のほうが難しい。

あと、資金面も掛かる量は尋常ではない、国家予算レベルの資金が動く。まあ、言ってしまうえば限りなく人間の価値なんてその程度の金額でしかないってことなんだが。

以上のことから実施は不可能と考えるべきだろうな。

しかしながら、こいつらは人間と言っていていいような、いや、分類上人間とされるべき精巧さを持ち合わせている。大量生産できないという欠点は生まれたが、制作者の成すがままに特性を持ち、望めば望むものに絶対服従、このメリットはかなり大きい。自分の身体能力より高いものを心の底から服従させている。人間のように裏切りはしない。

これは人間では無理なこと、金では絶対買えないものを、金で作り上げるのだから、画期的と言えば画期的ではある。まあ、信用さえも商品にするとは愚か、という意見は少なくない。

こう説明してみたが、結局、これは世界条約で禁止されるであろう行為だ。多分、俺が死んだ後なんだから既に禁止されているだろうな。

理由を説明すれば当然のことだろうな。言い訳ができないほどに俺としてはケース・バイ・ケースで認めてもいいと思うんだがな。

まあ、それは後世の人間に任せるとして、理由の説明に入る。

それは材料だ。

単純魔術製合成生命体の材料は主に炭素原子、水素原子、酸素原子……その他、まるで錬金術でもするかのような感じだ。それにくらべ複雑魔術製合成生命体の材料は色々細かいものはあるが主要なのはたった一つ。まあ、これが問題なわけだが……。俺は小説家じゃないから、引つ張るのはやめよう。複雑魔術製合成生命体の材料、それは……『人間一体』だ。

国際条約で禁止されるのも当然だな。
それでは次に作り方について ……。

……
……
……

僕はそこで本の内容を思い出すのをやめた。

まったくもってキモチワルイ内容だ。キモチワルイ内容のはずなのに……なぜだろう？このしつくり来るような感覚は。

キモチワルイ

キモチワルイ

キモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイキモチワルイ
イキモチワルイキモチワルイキモチワルイ……

僕はもう限界だった。

吐き気がする。

僕は……確かめようと、榎風に確認しようとし、走り出そうとして辞めた。

内容から察するに複雑魔術製合成生命体である僕は一体……誰だったのだろうか？

ワカラナイ
キモチワルイ
ワカラナイ……

閑話2歩：矛盾回路 邂逅

初めて見たときは、光だと思つた。

艶あでやかに輝く黒髪と、艶つややかに張つた肌。裕福さの象徴であるかのような豪華な服。絹に金糸で装飾されたその服に身を包んだ彼女は、白っぽい黄色の肌をした人間だった。アジア系 中国人か、日本人のようだ。

「……あ、う」

助けを求めようと、食事を求めようと、水分を求めようと、開いた口から漏れたのは、枯れて掠れた声で、意味のある音は出なかった。

そんな私はまるで ゴミだった。

着ているものはボロ切れで、食べるものも、飲むものも持たず、金銭など存在も忘れ、生きる意味も意義もなく、人であつたかどうかさえも不確かで、路上に座り、見向きもされない私は 間違いなくゴミだった。それ以上でも、それ以下でもなく 単なるゴミだった。

悲しむ感情さえも、私にはもうなかった。

涙を流す水分さえも私にはない。

そんな私の前に現れた彼女はまさに、光だった。

名も知らない私に名も知らない彼女は、気軽に、軽薄に話しかけてきた。

「生きたいか？」

私が今一番したいことを軽々と、あくまで軽々と、提案してくる。蜂蜜のように甘い甘い甘言。

脳内の回路をジリジリ焼きつける電気が流れるくらいの争い難い誘惑が私を絡めとっていく。

「私はお前を助けることができる。今、この場ですぐ、お前が望めば助けることができる。でも、助けるには一つ条件をつけなきゃならない」

何だろうか？この人に奴隷として扱われるのだろうか？それくらいなら構わない。むしろこちらから願い出たいぐらいの待遇の良さだ。または……商品として売られるのだろうか？それでもまだ、現状よりはよい。仕える人間が分らない分、不安を孕んでいたが、そんなことは全くもって小さいことだった。

私の貧困な、考え学ぶことを忘れた頭脳にはそれくらいにしか思いつくことが出来なかった。

とりあえず私は惰性的に……生きていたかった。生に貪欲で、無限の明日を求めている。目的もなく、意味もなく、ただ、私は唯一と言っていいほどに減少してしまった独立して稼働する思考で思う生きていたいと。

だから私なんかが思いつきもしない大変な条件でも、即答でうなずく自信があった。

ああ、もしかしたら私は、こんな風に考えなかったから、今みたいにゴミのようになったのかも知れない。

そんなことを今さら思い至って、何の意味は無いのだけれど。でも、こんな風な私にも、分かるほどに、理解できるほどに、求められた条件は単純なものだった。

「お前を生かすとなると、お前は今まで生きてきた記憶を無くすことになる。それでもいいか？」

なんだ、そんなことか。それくらいなら大したことはない。今ま

であった記憶なんて、私にはそれほど重要ではなかった。思いでも何も、私はすでに忘れていて、失っているのと大差無いのだから。そして私はうなずこうとして、ようやく気づく。

自分で思考して気づく。

今さらながら……気づく。

全てを忘れることと、いままでの生の痕跡を消すのと、いったいどれほどに差があるというのだろうか、と。同じではないか、と。そして、

死ぬことと、忘れられることにいったい何の違いがあるのだろうか、と。

だからだろうか？私はここで、今さらながら躊躇した。

選択すれば生きていけるのに、生きたいと思っている私が躊躇った。

彼女はただ、私を見下ろして、返答を待っていた。

返答を待つ彼女を見て思う。忘れた後にどうなるのかと、苦し紛れに。でも、何も思うことはなかった。

やっぱり私はそこで忘れることについて考える。今までになく、

深く、深く、深く。

忘れるとは死ぬことで、私は生きていたい。

忘れられることは殺されることで、私は生きていたい。

死ねばもう一度生きられる。

生きたければ一度死ななければならぬ。

そう考えると、私の中には、違和感がしこりとなって心の奥の方につつかえる。無くしたはずの心に…… つつかえる。

ならば、前提条件が違うのだろうか？

…… 分からなかった。

分かるはずも、なかった。

でも、そろそろ一つぐらいのことには気付いてもいいだろう。気付かないフリをして気付いていることを知っても良いだろう。

逃げていたことに、向き合って良いだろう。

私の考えそのものは大事なところで間違い、本質なんて元々無いものを、見失っている。

そう、結局、私が言いたいのは、私が思っていたのはきっと、私は生きていたいのではなく、ただ単純に

死にたくなかった……

……だけなんだろう。

流せない涙を流すほどに。

知らない恐怖を覚えるほどに。

生きるなんて私にはどうでもよくて、ただ、死という痛みを受けなくなっただけだった。

そうして私はまた、気づく。

今、こうして世界の片隅の街の、裏びれた路地でゴミのように投げ捨てられ、思い出も、人らしい感情さえも欠落しているというのに、生きていると言えるのだろうか？

ただ、呼吸をしているだけで、

ただ、目を開いているだけで、

ただ、脳が情報を交換しているだけで、

生ききていると 言えるのだろうか？

もしかしたら、私は既に死んでいるのではないか？

さらに、さらにさらにさらに、先程覚えた恐怖をさらに、凌駕する恐怖が私を満たしていく。

死にたくない。死んでいない。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

こんな私でも、彼女は助けてくれるだろうか？

私は死んでいないと証明してくれるだろうか？

ならば、私は請おう。

記憶を捨ててもいい。私が持っている記憶は死の証明になりかねない。

私は彼女の顔をもう一度仰ぎ見る。

白い歯を見せてニツコリと光のように笑っていた。

それを見て私はようやくながら確信した。彼女なら全てを任しても大丈夫だと。

私は見上げた顔を下ろして、彼女の問いに対して頷いた。助けを求めて頷いた。

すると、彼女は笑ったまま、私の答えに応ずる。

「よっし、わかった。私が余すところなく全力で、足の先から紙の毛先まで、一つ残らず助けてやるよ」

さらに彼女は不適に笑う。

「んでもって、お前に生きている実感を、脳みそがビリビリ痺れるくらいに味わあせてやるから覚悟しとけ」

ああ、私は思う。

私はこのとき一度死んだんだ、と。そうして私は生まれ変わるのだ、と。

そして

生きていたい、

と。

このとき既に私は生きている実感をビリビリと、足の先からビリビリと、紙の毛先までビリビリと、脳内にビリビリと、毛細血管一本一本まで余すところなくビリビリと、電気の流れるスピードでビリビリと、身体中で生きていると、生まれてはじめて感じるのだった。

第50歩：ギフト1

夏雪

荒い吐息が聞こえた。瞬間的に腰を固定し、足を地面に釘付け、横薙ぎに一閃。ひゅん、という空気を切り裂く音が耳に届いたが、何かを斬るような手応えはなかった。

それでも響く乱れた呼吸音。敵の姿を確認しようと、薙刀前方で盾にするように構えて辺りを見回す。

周囲には 何もなかった。

自分が壊し、積み上がっているべき死屍累々はなかった。

自分が壊し、倒れているべきものが一個もなかった。

無人駅前のアスファルトの上で、

人の血の臭いが残っているこの場所で、

彼女は一人、孤独に佇んでいる。

そこで彼女はようやく気付く。その呼吸音は他の誰でもない、紛うことなく自分のものなのだと。

このキモチワルイ排気音は己の口が奏でているのだと。

吐き気がした。当然のように。

めまいがした。当然のように。

まるで貧血でもひこしたかのように、クラクラする。頭がうまく回らない。思考がうまく機能しない。

そんな症状が出るはずなのに、カロリーは相当量消費はしたが、地の濃度が下がる程に運動はしていない。

この程度の戦いで血なんて『一滴も』流すはずないから、血の全体量も減っていない。

なのにどうして？

どうしてだろう？

こんなにも足元がおぼつかないのは。

疲労なんて欠片もなく、

恐怖なんて破片もない。

彼女は心当たりが思いつかず惑う。戸惑う。

思いつけない理由を思いつかず困惑する。

彼女を助けてくれる生命は彼女の周りには存在しない。

『墮天使』は動くことなくただそこにある。共にいたはずのものを伴わず。

生きている赤も青も、紅も蒼も、朱も藍もない。

才能のみで戦う彼女の周りには何人たりとも立っていない。

朝熊

体中がギシギシ軋むように痛い。体中から血がダラダラと止め処なく溢れている。痛い。痛々しい。

でも、それも終わる。

いや、終わったといってもいい。

正体不明の侵略者達は全て破壊し終え、彼に与えられた命令は完遂された。

今回ばかりは彼もさすがに疲れていた。何せ彼は一人で千にも達するような暴力を、暴虐を、暴悪を行ったのだから。

彼は、そういうえば明はどこに行ったのか、と考える。これ以上長い間この姿で入れば、何らかの後遺症でも残りそうで恐怖を感じたので、そろそろ戻してもらおうかと思ったからだ。実際のところ、そんなわけではないのだが、その事実を教える人物はいないし、それを思考する理性もない。本能のままに彼は明を求める。

「

」

声を出してみたのはいいものの、ちゃんとした言葉は出てこなかった。むなしく響く雄たけび。

当然といえば当然で、彼は戦うための道具、コミュニケーションなどする必要はないのだから。

辺りを見回しても彼女はいない。この辺にはいないらしい。彼は探しに行こうかとも思ったが、思いとどまる。

彼女の命令はここを死守すること。

もし、自分が動いている間にあいつらが再来したら？その可能性を否定できなかった彼は、結局待つことにした。

晩冬の北風がかすかに吹く山裾。静寂が彼の巨体を余すことなく包み込む。

キキキキキキキキキキ

唐突。予備空白も何もなし 殺害。

一瞬にして全てが止まる。体中の急所を針に糸を通すような正確さで貫く痛みが、彼を止める。

「
」

声も出ない。いったい何があったのか把握できない。

ああ、遠くで銃声が聞こえる。朝熊は思う。人間の思考で 思う。自分をこうした敵を麻紀が応戦しているのだと。

ダダダダと、まるで機関銃のような高速連射の着弾音。これなら大丈夫だと彼は思うが何分、両目とも先の攻撃で穿たれてしまったため、確認が出来ない。

彼は今度、泣き声聞き取る。ひたすらにうわんうわんと、子供のよう泣きじゃくる誰か。

そんなになく必要があるほどに、自分は壊れてしまったいるのだろうかと、彼は不安に思う。

その不安と大きな泣き声の中、彼は深い深い眠りにつく。果てしなく深い……深い……眠りにつく。

I・m

僕は結局自分の存在に不安を抱き、走り出した。紀伊 大地の制止にも耳をかさず、全力で階段を下る。転がり落ちるように降りていく。

何の説明もせず、突然走り出した僕を対面上止めはした紀伊 大地だが、僕なんかいなくても、いや、僕なんかいないほうがあの人はあの場をうまく守るだろう。どんな方法使うかは知ったことではないが。

そもそも、あの場所を守る人なんて必要ない。どんな人間であろうと、どんな生物であろうと、どんな物体であろうと接触するだけで『存在している』ものが『存在していない』ものになってしまうのだから、攻めるも守るもあつたものではない。

石段を駆け下りるのに武器は邪魔だったので、『葬倒天馬』を消し、『纏断』は服の中にしまった。

長い階段の中頃まで僕は飛ぶように降り、僕はまったくもって偶然に、ちょうど中間の石段で本当に飛んだ。

服が破れることも気にせず、幅数メートルに及ぶ巨大な真紅の翼を広げ、空へと羽ばたき、地面と平行に飛行する。

時速四十キロメートルで空を翔る僕。真っ赤な羽が風を受け、僕は空を滑空する。

気持ちよさは感じない。

いつしかのように、自分が人でないことを自覚させられて気持ち悪い。

そして今では、僕が人から改造されて作られた象徴にもなっている。

血のように不安が全身を巡る。

不安のように血が全身を包む。

榎風は……榎風は一体何処にいるんだ？

より低く、電線に引つかからない程度に低く、ギリギリの高度を保って榎風を探す。

二十メートルぐらい前方に人影が見えた。とつさに榎風かと思い、速度を落として着地。走って近づく。

息を切らしながら、不安を解消してもらおうと全力で走る。

十メートル程度走って、その人影が榎風ではないことに気付いた。榎風にしてはその人影は、あまりにも小さすぎた。

人違い。

ものすごい人違い。

人違いにも程がある。全然違うじゃないか。いくらなんでも間違えすぎだ。

だから当然僕は立ち止まった。その人影から十メートルぐらい手前で。

僕が見つけたその人は一歩も動かず、僕に背を向けて立っていた。振り返ることなく、背を向けて。

つめたい……つめたい風が吹いていた。その風が僕の白髪をやわらかくする。

そして、眼前に立つその人はおもむろに、いまさらながらに振り返った。

そうして一言。僕に立った一言だけ、言葉を投げつけてきた。

不気味な、不気味な言葉を投げつけてきた。

「よう、《失敗作》」

僕の眼前にゆらりと立っていたのは、僕と同じ白髪をした、僕そっくりの顔をした、僕のようなモノだった。

第51歩：ギフト2

衝撃なんてレベルの話ではない。

全身の動脈という動脈が、臓器という臓器が、細胞という細胞が、生命活動という生命活動が、その働きをやめてしまったかのような、そんな命懸けの感覚。

血が一滴残さずざわめく。

心が断片残さずふるえる。

相手がどんな感覚を僕に対して抱いたのかは知らないが、僕ほどに驚きはしていないだろう。むしろ、逆に冷静になっっているくらいの印象を受ける。普通に僕に話しかけてきたし。

「《失敗作》からしてみれば、初めまして、だよなあ？」

旧友と久闊を叙すかのようなフランクさで、僕に話しかけてきた。僕を不遜な態度で《失敗作》と呼びながら、そんなことは関係ないかのように、随分と適当な具合に。

当然ながら僕には自分にそっくりな知り合いなんていないので、実際のところは初対面の相手に対して《失敗作》という二人称もしくは三人称を使って会話をする、妙になれなれしい失礼な奴な訳だ。それにしても《失敗作》か。《失敗作》ねえ。《悪魔》とか《化け物》ならよく呼ばれるし、マイナーなところを言えば《天使》とか《武神》も言われたことも在る。しかしながら、《失敗作》とはまた、今までにない感じのパターンだ。

人間の《失敗作》、生命の《失敗作》、なんの《失敗作》にしろ、あたらずしも遠からずなあたり、なかなか良いかもしれない。少なくとも貶し文句には。

「おいおい、挨拶ぐらい返せよ、せめて」

「ああ、どうも、初めまして。もう会うことは無いでしょうけど、よろしく」

とりあえず、普通に言葉を交わしてみたのはいいものの、一体、何を会話しようというのだろうか？なぜ会話するのだろうか？

話題も理由も思い当たらなかったたので、僕はもともと無かった会話をさっさと切り上げることにした。

「じゃ、僕は人を探しているんで、これで」

「つれないねえ、っていうか、ほぼ無視かよ」

挨拶しただけでも十分よい対応だと思うのだけど。呼び止められた人全員に対して丁寧な反応などしてられない。自分の顔にそっくりな奴がいた《ぐらい》で、僕の反応は変えられない。内心かなり驚いてはいたが、この程度のことは魔術を用いれば、なんら出来ないことではないのだ。難しいし、大変ではあるだろうが。

そう考えると二、三ヶ月前に榎風の物真似をして現れた、あの魔術師は結構な手誰の人間だったのかもしれない。あ、あの時って何人かで分担してたんだっけ？

あの胸糞の悪い本によれば、思考のシンクロは難しい云々と書いてあったが、そこら辺は専門の人間の域内だから、説明は投げることにしよう。

閑話休題。

無視かよ、というツッコミが呼び止める言葉かどうかは知らないが、去り際に話しかけられたので、僕はこの場から去らずに、転進しようとしてやめた中途半端な半身の体勢で相手と対峙することになった。

僕が足を止めたのを見て、相手は勝手に話し出す。

「お、話をしてくれるとはありがたいな。礼といっちゃ何だが、質

問が在るなら答えてやるぜ、《失敗作》？」

質問を許されたところで、初対面の相手にするような疑問は持ち合わせていないし、質問をしたところで正確な答えが返ってくることは到底思えない。

だから僕は何もいわず、押し黙ったまま、ただ片目だけで相手をにらむ。

こんなことをしている暇はないというのに。

この間にも僕の中の不安はせつかく心に解けていたのにまた、奥のほうで黒々と、どんどん沈殿していく。榎風でないとこの問題は解決できない。心の、問題だから……。

そんな僕の様子を見て、相手はヘラヘラ笑いながら、言葉をゆつくりと紡いでいく。

「また無視かよ。まあ、俺みたいなヤツにはそれが必要十分な対応なんだろうけどな」

そんなことをいって、相手はまたヘラヘラと笑う。内容のない空っぽな笑いが辺りに木霊して、耳障りだった。

「そんなお前に敬意を表して、独り言でいろいろ教えてやるぜ」

ビクンと、心臓がひっくり返るくらいのインパクトをつけて、僕に直接語りかけてくる。関心を持たずに入られなかった。関心を持たないはずがなかった。

僕の不安だらけな心をえぐるような一言が、スイカみみたいな赤い口腔から放たれる。

「榎風は最初っから、お前なんか見ちゃねえよ、《失敗作》」

「　　つつ訳だ」

そういうことか。

そういうことだったのかよ。

最初から、今の今まで疑問なんて本来存在してはいなかったのか。今まで信じていた、信じさせられていた世界はそういう裏があったのか。

僕の世界が裏返っていく。

僕の中身が裏返っていく。

僕的能力が裏返っていく。

僕の、僕の、僕の、

僕の榎風が一片残さず裏返っていく。

「俺は何一つ嘘も、偽りも言っていないからな」

そういつて、必要のない免罪符でもたてるかのようにそういつて、相手は構える。僕同様の《失敗作》は太くて長い刀身の西洋剣を構える。

「お前が望むなら、俺は俺のためにお前を、《失敗作》を壊してやる」

そんな言葉、僕の耳に届きはしなかった。

体中にはりめぐらされた電気回路に逆向きの電流が流れていく。

「あアアああアアあ　　！」

反転する。逆転する。暗転する。

あの神の手を借りずに、僕は裏返っていく。

知りたくなかった。

知らなければ良かった。

知ろうとしなければ良かった。

歯車を、世界を回す歯車を、僕は逆向きに回していく。

.....。

.....。

.....。

《失敗作》が僕に教えてくれたのはごく単純なことで、榎風が僕を作った理由と、僕自身の壊し方だった。

《失敗作》と《失敗作》。

二人向き合って僕らは停止していた。

榎風が見ていたのは僕でも《失敗作》でもなく、ずっと昔の榎風の知り合いで、僕はそれを映すだけの鏡。

僕が榎風と旅をしてきた数年間。

僕は榎風が好きだった。

榎風以上なんて何もなかった。

なのに、なのに。

榎風が見ていたのは僕なんかではなく、僕の知りもしない誰か。

こんな酷いことがあるだろうか？

こんな惨いことがあるだろうか？

他人から見れたかがそれだけのこともかもしれない。死にたくなるほどに落ち込むのはおかしいといわれるかもしれない。そこまで好きなら、相手が自分にどんな目を向けていようが関係なく愛せたいかもしれない。

でも、でも、でも、

それだけのために作られた僕は、それだけの存在価値しかない僕は、一体どうすればいいのだろうか？

こんな僕に対しても、あんな詭弁をのうのうとはけるのだろうか？

僕は、教えてもらうべく頼る人間を失った。
何の抵抗もなく、膝を追って座り込んだ僕。
榎風が恨めしい。憎たらしい。

僕は完全に　裏返った。

第52歩：ギフト3

四肢に力がまったく入らない。血がまったく巡っていない気がする。心臓にひたすら血が送り込まれるだけで、体中には一滴もまわってこない。

その場にへたり込んだまま、動くことなく僕の前にいるであろう《失敗作》判断をゆだねる。

コッソ、コッソと一歩一歩踏みしめるようにゆったりと、僕に向かって近づいてくる。

ぴたりとその足音が止まったので、気になり、重い首をあげて、胡乱気な目で、光のともっていない瞳で仰ぎ見る。

軽々と上段に振り上げられた大刀。

月光を反射して銀色に閃く刀身と白髪。

僕を見下す《失敗作》の目が冷酷なる金色の光を灯す。

「俺が全部、終わらしてやるよ。これ以上お前が絶望しないように……」

絶望させたのは自分のクセをして、何のためらいもなく大刀を振り上げている。

僕はあの刀身が振りおろされるだけで、《失敗作》である僕を壊せる彼が振り下ろすだけで、僕はこの世からいなくなる。それが救いなのか、それとも罰なのかは判別は出来ないけど、拒む気力はなかった。

生きる必要性が見当たらなかった。

死ねない理由が見当たらなかった。

「ごめんな」

いまさらながらに、《失敗作》は必要のない謝罪を入れた。
そして、その刀身が僕に迫ってくる。

目はそらさなかった。
目がそらせなかった。

僕の何も映していない瞳を断ち切る、一撃必殺の剣。
もう、死ぬのか。

やっと、死ぬるのか。

僕が創られた死ぬまでにはあまりに短い。

事実を知らされてから死ぬまでにはあまりに長い。

鼻先に刃先が当たる。

明確な……………死

血のにおいが、僕に届かなかった。

変わりに、金属音が耳に届く。

僕の瞳は一部始終を見届けていたはずなのに、何があったか僕は
わからなかった。

ただ、明確な事実として、

長い剣で無茶な受け太刀をしている青色と、

棍棒で全力を持って力を抑えている赤色が、

優美可憐に僕の両隣に立っている。それだけだった。

「大丈夫ですか!？」

「許せないね!」

両者別々に怒りを顕にして、彼を、《失敗作》を睨む。疑うことを知らない瞳で、僕ごときのために本気で怒ってくれている。

そんな二人を見て失敗作は怪訝そうな顔をして、冷たく言葉を放つ。

「邪魔だ」

大刀を持っているとは到底思えないスピードで、いったん振り上げて、刃ではなく刀身の腹で二人をなぎ払う。その一撃にひとまりもなく二人は吹き飛ばされて民家の塀に激突する。

かは、と肺から息が漏れるような音が聞こえて、動かなくなった。息は在るようだったが、意識は危なそうだった。

《失敗作》は興ざめとでも言わんばかりに、一步も動かず二人を見下して、それさえも興味がなくなってしまったかのように僕に向き直った。

何事もなかったかのように機械的に僕に向き直って、また上段に構える。高々と、銀光を欲すように高らかに、大剣を掲げていつでも振り下ろせる体勢をとる。

僕は動くことなくへたり込んだまま、何もしなかった。何も、出来なかった。

「今度こそ、間違えなく終わらせてやる」

大刀が、振り下ろされることはなかった。代わりに、僕の変わりに他のものに当てられ、それが宙を舞う。僕は断頭台の刃が振り下ろされるのを待つ死刑囚のように、動かない。

動かすにはじいたものを見る。

長い長い日本刀と、硬い硬い棍棒。

くるんくるんと美しい放物線を描きながら、地面に落ちるそれら。

衝撃で少しアスファルトがえぐれていた。

投げたのが誰かなんて考えるまでもない。

本来投擲用でないものを無理やり投げたのが誰かなんて。

危険すぎる行動。守るものを、戦うものを、戦場で道具を捨てるなど、自殺行為。

でも、そんな馬鹿げたことをしたヤツがいる。僕の視界の中にいる。

二人が……二人が 茜と葵が投げた。

壁に打ち付けられ、立つことさえ危うい。その証拠に目に意思はなく、息のも微か。生命の危機であることがすぐに見て取れた。

生命の危機を侵してもなお、僕を守ろうとしてくれている。榎風が僕の知らない誰かを見るために作られた僕ごときを守ろうとしている。

よたよたふらふらと、意思なんてかけらもないのに、武器も何もなく戦うすべもないのに僕に向かって歩いてくる。

そんな光景を、《失敗作》は見下している。至極詰まらないものであるかのように、見下ろしている。

でも、大剣は構えることなく、僕を壊そうとしている意思も見受けられない。

かなりの時間がかかって僕の下にたどり着いた二人は、両側から僕を守るように、僕に向かってくるものが僕に当たらないように、包み込むようにへたり込んだ。

耳元に微かに呼吸音が聞こえる。

眠っているかようだった。

こんな僕に、《失敗作》は再度問う。

「まだ、死にたいか？」

両側には二人の女の子。女の子だったもの。彼女たちも誰かから改造されて作られたのだろう。僕は彼女たちが改造されているのを

背にして戦っていたけれど、彼女たちはそれを望んでいたのだろうか？

わからなかった。

彼女たちがそれを望んでいたかどうかと同様に、僕自身も望んでいたのかもわからなかった。

そして、死にたいのかも、わからなかった。

だから答えなかった。答えられなかった。

これほどまでに、彼女たちが僕を守ってくれているのに、生きる理由が見つからなかった。

ただひたすらに、月を背にして立つ《失敗作》の目を見る。

暗い、暗い、金色の瞳。

それだけが僕と違う金色の目。

「俺は……お前が殺したいかわからない。ただの嫉妬なのかもしれない。投影機としてでも榎風のそばにいられるお前に対して。でも、死んだ人間の投影機になるなんて、ごめんだとも思う。だから……お前がそんな葛藤に悩まされないように、俺はお前を殺す」

三度目の大剣を振りりあげる動作。今度こそ、僕に向かう太刀筋を阻むものは何も

ブオオオオオン！

ないはずだったのに。

民家の屋根の上から飛来する真っ赤の車体。閃光のようなスピードで、何のためらいもなく《失敗作》を轢いた。

爆音を、文字通り爆音を立てて《失敗作》を吹き飛ばす。

「他人の《恋人》に何してんだよ、クソが」

民家の上に勇壮と、真紅のドレスを身にまとい、騒ぎの元凶、全ての事実を知っていて、僕が何も知らないと信じている華麗なる女性
秋宮 榎風が立っていた。

第53歩：ギフト4

榎風は民家の上からゆつくりと、一步一步踏みしめつつ屋根のすそに降りてくる。すそまで降りてきて、そこから三メートル以上下にある塀に向けて何のためらいもなく飛び降りる。

立ち止まることなく、音もなく片足で着地し、歩くようなペースでアスファルトの上に舞い降りる。

「大丈夫か、アイ」

僕を今までにない名前で、視線を向けながら僕をアイと呼ぶ榎風。バイクで人を吹き飛ばしたというのに、なんら変わりなく榎風は笑っていた。

いつも見ていたはずの純粋な笑顔。

それが途端に、裏のあるように思えてきた。

実際何一つ、榎風は変わっていないのに。変わったとすれば、僕の心。視線にフィルターをかける……僕の心。

怪訝そうな顔さえすることを忘れた僕。

「って、ホントにお前大丈夫か？なんか目が死んでるぞ？」

その元凶は一体誰だと思っているんだよ、なんて言葉さえ僕の口から出てこなかった。

それ以前に、それ以上に、他に言うことがたくさんあるのに、なぜ何も訊かないのだろうか？

例えば、僕を守るように座り込んでいる二人とか、自分が吹き飛ばしたのが誰なのかとか。

もしかしたら、最初から榎風はすべて見ていたのかもしれない。だとしたら、どれほどに残忍で酷薄なのだろうか。そして、どれだ

け自信に満ち溢れているのだろう。

あれだけの事実を聞かされてもなお、僕が何も変わりないと信じられるなんて。ただの投影機である僕を。ただの投影機だからこそ、

「つぁ……！」

《失敗作》は何事もなかったかのように、壊れたバイクの車体を軽々大剣で弾き飛ばして立ち上がる。

服には少しばかり、解れや破れた箇所があつたが体自身は無傷。尋常ではない。異常なほどの……人外性。

「つたく、久しぶりに会つたつてのに、そりやないだろ？」

ニタニタ笑いながら、そんな風に言う《失敗作》。

そんな二人を、僕は見渡す。見渡しても、何も思うことはなかったが、どうしようもなく、この場にいたい気がしなかった。

「あぁん？」

フランクに話しかけられてはなしかけられて初めて気付いたかのように、自分がバイクで吹き飛ばした相手を見る。あれだけの攻撃を働きながら、完全に無視の方向らしかった。

「誰だ、お前？」

本当に無視らしかった。

「存在そのものを無視かよっ！？」

榎風にかかれば、あの《失敗作》でさえコミカルに会話をする羽目になっていた。

それにしても、榎風と《失敗作》が旧知の仲（榎風は忘れているらしいが）だったとは。僕と同じように投影機として扱われ、そして捨てられたのだろうか？

「お前なんか知らないな。というか」

榎風は《失敗作》をぎろりと睨み、人を石化させるほどの殺気を放つ。

「私のものにこんなことしたのは、お前か？」

手に握られた『光踊石』が淡い光を放ち、臨戦、いや、殺戮体勢に入る。

甲高い魔術式の起動音。『光踊石』を中心に複雑怪奇な式が立体的に延びていく。半径五十センチほどの球状になったところで、『光踊石』から手を離し、五十センチ上の球体から手を引き抜く。

重力に従い、『光踊石』は落下するかと思いきや、落ちることなく球体の中心で旋回して停滞する。

それを確認してから榎風は二、三步下がってニタリと笑う。そうして、再度問う。

「答えろ、お前か？」

「いや、俺じゃないなあ」

あれだけ殺気を放っている、榎風に対してヘラヘラおどけて見せる《失敗作》。でも実際、言っていることは事実。《失敗作》がやったことは教えたただけ。やっていることは、裁判で言うところの検察官のようなことしかやってない。

そうして、彼が何をしたのかを述べる。

「なあに、お前が俺と《失敗作》を作った理由を教えたただけだぜ。こつしたのは間違えなくお前だ、《榎風》」

彼がしたことは、ただそれだけ。

僕が作られた理由、それは単純なこと。簡単に言えば、穴埋め。

榎風が昔した、何か。それが何かまでは《失敗作》は語らなかったが、理由そのものは余すところなく全て話した。こちらの了解も取らずに明確に。

榎風には昔、一人すごく仲の良い人間がいたらしい。その人は紀伊 大地たちとも縁が深く、それなりに仲良くやっていた。容姿は並外れた美形でも、逸脱した不細工でもなく、普通と一般的にくくってしまえる程度のももの。洒落つ気もなく、性格も人並みの気遣いがある程度で僕らみたいな、《失敗作》じみた何かのない人間ではなかった。少なくとも、榎風がその何かを仕出かすまでは。

その仕出かした何か、その所為でその人間は完膚なきまで壊れた。榎風が壊した。榎風が人間ざりき存在にそいつを据えてしまった。

そして そいつは、人間として外れた精神を人間のみに宿した。そいつは、当然のように……死んだ。自壊した。

榎風はその業から、己が罪から目をそむけるために僕ら、《失敗作》を作った。最初は人ともいえない仕上がりで、徐々に、本当に徐々に、失敗に失敗を重ね、僕や、彼のような限りなく彼に近くなつた《失敗作》を作り上げることに成功した。

《失敗作》なのに、《失敗作》なのに……成功。代替品が出来ることが、成功なのだろうか？

榎風の昔の友人の代替品が僕ら。

昔の友人の……《失敗作》。

それが、それだけが、僕の前の《失敗作》が今の《失敗作》に語った全てで、僕の生まれた理由の全て。

一体どれほどの人間が、僕ら《失敗作》のために死んだのだろうか？

そもそも、人間として作られているかさえ怪しい《失敗作》僕らのために。

紀伊 大地や希崎 時雨、神宮 夏雪や間宮 和湖。彼ら全員が、旧『神々の墓守』全員がこの事を知っていたらしい。全員が全員、結託して僕に隠していた。良いか悪いかなんて関係ない。隠していたのは事実。悪いかどうかは僕の決めることだ。

「剣野 ……」

だから僕は問う。

ほんの少しだけ、表側へと戻り、僕は問う。

こんなことを聞かされてもなお、心のどこかで榎風を信じたがっている自分のために、僕は問う。

もう一人の《失敗作》の前で、僕は確かめることにした。

全ての事実を。

僕らの起源を。

世界の終止を。

「『ツルギノケシキ 剣野景色』って、一体誰ですか？」

《失敗作》の顔が形容しがたいほどにグニヤリと曲がり、榎風の顔に絶望と驚きの色が挿す。

誰一人として動くことはなく、ただ、魔術式が自立回転だけをずる。世界が止まってしまったかのような、静寂。

剣野 景色

榎風の無二の友人だった人間にして、僕の《オリジナル起源》。二つ名に最強の騎士『理由なき剣』を冠する男。

そして……………

僕と榎風の物語を完膚なきまでに終わらせる、魔法の《呪文^{スベル}》だ
った。

第54歩：ギフト5

静寂だった。待っていたのは静寂だった。冷たい風の音も、取り繕うような人の声も、歪な笑い声も、擦れた嗚咽も、派手な魔術の音も、何もなく、ただただ、胸を突き刺す痛々しい静寂が、僕ら三人を包んでいた。

いや、胸が痛かったのは僕だけ。

《失敗作》……剣野景色の《失敗作》は榎風に一矢報いてうれしいのかニタニタ笑っていたし、僕の問いかけた榎風は啞然と喪棒前途も放心状態とも違う、形容しがたい無表情とも取れる表情をしていた。

まるで、何もなかったかのように、隠そうとして失敗したツギハギだらけの……無表情。痛々しいわけではなく、それ以前に言葉そのものを嚥下し、理解できていないような、表情が僕に向けられていた。

今までにこんな顔をした榎風は見たことがない。何があるうと、どんな苦境に陥ろうとも、どんな陥穽に嵌められようとも、笑いながら、おどけながら解決してきた榎風が、今まさに、僕が、投影機が真実を知った程度のこと、新しい表情を見せた。

一体、榎風は僕に何を思ったのだろうか？

落胆？絶望？失敗？悲哀？

何にせよ、あまりいい感情をその胸のうちに宿しているとは思えなかった。こんな顔をした人が、明るい気持ちを胸に秘めていると思えるほど、僕は鈍感でも、ずれても、勘違いでもない。

でもそうしたら何故、どんな理由があつて、暗澹とした心情がありそうな顔をする必要があるのだろうか？僕《一個》が、真実を知ったところで心が揺れたような顔をするなんてどうかしている。もう一度、目の前にいる《失敗作》を捨てて僕を作ったように、僕を捨てて新しい《投影機》を作ればいいだけなのに。何なら僕を材料

にすればいい。それで『ネクロノミコン』に書いてあった一番高いハードルはクリアできる。もしかしたら次には僕みたいな《失敗作》ではなく、榎風の思い描く剣野景色そのもの 《完成品》が出るかもしれない。

たった、それだけの……それだけのこと。

だから早く、僕なんか捨ててしまえばいい。僕なんか材料にしてしまえばいい。僕なんか忘れてしまえばいい。思い出なんて微塵も残さず、未来永劫反芻しないよう完膚なきまでに、忘れしまえばいい。僕からも願い出よう忘れてほしいと。心のそこから忘れてほしいと。

だから、お願いだから、僕にそんな壊れた顔を向けなくてください。

「クソガアアアアア

！」

絶叫。咆哮。唐突な叫び声。

最初は誰が発したかさえもわからない叫び声が、僕の耳に届き、電気信号に変えられ、脳髄を刺激し、榎風の声だと気付く。心臓を鷲掴みにするような、インパクトのある美麗な声。

僕が榎風の声だと認識したときには、榎風はすでに行動に移っていた。

体の向きを《失敗作》へと変えながら、体中の至るところから『光踊石』を取り出し、中に放る。それぞれが榎風を取り巻くように、空中で停止し魔術式を自動的に描いていく。単一でも強力なはずの《それら》が……計二十一個。単純に威力が二十一倍になるわけではないが、《失敗作》一個を壊すには、あまりにも莫大過ぎる破壊力。こんな往来でそんなものを使えば、《失敗作》の後ろにある家十数軒は間違えなく全壊だ。

脳内を駆け巡る違和感。でも、そんなものを気にして思考しているほどの時間を与えず、榎風の魔術式は勝手に完成した。

「since……」

完成した魔術式にさらに追加で魔術をかけていく榎風。これより先に用意された魔術を、僕は見たことがない。

榎風の発音とともに、それぞれの魔術式がさらに拡張されていく。魔術式がお互いに干渉しあっているかのように繋がっていき、榎風を中心にすえた一つの巨大な魔術式が生まれる。

まるで平気にも用いられそうな巨大な魔法式の中心で、左右の親指と人差し指で輪を作るよう重ね、両腕を前に突き出す。戦車の砲身のように、手で作った輪の照準を《失敗作》に固定する。

《失敗作》はさすがにあせったように大剣を自分の体の前、榎風と自分自身との間に攻撃の進路を阻むようにしてつきたて、防御体勢に入る。その程度で防げるとは到底思えなかったが、しないよりかましだろう。

《失敗作》がとった行動はそれだけではなく、いや、むしろそっちの行動がメインだったかのように落ち着き払って、行動を開始した。榎風のまねでもするかのように両手を前に突き出す。《失敗作》がとった行動としては、たったそれだけあつたが、普通の人間がこの場に居合わせていれば、間違えなく《失敗作》のとった行動は異質なものであった。

どろり、と。

皮膚が融解したかのように、《失敗作》の手のひらから何かがすごいスピードで溢れてくる。どろりどろりと、まるで僕が『鴻の翼』や『幻夢の誘手』、『葬倒天馬』を出すかのような要領で、体から何かを練り上げていく。

出来上がったのは盾。僕の持っていない、盾。無骨な感じの盾ではなく、豪華絢爛装飾過多な儀礼的な盾だ。

完全に完成し、手から離れたその盾はかなり巨大で《失敗作》の体程度なら楽々と収まってしまいう代物だった。防御力の方は推測し

イミテーション
かなるが、玩具ではないのは確かだ。

そんなものはお構い無しに、榎風は魔術の最後のスペルを高らかに、発する。

「……velckrant toys！」

齒車のかみ合うような重い音と、齒車が高速回転するような甲高い音が同時に響き渡る。

目のくらむような光量と喉を焼くような熱量をもった一星一閃一条の光線が光速と呼ぶにはあまりに遅く、人間が感知するにはあまりに速い速度で《失敗作》に向けて突き進む。

榎風はまったく動かず、黒く長い髪をたなびかせるだけで、攻撃目標を睨む。光も熱も関係無しにただひたすらに、睨む。

対する《失敗作》。光が包み込むようにして本体の姿はまったく見えなかったが、自分の体から繰り出した盾がそこにまだのこっていることを知らせるように、極太の光線がその部分だけ膨らむように、通過していた。

曲がっている以上、光線ではないのだろうけど、その攻撃が光か、もつと物理的なものかは関係ない。問題はその威力。

榎風の放った攻撃が、《失敗作》の縦により曲げられ、その後ろにある民家に間接的ながらも、当たっていた。

《失敗作》のみを射抜くような都合のいい魔術があるわけがない。魔法でもない限り、そんなものありはしない。

攻撃を受けた何の関係もない民家が受けた場所から例外なく破壊されていく。消滅していく。

無慈悲だった。

冷酷だった。

やがて、榎風の攻撃はやみ、魔術式は消える。二十一個あったはずの『光踊石』は跡形もなくなり、そこに立っているのは榎風だけ。自分が破壊した家の所為で立ちこめる土煙を睨む、榎風だけが一人

孤独に立っている。

その土煙の中から、《失敗作》の影は見受けられない。消滅したとかそういう類の話ではなく、土煙が濃過ぎて見通せないだけ。

土煙から目を離し、もう一度榎風を見る。

榎風は……やはり、壊れた無表情をしていた。今にも消えてしまいそうな、今にも感情が壊れてしまいそうな、無表情をしていた。自分がやったことなのに、どうしてそんなに壊れてしまいそうな表情をするのだろう。僕はへたり込んだまま、そんな簡単なことを考える。簡単すぎて難しい、そんなことを考える。

僕は、この状況で一体何をするのが一番いいのだろう？ いや、違う。そんな合理的なことを考えたいわけじゃない。僕は一体、何がしたいんだろう？ 出来る出来ないを抜きにして、何がしたいのか。そんなことも、僕は回らない頭を使って考えてみたが、結局わからなかった。

そして唐突に。

目の前に赤色が広がった。暖かな真紅。やわらかそうな朱色。

「え……………」

おもわずそんな間抜けな声を上げた。その赤色に包まれるような感覚が、僕の肌から伝わってきたから。

何でへたり込んでいるかもわからないような僕を包み込む、そんな生命的な暖かさ。

抱きしめ、られた。

と、最初は思った。

でも、違った。

だらしなく脱力していた僕の手を無理やりがっちりつかみ、引っ張る。引っ張られたのでこちらに目を向けていると、やはり赤色があった。

赤い、紅い、朱い、これ以上なく血色いあか翼。

キシシと笑う無傷の《失敗作》が僕の手を無理やり引つ張り立たせて走らせる。当然、気を失っていた茜と葵は振り払われる形になる。

右手には僕、左手には大剣、背中には巨大な僕の『鴻の翼』に瓜二つな大翼。

三步で助走を完了し、大空へと舞い上がる。ばさりと鳴る羽音が僕の耳の機能を失わせるほどに、大きく聞こえる。

あまりにいきなりの出来事で理解が追いついていない。

でも、

ただ、

たった一つだけ印象的だったのは、

僕が飛び上がる瞬間に見た榎風の顔が、

いつも快活に笑っていたあの顔が、

……………涙でグシャグシャになっていたことだった。

第55歩：ギフト6

自分のものではない翼で空を生身のまま飛ぶなんて体験、よもやするとは思っていなかった。

赤い翼が空に広がり、羽ばたくたびに真紅の羽が花びらのように舞い落ちる。羽ばたく回数自体は多くないので、そう落ちる量は多くないが。

片手だけでもたれて飛んでいるのに、不思議と肩は痛くなかった。痛みを感じる神経さえも狂い、裏返ってしまったのだろうか？もう、裏返ったとか狂ったとか、どうでもいい気がしてきた。

「なあ、《失敗作》？」

ポツリとつぶやくように、話しかけられた。

「この辺でさ、誰もこなそうなところ、あるか？」

これはつまり、お前はどこで死にたいか、と訊かれているところでも良いだろうか？もともとそれが目的で《失敗作》は僕のところ立ち寄ったわけだし、僕ら二個の間で交わされるような話題といえば、それぐらいだ。

まず、最初に思い浮かんだのは、紀伊 大地の家。あそこなら今、全員出払っているからもぬけの殻のはず。そこで、思い出す。あそこには由愈がいるはずだ。彼女が起きてくる可能性はほとんどないし、僕らを止められるとも思えなかったが、不安要素はないほうがベターだ。それにあそこは《敵陣》の真っ只中。どんな仕掛けがあるかはわからない。

そういえば、僕がここに来た初日、紀伊 大地の敷居を跨いだ途端、猛烈な不快感が僕を襲っていた。それだけじゃない、神宮 夏

雪との手合わせの時だつて、希崎 時雨が何かいつていたがどう考えても違和感の残る意識の失い方だった。鏡が倒れたときに、僕も倒れたのだつて。違和感だらけだった。

そんなことも、全部含めた上で、僕はあえて《失敗作》にその案を提案してみることにした。

「完全な無人じゃないけど、ほぼ無人。住んでたからこれは確かなんだけど……紀伊 大地の家なんてどう？」

「はあ！？つとわあ！」

落とされそうになった。別に落ちててもかまわなかったが。

素っ頓狂な声を上げた《失敗作》は一気にまくし立てるように一気に不平不満疑問を口にした。

「『紀伊 大地の家』だと！？んなもん、無茶だつつつの！あいつらの表向きの行動は神様の護衛だろうが、俺がいんだぜ！？先頭に疲れ果てて、戻ってこられたらどう住んだつての！つか、住んでたのか！？お前が！？あそこに！？平然と！？ありえねえー！お前あそこがどんなところか知つてんのか！？あそこはな、確かに名目上、『神々の墓守』の本拠地だけだな、もともとあそこは紀伊 大地が、あいつが個人的に誰にも内緒で作った」

失敗作は一旦、そこで言葉を切つて真剣に、あの家が、『神々の墓守』の本拠地の正体が何なのかを言う。

「剣野景色を殺すために作つたからくり屋敷だぜ？」

そう、終始おどけていた顔を初めて真剣にして言った。

「そんな場所で、剣野景色の《失敗作》がのうのと生きていけるはずねえだろ」

なるほど、そういうことだったか。あの引きかえしたほうが良いという悪寒も、神宮 夏雪との手合わせでの失神も、鏡と一緒に倒れたのも、全部そういうわけだったのか。

また、ひとつ、価値観が裏返っていく。

「つー訳で却下。お前が榎風のおかげなんかは知らないが、大丈夫なのかもしれないが、おれにや無理。耐えらんね」

「じゃあ……町の外は？」

「いや、無理。榎風のヤツ、ここら全域包み込むぐらい馬鹿でかい魔術^{トラップ}広げてから、俺らんとこ来たらしい。最初にぶっこいてた余裕はこいつの所為かよ、クソ。まあ、そんなことしてた所為で、一番知られたくない真実を《失敗作》に知られたわけだけだな」

さっきの真剣さはどこへやら、キシシと笑ってそんなことを言う《失敗作》。そんなに榎風の鼻を明かせたことがうれしいのだろうか？

そんなこと、同じ《失敗作》の僕でもわからなかった。同じ《失敗作》だからこそわからなかったのかもしれないが。

そんなことより、時間がもうなかった。

刻一刻と、時間は着実に進み、僕らに榎風は確実に追いついてくる。僕を死なせないように、どんどん迫ってくる。

取られた玩具を取り返す、榎風はそんな心境なのだろうか？

そんな子供じみた思考で僕を取り戻そうとしているのだろうか？

でも、それは所詮些事で済まされるようなこと。

死ぬのに一生懸命な僕にとっては、本当にどうでもいいこと。

榎風に捕捉されないためか、《失敗作》は巡回せず、ただグニャ

リグニヤリと縦横無尽に空を飛ぶ。夜空を渡る。

夜を越えて……その先へ。

その先には……一体何があるというのか。

《失敗作》はその答えを知っている、気がする。聞く気に離れなかったけど。

そんなことはおいておいて、今のところは人のいない場所を探さなくてはならない。

何度も買出しに行った賑やか商店街。

地元の人間しか通わない小さな学校。

廃線になりそうな電車がまれに来る駅。

顔見知りの人々が寝静まった住宅地。

……いつもの町が変わらない風景。

僕が、少しの間居続けた、町。

僕が、初めて長く居た、町。

日常に組み込まれてしまった、町。

その町の中、僕は誰も居ない場所が思い浮かばないで居た。

どうしようもなく馴染んでしまっている、町の中にはいつも誰かが居る気がした。

紀伊 大地が、希崎 時雨が、神宮 夏雪が、間宮 和湖が、風

間 麻紀が、早苗 明が、南雲 朝熊が、浅辺 由愈が、そして神

である、鏡が、僕の記憶に深く食い込んでしまっている。それらが、思考をさえぎる。

どこだろう、彼らとの思い出がなく、無人の場所は。

思い出のない場所は、総じて思いつきにくい。

思いつかれない場所を探しているのだから当たり前か。

誰も知らない場所、思い出のない場所、と絞れば絞るほど、想い浮かばなっていく場所の数々。

「……あ」

「んあ？見つけたか、どっか」

なんて滑稽なのだろうか。一箇所あるじゃないか。思い出があっても良くて、誰にも邪魔されない場所。

最初に浮かんでもおかしくないような、ベストなポジションが無意識に除外していたのだろうか？そんな理由もやっぱりどうだっ
つていい。見つかったのだから。

僕の死ねる場所が。

嬉しすぎて笑いが止まらない。

嬉しすぎて 涙が、止まらないよ、ホント。

「早く言えよ、時間がねえんだから」

「ああ、その場所は」

僕は、自分の死に場所を《失敗作じふざく》に教えた。

第56歩：ギフト7

僕たちがやってきたのは、なかなか静かで、そして誰もいない場所だった。

聞こえるのは、冷たい冬の風と、木の葉がこすれる音。

見上げれば満天の星空と、明るすぎるくらいに輝いている月。

この場所にはそれだけしかなかった。ほんの少しだけある町の光もこの場所には、一切届かない。暗い暗い孤独な、静かで静かで閉鎖的な、場所。

それでいて、僕の思い出の場所。偽りの思い出の場所。榎風が僕ではなく、僕を通してみた剣野景色との、思い出の場所。

僕と榎風が　口付けを交わした……思い出の、場所。

心が痛い。もう、榎風のことが苦しくて、重くて、心がボロボロだった。だから僕は、こんなにも死にたがっている。死に急いでいる。

「ここでいいんだな？」

「……………」

気軽に聞いてきた《失敗作》に僕は首肯だけで応じる。もう喋るのも嫌だ。残すような遺言も、遺言を残すような相手も、僕にはいない。

この場所なら、もう誰の邪魔もないはずだ。《失敗作》のためにも、僕自身のためにも、これで終止符が打てる。

僕が、榎風という呪縛から解放され、投影機としての役目をなくせば、次は……《失敗作》自身の番。彼は唯一、榎風の作った僕らを、壊す力を持っている。だから……僕を殺して、そして最後に、自殺する。

あの、肉厚の大剣が、僕の存在を、榎風との関係をキャンセルす

るすることが出来る唯一の魔法具。

そして、剣野景色愛用の、戦闘道具にして彼の名前の元となっている『理由なき剣』でもある。

剣野景色の《失敗作》が、剣野景色の剣によって殺される。これほどシナリオじみた話はない。本物が偽者を倒すなんて随分とヒロイズムに沿ったストーリーだ。

それもまあ、良いだろう。

僕みたいな、《物》にはちょうどいいエンディングだ。これ以上ないほどぴったりのエンドマークだ。

「じゃあ、とつとと済ませるぞ。お前はどうかやら相当、あつちの世界に嫌われてるみたいだし、それじゃいつまでたっても俺が、《役目》をおえられねえしな」

もう何度も見た、この大剣を振り上げる動作。

もう幾回も見た、この月光を反射する銀の光。

リプレイ画像を繰り返し繰り返し流しているような感覚。

金色に光る《失敗作》の瞳が、僕を見下ろしている。これから僕を壊すとは思えないほどに、透き通った、何の邪念もない瞳が、僕を俯瞰している。

「地獄があつて、そこでまだ人格が残ってるようなら、また会おうぜ。今度はゆっくり話したいしな。まあ、俺とお前は同じものなんだから、地獄じゃ一個になっちまうかもしれないけどな」

そんな冗句を言いつつ、

「俺もすぐ追いかけるが、どっちにしる地獄までしばしの別れだ」

そんな徒言を言いつつ、

「じゃあな」

そんな挨拶を言いつつ、

《失敗作》はその銀色の刃を、僕に振り下ろす。

ブオンと風を切る音がした。

グシャと身を斬る音がした。

ピチャと液体が降り注ぐ音がした。

不思議と……痛みがなかった。

いや……不思議でもなんでもなかった。

僕に……銀の刃は届いていなかった。

どうしてこうも、僕はあの世に、地獄に嫌われてしまっているのだろうか。僕みたいな《物》は、地獄も受付拒否しているのだろうか？

「つたく……世話が焼けるな……」

僕の目の前に立っているその人は、深々と、常人ならショック死してしまうほど深々と、肩口からへその辺りまで深々と、銀の刃が刺さり、血が《ドバドバ》と、キモチワルイぐらいに流れているのに、そんなことは気にもせず、そんな軽口をたたいて見せた。

ゴフと咳き込んで血を吐いた後に、剣に支えられた体が、徐々に僕に傾いてくる。

事態が……把握できない。

僕のたっていた場所に、何故他の人がいるんがろうか？簡単なことだ。間に割り込んで、僕を押しのけただけ。その証拠にその人の手は僕を押すような形で、僕の肩にかかっている。

いや、そんなことは、『どうだっていい』。

この際、この人が何故こんな行動に走ったかも、『どうだっていい』。

「な、んで……？」

「どう、して……？」

そんな言葉が自然と僕の口から漏れた。

そんな言葉が自然と《失敗作》の口から漏れた。

理由がわからないからじゃない。起こったことがわからないんじゃない。

僕を無理やり助けた、その人が僕のほうに寄りかかってくる。力が入っていない僕の足ではその人の体重は支えきれず、押し倒される形となる。

ドバドバと流れる血は止まらない。その血が僕の服を汚していく。その人が倒れた所為で、見えなかった《失敗作》の顔が見えるようになる。

《失敗作》はひどく怯えたようで、ひどく焦ったような顔をしながら、自分の持つ剣と、僕をかばったその人を交互に見つめている。僕も、《失敗作》と同じような顔をしているんだろうか？

だったら……滑稽なことこの上ない。

二個が同じわからないことをもって、同じような顔をして驚いているのだから。それは二人の間に、この人の血みどろな姿がなければの話だけど。

その人はもう喋らない。

だから驚いているんじゃない。僕たちが驚いていたのはむしろ逆のこと。

その人が喋っていたことが、驚くべきこと。

僕たち二人を邪魔したのは……数日前、四肢をばらばらに解体され、見間違いようがないほどに完膚なきまでに殺された、すでにこの世にいないはずの、希崎 時雨だった。

「ったく……世話が焼けるな……」

まったく同じ口調でそういう影が、《失敗作》の後ろから現れる。

「ったく……世話が焼けるな……」

「ったく……世話が焼けるな……」

「ったく……世話が焼けるな……」

「ったく……世話が焼けるな……」

「ったく……世話が焼けるな……」

計六体の……希崎 時雨。

悪寒が走る。キモチワルイ。

一体何が起こったのか、見当もつかない。

理解の範疇を超えている。

理解する気が起きない。

「さあ、リベンジマッチとしゃれ込もうじゃないか？」

そういつて、六人が六人、別々の武器を、別々の構えを取る。
おぞましいくらいに、僕らを月が照らしている夜だった。

第57歩：ギフト8

「どこが無人だつっの！むしろ多いって！」

そんなことを嘆きつつも、《失敗作》は現状を理解もせず、鵜呑みにして、対応を始める。そんな《失敗作》に標的を絞って、会話をする六人の希崎 時雨。

「よう」「数日振りだな」「元気してたか？」

「お前の所為で元気がなくなつたっの」

わざわざ面倒くさいことに、一言一言喋る人間を変える希崎 時雨。話しているのはたった《一人》分の言葉なのに、会話を積み掛けられているような気分になる。

いや……この希崎 時雨を《一人》分と括ってしまったても良いものだろうか？肉体的ではなく、精神的に。そもそも、こんなものを人間と定義してしまつていいのだろうか？

「それは」「悪いことを」「したな」

「んなら、とつとと消えてくれ」

統御された希崎 時雨の動き。こんなにも統御された言葉の紡ぎ方をしている希崎 時雨には確かにここの意思なんてないだろう。でも、だからといって、六人が六人、まったく同じ思考をしているからといって《一人》と見なしても良いのだろうか？

「いや」「出来れば俺も」「消えたいけど」「そいつになんかされると」「俺が榎風に」「何されるかわからねえし」

「なこと、知らねーよ」

これらはどちらかと言えば、『一群』と見なしてしまうべきではないだろうか？例えば、国のように。億万の人間がいるにもかかわらず、国の意思とされるのは一握りの政府が決定しているような、そんな話。この内の一人が代表として意思となんている、それだけの話で、『一群』と括るのが一番良いのではないだろうか？

「んじゃ」「知つとけ」「何にせよ」「俺は」「お前を」「止めなきゃならん」

「お前つて、そんな熱血だっけ？」

そんな括りがあるうがなかうが、『失敗作』が六人分の体を持った希崎 時雨という集団を相手にしなければならぬのは事実。

「いや」「熱血じゃないが」「俺も少しばかり」「変わったっつか」「何っつーか」「少なくとも怒ってんだよ」

「あー、そういえば、お前、殺してんだよな、俺」

まあ、うすうす気付いていたことではあるが、やはり間宮 和湖と希崎 時雨を殺したのは『失敗作』だったようだ。

別にこんなことで怒ったりは、しない。僕にとっては、もう如何でもいいこと、だから。

「殺した？」「殺された？」「死んだ？」「死なされた？」「何言ってるんだ」「デメエ」

日常の会話のように、六者六様におどけながら、笑ってみせる。狂気だ。狂喜している。希崎 時雨の異常性が、僕の中に流れ込んでくる。キモチワルイ。こんなのは、人と定義していいはずがな

い。生命と定義していいから危ういほどに、自分が殺されたと聞いて、狂喜している。異常だ。間違いなく、希崎 時雨は異常だ。

「あははははは！」

「あははははは！」

「あははははは！」

「あははははは！」

「あははははは！」

「あははははは！」

「あははははは！」

笑い声が木霊する。異常な笑い声が木霊する。そこらじゅうから、気持ちの悪い笑い声が、木霊する。

「デメエ」「俺が誰だかわかって」「それ言ってるのか?」「だとしたら」「救いようのない」「馬鹿だな」

希崎 時雨は笑うのをやめ、《失敗作》を小馬鹿にするような、嘲笑とともに、喋る。

「お前ら二人にわかるように丁寧に説明してやるから！」

「耳の穴かつぽじって聞きやがれ！」

「俺は、『神々の墓守』にの副長にして！」

「史上最悪の絲狀災厄しじょうさいあくをもたらすと謳われた！」

「魔法使いをも凌駕する古今独歩の最強凡人！」

そこでニタリと、《失敗作》なんて比ではない気味の悪い笑みを浮かべて、名乗りを上げる。

「人形師『フェイカー』とは俺のこと！」

そこでまた、異常な狂的な笑いを木霊させる、人形師。きざきしぐれ 今すぐにも、《失敗作》が破壊できそうなほどな、強力な殺気と、戦慄が僕にまで伝わってくる。

「俺は」「嘔吐きでね」「自分が死んだって」「嘔ついたら」「面白いくらい」「お前は引つかかってくれたな」

なんとという生命だろう。自分の死亡さえも偽るなんて、狂気の沙汰とは思えないことを、平然とやってのけた。

ありえないとは思えない。

あの駅前で死んでいた、ばらばらな希崎 時雨は一体なんだというのだろうか？

この山の中で死んでいる、僕に寄りかかった希崎 時雨は一体なんだというのだろうか？

「さあて」「口頭説明はおわったし」「リベンジマッチといこうか」「それにつきまして」「お前にや退場してもらうぞ」「じゃあな」

え、と声を上げる暇もなく、僕は後ろに引つ張られるような感覚とともに、吹き飛ばされた。自分の重ささえ感じないように、軽々と飛ぶように。

流れるような景色のなか、希崎 時雨が見えた。

僕の後方に向かって手を振り上げるような動作をしている希崎

時雨六人。

僕という支えをなくして地面に伏せた、希崎 時雨の死体。

後見えたものといえば、金色の瞳で声も出さずに見送る《失敗作》。

それと、もう一人、誰か、いるはずのないもう一人の誰かが、見えた気がした。

僕はそれが確かめられないまま、乱暴に投げられたので木に激突し、受身も取れなかったので、あっけなく、本当にあっけなく、何も見届けないままに、視界をかすませ、意識をブラックアウトさせた。

第58歩：ギフト9

V・S・時雨

そこに立っていたのは七人だった。

暗闇に七人が、正確には一人と一群が、動くことなく立っている。

「さあて、邪魔者もいなくなつたし、あのクソ面倒臭い演出も必要ないよな？ お前相手にそんなことしてても時間の無駄だしなあ」

酷く気だるげに、白髪の少年の前に対峙する希崎 時雨のうちの一人が代表して喋る。

「いや、《失敗作》にんなことするのも無駄だろ？」

「んあ？ いや、あいつにはこんな風に幻想的に格好つけたほうが、なんとなく気が晴れるしな。お前と違って」

「……………」

シニカルに笑う時雨。どことなく楽しげではあったが、この状況を楽しむなど、自分は異常ですといっているようなもの。

「……………」つか、今度は怒って飛び掛ってこないんだな」

「ん？ はあ？ まさかお前、俺が本当に怒って戦ったと思ってるのか？ 俺が無鉄砲に戦って死んだって？ くっだらねえ。ない頭を少しは使えや、《剣野》」

相手を挑発するように、シニカルな笑みを絶やさず、相手を論う時雨。だが、白い少年はそんなことは気にせず、かといってニタニ

タと笑うこともせず、ひたすら無表情を保っていた。

「お前がどうやって生き返ったとか、何で死んでないかとか、どうでもいいけどな……邪魔すんな」

「黙れ、《剣野》。邪魔だあ？邪魔してんのはどっちだっつーの」

一転、白い少年は語気を強め、時雨は呆れたようにため息を吐く。

「うる、さい！」

何の前触れもなく、白い少年は地面に大剣を深々と突き立て、手のひらから二叉の槍を『作り出し』、時雨の顔めがけて全力で投げつける。

地面と平行に飛来する二叉の槍は時雨の顔を目標に軌道を描く。一撃必殺の速度と破壊力が、時雨に容赦なく襲い掛かっているというのに、当の本人はといえば、シニカルに笑ったままだった。

それもそのはず。

時雨の顔に、顔どころかどこにも、そのやりは刺さることはなかったのだから。

物理法則なんて完全に無視したかのように、ぴたりと、時雨に刺さる一メートル手前で、停止した二叉の槍。

白髪の少年は投げた姿勢のまま、わかっていたかのように、走り出す。空中に停止した二叉の槍に手を触れて『消し』、点滅しただけのようなスピードで今度は同じ長さ、同じ太さの金色の三叉の矛を『繰り出す』。

そのまま流れるような動作で今度は投げることなく、そのまま手を伸ばし、下から心臓を狙い突き上げる。

殺すための動作を、まるでその行為自体を意に介さないような心構えでもあるかのようにすなりと、後ろに軽く飛んでかわす。

白い少年のその動作のうちに、残りの時雨たちは彼に殺到する。

まるで数で圧倒し、敵を殺す蟻のように、彼ら五人が殺到する。それを背後で感じ取れるはずもなく、白い少年は予想と勘のみを持って、伸びきった腕をそのままに、踏み込んで体重のかかっている足を銃身にして一回転し牽制する。

時雨全員が等間隔等距離に立ち、正六角形をつくって白い少年を囲んだ。

そんな均衡状態もつかの間、前後にいた時雨二人が白い少年に襲い掛かってくる。前方の時雨は無骨なナイフ、後方の時雨はやや短めの小刀。どちらも狙っているのは心臓ただ一点のみ。

三叉の槍を『消し』、今度は両手から二本のまったく同じ剣を『繰り出す』。体を九十度回転させて、攻撃を軽く受け止めていなす。二人の時雨に後ろから攻撃されないよう牽制しつつ、右足を一人の時雨に向ける。そして、

「一人目つと」

軽い、あくまで気に負わないような言い方で死の宣告をした。

足の裏から、靴を突き破って先ほど出した三叉の矛を『繰り出す』。人間では考えられない一撃。

グサリと、一人の時雨の心臓をうがつ。いくら同じ人間が六人いたところで、一人一人は間違いなく人間。当然こんなことをされれば、絶命する。

三叉の矛で穿った時雨が血を吐いたのを確認してから、二本の剣とともに武器を全て『消す』。

殺した時雨を何のためらいもなく踏みつけ、反撃されぬよう残りの五人から距離を取る。

距離をとったのは一瞬。数日前のように、ナイフを自由自在に空中で踊らされては、さすがに面倒だ。

接近中に『繰り出し』たのは、紛う方なきもう一人の彼ではない。白い少年が使用していた日本刀 『葬倒天馬』。

聞こえてくるのは風を切る音のみ。刀身が見えないほどに、居合抜きのような高速で、白い少年は刀を振るう。

「二、三つと」

ザシュ、ヒュン、と人間がたてられるはずのない音が時雨の体、二人分から奏でられる。胸元を深く切り付けられ、そのまま時雨は仰向けに倒れる。

テンポ良く、人を殺していく白い少年。

何の躊躇もなく、

何の逡巡もない。

「四」

数を数えるのも億劫になったかのように、適当に数字を述べるだけで、時雨の心臓を穿つことで殺す。

「ご　五つ！」

時雨の体につきたてた刀を引き抜く勢いで、五人目を殺そうとした白い少年だったが、あっさりナイフでとめられる。軽くしたうちをし、膝蹴りを鳩尾に決め、膝から先の割れていないまっすぐな槍を『繰り出す』。

貫通した槍を消して払いのけるように足を振るう。

白い少年はもう一人がどこにいるのか探す。最後の希崎　時雨。

白い少年は希崎　時雨を目で補足する。だが、見つけたときにはもう遅い。その確認した目にめがけて、一本の長く、硬そうな黒い針を押し進めている。

刺されば間違いなく、脳に達し、即死するような針を、躊躇いなく希崎　時雨は突きたてようとしている。殺しの瞬間をなんとも思

っていない。

「残念でした、と」

それを言ったのは、時雨ではない。白い少年だった。

右手で『繰り出した』ハンドサイズの鎚で、横殴りに時雨の頭を叩く。軽々と時雨は吹き飛ばされ、地面を転がって動かなくなった。バチバチと放電でもしているかのような鎚を、用がなくなったので『消す』白い少年。

そこに立っていたのは一人だった。

暗闇に立っているのは一人、正確に言っても一人だった。

第59歩：ギフト10

V . S .

一人になった少年は、七人分の死体の中、とりわけ理由もなく立ち尽くしていた。

だが、いつまでもそうして呆然としているわけにもいかないのです。自分の大剣の元に歩いてゆく。山肌の固い土に深々と刺さって、抜けそうにない剣をいともたやすく抜き放ち、気だる気に刃の先端部分をおろして地面につけている。刃の手入れなど知ったとでもいわんばかりの乱暴な扱い。

地面の表面部分がやわらかい為少し食い込んでいる。

落ち葉もたくさんあり、余計深く刺さっているようにも見えた。

「あいつ、運がいいんだか、悪いんだかわつかんねえよな。全員が全員、命かけて助けようとしてやがる。ま、実際死んだのは時雨だけだけだな」

キシシと白い少年は笑う。ま、また湧いてきそうな気がするけど、と後に続けて軽いため息は吐いたが、またキシシと笑いを辺りに木霊させる。

「さて、《失敗作》はどこに行ったかな」

「まだ探しに行くにはちょっとばかり、早いな」

誰もいないはずなのに、声がした。

本当に運がいいんだか悪いんだか、ただ単に自分が運が悪いだけじゃないのか、などと思いつつ、後ろを振り向く。

そこに立っていたのは一人。

異常なほどに髪が長い、具体的に言えば、前髪から後ろ髪まで余すと来なく地面についているほどに長い髪をもった人間。

その髪の所為で年齢はおるか体格、性別、顔立ち、何一つわからない。

「久しぶり、か、初めまして。どっちが正しいんだろうな」

「んな、キモイ髪した知り合いになっていてたまるか」

「では、初めまして」

つかみ所のない飄々とした声色。男性とも女性とも分類できない奇妙な声。だからといって、中世的な声に属しているわけではない。一番近い感覚として上げられるのは、電子音だった。

「んで、そのキモイ髪、何の用だ」

「……キモイ髪とは、心外だ。心外過ぎる。実に心外だ。この上もなく心外だ。せめて省略せず、気持ち悪いぐらい長い髪、ぐらいは言ってほしいな」

「んな長い呼称があるかつーの。つか、そんな省略なんてしてねーし。気持ち悪い髪を省略してキモイ髪。なんつか、洗ってなくて臭いそうつつつか、何つつか、とりあえずキモイ髪」

「……洗ってないとは、心外だ。心外過ぎる。実に いや、復唱は確かに相手に印象づけることが可能だが、私のことは印象づいてもらって困るな」

「そのキモイ髪だけで十分印象づいたつつーの」

漫談じみた、下らない会話。そんなものに付き合っている白い少年。する必要がないのに、している暇などないのに、知らず知らずのうちに付き合っている。

「そんな私にキモイ髪とばかりいつている、ほんの少しの意趣返した。『まだ、気付かないのか、剣野？』」

「はあ？何」

いつてんだよ、とは続けることが出来なかった。

答える前に気付いてしまった。あまりに自然な行いだっただので、まったく気付かなかった。普通ならば気付かないほうがおかしいと言っのに。

白い壮年の体は、動かなかった。指の先や、口は動くが、大きな関節はまったく動かない。

「したんだ？」

何、で切る訳にもいかず、取り繕うかのようにそう言う。金色の瞳で相手を睨むことも忘れない。

「簡単なことだよ、《剣野》？」

異常に長い髪の間が、内側から髪を書き上げる。垣間見える精悍な顔立ち。右手で髪を押さえつつ、左手でネックウォーマーのようなものを額を通り越し、髪を括れるような位置までもってくる。膨大な量の髪を手先でいじり、顔が常に見えるように調整していく。出来上がったのは巨大パイナップルヘア。滑稽な感じの紙であるのに、精悍な顔とその髪型はマッチしていた。

そんなことは些事。

白い少年は、その人間の顔を見て目をむき、絶句した。

「私は元々、『嘘吐^{フェイカー}』などではなく、ただの『人形遣い』だったということを、考慮すれば、ね」

そこにいたのは、自分が先ほど散々切りつけた、シニカルに笑う
希崎 時雨。

「本当は姿をさらすつもりなど毛頭なかったが、さすがに急造人形
七体では話にならなかった。時間稼ぎにも足りないほどだと、私
の腕が落ちたのか、《剣野》が強いのかは知ったところではないが」

まったく感情がこもっていない声と、皮肉気に嫌みつたらしく笑
っている時雨。その姿が、先ほどの人形以上に歪で異常。

「オリジナル私自身の姿を視たのは《剣野》が三人目だ。生きているのは、と
限定すれば世界中で三人だけなんて幸運だぞ」

一人で勝手に喋り続ける時雨に対し、何も言わずただ睨み続ける
白い少年。

「《剣野》を止めた方法、人形を使う方法、これはひとつの簡単な
方法。もったいぶらす必要はないし、教えたところで看破できない
から教えてやるう」

頼んでもない説明とシニカルな笑い。人間じみた行動なのに、希
崎 時雨が行うとなぜか異常。

「物語としてはありきたり、《絲》を使った技だ。《剣野》が言っ
てた手品の種と仕掛けた。この程度のことを教えるハンディがあっ
たところで負けないが」

相変わらず、白い少年は動けない。何も言わない。

時雨は時雨で、言いたいことを言い終えたのか、それ以上何も言
わなかった。

長い、沈黙。

その沈黙を破つてのは、希崎 時雨だった。

「《剣野》、残念だが、三人だったのがたった今、四人になった」

「はあ？」

「動かないで！」

白い少年の質す声と、第三者の声はほぼ同時だった。

「別に動かないのはかまわない、動くつもりは元々なかった。そんなことはどうでもいいんだが……」

突然の乱入者にもかかわらず、時雨は落ち着き払い、何事もなかったかのように、声の主に問い返す。

「また、裏切りか、麻紀？」

声の主 風間 麻紀は慌てることなく、少なくとも慌てたことを態度には示さないように、時雨に切り返す。

麻紀の手には二丁のデザートイーグル。それを正確に頭と心臓に照準に入れて、構えている。それが故の余裕がある分、慌てずに対応が出来ているのだろう。

「景色君がいるんだったら……元に戻るだけ」

感情を押し殺した声で風間 麻紀が言う。

そんなことを訊いているのか訊いていないのか、わからないような態度で、麻紀に応答する。

「まあ……何にせよ。私は大地の側だ。足止めはする」

「何言ってんのよ。こっちはいつだって、あなたを殺せるようにしてあ」

ひゅん、と風がなく。

「在り来たりなセリフの途中に悪い。あまりに在り来たりすぎて、落ちまで見えて詰まらなかったから、それ以上は何も言っな」

無感情の威圧的な言葉。

それとともに、麻紀は両手に持っていたデザートイーグルを落とされた。それと同時に体が硬直して動かなくなる。

「な、なんで……？」

「同じ質問をするな。回答に疲れる」

「硬直したことじゃない！なんで『体をまったく動かしてないのに、私が糸で固定される』のよ！」

麻紀は、時雨がほんの一ミリでも、風で揺らいただけでも、射殺するつもりでいた。なのに、希崎 時雨は……指先どころか、揺らいでさえいないのに、麻紀の体を固定した。

「だからそれも言った。種と仕掛けがわかったくらいじゃ、看破でない、と」

齒噛みして悔しがる、麻紀。

その一部始終を見てもなお、白い少年は何も言わなかった。

そんな二人に挟まれて、時雨はぼやく。

「懐かしい面々が、同じ様なことをして、まったく進展も何もないな。……進展がないとは、嘆かわしい。嘆かわし過ぎる。実に嘆か

わしい。この上もなく嘆かわしい。せめて、結果ぐらいは変わってほしいものだ」

そんなぼやきは、冬の風の中に解けて消えた。

第60歩：ギフト11

希崎 時雨のオリジナル、本当に《一人》分の体と精神を持った希崎 時雨が剣野景色の《失敗作》と会話していたころ、そんな事実を知らない僕は、意識をようやく取り戻した。

暗澹とした意識の中、僕は後頭部には木の柔らかさとも、土の柔らかさとも違う、温かな感触があった。

「あー……」

「ん、目を覚ましましたか？」

吐息を漏らし、薄く目を開けると、人の顔らしいシルエットが視界に入る。宵闇にまぎれて、顔つきは見えなかったが、声からその人間は男性ということがわかった。

どうやら倒れているのに顔をつき合わせている体勢から察すると、僕は誰ともわからない人間に膝枕されているらしかった。

「もう少し眠っていてもいいですよ？」

「うー……」

僕は肯定も否定もせず、ただ、息を漏らす。

思考が判然としない。

自分が何もしていて、何をすべきなのか判然としない。

しかしそんな状態は長く続かず、視界は暗順応し、思考もクリアになっていく。

僕を膝枕していたのは、驚くべき人物で、希崎 時雨が六人現れた時の次に驚いた。

希崎 時雨の次、なかなかいい表現だ。僕が頭を預けていた人物は、彼と一緒に死んでいたはずの、他でもない、間宮 和湖だった。

間宮 和湖 『神々の墓守』！

彼の顔を見た瞬間に、死んだ人間がここにいる疑問より先に、敵と認識し、飛び起きる。

腕の力だけで飛び跳ね、踵を木の根に引っ掛けて立ち上がり、そのままの勢いで跳躍と反転を同時に行い、一瞬にして三メートル程度の間合いを取る。

同時進行で、右手にジリリと焼きつけるような痛みを感じつつも、『葬倒天馬』を繰り出す。

『葬倒天馬』を正眼に構えつつ、勝手に荒くなる呼吸を抑えながら睨みつける。

そんな僕を見て、間宮 和湖はゆったりとした動作で立ち上がると、肩をすくめてため息を吐く。

「一体なんだって言うんだい？ たまたま倒れているのを見かけたから手当てをしてあげたというのに…… 『初対面の相手』 だからってそれはないだろう？」

は、と息が止まるような感覚。

「ん？ もしかして、どこか出会っていたりするのかな、その反応は割と私は物覚えがいいほうだけど、外国に多く行っていたりするから、出会う人数が多いからね。忘れているかもしれない、髪の色から察すると…… 白髪、うん？ もしかすると、大地の関係者かな？」

そんなことを平気で言う、初対面であるらしい、間宮 和湖に似た誰か。

「それならひとつ教えてほしいんだが…… なんで、町に人がこんなにもいないんだ？ それに町中いたるところ壊されている形跡があるし、久しぶりに帰ってきたらこんな状況なんて洒落にも冗句にもな

らないぞ？まさかとは思うが《あの出来事の繰り返し》でもしてるんじゃないだろうね？」

「あなたは」

僕の目の前に立つ人間の質問を僕は完全に無視をして、まったく別の質問をする。

「ん？ああ、これは失礼なことをしたね。もしかしたら大地、紀伊大地から訊いているかもしれないが、私は『神々の墓守』のメンバーの一人」

意味深に一拍おいてから、彼の人は薄く、能面のように張り付いた笑顔を強調して、言う。

「役目無しの『断罪の血族』、間宮 和湖だ。以後よろしく」

刀を突きつけられ、正対しているというのに、何の物怖じもせず、握手でも求めているかのように、三メートルも離れているのに実際に握手を求めているらしく、右手を差し出していた。

そんなものは当然無視し、間宮 和湖と名乗る人間も無視し、僕は思考にふける。

ふけるのは、間宮 和湖について。

この間宮 和湖が本物だとするならば、僕が今まで見ていた、会話していた、あの間宮 和湖は一体なんだというのだろうか。いろいろな人間が、頭の中を交錯しては、消える。

そんな中で、僕はひとつの確信にも似た仮説を立てた。おそらくこのトリックを行っているのは希崎 時雨で間違いないだろう。あの六人になっていた技の応用じみたことをすれば、それはたやすいことのように思えた。

しかし、そうすると、この目の前に立っている間宮 和湖も希崎

時雨である可能性も捨てきれない。一度死んだことになっている間宮 和湖を使えば僕を混乱させ、足止めなり何なりをするのは、いとも容易いことだろう。

どうしてそんなことをするのか、その理由は僕にはまったくの推測の及ばない域だ。推測する必要はないし、何度も言っている気がするが、大事なものはそんな人間としての理由でもなければ、導かれる結果でもない。

一体どれほど僕が関与させられているのか、だ。

まあ、関与を考えれば、おのずと理由やら何やらは必要になってくるわけなのだが。

閑話休題。

いや、別にこの思考が不必要かどうかだったかといえ、必要だったと思うので閑話ではないが、思考の軌道修正を行う。

間宮 和湖がさつき独り言のように喋っていた言葉。

町に人がこんなにもいない。

町中いたるところ壊されている形跡がある。

久しぶりに帰ってきた。

そんなことはどうだっていい。町に人がいないのは、おそらく紀伊 大地の仕業。町中の破壊された後は全員の仕業。久しぶりに帰ったのは間宮 和湖の問題。

僕が気になったのは、最後の一言。

彼は思わず漏らしたのかもしれないし、あえてこちらをさらに混乱させるためのものかもしれないが、やけに喉奥に引っかかった。

『《あの出来事の繰り返し》でもしてるんじゃないだろうね？』

《あの出来事》 おそらくは《失敗作》の言っていた榎風の仕出かした友人への罪を含む昔話のこと。

この人はそのことを知っており、その状況と現状が酷似しているということなのだろう。

繰り返し、か。

そうなのかもしれない。

昔のことを知らない僕が安直に何か言っているとは思わないが、その《出来事》の被害者が剣野景色ならば、間違えなく今回の被害者は僕ら《失敗作》で、役者が変わっただけなのかもしれない。

だとしたら、結末を、僕らの行き着く先を、目の前でキモチワルイぐらいに揺るがない笑みを浮かべている間宮　和湖は……おそろく知っている。

この人なら、僕の話にエンドマークをつけられるかもしれない。魅力的で魅力的で魅力的な餌だ。毒を盛られているかもしれないのに、食いつきたくなるほどに。

だから僕は迷った。

相手の見せた隙、もしくは罠に何らかのアプローチをかけるべきかどうかを。

嘘と真。

偽と誠。

詐と正。

それを見極められるかどうか問題。

だから僕は気付かなかった。そんなことを逡巡させることそのものが、相手の狙いなのだと。

考えて見れば当たり前。これだけ長い間、初対面の人間が黙って、それも刀を構えたまま何の行動も起こさない僕に対して、声をかけないはずがない。間宮　和湖が一般人ならばそれはおかしくないことだが、『神々の墓守』たる彼が何の状況打開を図らないのはどう考えても不自然だった。

そんなことを考えていてももう遅い。

間宮　和湖にまんまと僕は嵌められてしまったらしい。

わざわざ相手なんてせず、身を隠し、《失敗作》との合流を待つべきだったのだ。

山林の合間、宵闇を割って現れる人間が一人。

「悪い……さすがに鏡とだといつものようには終われなかった。時間をかけてすまない」

「いえいえ、かまいませんよ。鏡とあなたとの仲の良さは私も知っていますから。もう少し時間をとっていても良かったですよ？」

「いや、大丈夫だ」

白銀の頭髪。

琥珀の虹彩。

至上の美貌。

化け物みたいな完璧な容姿の人間が、その姿を現す。

「いつまでも鏡のことを嘆いていたら、鏡自身に申し訳が立たない。輪廻した後に何を言われるかわかったものじゃない」

「まったくその通りですね。とりあえず、役目無しの私が言うのも変な話ですが、時間稼ぎという役目、果たしましたよ」

「重ね重ね、すまない」

じやらりと金属同士がこすれるような音がした。

良く視ると無骨な太い鎖が、その人の手に幾重にも巻きつけてあった。

間宮 和湖との会話を終え、宵闇から完全に浮き上がった琥珀の瞳が僕をまっすぐ見つめる。

『葬倒天馬』を取り落としそうになるほどの恐怖と威圧。

「さあ……そろそろ終幕にしようか、《大罪者》^{アンラ}？」

まるで僕を悪を裁くかのように、紀伊 大地はそう告げた。

第61歩：ギフト12

一瞬の跳躍で、紀伊 大地は僕への間合いを零にする。

無骨にジャラジャラと巻きつけられた左手で、飛んできた勢いのままに僕の頭をしっかりとつかみ、後ろの木に叩きつけられた。

『葬倒天馬』をもともせず、見せたこともない獰猛さを垣間見せる紀伊 大地。

ギリリと光る瞳孔に、僕は構えていた『葬倒天馬』を取り落とす。

「貴様は、終焉を望んでいるんだろう？」

今までに無いきつい口調で紀伊 大地は僕に向かって口を開いている。

「貴様は絶望し、腐心し、世界を裏切るんだろう？」

僕を押さえつけている左手に力がこもり、無骨な鎖が頭に食い込む。痛みは感じなかった。

「だから、私は、貴様が私たちに牙を向く前に、終幕を下ろす」

血流を止められているのだろうか？視界が暗くなってゆく。

「貴様には分からないだろうな。私達、いや、私がここまで君を明確な意思を持って殺そうとしているかなど」

暗澹とした声色が、僕の耳に届く。

「私は君になるべく、そんな感情は見せない様に接してきた。が、

私は君と榎風をここに招き入れた時点で最初から殺す気だったよ」

耳から体中を、心を侵食されているようにな感覚に襲われる。

「今、貴様は死ぬ気になった、自らな。だから、ついでだ、私が貴様を殺そうとしている理由を教えてやろう」

いかにも憎たらしげに、僕に紀伊 大地は告げる。

「貴様が私に殺されようとしている理由それは……」

僕の意味なんて欠片さえも無視して、紀伊 大地は宣告のように、僕に知りたくも無いことをわざわざ教える。

それはきつと自己満足の正義でも、

それはきつと独善的な優しさでも、

それはきつと高慢な自身でもなく、

それはきつと紀伊 大地の 彼の、彼だけのための感情的な行動。理性で固めたような、感情だけの行動。他人を思いやっているようで、他人を無視した行動。

人間はきつとそれを、復讐と呼ぶのだろう。逆襲と名付けたのだろう。

紀伊 大地はきつと僕に、復讐でもしているつもりなのだろう。

僕というのは正確じゃない。たぶん、《失敗作》が僕に教えた、剣野景色という人間に対して。

まったく、傍迷惑な話だ。

榎風は僕のことなんて考えもせず、僕を作った。

剣野景色は僕のことなんて考えもせず、僕に謎を残した。

紀伊 大地は僕のことなんて考えもせず、僕を殺そうとしている。まったく傍迷惑な連中だ。

僕の周りは僕にとって、傍迷惑なヤツばかりだ。

だから、紀伊大地が言ったことに対して、僕は一切何も感じなかった。

「貴様が持っている能力、剣野景色から受け継いだ《神殺し》の力だ」

その程度のことが。

僕はその程度の、どうでもいい理由で殺されるらしい。
だからって何を思うわけじゃないけれど。

「神は確かに死ぬ。死に、輪廻する。貴様の能力、いや、その《才能^{ギフト}》は神の輪廻そのものを崩壊させる能力だ」

ギフト 才能。

ギフト 魔法使い。

ギフト 紀伊 大地。

薄々は気付いていたけれど、そういうことか。

「『神々の墓守』として、貴様のその《才能^{ギフト}》はあまりに危うすぎる。剣野景色と同じように、ただ殺すのではなく、私の魔法を持って、繰り返し返さぬように私が管理しよう。だから」

紀伊 大地の左手に巻きつけられた鎖が、淡い光を放つ。
まるで、一つの回路の様に、鎖の何かが駆け巡っている。

「貴様のその《才能^{ギフト}》 私^{ギフト}が貰い受けた」

ガチリ。食い込んでいた鎖が僕の中に侵入してくる。まるで何処かの映画のように、宇宙人にでも侵食されている気分だった。
体中から力が抜けていく感覚。

体力的な力じゃない。

本当に、生命としての能力が抜けていく。

これが 魔法使い『ギフト』の力と本能的に理解する。

魔法『ギフト』 才能の与奪。

『ネクロノミコン』で事前知識がなかったら、僕はさすがに混乱しただろう。思えば、『ネクロノミコン』との遭遇が僕の全てを変えてしまった。

見つけなければ良かったのだろうか？

知らなければ良かったのだろうか？

僕はそう思う。どこその小説の主人公のように、自分に対して悪いことだけど、知らないほうがもつと嫌だったなんて、事後報告じみた割り切りのよさは、生憎持ち合わせていない。そもそも、見つけさえしなければ、そんなこと考えずに済んだのだから。

いよいよ、意識が不確かになってきた。

才能が抜き取られるとは、こうも苦行だとは思ひもしなかった。ドクンと、まだ心臓は動いているのは分かる。心臓を動かしているのは、才能ではないのだから。

どうせなら、それが、それさえもが才能で、生命活動も止めてくれればよかったのに。

そんな無茶なことを僕は考えつつ、視界が一瞬にしてクリアになるのを感じた。

「なっ
」

目に入ってきたのは驚愕にゆがんで僕を見ている紀伊 大地の顔。その次の瞬間には紀伊 大地のは僕の目の前からは消えていた。がつ、と言う、誰かが何かを殴るような擬音語とともに。

支えを失った僕は、崩れ落ち、地面にへたり込む。

妨害したのは誰かと思い、とっさに仰ぎ見ると、そこには

「よっ
」

一月前までには当たり前だと思っていた、快活に笑う、榎風の顔があった。

第62歩：カナギ

今さらだった。

遅すぎだった。

あの悲愴に泣いていた榎風。

この快活に笑っている榎風。

僕に裏切られた榎風。

でも僕を救った榎風。

本当に　今さらで、遅すぎだった。

「何の、つもりだ」

もちろん、言ったのは僕じゃない。僕にはそんなことを頭に浮かべる思考力さえ、残っていなかった。それは紀伊　大地の所為か、《失敗作》の所為か、体力の問題か、精神の問題か、僕には判別できなかったけれど。

「何のつもりだ、秋宮！！」

先程の冷酷さを裏返したかのように、それこそ僕が《失敗作》へと墮落した僕のように裏返し、声を荒げる紀伊　大地。

醜悪だった。

ありきたりな表現だけれども、人間の本質の部分は、何て醜いのだろう。目も当てられない程に、何て醜いのだろう。

これが僕のようにだったのだろうか？

これが僕のようにだったのだろうか。

「何のつもりか、だと？ハッ！！」

弱さなんて欠片もなく、
脆さなんて破片もなく、
高尚で、高潔で、
高貴で、高韻で、
完全無欠で唯一無二、
最強で最高の、

「これは私の『永遠の恋人』だ。勝手にさわつといて、何言ってるだよ、クソが」

榎風はそこにいた。

「何だよ、それって」

今度は僕。

榎風が此処に居る理由を問いただしたいのは紀伊 大地だけではないのだ。

僕は紀伊 大地と違って、状況を理解して、即座に言葉を口に出るほど、人間として完成していない。それこそ、まさに《失敗作》のように。

だから、僕はようやく、榎風と言葉を交わすことが出来た。いや、言葉を交わせた訳ではない。正確に、もつと的確に事を言い表すならば、感情の吐露。きつと、僕は、榎風に初めて榎風に対して、感情を爆発させているんだろう。

「何で、何で今さら、そんなこと言っんですか！！全部黙ってて、嘘吐いてて、知られたら勝手に泣いて、今度は勝手に助けて、本当に、本当に今さらなんですよっ！！」

「ホント、そうだよなあ」

いつものように、僕がこんなところに来る前と同じ調子で、寸分
違わないまま喋る榎風。

ただ、僕の方を向くことはなく、紀伊 大地を目線の先においた
ままだった。

まるで何かを警戒するかのように。

まるで何かを見張るかのように。

まるで何かを憎むかのように。

まるで何かを恨むかのように。

そして まるで、まるで何かに怯えるかのように。

ただ、その美しく、輝くような眼で紀伊 大地を射し穿つ。

「ホント、今さらだよなあ」

繰り返すように、ポツリと言葉をもらす。突けば崩れるくらいに、
弱い言葉を、もらす。

「確かに、私はお前に全部黙ってたし、それは裏切り、なんだろう
な」

人工の明かりのない森。

月の光も届かぬ夜。

夢げに、酷く夢げに喋る榎風。

「お前が何処から何処まで知ってるか分からないし、多分、私から
してみればだけど、誤解もあると思う」

それはいつもの絶対的に物事を言う榎風ではなく、まるで何かを
提案するかのような柔和さを、今の榎風は持ち合わせていた。

「でもな、そんなことはどうでも良いんだ、私にとって」

紀伊 大地のことも、《失敗作》のことも、まるで元から何もなかったかのように、全てをうち払ったかのごとく、顔を僕に向け、榎風は僕と視線を絡ませる。

透き通り、吸い込まれそうな黒い瞳は変わっていなかった。

「たとえお前が私をいくら裏切ったって、私にいくら嘘を吐いたって、私をいくら憎んだって、私をいくら恨んだって、私はな」

ゆっくりとマバタキをするかのように、榎風は薄く目を閉じて、開く。決意で結ばれた瞳が、そこにある。

対して、僕は目を閉じることなく、ただ待つ。降りかけられるであろう、言葉を。

「私はな……私は何がどうあろうと、お前が好きだ」

動けなかった。

動かなかった。

言われるコトは分かった。

言われるコトを分らないフリをした。

榎風なら、虚偽だろうと本音だろうと言うことは分かっていたのに、目をそらして考えることを放棄した。そのお陰か、その所為か、僕の口から返す言葉は出てこない。

感情を爆発させたところで、榎風の一言で静められるなんて、ざまあないな。

榎風は、そこで言葉を切ることなく、僕に歩いて近づいてくる。

「だからこそ、な」

ゆっくり、ゆっくり一歩ずつ地面を踏みしめながら、僕の前まで

くると、しゃがみこむ榎。へたりこんだままの僕と、視線の高さが同じになった。

相手の吐いた息が吸える距離。

相手の響く心音が伝わる距離。

相手の吐いた嘘が分かる距離。

相手の微笑む顔が見える距離。

そんな距離に服が汚れることも厭わず、跪いている榎は、ほんの少し体を動かして、僕の手をとる。

人肌の温もりと同時に感じる、重厚感と冷たさ。

僕の指をその冷たき塊に絡めるように、ゆっくりゆっくり一本ずつ、白魚のように優美な指を動かす榎。官能的な指使いは止まることなく、硬い塊と絡まされていくのを、僕はなすがままで感じていた。

絡める作業は終わったのか、一旦手を離すと、今度は僕の手を、下から包むように持ち上げる。

僕の目の前に持ち上げられた自分の腕。

そこに握られていたのは、僕が握っていたのは

紛れもない、リヴォルバー回転弾倉式拳銃だった。

宵闇に浮かぶそのフォルムはあまりに不気味で、あまりに怖々しくて、あまりに 空虚。

もう一度、榎はゆっくりマバタキをして、僕を正面から見据える。

僕を見ているその顔は、ほんの一瞬だけ、微笑んでいた……気がする。

「だからこそ、な、　だからこそ、私がお前を好きだからこそ、お前を裏切った私を、お前は『裁く』権利がある」

そういつて、何のためらいもなく、無骨で凶悪な銃口を……自ら
の口でくわえこんだ。

榎風顔の顔には恐怖や悲哀はなく、決意の顕れさえも見せず、ただ、そこにあつたのは、全てを受け入れるような慈悲深い、穏やかな、揺るぎない表情。

笑顔で僕と楽しむ榎風。

怒顔で僕をからかう榎風。

哀顔で僕と悲しむ榎風。

優顔で僕を守る榎風。

毎年、毎月、毎日、毎時、毎分、毎秒、一瞬にして表情を変える。そんな榎風が僕に見せたことのない、とつたことのない行動があつた。

僕に全てを委ね、何も反発することなく、全てを受け入れるような行動は、一度としてとつたことがない。

「う、うう」

本当に今さらだった。

本当に遅すぎだった。

もっと早くに榎風が行動にうつしていてくれれば、もっと早くに榎風の慈悲深さを知っていれば、あるいは話は、いや、僕と言うあの《失敗作》は拗れずに済んだのかもしれない。

榎風はきつと今、剣野景色の代わりとしてではなく、僕を僕として見てくれている。

初めはどうだか分からないけれど、これから先どうなるか分からないけど、きつと今だけは。

「うう、ううううう」

榎風が触れている手の甲がやけに温かくて、榎風が存在が僕にあまりにも近くて、涙が溢れてくる。

もしかしたら僕は、本当の意味で泣いているのかもしれない。本当の意味で泣いているんだと思う。

僕は手からリヴォルバーを取り落とした。

第63歩：世界

榎風はリヴオルバーを取り落とした僕の手を離すと、嗚咽をもらす僕の背中に手をまわす。自らの顔を僕の白い髪に埋め、背中を軽く二度、子供をあやすように優しく叩いてくれた榎風。

僕は拒むことなく、その温もりを素直に受け入れた。

正直なところ、僕はまだ榎風のことを信じきれていないのかもしれない。《失敗作》の言ったことが嘘だとも思えないし、気持ちの整理もついていない。榎風の言ってくれた言葉をストレートに受け止められないし、僕から好きとも言えない。

けれど、問答無用に榎風を拒絶する必要も気持ちも、また、ない。

榎風は最後に一度、僕を強く抱き締め、頬に軽く口づけすると、体を離れた。離れてもなお近くにある顔は淡紅色に染まっただけで、そして、幸せそうに笑っている。

無邪気で無防備で無垢な笑顔。

そんな笑顔を一瞬にして消し、立ち上がってから一步離れ、膝についた土をはらう榎風。

榎風は美しい体を翻し、紀伊 大地と対峙する。

「秋宮、自分が何をしているか分かっているのか？」

「わかってるよ」

いつの間にか立っている紀伊 大地の前置きのない質問に、榎風は即答した。

「問題だらけで、お前の言いたいこと、いや、当たり前のこととは分かってるつもりだ。だけど、そっち方向に流れていくのは私には無理だ。私が流され出したら、それこそ死んだみたいなものだろ、精神的に。つーわけで、一つ言っというてやるよ、《魔法使い》」

僕は、言っている意味がよく分からなかった。でも分からないなりに、榎風が大変な選択肢を、大変な『罪』の様なものを選ぶようにしているのは、雰囲気から読み取れた。

しかし、そんなことは悩みの種にもならないかのような気配で、榎風はニタアと最高に不敵な笑みを浮かべる。

「悪いな、紀伊。ついでに、ごめんな、世界中のみんな。私は世界を裏切ることにしたよ」

と、榎風は言った。僕の知らないことを榎風は確実に知っている。それもかなり重要とされる類いのこと。榎風の言動から察するに、榎風の選んだ『罪』と言う奴は、世界と対立するような、とんでもない『大罪』らしい。

「秋宮、やはりそういう選択をしたか」

紀伊 大地は、至極落ち着いていた。自分の思い通りならなかったはずなのに。先ほど、あんなに声を荒げていたというのに。きくと、この場で誰よりも落ち着き払っていた。

「秋宮がそういう回答を出すことは予想していたが、まさかその少年が拒絶しないとはね」

榎風は不敵に笑ったまま。

紀伊 大地も不敵に笑う。

「お前がそういう決断を下したのならば、もう曲がることはないだろう。だが」

右手を僕にまっすぐ向け、両目を閉じる。

「その少年にも、選択の権利と機会を与えるべきだな」

驚く暇もなく、榎風は反応を始めていた。黒い絹のような髪をなびかせて、紀伊 大地へと肉薄する。

そんな榎風に目もくれることなく、早口に口を動かしているが、何を言っているのかは判別できない。おそらく、呪文であろう。僕に向けて唱えているらしい。

高速で接近する榎風が、もう少しで紀伊 大地の口をとらえようとした瞬間、世界が、とても静かに思えた。

その為か、紀伊 大地の最後のフレーズだけが、やけにはっきりと僕の耳に届いた。

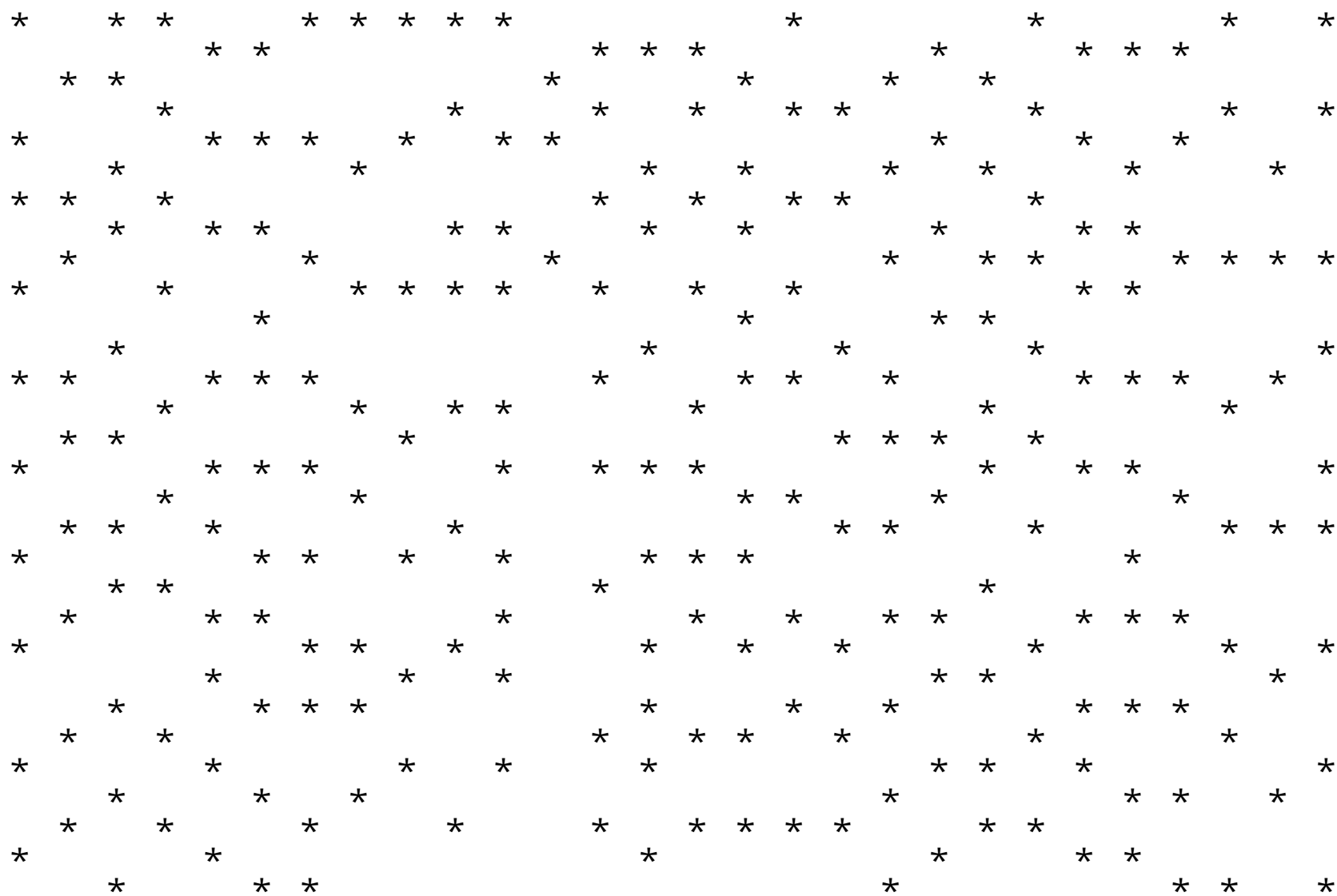
「ユキツクサキハ」

琥珀色の深い眼が、僕をとらえる。

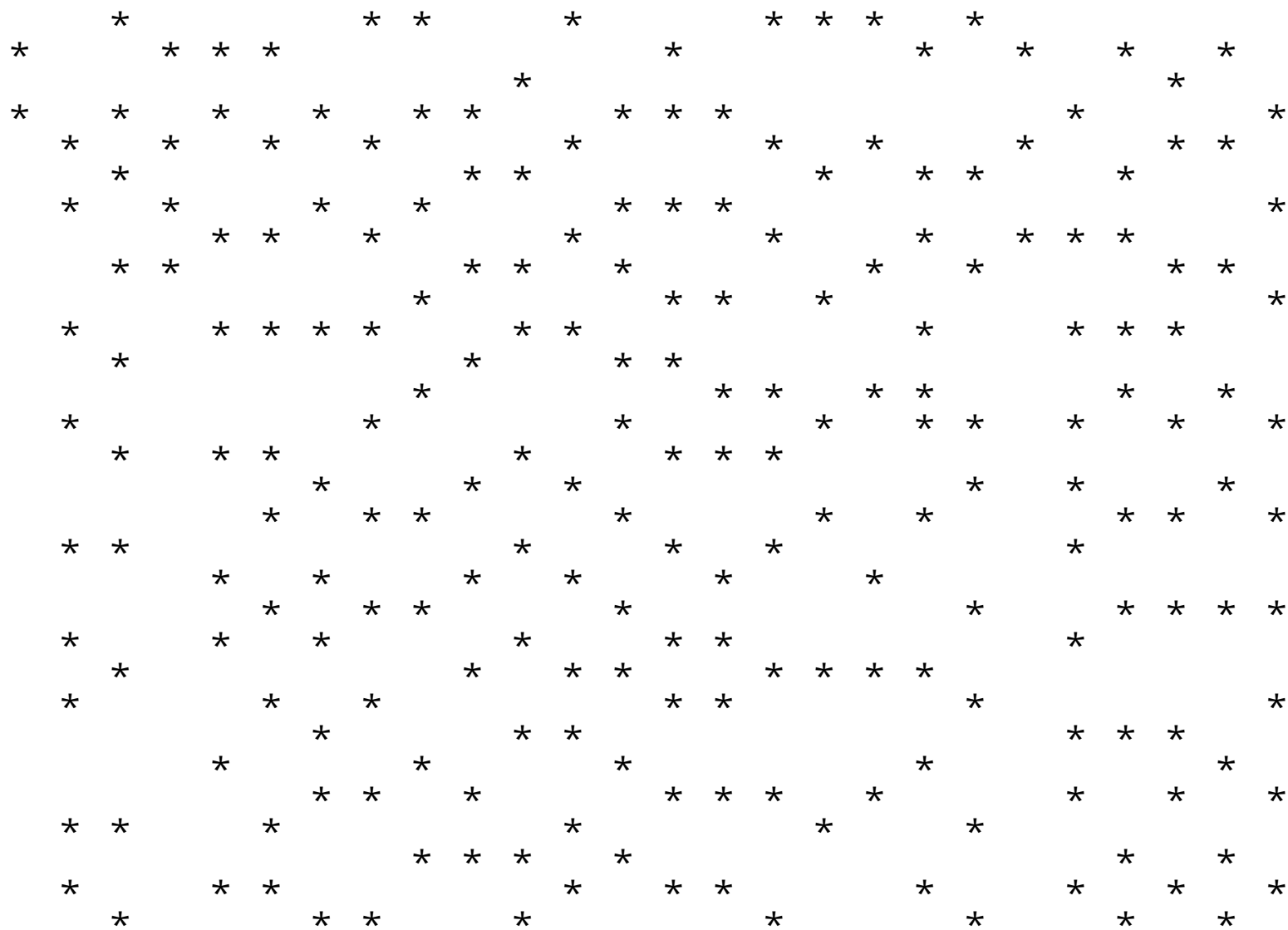
紀伊 大地の存在が無限に、まるで面積のない点が拡大していくかのように、膨らんでゆく、僕を包み込んでゆく。

例えるならば、それは 光。

「白銀の世界」



酷く浮遊感のある地面だった。
果てなく続く平らな白い大地と白い空。自然な曲線が何一つない
幻想的な空間。



この世界には、深々と雪が降っていた。

「第三魔法、《空間》^{ドリーム}だ」

紀伊 大地が立っている。そこが世界の中心かと思わせるほどに、彼の存在は絶対的だった。

「第一魔法、《才能》^{ギフト}で奪った技術の一つだ。まったく、魔法とは便利なものだ」

紀伊 大地は嬉々として、自己の魔法を自慢している。他人の能力に依存しているだけだと言っのに。

「本当はもう少し内容に凝ってみたかったが、何分、秋宮がいたからな」

これだけ不気味であれば十分、と言い返そうと思ったけれど、無駄な問答な気がしてやめておいた。

「さて、さっそく本題に入ろうか。魔法と云えど、秋宮相手ではもって10分程度だろう。時間が無い。黙って聞いてもらうよ」

僕は素直に手肯する。理解はしていなかったが。

「よろしい。本来ならば昔話 剣野君の話まで遡って話をしたいし、そうすべきなのだが、時間の関係上、割愛させてもらうよ。しかし、ある程度、あらすじは説明しないと、話が通らないか。中途半端になるが、やはり説明しよう。秋宮は昔、一つ魔術仕掛けの半永久機関、『理由なき剣』を作った。これだけで察するには十分だろうが、この剣が現在に至るまでの全ての発端であり、この発端を

始まりへと昇華させたのが剣野景色、その人だ。ここで一つ注釈を入れるが、『理由なき剣』の能力は果てしなく、強力なモノでな、本当に何でも切れる剣だった。人や物体は当然のこと、秋宮は空間さえも切り刻むと銘うっていたからな。実際、効果を發揮して斬れないモノはなかった。だがな、効果を發揮させるには一つだけ条件があつたんだ。それがこの上もなく厄介で、『斬ることに理由を持たないこと』という制限ものだ。

それが故に『理由なき剣』。全くの矛盾だと思わないか？人は何かをするために道具を作ったというのに、道具を使うことに目的を持つなど言う。まあ、その矛盾を凌駕したのが剣野君だったのだが。おっと、注釈が過ぎたな。話を戻そうか。その剣野君を中心とするいや、中心はまた別か。剣野君を一端とする騒動の結果、結果と言うにはあまりにも曖昧な終わりの果て、剣野景色という人物は死んだ。これだけは間違えようのない事実として残っている。その原因は秋宮で、その過程を辿ったのは剣野君、そして、終末の判断下したのは、つまり、直接剣野景色を殺したのはこの私だ。それは、剣野君が望んだエンディングではない。当然か、自分が死ぬエンディングなど誰が初めから望んでいようか。だからだろう。秋宮は彼の残したたった一言を実行しようとしたのは」

『やり直しを、要求する』

何処からか、そんな声が聞こえた。

「騒動の直後、秋宮は行方を眩ました。目的は明らか、剣野景色の『製造』だ。『理由なき剣』もなくなっていたし、直ぐに確信したよ。だが、秋宮が本気で身を隠した以上、私たちが見つけるなど、

到底叶うはずもなかった。さて、これが剣野景色を秋宮榎風が作るうとするに至るまでの過程だ。君には勘違いをしてほしくないから言っておくが、過程はあくまで過程だ。今の榎風にとって、そんな過程無いに等しいかもしれない。自分で勝手に結論付けないことだな。こればかりは私にだって予想ができないんだ。何せ君ほどに榎風の傍にいた『人間』はいないのだから。君を守るため、秋宮がどれだけ傷つき、財を費やしたかなんて、想像もできないほどに莫大な量のはずだよ。君は榎風に隠されて知らなかったかも知れないが、秋宮は君を超越せという再三の要求を危険も省みず、全て断っている。この街に来てからもね。ああいう性格だが、人間である以上、少なからず恐怖が――

「要求？」

僕は疑問を押さえきれず、思わず問うてしまった。

「たかが一体の、最強の魔術師が作ったとはいえ、人間を作り替えただけの、魔術製合成生命体を超越せという要求が？」

「まったく、時間がないから口をきくなといったのに。まあ、そちらの方が的を射た会話になって早いかな。君がとんでもない思い違いをしていることも分かったし。たかが一体？作り替えただけ？魔術の知識を半端に知るから、そういうことが考えが起るんだ。どうやって、知ったかは知らないが、確かに自我と理性を持つ、君のところの葵、茜が良い例となるような精緻なものは、非人道的ながら人間を作り替えて作る。が、君は例外なのだよ。例外中の例外。唯一の例外なのだよ。君は――」

無から作られた唯一の有

だ。秋宮が魔術に魔術を重ねて編み出した、な。世界ではそれを第六魔法として数えるほどの魔術だ。《魔法使い》である秋宮もさる

ことながら、その結晶である君を世界は狙っているんだよ。そんな背景を抜きにしたって君は狙われる立場にある。何と言ったって君は第二魔法《^{ヴァンパイア}血族》の疑似回路が組み込まれているのだからな。不思議に思ったことはないかな？魔術も行わずに、武器を製造するその力を。その力は君の血管が一本残らず、魔術式の役割を果たしているからこそできる技なのだよ。そんな身体に生まれながらに埋め込まれた機能、私の魔術では回収しようがない。君が家の結界に反応したとき、ほとんど直感的に、だが確実に、鏡と共鳴したとき君の中に『神殺し』があると確信を持つて思った。私は『神殺し』は榎風の埋め込んだ才能だと思って、君に鎖を下ろしてみたが、その時初めて分かったよ。『神殺し』の正体が、全く別の君の回路そのものだよね。だから今は、君を殺す気はないとは言わないが、少しだけ様子を見てみるつもりだよ。話が若干逸れたが、君はバックグウンドの面においても、スペックの面においても、間違えなく現代魔法と現代魔術の粋だと言えるだろう。

《^{ヴァンパイア}血族》の使い方は君の方が本能的に理解しているだろうから、私から言えることはない。私が言えることはあと一つだけだ。即ち、君そっくりの彼に付いてだけだ。直接私はまだ確認していないが、報告によると、剣野君と問答無用で意識付けられてしまうらしいな、剣野君を知っている人間だと。ここからは推測、誰でも出来るような簡単な推測だ。君は、『零』の理論を聞いたことがあるかな？簡単に説明すると、この世の要素はある一定の基準値で其処を『零』とすると、プラス要素とマイナス要素が差し引き『零』になって、世界はそれを保とうとする、という若干哲学の入った理論だ。が、魔術においてかなりの深い位置にある前提だ。例えば右向きに電流を流せば、付近で左向きに電流が等量流れる、と言った具合になそこだ、無からでた有のような産物が突如顕れたとしたら、世界は一体どうするだろうな？しかも、プラス要素しかないとしたら？さらに、魔術と魔法の粋という尋常ではない量だとしたら？答えは、簡単だと思わないかい？作るのさ、同じように。無から有を、マイ

ナス要素だけで、尋常ではない量を。一ヶ所ではなく、世界中にだらうが。まあ、その内、そうだな、三年ぐらいで一ヶ所に固まるだらうが。そんな果てしなく多い量の負の要素、誰が消滅させることができると思う？ 私だって無理だらうし、核兵器だって無理だらう。消滅させたところで、正の要素が残っている限り、何度だって復活するだらうがな。だが、だがな、例えば、正と負がふれあったとしたら？ もともとこの世になかったものだ、きつと対消滅でも起こして消滅してしまうだらうな。ふれあうとしたら、本質と本質同士ではないという意味はないだらうが」

紀伊 大地が僕を正面から見据える。

「さあ、選べ、この世の存在しなかった正の要素。秋宮榎風と共に負の要素と戦い続け、傷つき合うか、負の要素と共に対消滅をし、世界を元に戻すか。榎風の意味とは関係のない、君の意思を持って決めるんだ」

「決断を下す前に、一つ聞いて良いですか？」

僕は紀伊 大地を正面から見据える。

「僕を殺そうとしたり、助けたり、結局のところ貴方は一体、何がしたくて、誰の味方なんですか？」

「何をしたいかなんて分からないよ、剣野君を殺したあの日からね。償いかもしれないし、追撃かもしれない。贖罪と怨嗟との間に微妙なバランスでたっていて、状況に流されて、感情のままに動いている。誰の味方か、か。少なくとも、君や秋宮の味方ではないし、ましてや、世界の味方でも弱いものの味方でもない。正義のヒーローではないからな。強いて言うなら私は……夏雪の味方か」

僕は予想外の答えに思わず笑った。

紀伊 大地も今までになく楽しげに笑った。
互いに笑う。

僕は今、裏返らずにいられているのだろうか。そうだと嬉しい。素直にそう思えた。

ピシリ

空間にヒビが入る。

「意外にもったが、もう終わりか」

一瞬にしてヒビだらけになった空を見上げ、紀伊 大地が呟く。

「まるで、示し会わせたようによいタイミングだな」

「ホント、そうですね」

瞬く間に広がったヒビが空を覆いつくす。

「最後になったが、ちゃんと決断は出たんだろうな？」

「ええ、勿論」

「なら、それでいい」

紀伊 大地はそれ以上、何も言わなかった。

ヒビがまっ平らな地面を裂く。

「それじゃ、また」

「何を言っている、さよなら、だ」

世界がヒビで満たされる。

まるで、綺麗なステンドグラスでも砕くように、あっけなく、儚

く、世界が剥がれ落ちていく。

目映い光に視界が奪われていく最中、僕の目は確りと、紀伊 大地の口元をとらえていた。

音は聞こえない。でも、何となく、言っていることは分かった。

それは、僕の言っていた、『また』でもなく、

それは、自分の言っていた、『さよなら』でもなく、

謝罪の『すまない』でも、

怨恨の『ゆるさない』でも、

鼓舞の『がんばれ』でも、

感謝の『ありがとう』でも、

それは僕の事を考えたセリフでさえなかった。

紀伊 大地は、一言こう言ったただけだった。

「
を、よろしく」

紀伊 大地は、深々と降る雪の中、笑っていた。

第64歩：《失敗作》

《失敗作》

「なあ、この《絲》どうにかなんね？」

「……………」

月明かり銀色の夜。

軽薄に喋る《失敗作》に、無言で応じる希崎時雨。

その場には、月光はおるか、如何なる光でさえ視認不可な絲が無数に張り巡らされていることなど、第三者は知るはずもない。そして、その位置を正確に知っているのは、時雨のみ。

「いい加減、この体勢長いと疲れんだけど」

あくまで、時雨は軽々とした態度を崩さない《失敗作》を相手にせず、《失敗作》と同じように微動だにしない。空を見上げたまま、物思いに更ける。

「だー、ホント、全然動けねー。つか、力はいんねー」

「いい加減、何か言いなさいよ」

文句の言葉を麻紀も口にする。それでもなお、時雨が口を開かずにいると、麻紀は心底嫌そうに、舌打ちをした。

「せめてさー、いつまでこうしてるかくらい、教えてくれね？」
「そうよ」

二人の行動がよほど煩わしかったのか、時雨はほんの少し考えるように目を動かす。一頻り、目を動かし終わったかと思うと、こんどは《失敗作》に視線を投げた。

「場合によつてはすべてが終わるまで、だ」

「あー、はい、そーですか」

至極当然のような回答をする時雨に、やる気のない反応を見せる《失敗作》。

時雨の長い髪を風が巻き上げる。垣間見える表情は、あくまで無表情。

風が吹き、止み、また風が吹く。静かに時間が流れる。

「だー、もう我慢できねー！」

それは全く突然で、前触れのない現象だった。

《失敗作》の体がまるで粘土のように、グニヤリと曲がる。同時にプチプチという、絲を切るような音。

《失敗作》は無理矢理、体から同時に武器を生成し、動いた。その際、摩擦により身体中に走る無数の傷、ほとばしる血。

そんなことを気にも留めず、《失敗作》は自分の大剣へと接近する。

対する時雨。時雨は麻紀の方へと体を翻す。同時にそよぐ、束ねられた髪に、高速で飛来する鉛玉が掠める。

鉛玉をはずした瞬間、麻紀は軽く舌打ちをしたが、その顔は笑っていた。

「私の作った遠隔操作式の銃か」

素早く体を動かして、標的に定められないようにする時雨。自分

の作った銃だけに、弱点は理解していた。

だが、麻紀に元から当てようという気はない。ただ一瞬、《失敗作》が自らの大剣に触れるまでの短時間さえ稼げればよいのだ。

その理由を初めから悟っていた時雨は、もとより《失敗作》を止めようとしなない。寧ろ遠ざかるように走り出す。

先程自分が、絲で飛ばした少年がいる方向へ。

開けた場所から時雨が離脱したのと同時に、白髪の少年は大剣を手にとり、地面から抜きはなつ。

なんの意図もない、空に向けた一振り。

ヒウンと、空間が鳴く。

その場に満たされた絲という絲が、全て切り刻まれる。

「！」

《失敗作》の声にならない高い狂笑。

絲を切られて解放された麻紀が思わずへたりこんでしまうほどに、疾走する時雨が思わず振り返ってしまうほどに、その笑いは外れている。

その程度のことは気に留めず、真つ赤な大翼を惜しげもなく発現させる《失敗作》。無駄なまでに巨大な翼を一度羽ばたき、軽く中に浮く。それにともない、深紅の羽根が散乱する。まるで、火のついた血を撒き散らしているかのような、痛々しい光景。

滞空したまま、再度羽ばたくと、一瞬にして木の背丈をこえる。

更に何度も、幾度も、何返も、幾返も、翼を動かし、空高くへと舞い上がる。その度に、血飛沫を浴びた雪のような羽根が地上に降り注ぐ。

「あはははは！」

今度は人間の聞き取れる言葉で、笑う。

笑いながら、『失敗作』は思う。

今度こそ、今度こそ、今度こそ今度こそ今度こそ、本当に結末をつける。

意識のなかった、頃の自分。莫大な何かの頃の自分。そんな自分の唯一持っていたもの。それが漸く、行える。

自分にあつたもの。それは、剣の意思。剣の記憶。憎いという、明確に誰かが憎いという心。それでいて、そうしたくないという心だが、彼に会ってわかった。記憶がすべて繋がった。自分はきつと、秋宮榎風も紀伊大地も誰も彼も憎かった。そしてきつと、誰も彼もがいとおしかった。

だからこそ、『失敗作』は思う。そんな葛藤に苦しみたくない、と。

故に、取るべき行動は簡単だった。

「あはははは！」

全てを壊そうとも思った。
全てを愛そうとも思った。

「きゃはははは！」

無邪気に笑う。

無垢に笑う。

彼を見つけた。

彼は笑いながら、空を下っていった。

踊るように。

舞うように。

「よお、《失敗作》」

いつか呟いた言葉を、彼はまた呟いた。

thank you for everything

この世界はあまりにも、

僕にとって優しすぎました。

夜風が気持ちよく駆け抜け、僕の髪を柔らかく撫でる。風に合わせて踊る毛先が、頼くすぐつて、心地よかった。

深い深い森の中、月光さえ届かぬ夜。

紀伊 大地の世界から解放された僕は、へたりこんでいた筈なのに、いつの間にか立っていた。

視界は暗い。当然だった。僕は目を閉じているのだから。

僕は、ゆっくりと目を開く。差し込んで来る目を焼く光も、伝わる暖かい景色もなかったけれど、とてつもなくこの世界は、眩しかった。

まるで、何年ぶりに目を開いたような感覚。視界がぼやけて、目の前に何があるか定まらない。涙で視界が霞んだときに、よく似ていた。

荒い吐息が耳に届くと共に、徐々に視界が鮮明になっていく。暗順応も同時に起こり、輪郭線はよりクリアに。

深紅のチャイナドレス。

漆黒の目と絹のような髪。

美麗な顔には濃い疲労の色。

まったく、紀伊 大地も粋な計らいをしてくれる。

目を開いた僕の正面にいたのは、今にも倒れそうな榎風だった。

僕と同じように、随分と遅れたタイミングで僕を確認したらしい

榎風。一步踏み出そうとして、榎風は力なく前へと倒れる。

僕は慌てて駆け寄り、榎風の体が完全に倒れる前に受け止めた。自然と膝立ちの榎風と僕は抱き合う姿勢になった。

「ありがとな」

力なくそう言うと、僕を頬擦りして、少し乱暴な手付きで頭をクシャクシャ撫でる。榎風の頬は汗にまみれて気持ち悪かったし、撫でる手も髪を引っ張って痛かったけれど、それがこの上なく心地よかった。

榎風がキシシと笑う。

僕も合わせて笑った。

この笑顔を見ていられるなら、僕のたった選択肢は間違っていないかったと確信を持つて思える。紀伊 大地、いや大地さんには感謝してもしきれない。

その大地さんは榎風の向こう側にいた。右側に和湖さん、左側にいつの間やって来たのか夏雪さんを従えて、支えられるように立っている。

大地さん自身はそこまで憔悴しているようには見えなかったが、あの人のことだ、例えば疲れていても顔には見せないだろう。

寧ろ、疲れているように見えたのは夏雪さんの方だった。服は着乱れ、汗と血にまみれて、薙刀を支えに立っている姿は戦慄するものがある。

対して、和湖さんはあくまで飄々と、平然としている。大地さんの体重の大方は和湖さんが支えているように見える。未だに、死んだはずの和湖さんがここにいるか分からなかったが、今そんなことを考えている暇は無かった。

「榎風」

久しぶりに、僕から普通に話しかけた気がする。つい最近まで、当たり前だった筈なのに。

「今までずっと、僕は榎風を守ってるつもりでした。でも、違ったんですね。本当に守られていたのは榎風じゃなくて、僕の方でした」

榎風は何も言わず、僕の話聴き、ただ強く僕を抱き締めるだけ。

「僕のために一杯傷ついて、僕のために沢山お金使わせて、本当にごめんなさい。そして、ありがとうございます」

「……………うん」

年齢退行したかのような、甘い声。

榎風は、泣いていた。

「これから、もっと一杯、もっと沢山傷つけて、お金を使わせてしまつかもしれません。それでも榎風は」

僕は迷うように一拍置く。実際に迷っていた訳じゃないけれど、僕は慎重に頭の中で言葉を選んでいた。

「僕が榎風を好きでいる間、好きでいてくれますか？」

返事の代わりにあった反応は、痛いぐらいの強い抱擁。

しゃくりあげ、声をあげ、何度も力を入れ直し、僕を捉える榎風を、僕はこの上もなく、愛しく思う。間違えなく、そう思える。

「……………うん……………うん」

榎風は、抱擁から少し遅れて、何度も何度も榎風は肯定を繰り返

す。病的なまでに繰り返す。

「私はずっと、死ぬまで一生、死んでもずっと　お前を愛し続ける」

「ありがとうございます」

僕は、痛いぐらい抱き締めてくる榎風を、腕が痛くなるほどに抱き締めた。

世界で一番温かい所。

世界で一番安らぐ時。

僕は、今、そこにいる。

「そうだ、お前に名前をやらないとな」

抱き締めていた手を弛めると、につこりにはかみながら、頬を赤く染め、そう言う榎風。

これから先の苦難を知らないかのように無邪気で、これから先の問題を考えないかのように無垢。

人はソレを愚かと言うかもしれないけれど、そんなことを言ってる奴の方が愚かしい。榎風にこんな風な笑顔が似合うなら、それで十分じゃないか。

榎風はあでもない、こうでもない微笑みながら、色々試行錯誤している。

「なあ、お前はどんなのが良いと思う」

僕に何度目か分からない笑顔を浮かべる榎風。

改めて、認識する。僕はこの笑顔のためならいくらでも戦えると。いくらでも。守りたいと。守りたいと。

「だから　ごめんなさい」

僕は、僕は榎風の足に『葬倒天馬』を突き立てた。
思ったより、抵抗はなかった。感触としても、精神的にも。
太ももに貫通しそうなほどに深く突き立てたのに、刃を入れたままの所為か血はほとんど出なかった。傷口から蓋から溢れるように刃をつたって、生暖かい赤色が流れ出ていく。

「……………え？」

理解できないと言うような具合で、榎風は声を漏らした。当たり前だ。やった本人である僕でさえ、まったく無茶苦茶で荒唐無稽な事をしていると思っている。

榎風は痛みさえもまだ、理解できていないらしく、ひたすらに、え、え、と口になっている。

「ごめんなさい、榎風」

もう一度、僕は謝罪の言葉を口にして、立ち上がる。
榎風は未だに、現状を理解していない。さっきまで僕が居た位置を、僕の顔があった位置を視点の胡乱な瞳で見ている。

「僕、馬鹿ですから。こんなやり方しか思い付きませんでした。こんな冴えないやり方しか。榎風を傷つけないために足止めしようとして、自分で怪我させたり、わざわざ思わせ振りの答え方したり」

一本、榎風から遠ざかる。

聞いているかさえ怪しい、僕は話しかけている。

「僕は榎風に忘れてほしくないのでから、存在を。どこかのヒーロ

「みたいに自分のことは忘れて新しい人生を生きてくれなんて、いえませんよ。榎風の体に傷痕を残してしまえば、忘れないでしょ？」

まだ一步、榎風から離れる。

振り返って、空へと顔を向ける。木々に阻まれて、空は見上げづらかったけれど、ちゃんと空はそこにあった。

「本当に僕は酷いと思います。この上もなく、至上最悪に。これは今まで榎風が僕に黙っていたことに対する恨みと、復讐だと思ってくれても構いません。それと、僕を忘れないようにする呪いだとも」

さらに一步、ゆっくりと踏み出す。

落ち葉を踏んでも、音がならなかった。あまりにも寂しい歩み。榎風に背を向けたまま、僕は語る。

「何度も言いますが、ごめんなさい。色々ごめんなさい。本当にごめんなさい。でも、呪いが解けてしまわないよう、お願いですから 僕を許さないで下さい」

空にポツンと浮かぶ、赤い点。

間違いない、《失敗作》だ。

確実に僕の方を見ていた。遠すぎて、交わるはずない視線が、交わったように錯覚する。

「……よあ、《失敗作》」

僕はポツリと、そんな言葉を口にした。なんの意図もない、自然に出た一言。

僕は惜しげもなく、真紅の翼を顕現させる。僕の体にはあまりにも大きすぎるそれを、木の合間を縫うように目一杯広げる。

飛び上がる準備は出来た。

後は、この翼を羽ばたき、木の壁を抜けるだけ。それだけで、僕の終わりは始まる。

僕は少しだけ躊躇してから、榎風を振り替える。

自分の赤い羽越しに見える榎風は、必死になって、立ち上がろうとしていた。額には玉のような汗が浮かんでいるのから察すると、どうやら痛みがやって来たらしい。

足に突き立てたままにしていた『葬倒天馬』を、このままにしておいては倒れたとき、本当に貫通して傷を広げかねなかったので、無に還す。

ドブリと、音を立てそうな勢いで足から血が吹き出した。それで膝を折りそうになったが、榎風は何とか持ちこたえた。

たった三步しか離れていない。その気になれば、直ぐに榎風を支えることは出来る。いつの間にか泣き出している涙を拭うことも可能だ。

でも、僕はソレをしなかった。

ただ、僕は赤い翼越しに微笑む。

いよいよ、榎風が僕に、手を伸ばせばかすってしまいそうな距離まで近づいてくる。

今までにないほどに、榎風の涙は止め度ない。

きつと、もう一度、榎風が僕に触れてしまえば、飛べなくなる。消える怖さに足がすくんで、飛べなくなる。

再度、空を確認すると、容赦なく、『失敗作』が接近していた。時間はもうない。

視線を榎風に戻す。濡れてグシャグシャになった顔と目があった。

……僕は結局、榎風を拒絶することにした。

最後まで言えずに、迷っていた言葉を口にする。僕の出来うる最高の笑顔で。

「だ」

「い」

「す」

「き」

「で」

「す」

「よ」

轟と、風が吹き抜ける。
僕は空へと舞い上がった。

私の、秋宮榎風のこの手は、届かなかった。届かせられなかった。ほんの後、数センチの距離を縮められなかった。

「あ、ああ……………」

木の天井を突き破り、枝の抵抗をもとせず、力強く、雄々しく、空へと飛びついていった。

糸が斬れたように、意図が切れたように、私は腕をダランと下へ垂らした。

「何で…………何で…………何で邪魔したんだよ！」

私を妨害した張本人を、自分でも分かるほどに毒々しい瞳で睨む。視線の先には、森の影と宵の闇に紛れ、でも確固として存在を誇示するように、長い髪を風になびかせながら、ゆっくりと紀伊大地に近づく希崎時雨がいた。

冷淡に、冷酷に、その顔は無表情。

「何でだよ、希崎！もうすぐで届いたのに！あいつを留められたのに！殺して、殺して、殺して殺して殺してやる！」

駆け寄ろうとして、足が巧く動いていないことに気付く。痛みは気にならなかったが、近づけないことに苛立ちがつのる。

本気で希崎を殺そうにも、先ほど全部『光踊石』を使ったせいで魔術も出来ず、手段がなかった。

「そうだ、そうだ。紀伊、お前なら……」

まだ手段はある。まだ助けられる。終わってはいない。

「紀伊、お前の魔法なら、《空間》^{ドリーム}なら……」

引きずるようにして、一歩進む。歩けなくなったって構わない。その程度であいつが助けられるなら、そんな対価、無いに等しい。

「あれならどれだけ離れていたって、引きずり込んでつれてこれるだろ……？」

一歩、更に一歩。倒れて膝をついたって、這いつくばって紀伊に辿り着いてやる。

距離としては後数歩分。たどり着けない距離じゃない。

「頼む。それだけが、頼りなんだ。お前が使ってくれるなら、私はどんな代償だって払ってやる。金だって、私の魔術の才能だって何だってくれてやる」

無理矢理、二歩分進んだ。血液が体外に出過ぎたせいか、意識が朦朧とする。それでも、途絶えさせるわけにはいかない。途絶えた瞬間に、私とあいつの関係も一緒に途絶えそう。

いつの間にか、夏雪が持っていた肩は時雨に渡されていた。

「だから頼むよ、紀伊」

一歩。届いた。紀伊の服に。

離さぬようにがちりと掴み、膝をつく。力の入らない腕で全力で、紀伊を揺さぶる。

紀伊は何も言わなかった。

紀伊は何も抵抗しなかった。

ただ、間宮と希崎に体重を預け、私のなすがままになっている。それでも私は紀伊を揺さぶった。

何度も何度も。

「頼むよ……あいつを……助けてくれよ」

私は膝をついた。

紀伊の前に詭ぜいて、ひたすらに、まるで祈るように、頼むよ頼
むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼むよ頼
むよ頼むよと、口にする。

必死だった。誇りも何もない。ただ、あいつと一緒にいたいだけだった。

「頼む、よ……」

紀伊は、私から目を逸らした。

私を見て痛ましく思ったか、それとも何もしない自分の罪悪にさ
いなまれているのか。どちらだっていい、少しでもそんな気がある
なら、私を助けるよ。

「ごめん……」

一言だけ、紀伊はそう口にした。

それだけで私に絶望を与えるには余りあるほどに十分だった。

「うう、うあ、あああうああ！」

子供のよう
に、私は泣
いた。

アイツは今、何処に居るんだろうか？

赤い羽根に風を受け、僕は空へと舞い上がる。

鳥よりも速く、風よりも速く、《失敗作》よりも速く、ひたすらに高く、高いところより更なる高みへ。短く言えば、僕は《失敗作》から逃げていた。

考える時間を稼ぐために。

大地さんは本質と本質とをぶつければ、対消滅するといっていたが、僕の本質とは何なのか、それが分からずにいた。

本音を言えば、もし対消滅の瞬間に何らかの影響 例えば爆発のようなことがおきた場合、地上への危険を最小限にするためだけだ。

肌に吹き付ける風が、ナイフのように冷たかった。

それに耐えながら、更なる高みへと飛んでいく。高さはどれ程か分からないほどに高い。

吐く息が凍り付く。気温が零下40度ほどに感じられる。

翼も凍えているのか、背中が痛い。

これが大地さんの言っていた《ヴァンパイア血族》の擬似回路 血管を魔術式にしている所為なのだろうか？『葬倒天馬』が折れたとき、体が痛んだのも、その為なのかもしれない。

ジリ、と考えがよぎる。

電撃のように走る一つの仮説。

そうなのか？そうだというのか？

荒唐無稽な仮定だったが、ありえない話じゃない。今の僕にそれ以外の考えは思い付かなかった。

雲を突き破って僕は止まった。眼下には小島のようにポツリポツリと雲が浮かんでいる。雲海、か。初めにそんなことを言った人間はなかなか的確で洒落た表現をしたものだ。

吸った息が胸を凍らせそうぐらい冷たくて、気が引き締まる。
溜めた息を吐いて　僕の覚悟は終わった。

一度大きく羽ばたいて上昇し、僕は翼を自ら消し去った。

満点の星空、丸い月、黒い空、一瞬の空白。音もなく、風もなく、
重力も無い停滞の中に、僕はいた。物理時間にして一秒にも満たない刹那が、僕にとって一時間より長い時間を感じられた。
が、それもいずれ終わる。

高度数千メートルにいる僕に内包された莫大な位置エネルギーが
自然の摂理に従い、運動エネルギーへと変換されていく。

パラシュートなしのスカイダイビング。

単純な垂直落下。

僕は死へと、アクセルを踏みながら、ギアを上げながら、全力で
向かっている。

「――！！」

声にならない絶叫。目を保護するためか、涙も溢れてきた。

昇るときよりひどい空気抵抗が僕にかかり、髪が逆立つ。痛みが
麻痺するほどに、アドレナリンが過剰分泌されている。

だが、そんなことを考えている暇はない。

僕の本質を顕現させなければいけない。

大地さんは言った。僕の血管は魔術式なのだと。

ならば、僕の血管全てが、魔術式だとしたら。

榎風は昔、失踪した。『理由なき剣』を持つて。

ならば、今『理由なき剣』はどこにあるのか。

例えば、もしも、僕そのものが、『理由なき剣』を核として作ら
れたのなら、僕の魔術式は『理由なき剣』そのものではないだろう
か？

血管全体は魔術式ではないかもしれない。

『理由なき剣』は榎風が隠し持っているかもしれない。

あまりにも飛躍しすぎているのは 承知の上。

これは賭けだ。

僕の命を賭した乾坤一擲、大博打！

信じようじゃないか。可能性を。

信じようじゃないか。自分の思考を。

信じようじゃないか。『理由なき剣』を核として、全身の血管を魔術式にできるだけの、榎風の才能を！

「あああああ ！」

スピードを更に付け、落下する。

目の前にはちゃんと《失敗作》がいた。距離感はわからない。多く見積もっても、500メートルほど。

こんな距離、すぐに縮まってしまふ。もう考える猶予はない。あとは自分の能力と仮説を信じて、全力で実行するだけ。

ドクン、心臓が唸る。

使い方なんて教えてもらった事無いし、考えて編み出したわけでもない。大地さんの言う通り、僕は《ヴァンパイア血族》を本能のままに使っていけばいいだけ。

『鴻の翼』や『葬倒天馬』と同じ、ただ頭の中に僕の本質の出現を願う、それしかない。変化は劇的。

ズキン。

ズキン。

全身が痛む。

ドクン。

ドクン。

心臓が震える。

電源しんぞうがあり得ないスピードで稼働いやくどうする。

電圧けつあつと稼働速度しんぱくそくどが際限なく上昇していく。

流れる電流けつえき。回路けつかんに余すことなく満たされていくのが、感覚として分かる。

人間にはあり得ない電力けつえきりょうが体の何処からか沸き上がってくる。今まで溜め込んでいたかのような、年単位で溜め込んだような、それでいて新鮮な電気けつえきが溢れている。当然だ。たかが回路全体けつかんの15%程度しかない血で僕が稼働するはず無い。

加速度をつけて、止まることなく、僕の回路けつかんを直流いっけうに流れていく。ジリ、と脳幹を焼くような官能的な痛み。

こんな感覚、今まで受けたことがない。

賭けはどうやら　僕の勝ちらしい。

バチ、ジジ、ジジジジジ。

右手の平に走る、皮膚が剥がれてしまうほどの、尋常ではない力。絶叫さえできないほどに、声に出来ないほどに、力が放出される。力に抵抗するように腕が震える。当たり前、僕の体は今毛細血管まで余すことなく満たされているのだから。

漏れる息が可聴領域を超える。

それが、《失敗作》と重なった。

それを合図にしたかのように、『理由なき剣』が、僕の本質が、
顕現してゆく。

僕の手に馴染む、形のよい柄。
細い両刃で反りのついていない、剣。装飾過多なその剣。そんな
部分は普通の剣。

ただ、異常な部分と言えば、『理由なき剣』らしい部分と言えば
……その剣には鎖が巻いてあった。刃先から柄、柄から僕の右腕へ
とのびる鎖。

それがどんな意味を持つのかしら無いが、今はそんなことを気に
している暇はない。

《失敗作》は目の前。視線が絡み合う。

生き生きしていた。これから死ぬと言うのに。いくら死ぬのが目
的なもの同士と言っても、この局面で生き生きしている《失敗作》
は異常だった。

「さあ、祈ろうぜえ！お互い、死ぬることをよお！」

《失敗作》は更に加速する。

もう死は目前だった。

《失敗作》は僕に向け、空に向け、大剣を振り上げる。おそらく
は、この大剣が《失敗作》の本質。

僕も合わせるようにして、《失敗作》に、地面にむけ、『理由な
き剣』を降り下ろす。

二つの剣が交錯すれば、それで終わる。

「あああああああ！」

二つの剣が触れる直前、僕は呟いた。

「ありがとう、榎風」

榎風の笑顔が、声が思い浮かぶ。

「……………!!!」

僕を呼ぶ声が聞こえた。

エピソード

春。都会にも田舎にある町にも訪れる季節の移ろい。涼暮の町は山はあるが、その山には桜が植生していないせいか、目に見えて春と実感させるものがなかった。

だが、暦の上では既に春であつたし、気温も暖かく落ち着いていたので、違うことなく春だつた。

そんな季節の中、空は快晴。すがすがしい一日。

涼暮の町の端に位置する武家屋敷のような広い和風の建築物の前庭に一人の青年と一人の女性がいる。

男性の方は車椅子に座り、女性がその後ろから車椅子を押していた。二人とも表情は穏やかで、ゆったりとしたペースで散歩でもするかのようには歩を進めている。

やがて、前庭の中心程に来て、止まる。

平和、そんな言葉がよく似合う情景。

車椅子に座つて、全てを女性に任せていた男性が、眠っていると思わせるほどに薄く閉じていた眼を開く。

同時に柔らかな春風が彼の白銀の髪を巻き上げる。

琥珀の瞳、この世のものとは思えないほどに整った顔立ち。

言つまでもなく魔法使い《ギフト》、紀伊大地。

「もう、二年以上になるのか……」

「……はい、そうですね」

車椅子を押している女性、神宮夏雪が大地の意図したことを正確に読み取り、少しだけ言葉に迷つて返答した。

「彼が行方を絶つて、二年と三ヶ月になりますね」

大地の言葉を補足するように、ポツリと夏雪はそんなことを口にした。

それで会話は途切れる。それ以上、全てをわかっている大地が言葉を発する必要がなかった。

ゆつくりと、春の時間が流れる。

十分経って、二十分過ぎる。いつまでも、そうしているかのように、二人とも動くことがない。

まるで、長年連れ添った老夫婦のような二人の間。

「あはははっ！」

「ちよ、危なっ！」

楽しそうな声が大地と夏雪の背後から聞こえた。

軽く眼をやると明が屋根から飛び降り、朝熊がそれを下でキャッチしているところだった。いったいどんな経緯があつてそんな行動に走ったか知れないが、危険な行動には違いなかった。

いくらこの家が一階建てだといつても、屋根から飛び降りたりすれば、下手をすると怪我ではすまない。

楽しそうな二人を邪魔するのは悪いし、朝熊がついていれば大丈夫だと思つたが、もしもと言うこともある。そう思つて、夏雪は一旦、大地のそばを離れて、二人を注意しに行く。

朝熊は平身低頭謝っていたが、明には全く反省の色がない。そんな明にさらに厳しい口調で夏雪は責め立てる。

そんな三人のやり取りを見ながら、大地は思う。

二年前、あの戦いの中、もっともひどい怪我をした朝熊。不幸中の幸いか、傷は中核にまで及ばず、かろうじて仮死状態で彼は現世にとどまつた。そんな朝熊を“片手間”で『彼女』は治した。治したといつても一月前の話だが。それまで大地の応急処置により彼は一部の生体機能だけで、植物状態になっていた。

「大地、少し出掛けてくる」

脇から唐突に声を掛けられた。車椅子に座っている大地は声の主を見上げた。

「出無精のお前が珍しいな、時雨」

「……………いや」

髪は相変わらず長いまま、もはやトレードマークとなってしまうパイナップルヘア。その髪を揺らして下を見た。視線を追うようにして大地も視線を下げる。

時雨の脇腹あたり、車椅子に座っている大地と同じ視線の高さにいる理由を見た。

「……………せがまれて」

時雨の服の裾をしっかりと握りしめて離さない由愈がいた。じつと大地を見て、時雨に視線を首がいたくなるほど上に向けている姿は何とも微笑ましい。

あまり笑うことのない大地が笑うほどに。

「それじゃ」

由愈に引つ張られるような形で時雨は歩いていく。

時雨早く行こ、わかった、わかったから髪を引つ張るな、痛い、と言うやり取りが門の辺りから聞こえてきた。

そういえばと、もう一度、二年前のことを思い出す大地。

確か、彼女　風間麻紀が出ていくときも、あんな風に騒がしかった。

麻紀は剣野景色を探しに世界中を飛び回っているらしい。時々、

剣野景色の情報を催促するによこす連絡によれば、いまごろマダガスカルらしい。

「はあ……」

所変わって、紀伊宅屋上。ため息を吐く人が約一名。

「若干、忘れられてますよね、私って」

一人孤独に本を読む間宮和湖。

「それぞれみんなパートナーというか、恋人っていうか、そういうのがいるっていうのに、私だけ居ないって、どうなんでしょうね？」

誰も居ない虚空に向かって話しかけているのが、さらに内容を痛々しくしていた。

「結局、二年前のこと、私だけ何も関わっていませんし、本当に孤独ですよ。はあ……」

わざとらしく、切なそうにため息をつく間宮和湖。まるで背後にいる人影にでも聞かせるかのように。

「ああん？それはあたしへの当て付けかこらあ？」

長身のスタイルのよい体。緩く髪にかかったウェーブが、その体によく似合っていた。

「あ……鏡さん、いたんですか」
「さん、じゃなくて、様、だろ？」

彼女、輪廻後の鏡はわざとらしく自分の存在を確認した和湖の頭を片手でホールドする。

「ああ、どうせ私は輪廻しても夏雪にかなわかったさ！大地にフラれたんだよ！コンチクショ
！！」

空しい絶叫が空に響いた。

「大地さん」

明達を叱り終えた夏雪が唐突に話を切り出した。

「未だに、罪悪感がありますか？」
「……ああ」

突拍子な疑問にとぼけることも、聞き返すこともせず、ゆっくりと頷いた。

「私がしたことは自己満足だ。彼に知る必要のない、知りたくもない知識を与え、思考を誘導し、こんな結果をもたらさせたのは、間違はなく私だ」

「そんなことはありません。彼はちゃんと最後は自分で決断しました。それに」

夏雪は一拍間をあけた。

「《空間^{ドリーム}》を使用した代償で足が動かなくなっただっていつのに、それが罪だったなんて、悲しすぎるじゃないですか」

「いくら自分に被害が出たからと言って、自己満足は自己満足だし、罪は罪だ。しかも、それを決めるのは私じゃない」

大地は薄く目を閉じた。

「私は罪だったと思ってるが、最善だったと思っている。彼がそれを望んでいたとも、ね」

目を開き、自ら車椅子を動かして、山の頂上を向く。

二年前、終幕を下ろした場所を。

「これも自己満足なんだが……彼は後悔していないと思う。そうだろう、《姉さん》？」

私は長い長い石段を上っていく。

一步一步、着実に自分の足で。

葵と茜は石段の下まではついてきていたが、私が石段を上り始めると、引き返してしまった。私に気を使っているんだろうな。

はあ、自分の使い魔に気を使わせるなんて、なんつーか、嫌だなあ。ま、ありがたいけど。ついてこられたら、迷惑とは言わないが、うっとうしい。

あー、それもなんか悪い表現だな。迷惑より悪化してる気がする。気にしても仕方ないし、思考を丸投げした。

要は私が一人で居たい。それだけ。

私は毎日この石段を上っている。あの日から、一度も欠かすことなく。

最初は石段なんてなく、獣道を徒歩で上がったものだ。知ってるか？一人で山道を歩くと裏山でも遭難するんだぜ？

石段の終わりが見えてきた。もうすぐ山の頂上に辿り着く。

既に日は結構高い。昼食に丁度よい時間だ。今日は頂上で食べることにしよう。小春日和で気持ちいいし。

最後の一段を踏みしめる。今日も登頂に成功。よくやった、私。

「よおっ」

笑みと共に片手を上げ、あいさつ。

いつものように誰からも返答はない。当然か。誰もいないんだし。有るのは唯の石ところ。3つ上下に重ねられ、一番上にある縦長の大きな石にはこう刻まれている。

『秋 宮 世 界』

これは名前。私がこの世で唯一愛している奴。ついでにいうなら命名、私。

「最近めつきり暖かくなったなー」

返答がないのを承知で話しかける。

「最近、足に筋肉ついちゃってさ」

「ちよつと足が太くなっただよ」

「っていつても、綺麗なのは変わらないけど」

「昨日希崎が」

「紀伊と夏雪が」

「町でナンパされて」

「また新しい魔術を」

「今度、総理が」

とりとめもないことを話しかけ続ける。同じ話題を何度も繰り返したり、しきりに笑ったりして、音を絶やさない。

音をならしていないと、壊れてしまいそうで、怖かった。

「なあ、覚えてるか？」

この話題は何度目だったろうか？初めての気もするし、毎日言ってる気もする。

「私たちが初めて会った時のこと。はは、覚えてるわけないか。生まれた瞬間を覚えてる人間なんているわけない、か」

何度繰り返しただろう？このフレーズを。

「お前さ、クリッとした目付きで見上げてくるんだぜ。ホント、可愛かったなあ」

誕生の瞬間、あいつは円らな瞳で純真無垢に私を見た。弑虐欲と庇護欲、世界中の人にひけらかしたい欲求と自分一人が独占したい欲求、同時に矛盾した感情が全身に駆け巡ったのを、今でも鮮明に覚えている。

「あれから、何年だろうな」

長すぎて忘れてしまった。

楽しすぎて忘れてしまった。

「待つてるのも、そろそろ飽きてくるぞ。いい加減探しにいくぞ」

そんなこと自分では出来ないと理解しながら、呟いた。

「こっちはなあ……白亜の豪邸建てて待つてるんだぞ。ダ・ビンチに負けずとも劣らない、つーかぶっちゃけ勝ってる万能の人、私の設計だ」

ここから見える向かいの山に、ここからはつきり見えるほどに巨大な家。

あれが私とあいつの 秋宮榎風と秋宮世界の新居。因みに私は一度だつて入っていない。あいつが帰ってくるまで、入らないと決めたから。

「だから……早く帰って来ないと……」

不思議な感覚だった。体の奥底が熱くて冷たい。

「私がおばさんに、なっちゃうぞ……」

いつものように軽口がうまく叩けない。

足にうまく力が入らない。

二年経っても悲しみは衰えない。

「あ……う……あ」

石に前のめりに寄りかかる。両手で一番上にある石をつかんで、膝をつく。もう立っていられなかった。

下を向くと、石で舗装された地面に幾つもの染み。それを視認してから、私は堰を切ったように泣き始めた。

「ああ……うあ……ああ……」

どうして居なくなっただのか。

どうして助けられなかったのか。

そんな後悔が今の私の構成要素だ。

あと一年でも、あと三年でも、あと五年でも、あと十年でも、あと百年でも、待っている。待っていていられる。待っていていられる、けれど。

「会いたいよお……世界い……」

どうしても思ってしまう。

どうしても求めてしまう。

愛し愛されている『永遠の恋人』を。

こっん

やけに、静かだった。

たった一度だけなっただけの靴音。

その靴音だけが、やけに、はつきり聞こえた。

「……………え？」

一陣の風が運んできた、赤い羽根。血染めしたような真っ赤な、羽根。

裏切られることを恐れず、期待した。

「うあ……………」

言葉にならない。

言葉にできない。

白い髪に蒼い虹彩。一回り体が大きく、逞しくなっている
思わず駆け出す。自然と体が動いた。彼の胸へと飛び込む。周り
なんて関係無い。恥ずかしさなんて微塵もない。
ひしと抱き合って、彼は耳元で呟いた。

「ただいま、榎風」

僕は榎風といっしょにいるよ、と。

エピローグ（後書き）

どうも、西宮東です。『榎風といっしょ！』を最後まで読んで頂き、ありがとうございます。掲載日を見てみると第一歩の投稿が2005年10月4日になっているのから計算すると、既に二年も経つてゐるんですねー。若干驚きです。まあ、間3ヶ月投稿してなかったり、一日に二話投稿したりと、不規則なことこの上ないのですが……。そんな不規則更新にもめげず、最後までお付き合いして頂いた方もいらっしやると思います。いると思います。居てくれるといいなあ……。とにかくにも、最後まで読んで下さった方、どうもありがとうございます。終わりに際、某アニメの影響でバットエンドにしてしまいそうでしたが、何とか書き上げることが出来ました。これも読者の方々、及び椎堂真砂先生を初めとする他の作家さまのおかげです。もう一度、ありがとうございます。あ、最後になりませんが、好きなキャラクター、好きなシーン、好きなセリフ、好きな表現技法、等々ありましたら作品評価または感想で、今後の為にもお教え下さい。では、また機会があればお会いしましょう。長々と失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2501a/>

榎風といっしょ！

2010年10月10日12時18分発行